

鷹ノ巣Ⅱ

－第2・3次調査の成果－

2013

ひ　　た　　ち　　な　　か　　市
財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社



鷹ノ巣Ⅱ

—第2・3次調査の成果—

2013

ひ た ち な か 市
財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社



第28号住居跡 遺物・炭化材出土状況



第28号住居跡 出土遺物

序

ひたちなか市は、東に太平洋、南に那珂川を望む自然環境に恵まれた都市です。現在、わが国の中核国際港湾として常陸那珂港の整備が進められており、そこから延びる東水戸道路は、北関東自動車道を経て栃木県や群馬県とつながり、北関東の新しい玄関口として発展しつつあります。このような発展により道路建設や都市化が進み、それに伴い数々の埋蔵文化財が発見され、往時の生活文化を偲ぶ貴重な文化遺産が発掘されてまいりました。そうした文化遺産を文化都市づくりの基盤として保存し、活用していくことは、私たちの責務といえるでしょう。

ひたちなか市では、鷹ノ巣遺跡が所在する部田野地区において市営たかのす霊園拡張事業を実施することになり、地区内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて関係諸機関で協議した結果、記録保存の処置が講じられることになりました。

発掘調査は、2005年度と2012年度に実施し、弥生時代の住居跡から市内で初の出土となる58点ものガラス小玉や、古墳時代の住居跡から赤色顔料である「ベンガラ」が詰まった小型の壺が出土しました。また、奈良時代の住居跡からは「山田文マ子夜児」と刻まれた文字瓦も出土し、その成果は近隣にあります十五郎穴横穴墓群の解明にも期待されます。このように今回の調査により、旧石器時代から平安時代に至る膨大かつ貴重な資料を検出することができました。これらの資料につきましては、2006年度より整理作業を進めて参りました。

本報告書が、学術資料としてはもとより地域の歴史を解明する資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本報告書刊行に至るまで、多大な御協力をいただきましたひたちなか市環境保全課、御指導いただきましたひたちなか市教育委員会をはじめとする関係諸機関、部田野地区の方々、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2013年3月

財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

理事長 松本正宏

例 言

- 1 本書は、ひたちなか市の委託を受けて、財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が実施した鷹ノ巣遺跡発掘調査の報告書である。なお、2007年度に刊行した『鷹ノ巣』と本書を合わせて、本報告書とする。
- 2 発掘調査は、ひたちなか市部田野地区の市営たかのす霊園拡張工事予定地域内に存在する埋蔵文化財の事前調査を目的とする。
- 3 発掘調査および整理報告は、財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社の文化課文化財調査事務所が実施したものであり、組織は次の通りである。

(2013年1月1日現在)

理事長	松本 正宏	
副理事長	木下 正善	
常務理事	兼山 隆 山田 博	
理事	佐藤 良元 武藤 猛 薄井 宏安 楨 和美 大和田 健 網川 正 後藤 芳文 打越 秋一 雨宮久美子 興野 正憲 飯塚 敏晴 鈴木 隆之 小池 洋	
監事	住谷 勝男 黒沢 武男	
文化課 文化財調査 事務所	次長兼課長	西野 均
	副参事兼所長	鈴木 素行
	係長	佐々木義則 稲田 健一
	嘱託	菊池 順子 鈴鹿八重子

- 4 発掘調査は、第2次が2005年7月29日から2006年2月28日、第3次が2012年5月15日から7月11日まで実施された。第3次発掘調査の従事者は次のとおりである。
主任調査員 稲田健一 調査員 菊池順子
調査補助員 石井雅志 海老原四郎 坪内治良 廣水一真 福原雅美 矢野徳也 渡辺恵子
- 5 整理作業及び本書の作成に従事したものは、次の通りである。
青木千歌子・稲田健一・色川順子・宇佐美幸枝・小貫栄子・片西登美江・菊池順子・桐嶋美子・窪田恵一・後藤みち子・小松崎恵子・佐藤富美江・鈴鹿八重子・鈴木素行・故高安久恵・武田洋子・西野陽子・横須賀由利子
- 6 本書は、稲田健一が編集した。
- 7 本書は、次の分担で執筆した。
Ⅰ、Ⅱ-1、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ 稲田健一 Ⅱ-2、Ⅲ-2(一部の石器の実測図及び文章) 窪田恵一
Ⅲ-1 小松崎恵子 Ⅳ-1 色川順子 Ⅳ-2 鈴木素行・窪田恵一
Ⅷ パリノ・サーヴェイ株式会社
- 8 石器及び礫の石材の同定は、有限会社考古石材研究所に委託し、柴田 徹氏に御指導をいただいた。
- 9 黒曜石の産地分析は、国立沼津工業高等専門学校材質工学科 望月明彦氏に御協力をいただいた。
- 10 旧石器・縄文・弥生時代の石器の実測については、一部を窪田恵一氏に委託した。
- 11 炭化材の樹種及び炭化種子の同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 12 発掘調査の出土資料は、本報告書刊行後に、ひたちなか市教育委員会へ移管される。
- 13 本書の作成にあたっては、次の方々にご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(50音順・敬称略)
石井 篤・石原正敏・梅田由子・川上みね子・栗田昌幸・黒澤春彦・斉藤 新・さかいひろこ・住谷光男・林 恵子・三井 猛・渡邊朋和
土浦市教育委員会・東海村教育委員会

目 次

I	遺跡の概要	1
1	遺跡の位置	1
1	遺跡の位置	1
2	遺跡の周知と既往の調査	1
3	周辺の遺跡	2
2	調査の経緯と概要	4
1	調査に至る経緯	4
2	調査の経過	4
3	調査の概要	4
II	旧石器時代の遺物	7
1	調査の概要	7
2	石器群の様相	8
III	縄文時代の遺物	15
1	土器	15
2	石器	20
IV	弥生時代の遺物	23
1	検出された遺物	23
2	鷹ノ巣遺跡第47号住居跡における石英を素材とした石器について	28
V	古墳時代の遺構と遺物	41
1	調査の概要	41
2	2005年度古墳時代前期の住居跡の調査	43
	第40B号住居跡 第52号住居跡	
	第46号住居跡 第62号住居跡	
3	2005年度古墳時代後期の住居跡の調査	52
	第34B号住居跡 第39号住居跡	
	第36号住居跡 第40A号住居跡	
	第37号住居跡 第45号住居跡	
4	2012年度住居跡の調査	68
	第28号住居跡 第30号住居跡	
5	遺構に伴わない古墳時代の遺物	77
6	古墳時代遺物観察表	78
VI	奈良・平安時代の遺構と遺物	87
1	調査の概要	87
2	2005年度住居跡の調査	88
	第31A号住居跡 第58号住居跡	
	第44号住居跡 第61号住居跡	
	第54号住居跡 第66号住居跡	
	第56号住居跡	
3	2012年度住居跡の調査	101
	第29号住居跡	
4	奈良・平安時代遺物観察表	104
VII	その他の遺構	107
1	溝状遺構	107
2	土坑	107
VIII	自然科学的分析	110
1	鷹ノ巣遺跡から出土した炭化材の樹種と炭化種実	110
2	鷹ノ巣遺跡出土顔料成分分析	123

I 遺跡の概要

1 遺跡の位置

1 遺跡の位置

ひたちなか市は、茨城県のほぼ中央の太平洋岸に位置する。東は太平洋に面し、西は那珂市、南は那珂川を境に水戸市・大洗町、北は東海村と接している。市域は、東西約13km・南北約11kmで、総面積は99.04km²、人口は約15万7千人である。

鷹ノ巣遺跡は、ひたちなか市のほぼ中央に位置し、字名では字部田野(へたの)宮後(みやうしろ)と西原に所在する。

ひたちなか市域の地形は、那珂台地、那珂川段丘、砂丘、沖積低地の4つの地形面に大別できる。鷹ノ巣遺跡は、沖積低地を望む標高25m前後の那珂台地上に立地する。沖積低地には中丸川が流れ、国道245号線湊大橋付近で市域の南端を流れる那珂川に合流する。遺跡の西側には、中丸川の支流の本郷川が流れ、その流れは狭小な支谷を縫うように北上する。本郷川の上流には、馬渡埴輪製作遺跡や製鉄遺跡の後谷津遺跡、原の寺瓦窯跡が存在している。

遺跡の位置する台地には南側から2つの谷津が入り、それらの谷津により舌状の地形を呈す。東側の谷津には湧き水が流れており、西側の谷津付近には現在東水戸道路のインターチェンジがある。遺跡の現況は、ひたちなか市名産の干し芋の畑地となっていた。

2 遺跡の周知と既往の調査

茨城県内市町村の遺跡を集成した地名表及び地図の中に、鷹ノ巣遺跡が記載されたのは、1976年の『那珂湊市遺跡分布調査報告書』[井上他1976]が初出である。報告書の中には、「昭和42年頃、ごぼう深耕中に竪穴式住居址が発見され、古墳時代前期の古式土師器の破片が出た」とある。

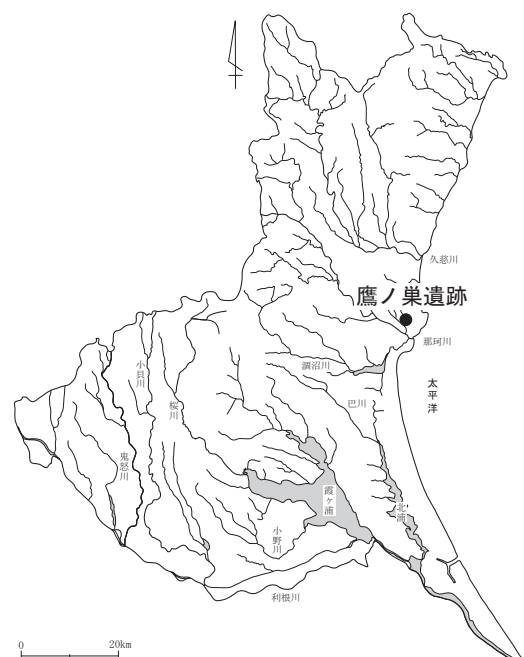
鷹ノ巣遺跡における調査は、2回実施されている。第1次調査は、1992年度に鷹ノ巣遺跡発掘調査会が実施している。この調査は市営たかのす霊園造成に伴うもので、調査期間は1992年11月4日から1993年3月17日である。

調査対象面積は約3,300m²。調査では、住居跡28基(古墳～平安時代)、土坑3基、性格不明遺構1基が確認されている。

第2次調査は、2005年度に当公社が実施した。この調査は市営たかのす霊園の拡張に伴うもので、調査期間は2005年7月29日から2006年2月28日である。調査対象面積は7,363m²。調査では、住居跡43基、溝状遺構3条、土坑8基を確認したが、調査期間等の関係から東側の調査区の遺構と西側の遺構の一部のみを調査対象とし、西側の住居跡3基と溝状遺構2条は次年度以降とした。



遺跡全景(上が虎塚古墳方向/2005年度撮影)



第1図 遺跡の位置



第2図 鷹ノ巣遺跡の位置(A：鷹ノ巣遺跡/1～90の遺跡番号は第1表に対応する/[茨城県2001]を一部修正・加筆)

3 周辺の遺跡

鷹ノ巣遺跡周辺には、旧石器時代から近世にかけて数多くの遺跡が存在している。第2図は、鷹ノ巣遺跡を中心として、約3km以内の範囲に分布する遺跡を25,000分の1の地図に記したもので、各遺跡の状況は第1表の通りである。

各時代ごとの詳細については、2007年度にすでに記載しているので、ここではその報告後に調査が実施された

宮後遺跡(51)と部田野西原遺跡(52)の成果を報告する。

宮後遺跡と部田野西原遺跡は、茨城県教育財団が2010年4月1日から6月30日まで調査を実施した[大久保2012]。その結果、宮後遺跡で縄文時代の陥穴状遺構、弥生・古墳・奈良・平安時代の住居跡15基、部田野西原遺跡で平安時代の住居跡1基などが確認された。宮後遺跡の古墳時代後期と奈良時代の住居跡には、鷹ノ巣遺跡同様に7mを超える大型住居跡が確認されている。遺物

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					
		P	J	Y	K	N	T
A	鷹ノ巣遺跡	○	○	○	○	○	
1	峯ノ山遺跡		○				
2	道理山古墳群				○		
3	道理山貝塚		○				
4	道理山遺跡	○	○	○	○		
5	寺前前方後円墳				○		
6	寺脇遺跡		○	○	○		
7	大田房遺跡		○	○			
8	柳沢十二所遺跡	○	○	○	○	○	
9	御所内Ⅰ遺跡			○	○	○	
10	御所内Ⅱ遺跡			○	○	○	
11	鍛冶屋遺跡					○	○
12	前方遺跡			○	○	○	
13	坂ノ上遺跡		○	○	○	○	
14	宮前古墳群				○		
15	下高井遺跡			○	○	○	
16	柳沢原山遺跡			○	○	○	
17	天王前遺跡		○	○	○	○	
18	三反田古墳群				○		
19	上高井遺跡		○		○	○	
20	高井古墳群				○		
21	三反田上河原遺跡			○	○		
22	三反田遺跡		○		○		
23	蜷塚西貝塚		○				
24	三反田蜷塚貝塚		○				
25	三反田蜷塚遺跡			○	○	○	
26	峪遺跡			○	○	○	
27	八幡ノ上遺跡		○	○	○	○	
28	大部坂砂利山遺跡		○				
29	ぼんぼり山遺跡	○	○	○	○	○	
30	船窪遺跡	○	○	○	○	○	
31	廻り目遺跡			○	○	○	
32	鍛冶屋窪遺跡		○	○	○	○	
33	神敷台遺跡			○	○	○	
34	館山横穴墓					○	
35	田宮原Ⅱ遺跡		○	○			
36	田宮原Ⅰ遺跡		○	○			
37	新堤横穴墓群					○	
38	新堤遺跡		○	○			
39	小谷金遺跡		○	○	○	○	
40	小谷金東遺跡		○	○	○	○	
41	部田野富士山遺跡		○	○	○	○	
42	部田野古墳群				○		
43	部田野西富士山遺跡		○	○	○	○	
44	部田野横穴墓群					○	
45	上ノ内遺跡		○		○	○	
46	上ノ内貝塚		○				
47	宮前貝塚		○				
48	尼ヶ祢館跡						○
49	尼ヶ祢遺跡		○	○	○		
50	釜神山遺跡			○	○		
51	宮後遺跡		○	○	○	○	
52	部田野西原遺跡	○				○	
53	差洪遺跡		○	○		○	
54	中浦見遺跡		○		○		
55	石沢遺跡				○	○	
56	西浦見遺跡		○		○	○	
57	北西原遺跡		○		○	○	
58	部田野猪Ⅰ遺跡		○	○			
59	部田野猪Ⅱ遺跡		○	○			
60	部田野猪Ⅲ遺跡		○	○			
61	部田野山崎Ⅰ遺跡		○	○	○	○	
62	部田野山崎Ⅱ遺跡		○	○	○	○	
63	山崎遺跡		○				
64	前原A遺跡		○	○			
65	西並木下遺跡		○		○	○	
66	前原B遺跡			○	○	○	
67	馬渡古墳群				○		
68	前原C遺跡				○	○	
69	本郷東遺跡			○	○	○	
70	本郷西遺跡			○	○	○	
71	十五郎穴横穴墓群				○	○	
72	指洪遺跡		○	○	○	○	
73	虎塚古墳群				○		
74	下原遺跡		○				
75	北谷遺跡			○	○	○	
76	中根北谷北遺跡		○	○	○	○	
77	君ヶ台遺跡	○	○	○	○	○	
78	君ヶ台貝塚		○				
79	笠谷古墳群				○		
80	館出遺跡		○	○	○	○	
81	笠谷遺跡		○	○			
82	大和田遺跡		○	○	○	○	
83	東中根清水遺跡	○	○	○	○	○	
84	中根城跡						○
85	東中根堂山遺跡			○			
86	野沢前遺跡		○	○	○	○	
87	石光遺跡		○		○	○	
88	中根中区古墳群				○		
89	中根中区遺跡				○		
90	西中根遺跡		○	○			

〈第1表凡例〉「時代」 P：旧石器時代 J：縄文時代 Y：弥生時代 K：古墳時代 N：奈良・平安時代 T：中世

では、奈良時代の硯や平安時代の銭貨「隆平永寶」が注目される。

この2遺跡の調査成果に基づく集落の性格は、鷹ノ巣遺跡の集落の性格と類似する点が多いことから、鷹ノ巣遺跡の集落の広がり宮後遺跡や部田野西原遺跡まで続いていることが推定できる。

2 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

2004年、ひたちなか市においては、ひたちなか市営たかのす霊園拡張事業が計画され、約1万㎡の範囲が対象とされた。

対象地内には、周知の遺跡として鷹ノ巣遺跡が存在することから、ひたちなか市市民生活部とひたちなか市教育委員会、当社の三者協議会がもたれた。その結果、2005年度に発掘調査が計画され実施された。調査区は、道路を挟んで西側をA地区、東側をB地区と呼称した(第3図)。当初、発掘調査は当年度中の計画であったが、調査期間等の関係からすぐに工事に入るB地区とA地区の第30号住居跡の一部を対象とした。

そして、2011年度にA地区部分の墓地拡張工事の計画がひたちなか市より提示されたため、2012年度にA地区の発掘調査が計画された。

2 調査の経過

2012年5月 鉦入式(15日)。調査は、まず重機を使って2005年度に確認した遺構を再確認する作業から開始した。その結果、住居跡3基と溝状遺構2条を確認し、第28号住居跡から調査を開始した。

6月 第28号住居跡は、一辺が8mの大型住居跡であったため、覆土の掘り下げに苦勞した。また、当住居跡から炭化材が多数出土したため、その調査に時間を要した。当遺構の調査と同時に第29・30号住居跡、第1・2号溝状遺構の調査も実施した。8日には市内的那珂湊第三小学校六年生80名が来訪。

7月 3基の住居跡の調査が進み、掘形の調査を実施した。10日には調査区の全体の写真撮影を行った。そして11日に全ての調査を終了した。

3 調査の概要

A地区のローム層上において検出された遺構は、古墳時代後期の住居跡2基(第28・30号住居跡)、奈良時代の住居跡1基(第29号住居跡)、溝状遺構2基(第1・2号溝状遺構)である(第4図)。

住居跡は他の遺構と重複せず、点々と分布する。古墳時代後期の住居跡である第28号住居跡は、一辺8mを有し、同時代のものとしては鷹ノ巣遺跡で最大規模となった。溝状遺構は、2条とも時代を特定する遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、遺構の重複関係から第28号住居跡よりも新しい年代であることは確認できた。

第2次と第3次調査の時代ごとの住居跡番号は以下の通りである。なお、住居跡等の遺構番号は、第1次の調査で付された番号に続くものとし、A地区から付けている。

弥生時代：35・47・55

古墳時代(前期)：40B・41・43・46・52・59・60・62

古墳時代(後期)：28・30・31B・34B・36・37・39・40A・42・45・48・49・50・51・53・64

奈良・平安時代：29・31A・32・33・34A・38・44・54・56・57・58・61・63・65・66・67



調査風景(第28号住居跡)

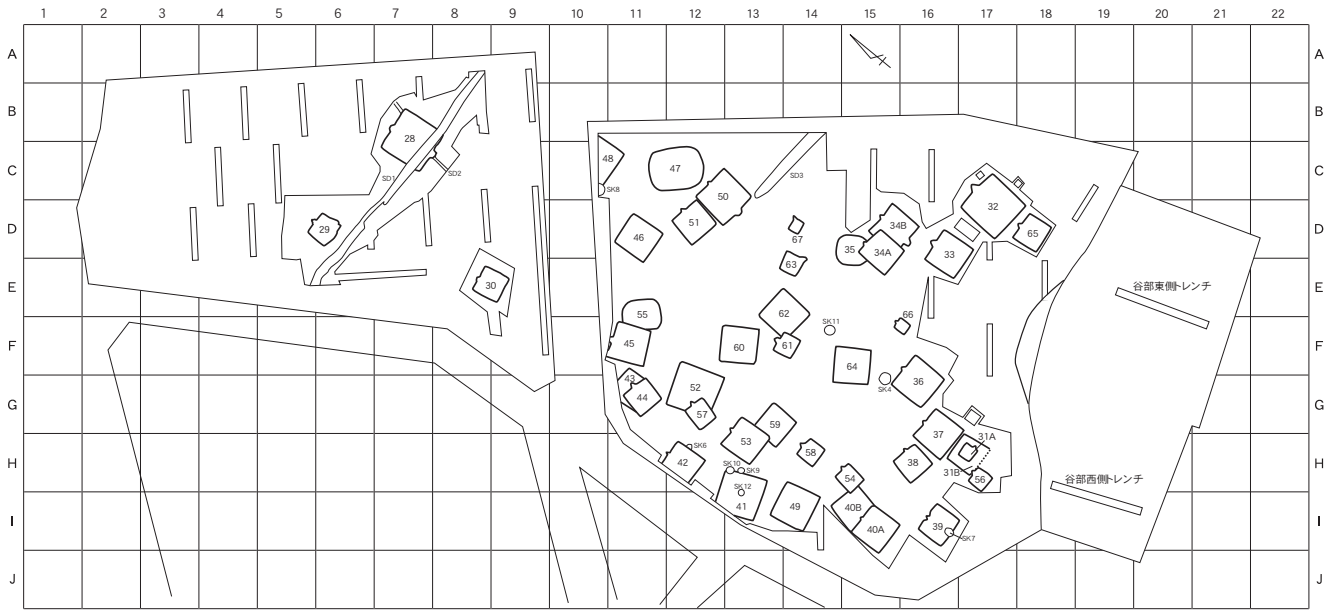


小学校見学風景



第3図 鷹ノ巣遺跡調査区位置図

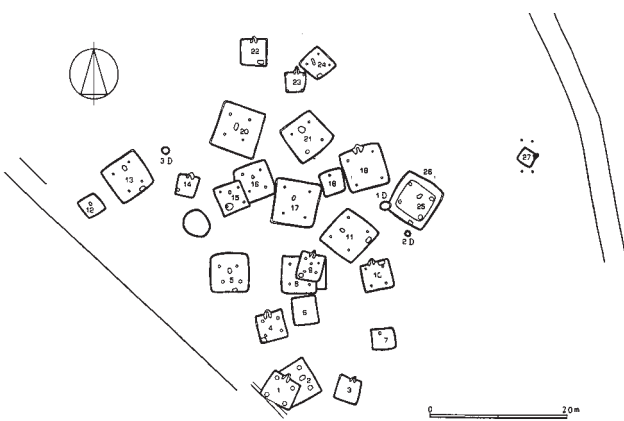
I 遺跡の概要



第4図 第2・3次調査遺構分布 (SD：溝状遺構/SK：土坑/グリッドは1辺10m)



第3次調査遺構出土状況



第5図 第1次調査遺構分布 ([井上1994]を一部修正)

第2表 第1次調査住居跡一覧

住居跡番号	長軸 (m)	短軸 (m)	主軸	時期
1	4.6	4.25	N-25°-E	古代
2	5.5	(5.3)	N-67°-E	古墳前期
3	3.9	3.5	N-4°-E	古代
4	4.2	4.0	N-13°-W	古墳後期
5	5.7	5.4	N-10°-W	古墳前期
6	3.8	3.7	N-7°-W	古墳前期
7	3.7	3.2	N-10°-W	古墳前期
8A	5.5	5.45	N-3°-E	古墳前期
8B	(4.1)	-	-	古墳前期
9	4.1	3.8	N-12°-E	古墳後期
10	4.7	4.2	N-14°-W	古墳後期
11	6.2	6.2	N-51°-W	古墳前期
12	2.9	2.9	N-27°-W	古墳前期
13	5.8	5.65	N-33°-E	古墳前期
14	3.0	3.0	N-19°-E	古代
15	4.4	4.3	N-22°-W	古墳前期
16	5.5	5.5	N-15°-W	古墳前期
17	6.6	6.3	N-7°-E	古墳中期
18	3.7	3.65	N-14°-W	古墳前期
19	6.15	5.95	N-15°-W	古墳後期
20	6.55	6.5	N-12°-E	古墳中期
21	6.85	6.1	N-23°-W	古墳中期
22	4.05	3.9	N-1°-W	古墳後期
23	3.2	3.1	N	古墳後期
24	4.05	3.9	N-46°-W	古墳前期
25	6.5	6.45	N-31°-E	古墳中期
26	6.55	6.5	N-31°-E	古墳前期
27	1.2	1.1	N-36°-E	古代

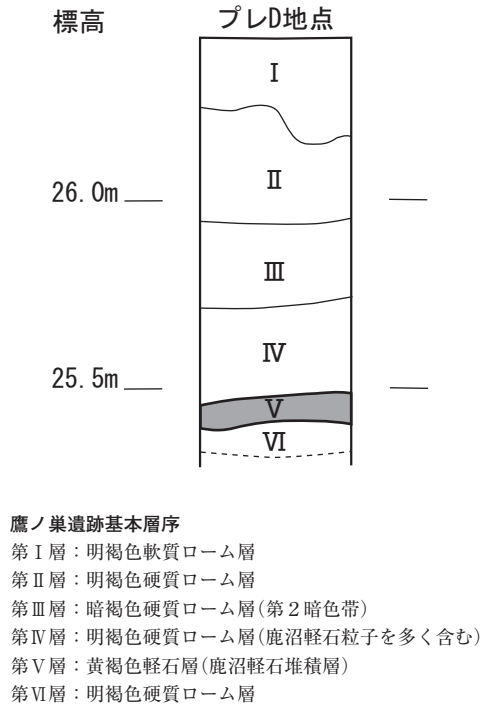
参考文献

井上義安他 1976 『那珂湊市遺跡分布調査報告書』那珂湊市教育委員会
 井上義安 1994 『那珂湊市鷹ノ巣遺跡』那珂湊市鷹ノ巣遺跡発掘調査会
 稲田健一他 2008 『鷹ノ巣-第2次調査の成果-』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第37集 財団法人ひたちなか

市文化・スポーツ振興公社
 茨城県教育委員会 2001 『茨城県遺跡地図』
 大久保隆史 2012 『宮後遺跡 部田野西原遺跡 一般国道245号道路拡張事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第354集 財団法人茨城県教育財団

II 旧石器時代の遺物

1 調査の概要



第6図 基本層序

1 基本層序

基本層序は、旧石器時代の調査で設定したトレンチD地点で観察を行った。観察の結果は第6図に掲載した。また、層序を観察するにあたり、過去に調査を実施した市内の武田遺跡群の基本層序を参考とした。

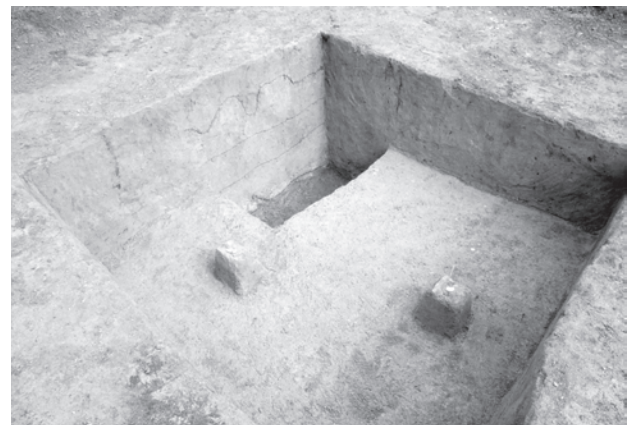
2 旧石器時代の調査

旧石器時代の調査は、第32号住居跡と第36号住居跡の覆土より石器が出土したことを参考として、トレンチを4地点設定し実施した。その結果、A地点では2点のガラス質黒色安山岩製剥片、B地点では1点のメノウ製剥片、D地点では2点のメノウ製剥片が出土した。基本層序に対比すると、出土層位は第III層(第2暗色帯)となる。ただし、出土数は1～2点と少なく、石器のブロックは確認できなかった。C地点からは石器が出土していない。

関東ローム層以外の後世の遺構から、100点の石器類が出土した。第7図は、その石器の出土点数の分布であ



第7図 旧石器時代調査区設定図(数字は石器の出土数/グリッドは1辺10m)



D地点石器出土状況

る。この図から、調査区東側で出土点数が多いことがわかる。この分布状況は、第3図の地形図では、標高26～28mの等高線に沿う形となる。

2 石器群の様相

器種構成は台形様石器3点、ナイフ形石器1点、二次加工石器2点、剥片93点、石核8点である。石材構成はメノウ34点、石英1点、ガラス質黒色安山岩22点、トロトロ石18点、赤玉石1点、チャート3点、黒曜石3点、硬質頁岩6点、珪質頁岩16点、珪質岩1点である。当資料中には3組の接合資料も含む。このうち、台形様石器3点、ナイフ形石器1点、剥片10点(接合後8点)、石核6点について実測図を提示し説明を行い、実測図未掲載の資料の様相にも触れる。

台形様石器(第8図1～3) 1はメノウ製で、鱗状の剥片を素材とする。打面を基部側に置き、基部側の両側縁に二次加工を施しているが、素材剥片時の打点付近は二次加工を施さずに残置するため打点と打瘤裂痕が残る。二次加工の程度は左右両側縁で異なり、正面図向かって左側縁では背腹両面に押圧剥離による二次加工を施すが、右側縁では腹面にのみ施す。刃部先端を折損する。

2はメノウ製で、鱗状の剥片を素材とする。打面を基部側に置き右側縁は全体に左側縁は基部側にそれぞれ二次加工を施しているが、打点付近は二次加工を施さずに残置する。先端側を折損する。

3はトロトロ石製で、横長の剥片を素材とする。打面を左側縁に置き、基部側左右両側縁に二次加工を施す。背面構成を観察すると、剥離方向が並行するものが少なく多方向からの剥離作業から生産している素材を使用していることが台形様石器3点に共通する。

ナイフ形石器(第8図4) 珪質頁岩製で二次加工部位の端部破片である。先端側からの入力状況を見ると、先端側から縦割れ状となり、衝撃による折損と考える。二次加工部位の剥離角が80度から90度と直角になることが台形様石器と異なり、ナイフ形石器と分類した。

剥片(第8・9図5～13) 5はトロトロ石製の縦長剥片である。左側縁の観察から縦長剥片生産の初期段階あるいは途中に稜形成を実施した部位に近接していたものと判断する。末端側が肥厚する様相から、剥離作業後半段階における石核形状修正作業の可能性が高い。背面構成と本剥片の剥離方向はほぼ一致する。器体表面に被熱赤化の痕跡が認められる。打面側を折損する。

6はトロトロ石製の縦長剥片である。背面構成と本剥

片の剥離方向はほぼ一致する。表面の風化が著しく剥離面の観察ができずに剥離方向が把握できない箇所(打面)がある。

7はガラス質黒色安山岩製の縦長剥片である。背面構成と本剥片の剥離方向は一致する剥離面もあるが大きく異なる剥離面も多く、頻繁な打面転位が組み込まれていると考える。単剥離面打面で打点から連続する腹面端部に「リップ」が生じており、剥片生産に軟質ハンマーが使用されたと判断する。打面そばを検出時に欠損している。

8はガラス質黒色安山岩製の縦長剥片である。打面は線状打面で、腹面に小さな打瘤裂痕が生じている。左側縁は素材礫面が残る。

9はガラス質黒色安山岩製の横長剥片である。剥片生産時に使用した打面に直径が3.5mmのパンチコーンが残っている。剥片末端には礫面が残る。

10はガラス質黒色安山岩製の縦長剥片である。2点が接合する(接合資料1)。単剥離面打面を使用して剥離を行っているが、打点から連続する腹面端部に「リップ」が生じており、剥片生産に軟質ハンマーが使用されたと判断する。

11は珪質頁岩製剥片の接合状況図で、都合3点の剥片から構成される(接合資料2)。円礫の一部を除去した剥離面をそのまま打面とした様で、剥片剥離時に打面調整は施さずほぼそのまま剥片剥離になっている。

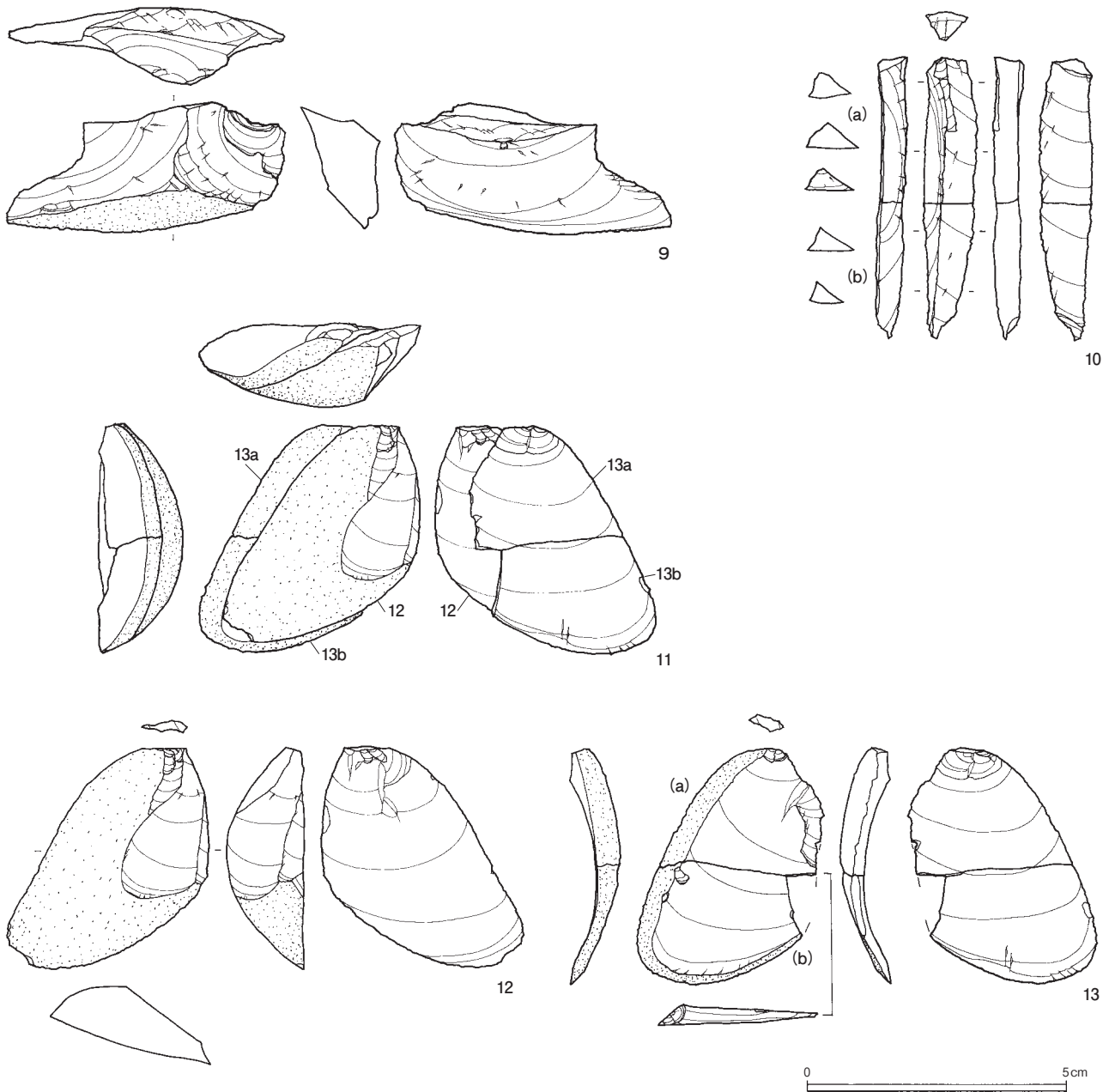
12は厚い剥片で、13は薄い腹面側に大きく湾曲する剥片である。器体中央で折損するが折損面は背面側からの入力で剥離と同時に折損したと判断する。この接合資料は第65号住居跡から出土したが、同じ遺構内から接合はしないが同一母岩製の剥片が他に2点ある。打面の形状も単剥離面打面を使用した剥片で、背面構成も90度剥離方向が異なる剥離面で構成されるなど、打面転位が組み込まれながらの剥片生産であったと考える。残核は出土していない。

実測図未掲載の剥片資料、縦長状から鱗状まで様々な形態があり、一定の形状が揃わない。打面調整も低調で打面長が大きく器厚最大値の計測点が打面付近となる傾向がある。

石核(第10～12図14～19) 14はメノウ製の石核で



第8図 出土石器(1)



第9図 出土石器(2)

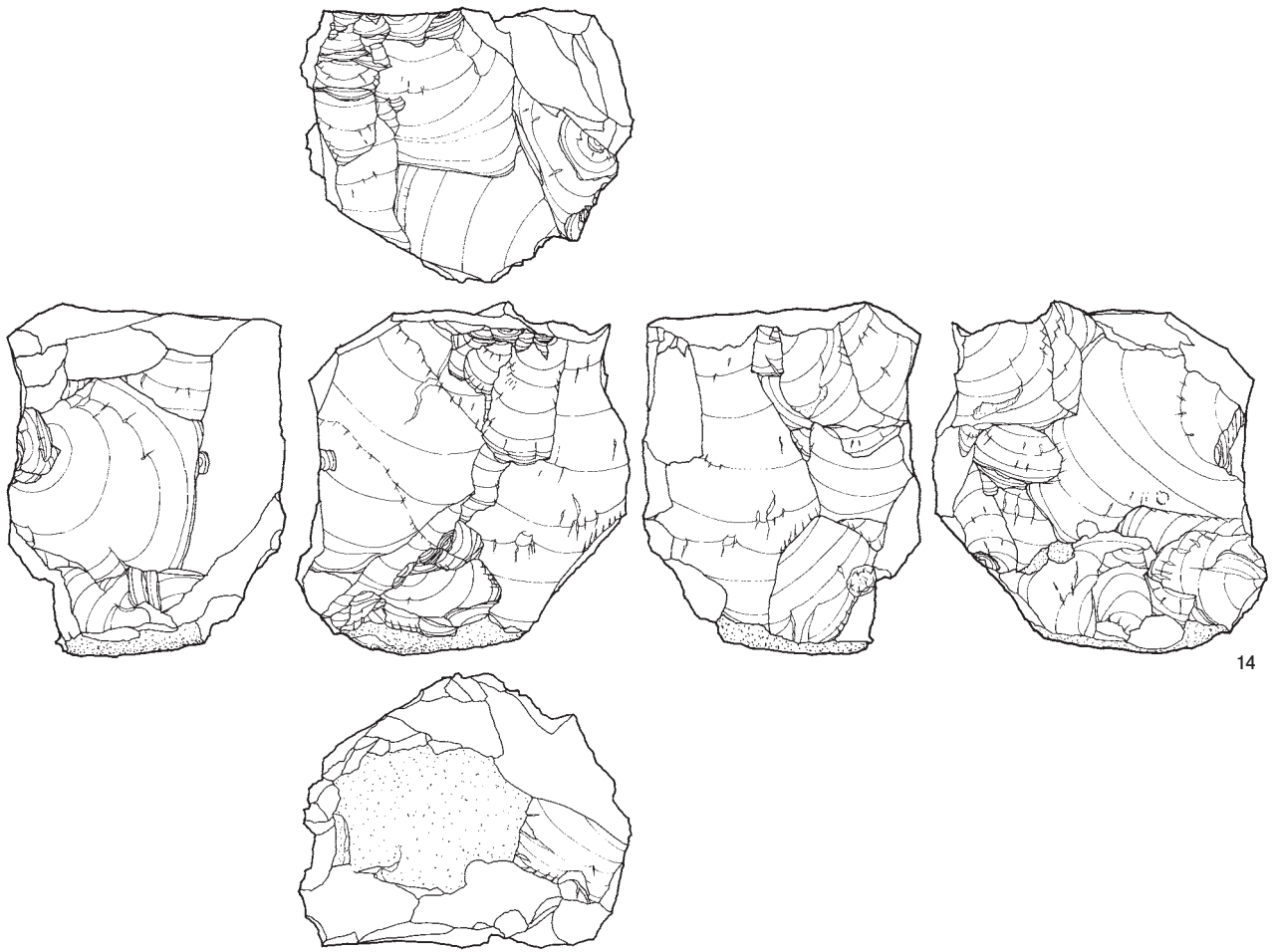
ある。器体の一部に礫面を残すが、表面の9割で剥片剥離を実施しており作業面使用頻度は高い。しかし打面を一定に保持する工程が無く、剥離作業面と打面の頻繁な交替を行っている。剥離作業には不向きな角状の端部が器体各所に残るなど、石核としての剥離作業面調整や打面調整はほとんど行っていない。生産していた剥片の形状やサイズも縦長や鱗状とかなり異なっていたと考える。

15はメノウ製の石核である。器体の一部に礫面を残すが、表面の8割で剥片剥離を実施しており作業面使用頻度は高い。14の石核とは異なり端部に鋭角な部位が残ら

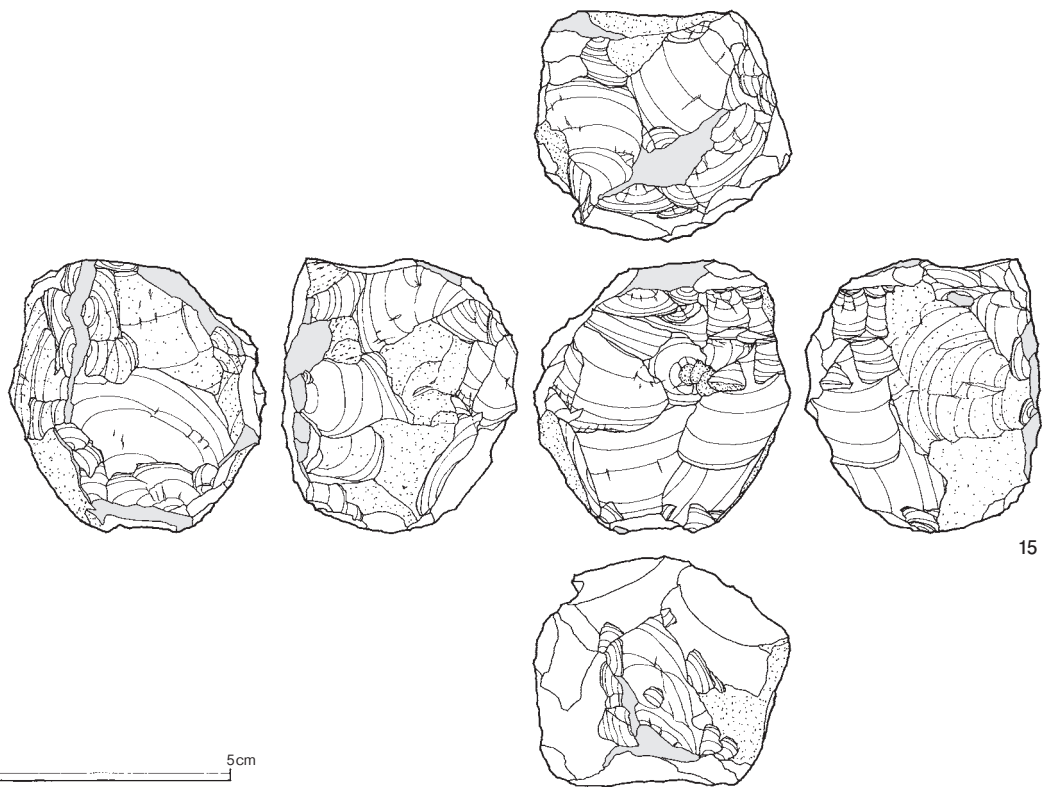
ず、数箇所に敲打痕が認められる(網点で表示)。この敲打痕部は多くが凸面状で、敲打器として使用した可能性を考える。礫面の残存位置からすると、正面とした部位以外は剥片剥離作業面として余り使用していないため、剥離以前の原石のサイズからあまり縮小していないと考える。

16はメノウ製の石核である。器体の一部に礫面を残すが、表面の8割で剥片剥離を実施している。生産した剥片は鱗状のもので、台形状石器の素材と考える。

17はメノウ製の石核である。板状礫を素材として小口付近に剥離作業面を設置して縦長状の剥片を生産してい



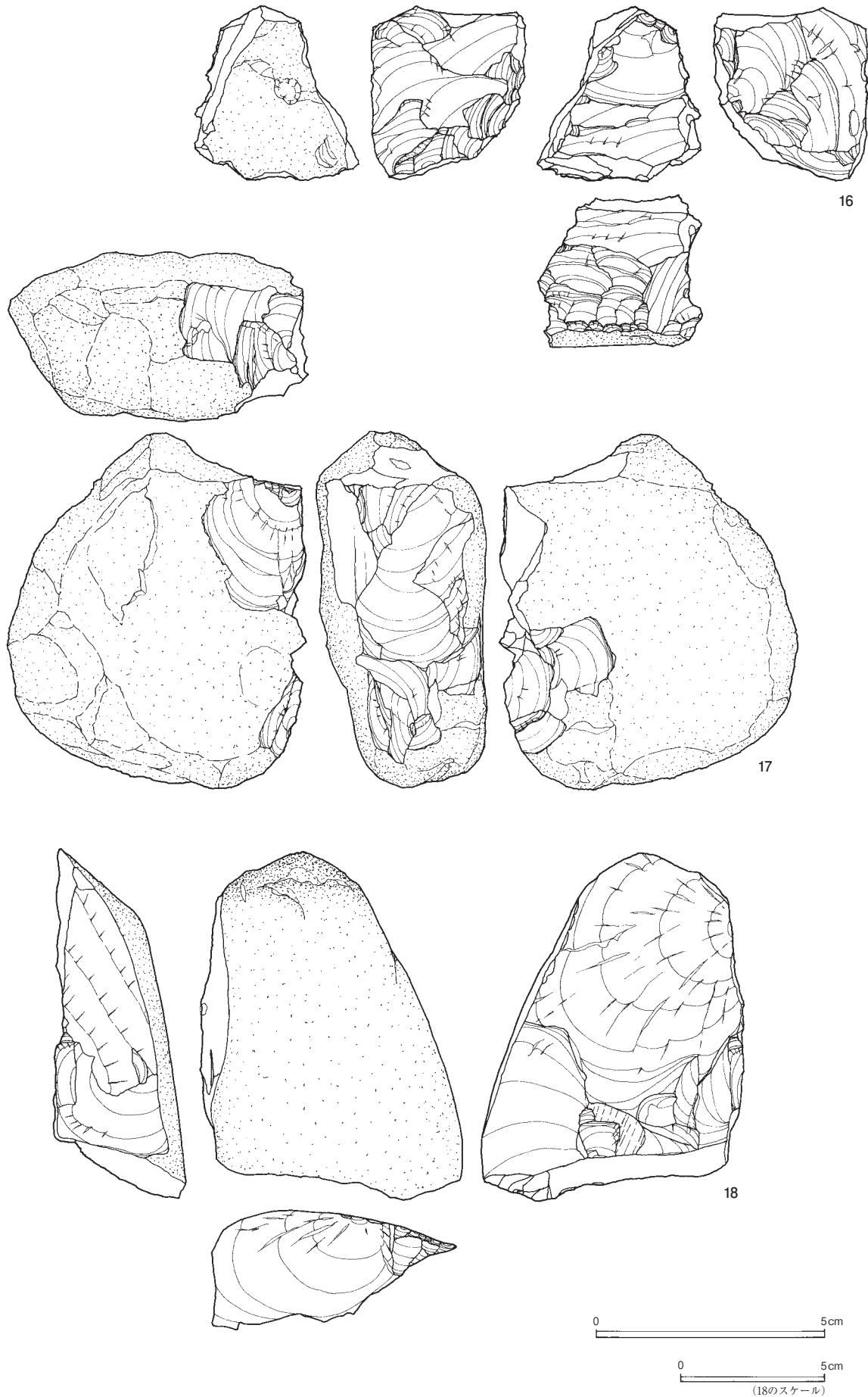
14



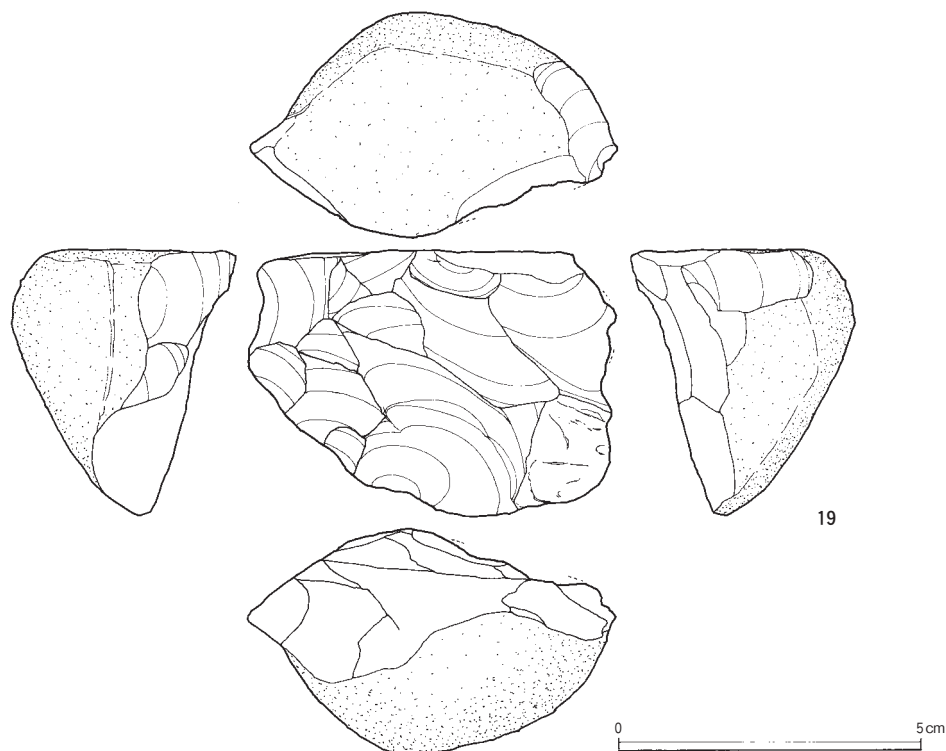
15

0 5cm

第10図 出土石器(3)



第11図 出土石器(4)



第12図 出土石器(5)

る。打面調整は認められず、打面と剥離作業面を交替させながらの剥片生産である。

18はガラス質黒色安山岩製の石核である。素材礫を大きく分割した後に様々なサイズの剥片を剥離して最終段階で横長な剥片を生産している。横長剥片生産時にも打面を調整することなく礫面をそのまま使用した剥片剥離で、全体でも打面調整は低調である。

19はトロトロ石製の石核である。素材礫の角部を一つ残し、礫面をそのまま打面として剥片剥離を施している。生産した剥片は鱗状で他の石核と同様に台形様石器の素材剥片を生産したと考える。

実測図未掲載資料では17と同様なメノウの板状礫を素材とする石核で、礫面をそのまま打面とする。生産した剥片の形状は、小さなサイズの鱗状の物と考える。

小 結 鷹ノ巣遺跡で出土した旧石器の特徴は大半を本来の包含層である関東ローム層中ではなく、後世の遺構内から出土した石器群という点である。旧石器が出土した遺構の周辺に設定した旧石器調査区でも関東ローム層中から少数ながらも旧石器が出土したことから、その遺構付近に本来旧石器集中地点が存在していたことは確実であると考えられる。遺構内から出土した石器点数の状

況から考えると、少なくとも3地点の石器集中があったと想定する。

石器群の所属時期について、二側縁加工によって柳葉状となるナイフ形石器を含まず、台形様石器を中心とする二次加工石器を保持する点。生産された剥片には、打面調整がほとんど見受けられず単剥離面打面や礫面を無調整のまま打面とするものが多い。剥片7や10では剥片剥離時に軟質ハンマーを使用した痕跡があり、打面長がやや大振りな傾向が窺える。剥片9ではパンチコーンが観察できたが、剥離時に間接具を使用したにしては打面長が大きく残り、あまり多用していない。末端が蝶番状剥離となり必要以上に肥厚しすぎる剥片が多い。石核では打面と剥離作業面を交替させての剥片生産であるが、生産した剥片のサイズや形状があまり揃っていない様だ。石核の打面調整や不必要に残る角状の端部除去も施さないため、かなり大きなサイズでも剥片生産が中断され作業地外に搬出もせず残っている。想定する3地点の石器に共通する特徴である。以上の特徴から、間接具を用いて企画性の高い同サイズの剥片を連続して生産するAT降灰期以降の石器群と比較すると、それ以前の石器群の様相であると判断する。那珂台地周辺で検出される

II 旧石器時代の遺物

台形様石器の製作時期は、立川ローム層段階区分で表現すると関東平野の時期区分で第Ⅸ層段階となる。剥片と石核の剥片生産の様相も同段階と判断する。

石材利用の点では、久慈川産メノウと珪質頁岩に那珂川流域産のガラス質黒色安山岩を中心とした様相は、いかにも那珂川流域の石器群であると考えられる。大半の石材は茨城県内で獲得可能であり、県外から搬入された石材としては黒曜石と硬質頁岩ということになる。黒曜石は産地分析作業を実施していないが、栃木県高高山産1点と中部高地の和田峠産2点と判断する。硬質頁岩は剥片で6点と少数だが、二次加工作業によって生じたものではなく剥片生産時に生成したもので、当地に石材搬入から剥片生産までを想定できると考える。

周囲の遺跡では同じ台地上で北に250m離れた地点に第Ⅴ層～第Ⅳ層下部段階石器群が出土した差洪遺跡があり那珂川流域産のガラス質黒色安山岩を主体とした石器群と被熱赤化・破碎礫の集中による礫群が検出されている[檜村1995・窪田2005]。差洪遺跡の石器群が出土した層位を本遺跡の基本層序に当てはめると、Ⅰ層下部の軟質ローム下部となる。部田野西原遺跡では過去に耕作中に剥片が出土したと報告[植田・杉浦1976]されているが、資料の詳細は不明である。周辺遺跡の石器群の内容

を観察すると、部田野の台地上には異なる時期の石器群が各所に分布していて、旧石器時代を通じて良好な生業活動の場であったと理解できる。

鷹ノ巣遺跡の位置は中丸川と本郷川の合流点を南に臨む場所で、本郷川を遡ると細石器の出土で著名な後野遺跡や、Ⅴ層～Ⅳ層下部段階の搔器や角錐状石器の製作跡と考えられる向野遺跡群が分布する。那珂川北岸の那珂台地では、那珂川沿岸や内陸に流路を持つ中丸川や本郷川沿岸で近年旧石器時代遺跡の調査が数回実施されたが、出土資料の時期がAT火山灰降灰期以降の資料ばかりで、良好なAT火山灰降灰期以前の資料を出土した武田西端遺跡と武田原前遺跡に対比可能な資料はほとんど追加されてこなかった。小規模ながらようやく検討資料が追加できたと考える。今後の調査によってさらなる研究の進展があることを期待したい。

参考文献(著者50音順・敬称略)

- 植田友次・杉浦隆之 1976 「Ⅴ.部田野地区の遺跡 42 西原遺跡」[那珂湊市遺跡分布調査報告書]那珂湊市文化財調査報告Ⅱ 那珂湊市教育委員会
- 檜村宣行 1995 「一般国道6号線東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 差洪遺跡」第103集 建設省・財団法人茨城県教育財団
- 窪田恵一 2005 「茨城県ひたちなか市差洪遺跡の旧石器時代資料 那珂川下流域のⅤ層～Ⅳ層下部段階石器群」[茨城県考古学協会誌]第17号 1～24頁 茨城県考古学協会

第3表 旧石器時代石器計測表

No.	出土地点	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	剥離角	石材	接合
1	64住No4	台形様石器	24.3	18.5	6.5	2.60	-	メノウ	
2	40A住No8	台形様石器	25.7	17.3	6.3	2.25	134	メノウ	
3	42住No16	台形様石器	31.0	20.3	7.4	3.34	130	トロトロ石	
4	64住No2	ナイフ形石器	17.1	7.3	5.8	0.50	-	硬質頁岩	
5	64住No21	剥片	43.3	30.5	14.3	20.30	-	トロトロ石	
6	37住No9	剥片	53.2	34.7	11.6	14.65	128	トロトロ石	
7	31A住No4	剥片	55.3	34.4	12.3	13.75	110	ガラス質黒色安山岩	
8	36住Ⅳ区No9	剥片	61.4	15.6	8.4	6.50	128	ガラス質黒色安山岩	
9	36住No20	剥片	22.9	54.9	14.7	13.10	126	ガラス質黒色安山岩	
10(a)	31住一括	剥片	28.0	10.2	5.0	1.80	112	ガラス質黒色安山岩	1
10(b)	31B住Ⅰ区No1	剥片	26.3	9.6	4.9	1.20	-	ガラス質黒色安山岩	1
12	65住No7	剥片	45.6	38.9	10.4	13.70	102	珪質頁岩	2
13(a)	65住No15	剥片	25.0	31.8	6.4	3.45	102	珪質頁岩	2
13(b)	65住No5	剥片	24.8	30.9	3.9	2.45	-	珪質頁岩	2
14	32住Ⅱ区No4	石核	58.5	55.5	45.6	179.50	-	メノウ	
15	40A住No13	石核	44.9	42.3	38.6	42.21	-	メノウ	
16	31住周辺表土No1	石核	38.0	36.5	33.8	48.47	-	メノウ	
17	37住No13	石核	79.0	65.0	36.8	226.01	-	メノウ	
18	65住No1	石核	121.8	93.0	46.2	534.75	-	ガラス質黒色安山岩	
19	38住No5	石核	44.2	60.8	37.1	95.06	-	トロトロ石	

Ⅲ 縄文時代の遺物

1 土器

調査区内からは、縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物はすべて、後世の遺構内あるいは遺構外から検出されている。遺物は土器の破片が検出された。そのうち図示したものは早期が2点、中期～後期74点、時期不明15点である。(第13～15図)

早期の土器(第13図1・2) 1は棒状工具による太沈線文が縦方向に施文されている。2は尖底部であり、外面には条痕文が施されている。器壁が薄く、小型の土器かと推測される。

中期の土器(第13図3) 3は、波状の口縁部。LR縄文の地文で口唇部は撫で調整されている。口唇部直下に棒状工具による沈線文、半截竹管状工具による有節線文。斜位に棒状工具による沈線文が施文され、その片壁にそって半截竹管状工具によって連続刺突文を施文している。阿玉台式かと思われる。

中期～後期の土器(第13図4～27, 第14図28～65, 第15図66～76) 4は波状口縁の波頂部。棒状工具による渦巻文が施文されている。5も剥離しているが渦巻文と推測される。6は波状の口縁部。口縁部に無文帯、以下に縄文を施文、沈線文により区画された無文帯を丁寧に磨いている。内側も丁寧な磨きが施されている。7・8は縄文を施文後、沈線文による区画、無文部の磨きを行っている。11は口縁部と縄文施文部が微隆起線文により区画される。12～18は縄文施文後沈線文による区画されているもの。19～23は縄文施文後微隆起線文によって区画されているもの。以上加曾利E3～4式の範疇と思われる。24～27は縄文を縦方向に施文しているもの。

28～31・33は刺突文が施文されている。28は先の尖った棒状工具で3ヶ所刺突し、沈線文は先の角ばった棒状工具で施文している。29は沈線で円を描いた中を先の尖った棒状工具で刺突している。30は円形貼付文の真中を棒状工具により刺突。31は縦位の隆帯文の上を指(?)で刺突している。

32は口縁部の無文帯の下部を沈線文で区画し、縄文の地文の上に棒状工具による沈線文を施文している。34・

35・36は口縁下部を隆帯と沈線文で区画している。34は緩い波状の口縁部。38は沈線文で区画された中を短沈線で充填している。39は把手部分か。40～46は地文の縄文の上から沈線文を施文している。47～56は櫛あるいはハケ状の工具で施文している粗製の土器である。

57は口縁内側に棒状工具による沈線文、指による押圧文が確認される。58も内側に棒状工具による沈線文が見られる。浅鉢の口縁部かと考えられる。59は隆帯に刺突文と言うよりも半截竹管状工具によって左右の方向から挟り取るような施文を行っている。60は屈曲部に隆帯が貼られ篋状工具により刻みが施文されている。61は口縁部を折返している。28～46は堀之内1式、47～56はそれに伴う土器。

62は口縁部に貼瘤を施し篋状工具で整えている。少し粗雑な作りである。撫で調整してから沈線文で区画を描出し、縄文を施文している。安行1式と思われる。

63も棒状工具による沈線文を施文しているが粗雑な感じである。堀之内式の粗製か。

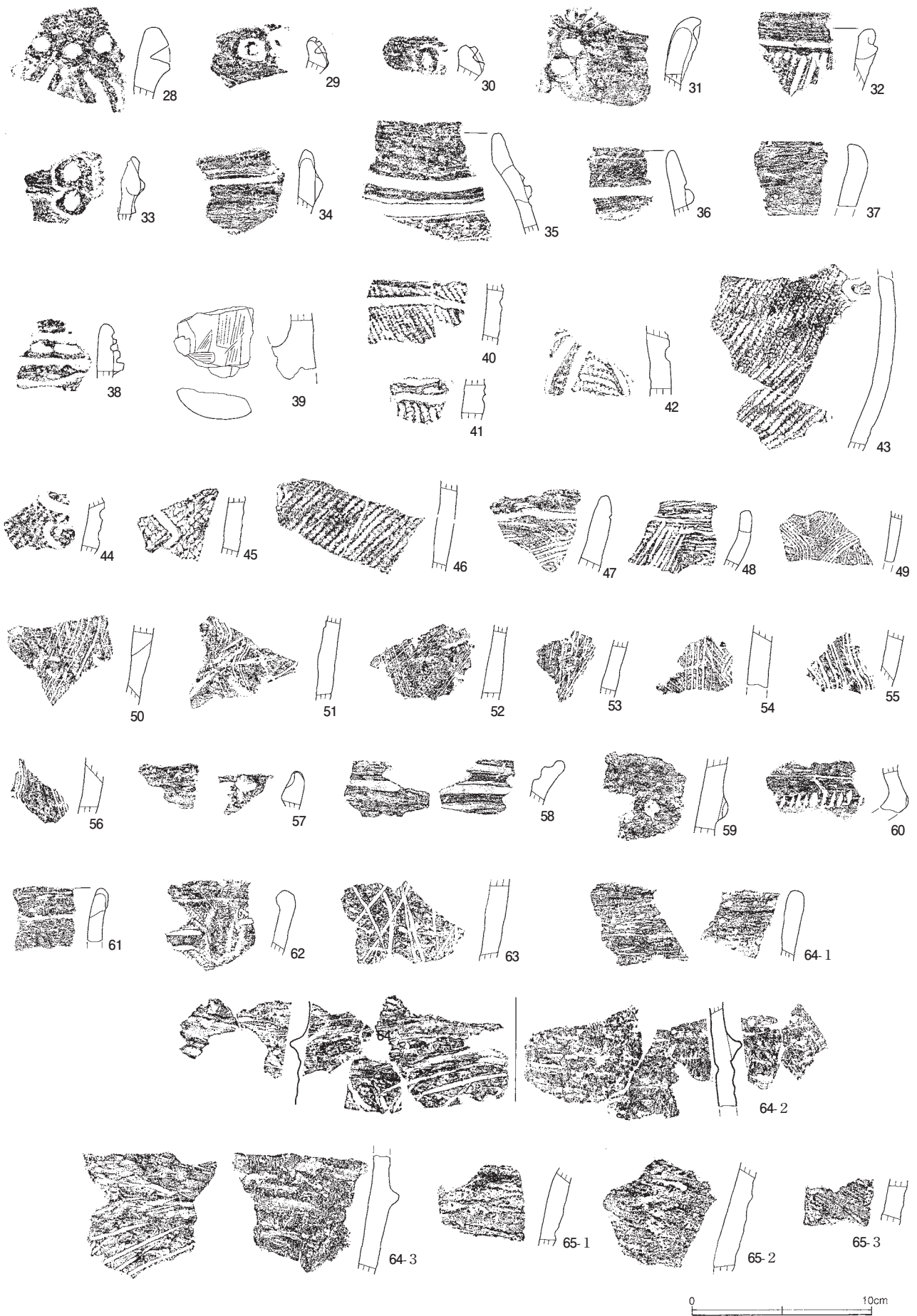
64は粗い胎土で表面は横方向に撫で調整されている。65は隆帯文の貼付によって二段に区画されている。隆帯文は撫で調整されている。文様の構成は粗雑である。後期の土器。

66～76は中期～後期に伴う土器か。

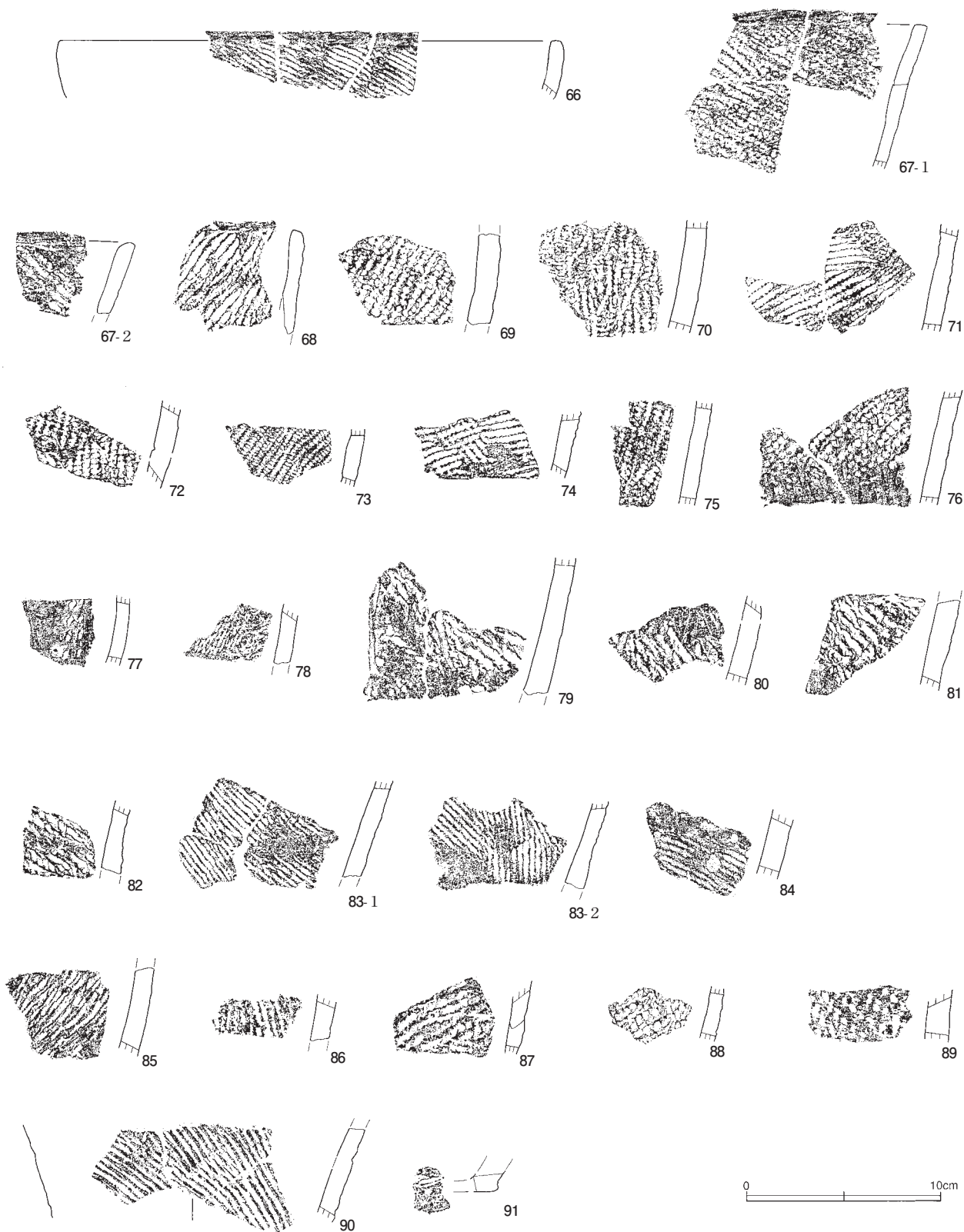
その他の土器(第15図77～91) 77～90は縄文が施文されている。78・79・80は同一個体か。91は底部。



第13図 出土土器(1)



第14图 出土土器(2)



第15図 出土土器(3)

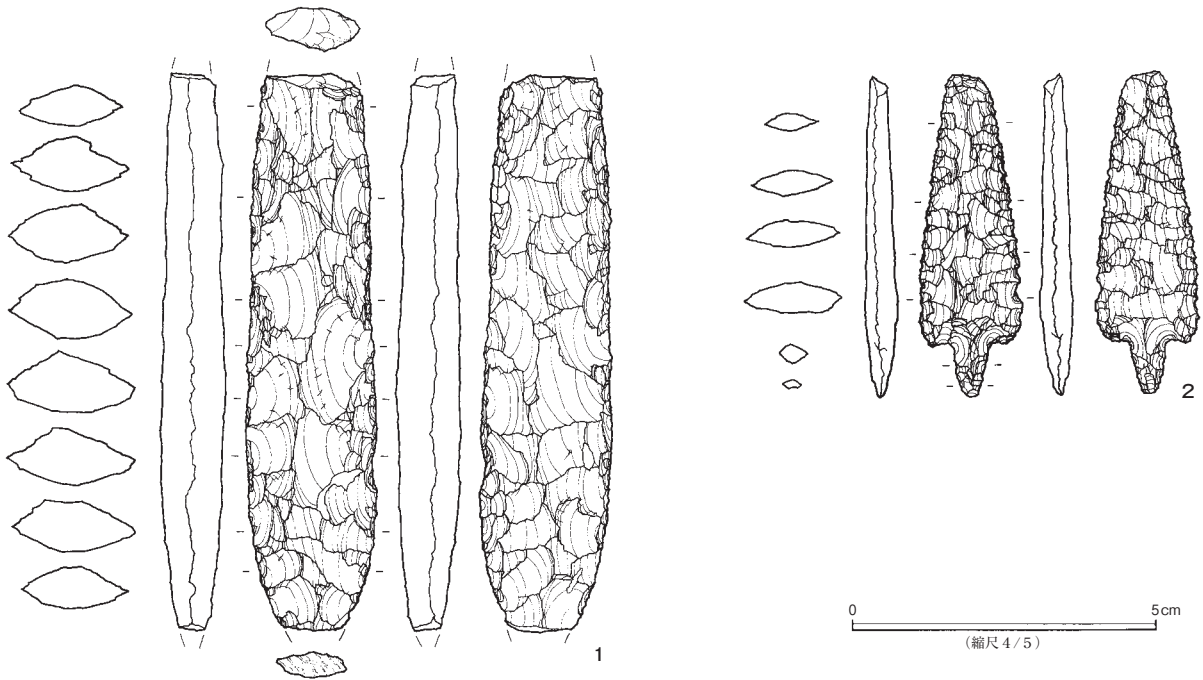
第5表 縄文時代土器一覽表

挿図	番号	出土位置	計測及び観察	挿図	番号	出土位置	計測及び観察	
第13図	1	SI31	文：棒	第14図	46	SI36	文：縄LR, 棒	
	2	SI45	文：無		47	SI66	文：唇無, 棒, 櫛(4本)	
	3	SI41	文：唇無, 縄LR, 棒, 半竹, 備：波状		48	SI56	文：唇ハケ?, ハケor櫛?, 胎：骨多	
	4	SI64	文：唇無, 棒, 胎：骨多, 備：波状		49	SI42	文：櫛(6本)	
	5	SI45	文：棒, 備：外剥離		50	SI21	文：輪積痕, 櫛?(4本?)	
	6	SI44・45	文：唇無, 縄RL, 棒or半竹, 備：波状, 外炭付		51	B地区	文：櫛(4本)	
	7	SI43	文：唇無, 縄LR, 棒		52	SI36	文：櫛(6本?)	
	8	SI52	文：唇無, 縄, 棒		53	SI38	文：櫛?	
	9	SI45	文：唇無, 縄R		54	B地区	文：櫛(4本)	
	10	SI45	文：唇無, 縄RL		55	SI38	文：櫛(4本)	
	11	SI38	文：縄RL		56	SI61	文：櫛	
	12	SI36	文：縄LR, 棒		57	SI38	文：唇無, 内面に棒, 押圧(ユビ)	
	13	SI36	文：縄LR, 棒		58	SI38	文：唇無, 内面に棒	
	14	SI36	文：縄LR, 棒		59	SI38	文：隆, 半竹	
	15	SD2	文：縄LR, 棒		60	SI58or38	文：隆・窠	
	16	SK10	文：縄RL? 棒		61	SI55	備：口唇部折返し,	
	17	SI52	文：縄LR, 棒, 胎：白多		62	SI31A	文：唇無, 貼瘤, 棒, 縄RL	
	18	SI37	文：縄LR, 棒		63	SI45	文：棒	
	19	SI43・44	文：縄LR, 隆		64	SI45・49	文：唇無, 隆・指, 外・横撫→棒or半竹, 内・条→撫?	
	20	SI61	文：縄LR?, 隆		65	SI44・49・59	文：撫	
	21	SI43	文：縄LR, 隆		第15図	66	SI47・55	法量：□816(13), 文：唇無, 縄R
	22	SI43	文：縄LR, 隆			67	SI48・SK8	文：唇無, 縄RL
	23	SI43	文：縄LR, 隆			68	SI40B	文：唇無, 縄L
	24	SI52・55・59	文：縄LR			69	SI64	文：縄LR
	25	SI36	文：縄RL			70	SI38	文：縄LR
	26	SI32	文：縄LR			71	SI36	文：縄LR
	27	SI45	文：縄RL			72	SK4	文：縄LR
第14図	28	SI69	文：唇無, 棒, 刺突文	73		SI52	文：縄0段多条LR, 備：内面剥離	
	29	SI45	文：唇無, 棒, 刺突文	74		SI52	文：縄LR	
	30	SI57	文：唇無, 円形貼付文, 刺突文, 備：波状?	75		SI37	文：縄LR	
	31	SI31B	文：唇無, 刺突文	76		SI41	文：縄LR	
	32	SI58	文：唇無, 縄LR, 棒	77		SI44	文：縄RL-S	
	33	SI42	文：円形貼付文, 刺突文(指?)備：輪積痕	78		SI38	文：縄L-S?	
	34	SI42	文：唇無, 棒	79		SI52	文：縄R, 棒	
	35	SI36	文：唇無, 棒	80		SI52	文：縄R	
	36	SI64	文：唇無, 棒	81		SI52	文：縄R	
	37	SI60	文：唇無	82		SI55	文：縄R	
	38	SI56	文：唇無, 棒	83		SI40・44・55	文：縄R	
	39	SI49	把手?	84		SI49	文：縄R	
	40	SI52・SD3	文：縄RL, 棒	85		SI49	文：縄L	
	41	SI52	文：縄LR, 棒	86		SI33	文：縄R-S?	
	42	SI53	文：縄LR, 棒	87		SI62	文：縄L	
	43	SI36	文：縄LR, 棒	88		SI36	文：縄LR	
	44	13ト	文：縄LR, 棒	89		SK4	文：縄LRL	
	45	SI36	文：縄LR, 棒	90		SI47	文：縄0段多条LR	
				91		SI64	文：棒	

(第4表 凡例)

- *「番号」は、同一個体と推定された土器を、挿図では枝番号で表示したが、一覽表では区別していない。
- *「出土位置」は、遺構を次のように記号化している。
「SI」住居跡, 「SD」溝状遺構, 「SK」土坑, 「トレ」トレンチ
- *「計測及び観察」は、次のように記号化して、記載を分けている。
「法」法量に関する記載
「文」文様の特徴に関する記載(特に施文工具について記述した。文様の形象については実測図及び拓影図を参照とする)
「胎」胎土の特徴に関する記載
「備」その他の備考とすべき記載
- *「法」の記載には、次の記号で、部位の計測値を表記している。(単位は「mm」, 括弧内の数値は残存率で単位は「%」。
「□」口縁部直径
- *「文」の記載には、次の記号を使用する。
「唇」口唇部の施文(さらに、「無」施文無し、という記号の組み合わせで表記する。)
「隆」隆帯の貼付(さらに、「指」指頭の押捺による調整、「棒」棒状工具の刻み、「窠」窠状工具の刻み、という記号の組み合わせで表記する。)
「棒」棒状工具(沈線の断面が半円形のもを典型とした工具に対する表記。)
「半竹」半截竹管状工具(2本の沈線を同時に施文した工具に対する表記。)
「窠」窠状工具(沈線の断面が鋭角なものを典型とした工具に対する表記。)
「櫛」櫛歯状工具(3本以上の沈線を同時に施文した工具に対する表記。)
「撫」撫調整
「縄」縄文原体(撚糸文の原体には、条の巻き方を「-Z」「-S」として表記する。)
- *「胎」の記載には、次の記号を使用する。
「白」白雲母の含有(さらに、「多」含有が多量、という記号の組み合わせで表記する。)
「骨」海綿骨針の含有(さらに、「多」含有が多量、という記号の組み合わせで表記する。)
- *「備」の記載には、次の記号を使用する。
「波状」波状口縁, 「外」器外面, 「炭付」炭化物の付着

2 石 器



第16図 出土石器(1)

ここでは明らかに縄文時代に所属すると判断した石器について報告する。器種は槍先形尖頭器1点、有茎尖頭器1点、石鏃6点、石鏃(未完成品)1点、篋状石器1点である。

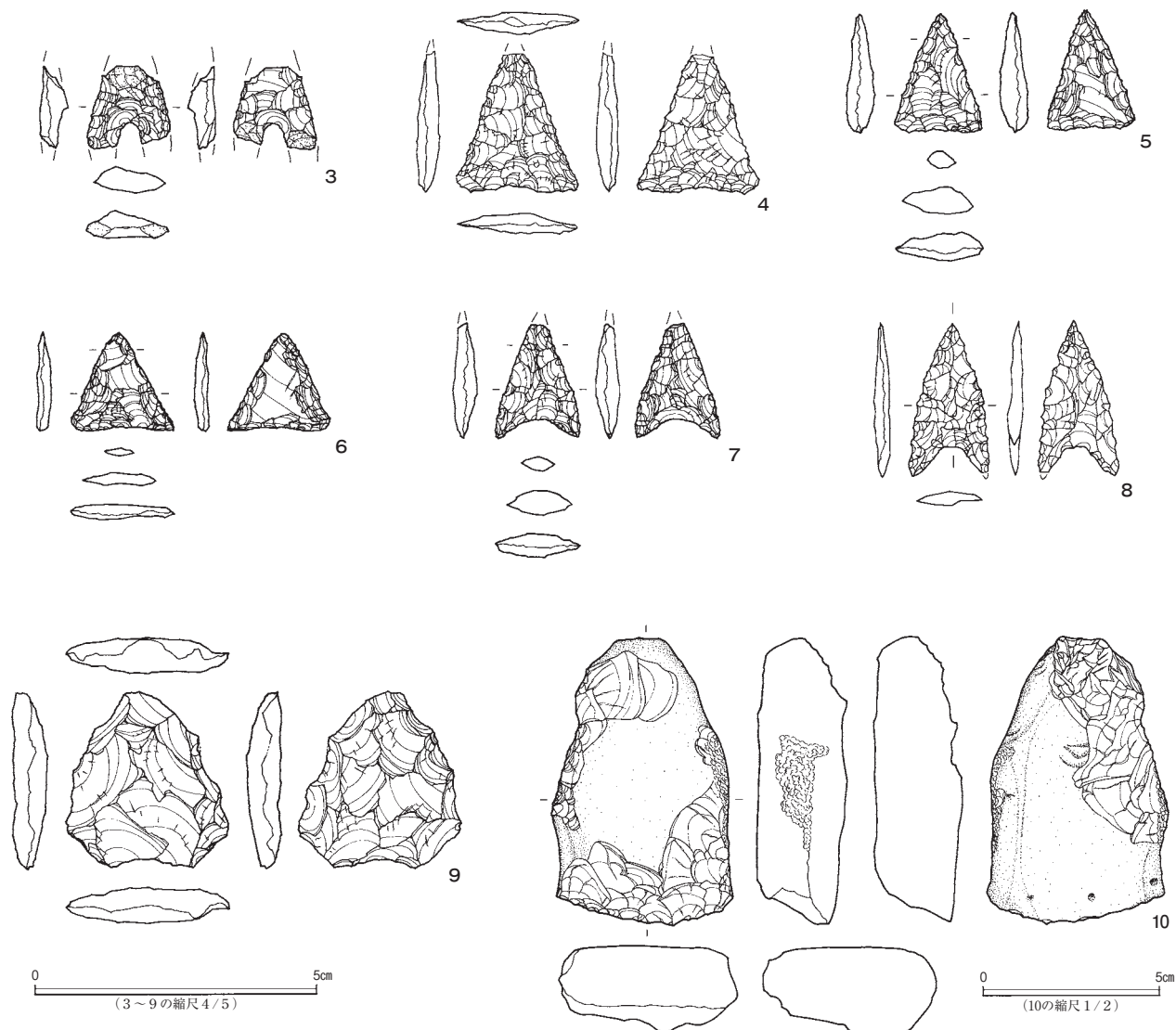
槍先形尖頭器(第16図1) 福島県いわき北部から楢葉町に分布する柵平層産と考える斑晶に富む流紋岩製で、先端と基部端のそれぞれを折損する。両側縁はほぼ並行する形状で、基部側とした下部で緩やかに縁辺が曲線をなして収斂する様相で、屈折部が明確な角を持たない。器体両面が押圧剥離によって覆われているため素材時の形状は不明だが、器体そのものの反りや湾曲がほとんど無い側面観から、剥片を素材とするのではなく素材礫又は素材礫の分割品を成形開始として製作した可能性が高いと考える。成形のための押圧剥離はかなり良好で剥離末端に蝶番状剥離や階段状剥離などの形成が少なく、器体表面が滑らかに仕上がっている。形状から縄文時代草創期の「本ノ木型尖頭器」と分類できる資料である。遺存状況に関して、農耕具などの金属器と接触した痕跡の鉄錆が器体表面各所に認められる。

有茎尖頭器(第16図2) 青灰色チャート製である。入念な押圧剥離の二次加工が全体に及んでいるために素

材時の形状は不明だが、器体そのものの反りや湾曲がほとんど無い側面観からかなりな器厚の剥片や板状礫が使用されたと考える。遺存状態に関して、先端が鋭利で無く逆刺部が左右で対称形でないことや、茎部の一部に衝撃剥離と考えられる槌状剥離があることから、刺突行為後に折損箇所に対して器形修正を施したと考える。

石鏃(第17図3～8) 6点を図示した。平面形状で基部縁辺が直線状か僅かに内湾する平基無茎鏃が4～6、基部縁辺が内側に挟り込みを有する凹基無茎鏃が3、7、8である。3は先端と脚部両端が折損するが、凹基挟りこみ部の形状が細長く成形していることと左右両側縁が曲線状に内湾していることから、長脚鏃の破損品と考える。5の石鏃に使用している石材は、福島県柵平層産の流紋岩と考える。6の石鏃に使用している黒曜石は国立沼津工業高等専門学校材質工学科望月明彦元教授によって蛍光X線による産地判別作業を実施していただき、その結果東京都伊豆諸島に位置する神津島恩馳島群産と判別された。

石鏃(未完成品)(第17図9) 那珂川流域産のガラス質黒色安山岩製で両面に押圧剥離による二次加工が施されて略三角形に成形されているが、先に扱った石鏃の



第17図 出土石器(2)

完成品に比べて仕上げの調整となる二次加工剥離の密度が低く器厚も2倍あることから、未完成品として扱った。

篋状石器(第17図10) 那珂川河口域で採取可能な流紋岩を用いた石器で、刃部は裏面からの入力で成形し、片刃状となる。正面図左側縁から表裏両面に器厚調整のための剥離を施した後に両側縁に敲打調整が施される。器体の半分ほどに礫面が無調整のまま残る。

小 結 鷹ノ巣遺跡で出土した縄文時代の石器は、槍先形尖頭器と有茎尖頭器という尖頭器石器群と、石鏃を中心とする石器群に纏まる。大型な槍先形尖頭器は「本ノ木型尖頭器」に分類され、有茎尖頭器と共に縄文時代草創期前半の石器群とする。北に隣接する差洪遺跡でも木葉形となる槍先形尖頭器が2点出土しており、石材は硬質頁岩とホルンフェルスを使用するなど旧石器時代の石材利用を引き継ぐ様相が窺われる[樫村1995・窪田

2005]。同一台地上に近接する場所で異なる形態の槍先形尖頭器が分布することを把握できた。3で報告した長脚鏃は、直前段階まで存在した有茎尖頭器の茎部の輪郭を折り返しネガ・ポジの様になぞる状態に抉り込み成形することが最大の特徴である。左右両側縁の輪郭は木葉形槍先形尖頭器の平面形に倣っているため脚両端幅は器体最大幅よりも狭い。この長脚鏃は縄文時代草創期後半の爪形文系土器群に共伴する事例が多いが、茨城県内では爪形文系土器群と石器が共伴する事例は確認されていない。2010年に調査された宮後遺跡でも長脚鏃が1点出土したことが報告されている[大久保2012]。茨城県域では土浦市尻替遺跡2点(石材：珪質頁岩・ホルンフェルス)[窪田2007]、同市内向原遺跡1点(石材：珪質頁岩)[仲野1987]、つくば市下平塚蕪木台遺跡1点(石材：硬質頁岩)[白田・飯田・本橋・齋藤・川井2009]など近年

Ⅲ 縄文時代の遺物

県南部域で確認数が増加している。しかし石器ばかりで同時期の土器は未発見のみである。その他の石器は脚部が短い二等辺三角形の石鏃で、縄文時代早期頃のものとする。6の石鏃に使用している黒曜石は分析作業によって伊豆諸島の神津島恩馳島群産と判別されたが、形状から縄文時代早期頃と判断するもので、早期に神津島恩馳島から本州に搬入された後に那珂川流域に達する移動・搬入活動が行われていた証拠となる貴重な事例である。

縄文時代に神津島恩馳島の黒曜石が利根川を越えて北方に利用範囲が拡大する事象は、近年の蛍光X線を用いた産地判別作業が進展して分析点数が増加する中で理解が進んでいる。笠間市西田遺跡の分析調査例[加藤1996]以降、茨城県内の縄文時代に使用されていた黒曜石産地分析作業の増加は進んでいなかったが、2007年に調査が実施された小美玉市石川西遺跡[小川2009]の資料を観察したところ縄文時代中期(阿玉台Ⅱ式～加曾利EⅡ式段階)の遺構内から出土した黒曜石の大半が神津島恩馳島と把握した^{註1}。縄文時代中期前半(阿玉台Ⅰ～Ⅳ式期)を中心に、爆発的に搬入活動があった神津島恩馳島産黒曜石が霞ヶ浦周辺を超えてより北の那珂川に近い巴川に達していたことを把握した。石川西遺跡が位置する巴川周辺は、遡ること旧石器時代から縄文時代にかけて研究が遅れていた地域であったが、2006年の小美玉市誕生後に資料観察作業が進み、霞ヶ浦～恋瀬川と涸沼川の間にあった南北間の空白地帯を埋める情報が増加している。

茨城県域の中で神津島恩馳島産黒曜石搬入の開始時期がいつ頃なのか不明瞭でこれから分析・検討すべきことだが、鷹ノ巣遺跡の事例は石材研究を大きく進展させる契機となると考える。

縄文時代を通じて那珂川流域は豊富に入手可能なメノウやガラス質黒色安山岩を用いた剥片石器群が存在する地域であるが、東北地方などの北方地域や伊豆諸島や中部高地などの南方地域からの石材(特に黒曜石)が持ち込まれる活動があった理解が進むことを期待したい。今後の石材分析作業の進展を期待する。

註釈

註1 筆者が小美玉市教育委員会の協力の下観察作業で確認した、筆者の肉眼判断である。今後蛍光X線での産地分析作業を行って産地を確認する予定である。

参考文献(著者50音順・敬称略)

- 小川貴行 2009 『石川西遺跡 茨城空港テクノパーク整備事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』第321集 茨城県・財団法人茨城県教育財団
- 大久保隆之 2012 『宮後遺跡・部田野西原遺跡 一般国道245号道路拡幅事業地内埋蔵文化財調査報告書』第354集 茨城県常陸大宮土木事務所・財団法人茨城県教育財団
- 櫻村宣行 1995 『一般国道6号線東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 差込遺跡』第103集 建設省・財団法人茨城県教育財団
- 加藤博文 1996 「Ⅶ考察 3. 黒曜石利用から見た東関東縄文時代中期の動態」『笠間市西田遺跡の研究－縄文時代における石族の製作と流通に関する研究－』69～75頁
- 窪田恵一 2005 「茨城県ひたちなか市差込遺跡の旧石器時代資料 那珂川下流域のⅤ層～Ⅳ層下部段階石器群」『茨城県考古学協会誌』第17号 1～24頁 茨城県考古学協会
- 窪田恵一 2007 「第3章遺構と遺物 第1節 縄文時代 3. 遺構外遺物 b.石器」『尻替遺跡－田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集－』田村・沖宿土地区画整理組合・土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会
- 仲野修秀 1987 「Ⅳ－2. 縄文時代」『向原遺跡』向原遺跡調査会・土浦市教育委員会
- 白田正子・飯田浩彦・本橋弘巳・齋藤和浩・川井正一 2009 『下平塚蕪木台遺跡 葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』第326集 独立行政法人都市再生機構茨城地域支社・財団法人茨城県教育財団

第5表 縄文時代石器計測表

器種	挿図	番号	出土位置	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
槍先尖頭器	第16図	1	SI36 No14	流紋岩	92.3	21.7	10.5	20.04	
有茎尖頭器	第16図	2	SI34A No3	チャート	53.2	17.1	5.2	4.70	
石鏃	第17図	3	SI31B No13	珪質頁岩	14.3	14.9	4.9	0.8	
石鏃	第17図	4	SI47 S65	ガラス質黒色安山岩	25.2	21.8	4.1	1.7	
石鏃	第17図	5	SI58 No1	ガラス質黒色安山岩	21.6	15.6	5.0	1.3	
石鏃	第17図	6	SI32 IV区No8	黒曜石	17.8	18.3	2.7	0.6	神津島恩馳島群産
石鏃	第17図	7	7トレ No1	流紋岩	20.4	15.1	4.3	0.8	
石鏃	第17図	8	SI29周辺 No4	チャート	27.5	14.0	3.0	0.8	
石鏃(未成品)	第17図	9	SI36 No1	ガラス質黒色安山岩	31.3	28.9	6.2	6.0	
筥状石器	第17図	10	SI29 S3	流紋岩	82.0	52.0	25.0	137.7	

IV 弥生時代の遺物

1 検出された遺物

弥生式土器は、全体で中期中葉が1点、後期中葉が1,817点、後期後葉から古墳時代前半が138点検出されている。

土器は、後世の遺構の覆土中から検出された破片が大部分であり、これを一括し調査区出土として報告する。図示は、特徴的な一群の土器を抽出した他は、器種ごとの配列を考慮した。但し、底部については、器種の区別が困難なことから、ほとんどを一括で掲載している。可能な限り、同一個体は識別した。以下、時期ごとに報告する。

弥生時代中期中葉の土器(第18図) 沈線区画内に縄文が充填された土器が、1点のみ検出された。1は壺形土器と考えられる。「猪式」に相当する。

弥生時代後期中葉の土器(第18～20図) 1,817点の破片が出土し、そのうち78点を掲載した。

施文工具は、2本の沈線を同時に施文した工具を「2本同時施文具」、3本以上のものを「櫛歯状工具」とし、さらに5本以上のものを「多条櫛歯状工具」とする。

2～17・19～29は複合口縁を呈している。2～5は複合部が無文で、下端に指頭による押捺が施されている。6は粘土紐を貼り付け後、粘土紐の上端と下端を隆帯状につまみ出し、その部分に指頭による押捺が施されている。7・8は粘土紐を積み上げ後、隆帯をつまみ出し、その部分に指頭による押捺が施されている。9・10は複合部下端に沈線引きして、隆帯状になった部分に指頭による押捺が施されている。11～16は複合部が無文である。17・19～26は複合部に縄文を施文し、下端に17・19～21は指頭、22～24は棒状工具、25は縄文原体、26は半截竹管状工具による押捺が施されている。27は複合部に縄文を施文し、複合部下端に沈線引きして、隆帯状になった部分に指頭による押捺が施されている。28・29は複合部に縄文が施文されている。

2・30～32は篋状工具または棒状工具、33～37は2本同時施文具、10・15・24・29・38～42は櫛歯状工具(3本)、5・43～45は櫛歯状工具(4本)、9・20・25・46～57は多条櫛歯状工具によるものである。17は頸部に縄文

原体が縦位に押捺されている。18は縄文原体が横位に押捺され、以下に縄文が施されている。

壺形土器及び甕形土器の胴部の縄文は、付加条第1種付加2条による斜行縄文が多い。

62～64は大型、65～76は中・小型の底部である。壺形土器及び甕形土器の底面痕跡は、ほぼ木葉痕である。76は中心部のみ調整されている。

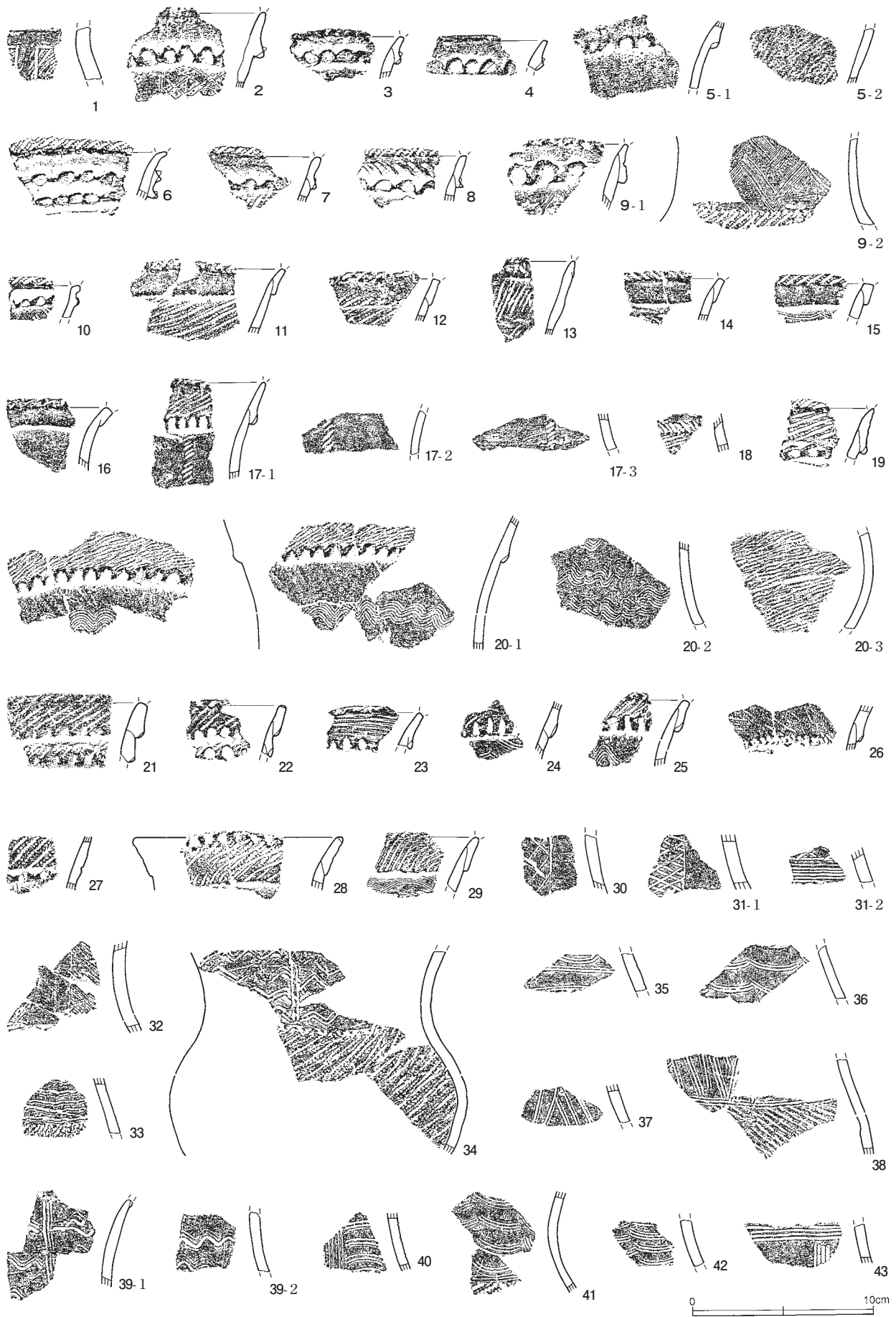
77・78は高坏形土器と考えられる。77は複合部が無文で、下端に指頭による押捺が施されている。内面は櫛歯状工具(3本)により波状文が施文されている。78は複合部が無文である。

79は蓋形土器の可能性ある。底面痕跡は木葉痕である。

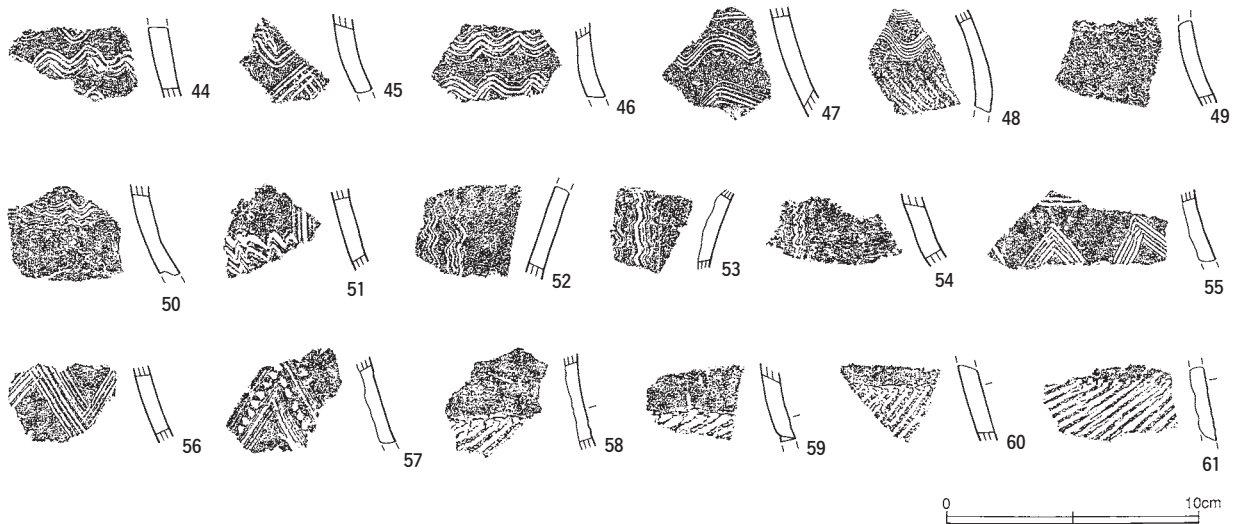
弥生時代後期後葉の土器(第21図) 138点の破片が出土し、そのうち16点を掲載した。80～95は、「十王台式」に相当する。

80は小型細頸形の口縁～胴部である。口縁部の文様帯は縦区画され、波状文が施されている。頸部は1条の直状文によって区画されている。胴上部の縦位区画は3条を単位とする。横位区画は波状文。櫛歯状工具の歯数は5本。胴下部には、LをS巻きした原体(軸不明)と、LをZ巻きした原体(軸不明)で羽状縄文が構成されている。86は口縁部に単節斜縄文LRが施文され、頸部が撫で消されている。87は中型の土器である。口縁部の文様帯は波状文で、下から上の施文順序である。頸部の隆帯は3条であり、指頭により調整されている。胴上部の縦位区画は2条以上を単位とする。櫛歯状工具の歯数は5本。88は带状刺突文が施されている。刺突文の施文具は多截竹管状工具である。93は大型、94・95は中・小型の底部で、底面痕跡は砂目痕である。

IV 弥生時代の遺物



第18図 調査区出土の弥生式土器(1)

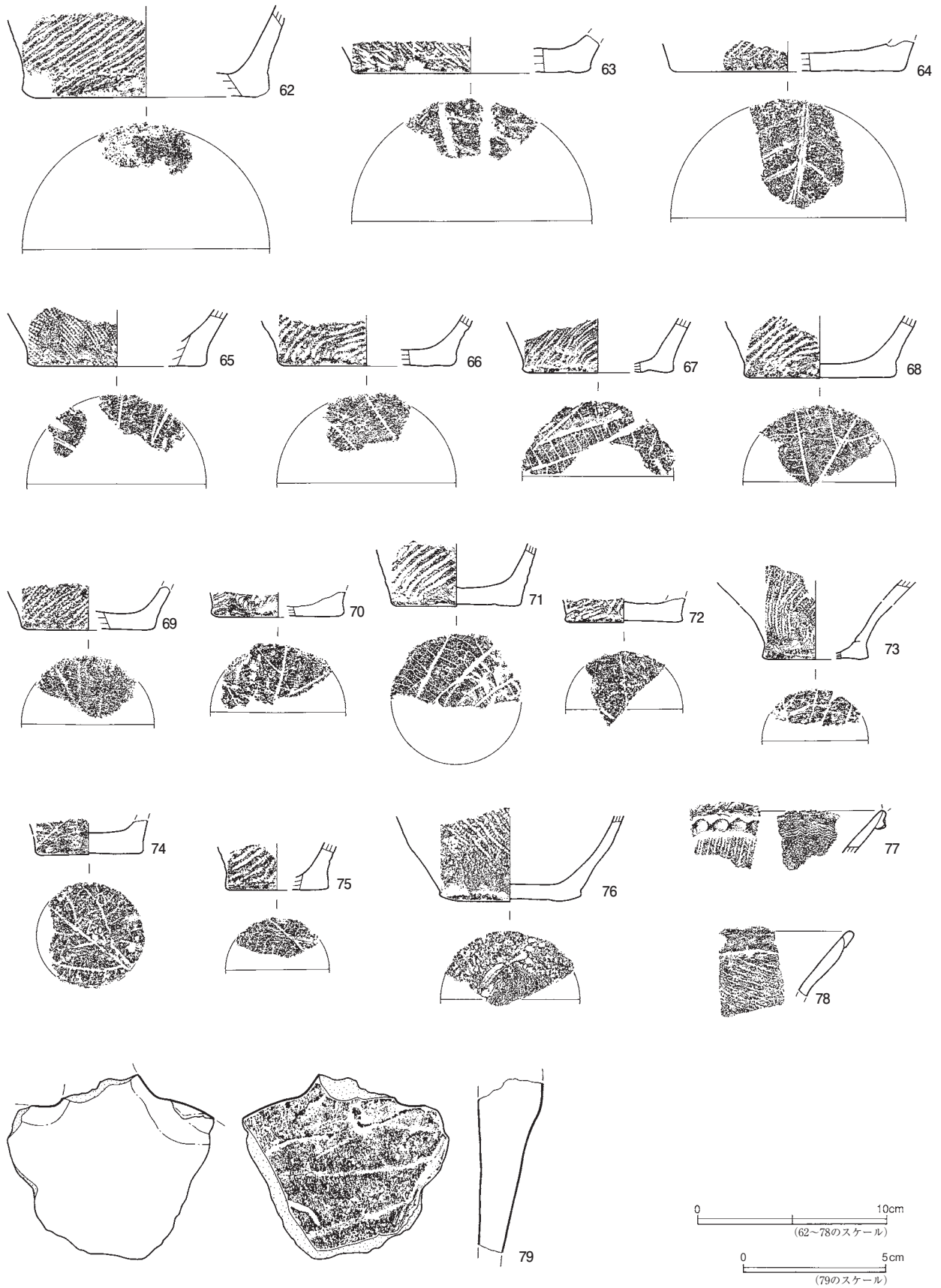


第19図 調査区出土の弥生式土器(2)

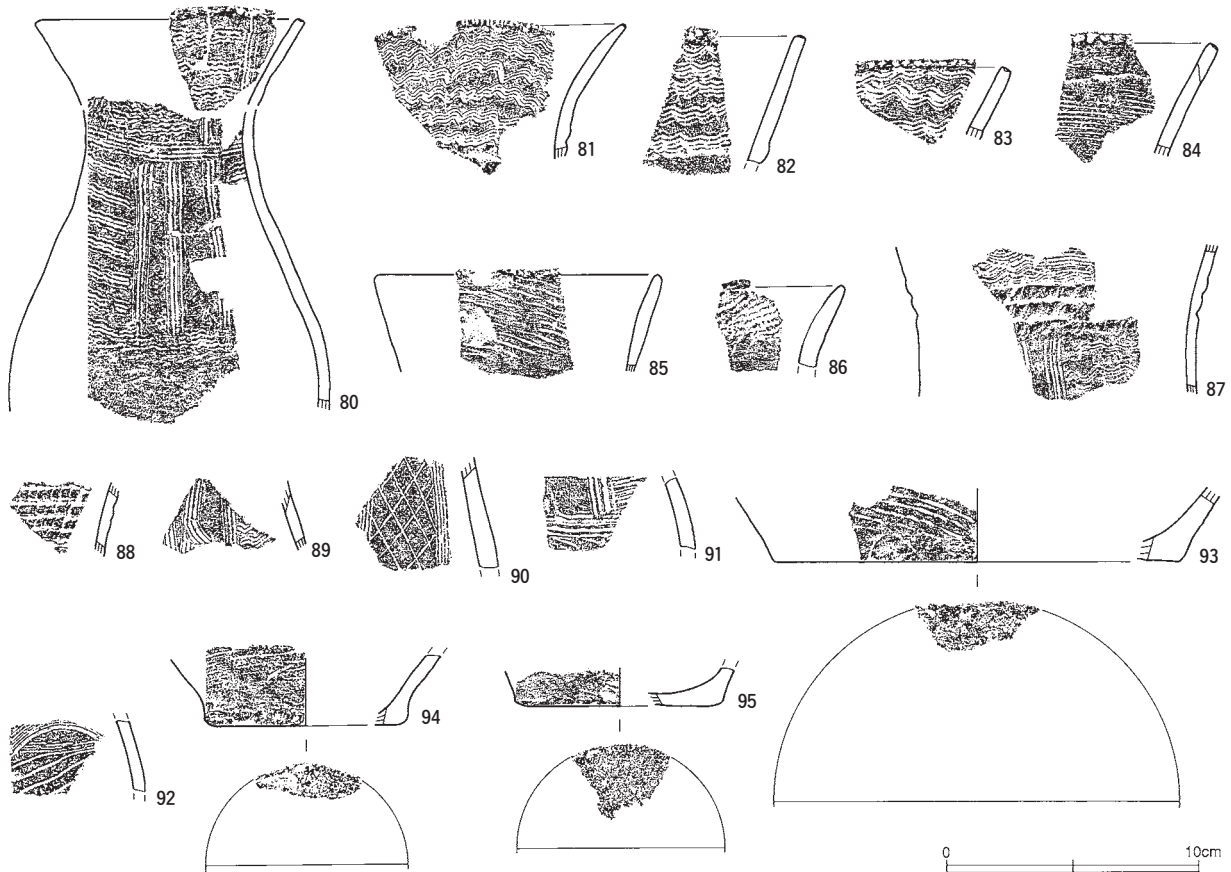
第6表 弥生時代土器一覧表

挿図	番号	出土位置	計測及び観察	
第18図	1	SI45	文棒, 縄LR+2R	
	2	SI51	文唇縄文, 複無・指, 篋or棒, 胎:骨多, 備:内剥離	
	3	SI50	文唇縄文R-S, 複無・指, 櫛?, 胎:金多, 骨	
	4	SI52	文唇無, 複無・指, 胎:骨多	
	5	SI34・34B	文複無・指, 櫛, 縄R-S, 胎:金, 骨多	
	6	SI50	文唇縄文, 複無・指, 縄LR+2R, 胎:骨	
	7	SI51	文唇縄文, 複無・指, 縄LR+2R, 胎:金, 骨多	
	8	SI60	文唇縄文LR+2R, 複無・指	
	9	SI60・64	法:頸98(10), 文唇縄文, 複無・指, 櫛10, 縄LR+2R	
	10	SI34B	文唇縄文LR+2R, 複無・指, 櫛3	
	11	SI51・B地区谷	文唇縄文, 複無, 縄LR+2R, 胎:骨多	
	12	SI48	文唇縄文, 複無?, 縄LR+2R, 胎:骨	
	13	SI50	文唇縄文, 複無, 縄LR+2R	
	14	SI33	文唇縄文, 複無, 縄RL+2L	
	15	SI42・52・57	文唇縄文LR+2R, 複無, 櫛3	
	16	SI50	文唇縄文R-S, 複無	
	17	SI42・48・51・52	文唇縄文, 複縄・指, 縄文原体, 縄LR+2R	
	18	SI50	文縄文原体, 縄LR+2R	
	19	SI48	文唇縄文, 複縄・指, 半竹?, 縄LR+2R, 胎:骨多	
	20	SI46	文複縄・指, 櫛7, 縄LR+2R, 備:外炭付	
	21	SI34B	文唇縄文, 複縄 \geq 2・指, 縄LR+2R, 胎:金	
	22	SI64	文唇縄, 複縄 \geq 2・棒?, 縄R-S, 胎:銀多	
	23	B地区	文唇縄文, 複縄・棒, 縄LR+2R	
	24	SD3	文複縄・棒, 櫛3, 縄R-S, 備:外炭付	
	25	SI52	文唇縄文, 複縄・縄, 櫛5, 縄LR+2R, 胎:金多, 骨多, 備:外炭付	
	26	SI52・60	文複縄・半竹, 縄L-Z, 備:外炭付	
	27	SI34A	文複縄・指, 半竹?, 縄LR+2R, 胎:銀多	
	28	SD3	法:口116(14), 文唇縄, 複縄, 縄LR+2R, 胎:銀多	
	29	SI46	文唇縄文, 複縄, 櫛3, 縄LR+2R, 胎:骨	
	30	SI50	文篋	
	31	SI38	文棒, 櫛 \geq 8	
	32	SI40B・50	文篋, 縄R-S, 備:外炭付	
	33	SI60・62	文半竹3.0, 縄R-S, 胎:骨多	
	34	SI36	法:頸124(16), 胴164(9), 文半竹4.0, 縄LR+R, 備:内外炭付	
	35	SI67	文半竹3.0	
	36	SI50	文半竹3.0, 胎:金	
	37	SI50	文半竹2.5	
	38	SI44・45・B地区	文櫛3, 縄L-Z	
	39	SI45・46・48	文複, 櫛3, 胎:金多, 骨多, 備:外炭付	
	40	SI50・SD3	文櫛3, 胎:金, 骨多	
	41	SI50・5トレ	文櫛3, 縄LR+2R, 胎:骨	
	42	SI45	文櫛3	
	43	SI64	文櫛4, 備:外炭付	
	第19図	44	SI63	文櫛4
		45	SI48	文櫛4
		46	SI50	文櫛5

挿図	番号	出土位置	計測及び観察	
第19図	47	SI32	文櫛5	
	48	SI61・62	文櫛6, 縄RL+2L	
	49	SI32	文櫛, 胎:金多, 骨多	
	50	SI50	文櫛, 胎:金多, 骨多	
	51	SI50・63	文櫛5?, 胎:銀多	
	52	SI66	文櫛4, 胎:骨多, 備:外赤彩	
	53	SI50	文櫛5?, 胎:金, 骨, 備:内剥離	
	54	SI34	文櫛7?, 胎:金多, 骨	
	55	SI32	文櫛5, 備:内剥離	
	56	SI50	文櫛9 ~ 10	
	57	SI50	文櫛, 円竹, 胎:骨多, 備:内剥離	
	58	SI50	文縄LR+2R, 胎:骨, 備:内剥離	
	59	SI51	文縄LR+2R, 胎:金, 骨	
	60	SI50	文縄LR+2R, 胎:金, 骨多	
	61	SI52	文縄LR+2R, 胎:金, 骨, 備:内剥離	
	第20図	62	SK11	法:底130(8), 文縄LR+2R, 底葉, 胎:骨多
		63	SI60	法:底126(15), 文縄RL+2L, 底葉
		64	SI32	法:底124(10), 文縄LR+2R, 底葉, 胎:金, 骨多
		65	SI32	法:底94(17), 文縄RL+2L, 底葉, 胎:金
66		SI34B	法:底94(16), 文縄R-S, 底葉, 胎:骨多	
67		SI50	法:底80(42), 文縄LR+2R, 底葉, 胎:骨	
68		SI34B	法:底80(30), 文縄R-S, 底葉, 胎:骨多	
69		SI36	法:底70(26), 文縄LR+2R, 底葉, 胎:銀	
70		SI32	法:底70(31), 文縄R-S, 底葉, 胎:骨	
71		SI45	法:底68(52), 文縄LR+2R, 底葉, 胎:骨	
72		SI50	法:底62(25), 文縄R-S, 底葉	
73		SI50	法:底56(30), 文縄LR+2R, 底葉	
74		SI34A	法:底56(72), 文縄R-S, 底葉, 胎:銀	
75		SI34B	法:底54(30), 文縄R-S, 底葉	
76		SI60	法:底74(39), 文縄RL+2L, 底調, 備:底面は中心部のみ調整	
77		SI50	文唇縄文, 複無・指, 櫛3, 縄LR+2R	
78		SI40B	文唇無, 複無, 縄L-Z, 胎:金	
79		SI60	法:長径73mm, 短径65mm, 厚さ23mm, 重量63.3g, 文:底葉	
第21図		80	SI44・49・57	法:口106(12), 頸66(40), 胴126(28), 文:唇縄, 櫛5, 縄L-S・L-Z
	81	7トレ	文唇篋, 櫛6, 隆 \geq 2・指	
	82	SI36	文唇縄?, 櫛5, 隆・指?, 胎:金多	
	83	SI36・37	文唇縄, 櫛5, 胎:金多	
	84	SI44	文唇縄, 複無, 縄R-Z	
	85	SI37	法:口113(6), 文唇縄, 縄R-Z	
	86	SI49	文唇無, 縄LR, 備:外炭付	
	87	SI45	法:頸110(14), 文櫛5, 隆3・指	
	88	SI49	文帯 \geq 4, 櫛?	
	89	SK11	文櫛5	
	90	SI44	文櫛 \geq 5, 篋, 胎:金多	
	91	SI44	文櫛5, 縄R-S?	
	92	SI49	文櫛6, 縄R-S	
	93	SI58	法:底164(10), 文縄L-Z, 底砂, 胎:金	
	94	SI45	法:底82(16), 縄R-S, 底砂	
	95	SI36	法:底80(17), 文縄L-S, 底砂	



第20図 調査区出土の弥生式土器(3)



第21図 調査区出土の弥生式土器(4)

〔第6表 凡例〕

- *「番号」は、同一個体と推定された土器を、挿図では枝番号で表示したが、一覧表では区別していない。
- *「出土位置」は、遺構を次のように記号化している。
「S」住居跡、「SD」溝状遺構、「SK」土坑、「トレ」トレンチ
- *「計測及び観察」は、次のように記号化して、記載を分けている。
「法」法量に関する記載
「文」文様の特徴に関する記載(特に施文工具について記述した。文様の形象については実測図及び拓影図を参照とする。)
「調」調整に関する記載
「胎」胎土の特徴に関する記載
「備」その他の備考とすべき記載
- *「法」の記載には、次の記号で、部位の計測値を表記している。(単位は「mm」、括弧内の数値は残存率で単位は「%」)
「高」器高、「*」付の数値は、底部からの残存高、「口」口縁部直径、「頸」頸部直径、「胴」胴部直径、「底」底部直径、
「括」高坏形土器接合部直径、「裾」高坏形土器脚裾部直径
- *「文」の記載には、次の記号を使用する。
「唇」口唇部の施文(さらに、「縄文」縄文原体の回転施文、「縄」縄文原体の刻み、「篋」篋状工具の刻み、「棒」棒状工具の刻み、「無」施文無し、「不明」施文の有無及び施文の不明、という記号の組み合わせで表記する。)
「複」複合口縁(「縄文」縄文原体の回転施文、「無」施文無し、という記号の組み合わせで表記する。さらに、「指」指頭の押捺による調整、「棒」棒状工具の刻み、「篋」篋状工具の刻み、「縄」縄文原体の刻み、「半竹」半截竹管状工具の刻み、という記号の組み合わせで表記する。)
「隆」隆帯の貼付(さらに、「指」指頭の押捺による調整、「棒」棒状工具の刻み、「篋」篋状工具の刻み、「縄」縄文原体の刻み、という記号の組み合わせで表記する。数値は隆帯の条数であり、確実なもの及び3条以上であることが確実なもののみ記載する。)
「帯」帯状刺突文(数値は刺突列の列数であり、確実なもの及び3条以上であることが確実なもののみ記載する。)
「底」底面の痕跡(さらに、「布」布目痕、「砂」砂痕、「葉」木葉痕、「調」調整痕、「不明」痕跡の有無及び圧痕原体の不明、という記号の組み合わせで表記する。)
「篋」篋状工具(沈線の断面が鋭角的なものを典型とした工具に対する表記。)
「棒」棒状工具(沈線の断面が半円形のものとして典型とした工具に対する表記。)
「円竹」円形竹管状工具(環状の刺突文を施文した工具に対する表記。)
「半竹」半截竹管状工具(2本の沈線を同時に施文した工具に対する表記。数値は施文幅の数値であり、単位は「mm」である。)
「櫛」櫛歯状工具(3本以上の沈線を同時に施文した工具に対する表記。数値は櫛歯の数であり、「≥」は記載した数値以上であることを意味する。2本以下の残存については「櫛」とのみ表記する。)
「縄」縄文原体(付加条第1種の原体には「+」、付加条第2種の原体には「×」の記号を使用する。撚糸文あるいは軸繩の不明な付加条縄文の原体には、条の巻き方を「-Z」「-S」として表記する。)
- *「胎」の記載には、次の記号を使用する。
「金」金雲母の含有(さらに、「多」含有が多量、という記号の組み合わせで表記する。)
「銀」銀雲母の含有(さらに、「多」含有が多量、という記号の組み合わせで表記する。)
「骨」海綿骨針の含有(さらに、「多」含有が多量、という記号の組み合わせで表記する。)
- *「備」の記載には、次の記号を使用する。
「外」器外面、「内」器内面、「炭付」炭化物の付着、「赤彩」赤色顔料の塗彩

2 鷹ノ巣遺跡第47号住居跡における石英を素材とした石器について

1 はじめに

鷹ノ巣遺跡第2次調査の第47号住居跡は、長軸9.29m、短軸7.32m、平面形状が隅丸長方形を呈した弥生時代後期前半の住居跡である。この超大型の住居跡は、57点ものガラス玉が検出されたことで注目を集めた[色川他2008]。本稿では、第47号住居跡から出土している石英とメノウの破片について検討し、台石・敲石等の礫石器、アメリカ式石鏃、ガラス玉をも含めて、これらが出土した現象の関係について考察を進める。

また、茨城県南部においては、石英片が集中的に出土する事例の調査が増え、その現象の解釈をめぐる議論が展開されてきている[奥沢^{註1}2006]。本稿は、石器としての視点から、この議論に参画することになる。

2 鷹ノ巣遺跡における石英片の分布

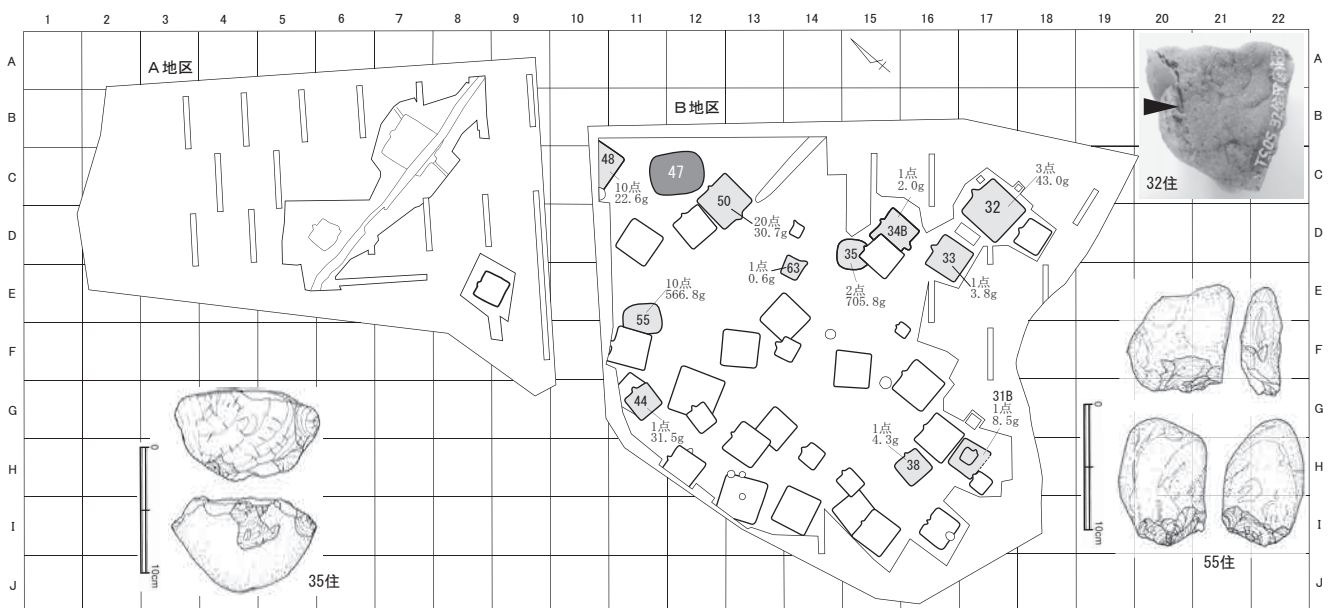
鷹ノ巣遺跡の第1次調査[井上1994]には石英片に関わる報告が見られず、第3次調査では、石英片が検出されなかった。石英片の出土は、第2次調査のB地区にのみ認められた現象である。B地区からは、数量で510点、重量で2,802.0gの石英片が検出されている。そのうち、第47号住居跡から検出された467点、1,382.4gの石英片は、数量で90.0%、重量で49.3%を占める。さらに、

第35号住居跡の2点、705.8g、第55号住居跡の10点、566.8gを加えた弥生時代後期前半の住居跡での合計は、数量で92.3%、重量で94.8%に及び、1点で50g以上を量る破片も、これら3基の住居跡に限定されている。B地区の石英片のほとんどは、当該時期に所属するものと捉えられた。

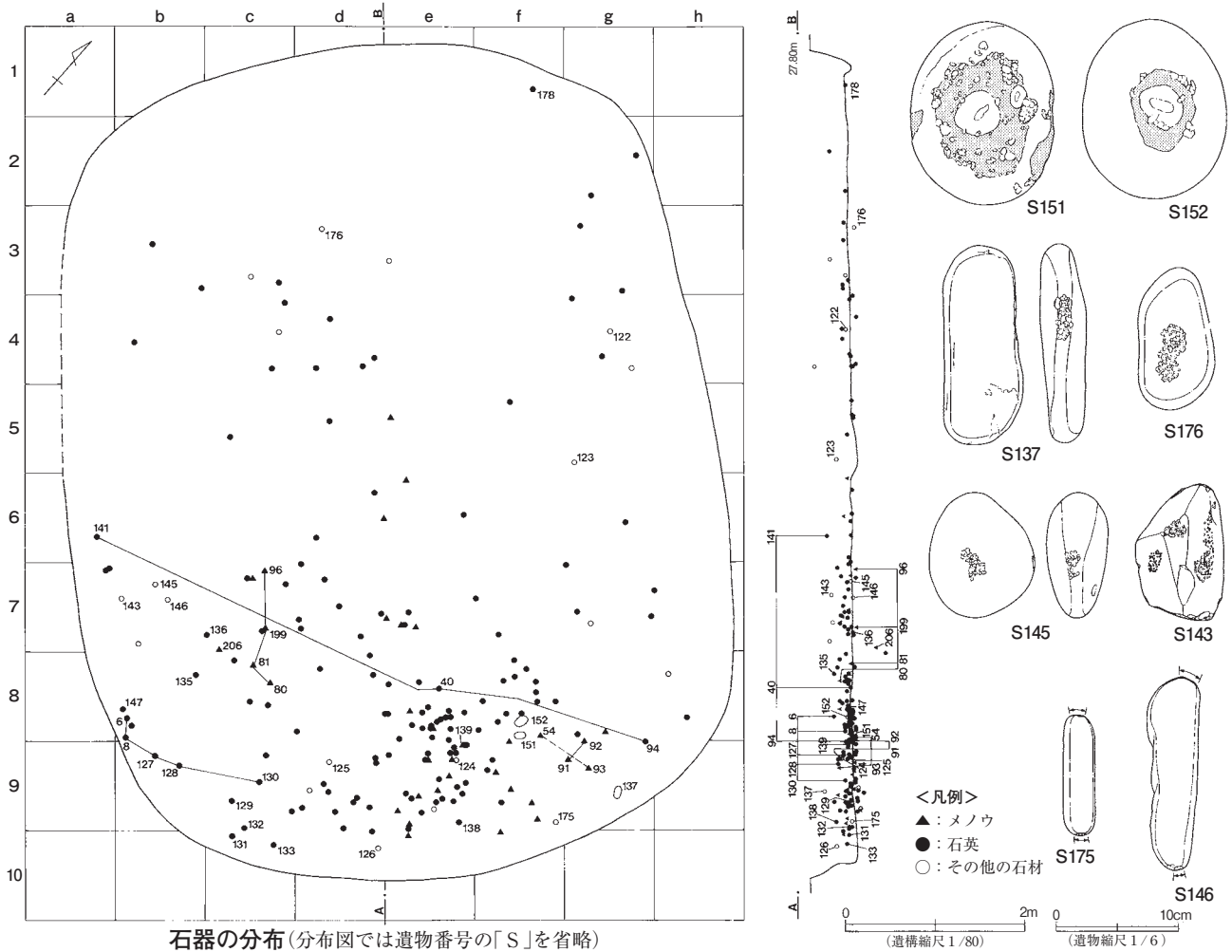
古墳時代以降の住居跡から回収された石英片については、覆土の堆積に伴う流入や、後世の耕作等による混在と見られる。第32号住居跡から出土した石英片の1点(第22図写真)は、第47号住居跡において母岩1とした石英と同一の特徴を有する。この石英片には、表面の一部に耕作機械あるいは器具による鉄錆(矢印部分)が付着していることから、後世の耕作により50m以上もの距離を移動したことが考えられてくる。そうであるならば、調査区グリッドのC・D列にかかる住居跡から石英片が出土するのは、この方向で畝を作るように耕運されて、第47号住居跡に包含されていた石英片が拡散したことに起因する。道路で耕運が途切れることから、A地区に石英片が移動することはなかったであろう。

3 第47号住居跡における石英とメノウの分布

破片の数量 第47号住居跡においては、個々の出土



第22図 第47号住居跡外における石英の分布(グリッドの1辺は10m)



位置を記録して取り上げた石英片が147点ある(「S」番号表記)。覆土について、床面から10cmの厚さを目安に土壌を採取し、その全てを3mm方眼の篩により水洗選別したこともあって、別に320点の破片が回収された(「No」番号表記)。これらの合計467点は、重量0.1g(小数点第二位四捨五入)以上のものに限定した数値である。他に、0.1gに満たない破片が596点ある。また、メノウ片も検出されていて、出土位置を記録したものが37点、これとは別に81点の破片が回収された。これらの合計118点も、重量0.1g以上のものに限定した数値である。他に、0.1gに満たない破片が96点ある。

破片の平面分布 住居跡における平面分布は、出土位置が記録できた石英147点、メノウ37点だけを表示しても、南半部の特に壁近くに集中することが見て取れる(第23図)。水洗選別を実施した土壌の採取にあたっては、住居跡内を1m方眼のグリッドで区画しており、この平面区分で捉えられる石英435点、メノウ112点の分布も、

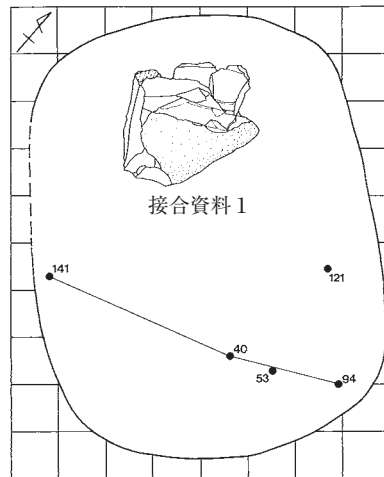
ほぼ同じ傾向を示し、9eグリッドに最も集中している(第24図1)。0.1gに満たない破片も、石英が9eグリッド、メノウが8fグリッドに最も集中する。一方で、北半部にも破片は散在する。このような平面分布の状況は、弥生時代後期前半の土器片、砂岩を素材とした礫石器の分布によく一致しており、覆土の上位から出土する古墳時代前期の土器片の分布とは明らかに異なっている。

破片の垂直分布 住居跡における垂直分布は、床面直上と捉えられたものもあれば、覆土中と記録された破片もある。特に、壁近くの平面位置の破片に、床面から離れ覆土中に包含されるものが多く見られた(第23図)。これは、長軸が25mm以上の破片に限定しても、同じ傾向を示すことから、微細な破片のみが垂直位置を移動したのではなく、本来の位置を反映したものと考えられる。つまり、破片の分布は、住居の廃絶後、壁際に覆土の堆積が進行した段階に生じた現象と捉えられた。このような垂直分布の状況も、弥生時代後期前半の土器片、礫

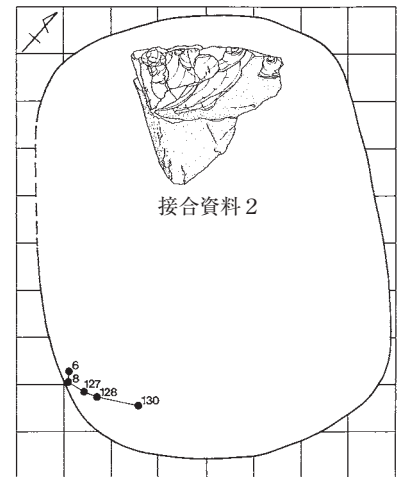
IV 弥生時代の遺物

	a	b	c	d	e	f	g	h
1				メ1ヶ (0.4g)		石2ヶ (13.3g)		
2				石1ヶ (0.1g)			石3ヶ (3.3g)	
3		石2ヶ (0.2g) メ1ヶ (0.6g)	石2ヶ (0.4g) メ1ヶ (0.3g)	石3ヶ (0.4g)	石4ヶ (0.4g)	石10ヶ (115.0g) メ1ヶ (0.2g)	石3ヶ (0.6g)	
4	石1ヶ (0.1g)	石2ヶ (2.7g)	石2ヶ (1.6g)	石7ヶ (3.7g) メ1ヶ (0.1g)	石5ヶ (1.2g)	石1ヶ (0.3g)	石3ヶ (2.7g)	メ1ヶ (0.4g)
5		メ2ヶ (0.3g)	石2ヶ (2.2g)	石3ヶ (0.3g) メ1ヶ (0.3g)	石11ヶ (2.2g) メ3ヶ (0.6g)	石3ヶ (0.4g)		
6	石3ヶ (39.7g)	石1ヶ (0.4g)	石3ヶ (0.3g)	石7ヶ (0.8g)	石5ヶ (1.0g) メ2ヶ (0.7g)	石4ヶ (2.3g)	石4ヶ (0.9g)	
7	石3ヶ (6.8g)	石2ヶ (15.8g)	石13ヶ (99.3g) メ5ヶ (8.5g)	石10ヶ (2.8g) メ1ヶ (0.2g)	石9ヶ (1.2g) メ8ヶ (1.6g)	石10ヶ (1.7g) メ3ヶ (0.4g)	石9ヶ (1.9g) メ4ヶ (0.6g)	石3ヶ (0.6g)
8	石10ヶ (619.3g) メ2ヶ (0.6g)	石7ヶ (4.2g) メ4ヶ (1.8g)	石17ヶ (2.8g) メ1ヶ (1.4g)	石16ヶ (2.8g) メ1ヶ (1.4g)	石51ヶ (28.9g) メ8ヶ (1.4g)	石38ヶ (13.2g) メ19ヶ (2.9g)	石7ヶ (1.9g) メ4ヶ (0.2g)	石2ヶ (0.2g)
9	石2ヶ (47.2g)	石7ヶ (37.4g)	石21ヶ (12.3g) メ2ヶ (0.3g)	石64ヶ (146.8g) メ2ヶ (0.3g)	石21ヶ (11.2g) メ9ヶ (6.9g)	石1ヶ (0.1g) メ2ヶ (3.2g)	石1ヶ (0.1g)	石1ヶ (0.1g)
10		石2ヶ (62.4g)	石7ヶ (1.8g)	石19ヶ (6.5g) メ3ヶ (0.9g)	石1ヶ (0.2g) メ1ヶ (0.3g)			

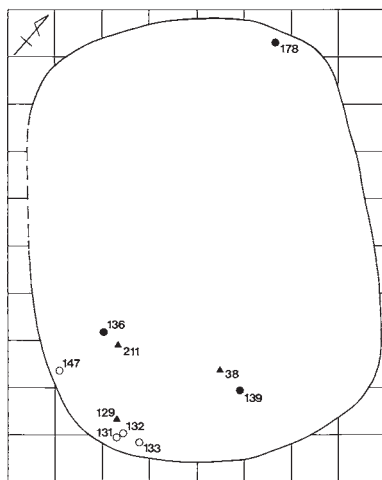
1. グリッド区画による破片数量(重量)の分布(石:石英, メ:メノウ)



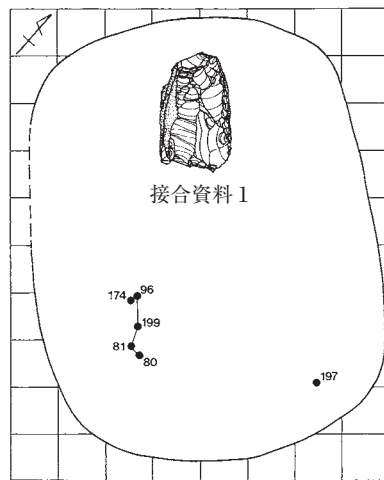
2. 石英母岩1の分布



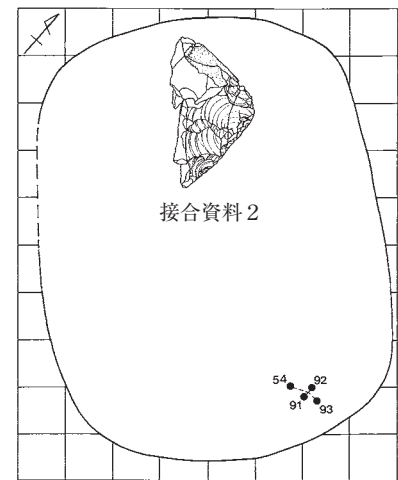
3. 石英母岩2の分布



4. 石英母岩3・4・5の分布
(○:母岩3, ●:母岩4, ▲:母岩5)



5. メノウ母岩1の分布



6. メノウ母岩2の分布



第24図 第47号住居跡における石英, メノウの分布

石器の分布によく一致している。

母岩別の分布 石英やメノウの石材について、全ての破片の母岩を識別することは難しい。それでも、破片の接合関係、あるいは個性的な色調や材質の特徴から、分別できる母岩もある。観察により、石英には母岩1～5の5つ、メノウには母岩1・2の2つが抽出できた。

石英母岩1 破片は、石核が1点と剥片が8点の9点で、そのうち石核を含む4点が接合した(石英接合資料1)。分布は、住居跡の南部で東西方向に6.4mほどの範囲に及ぶ。(第24図2)

石英母岩2 破片は、剥片が5点で、全て接合した(石英接合資料2)。分布は、住居跡の南西隅部で1.6mほどの範囲に収まる。(第24図3)

石英母岩3 破片は、剥片が4点。分布は、住居跡の南西隅部で2.2mほどの範囲に収まる。(第24図4)

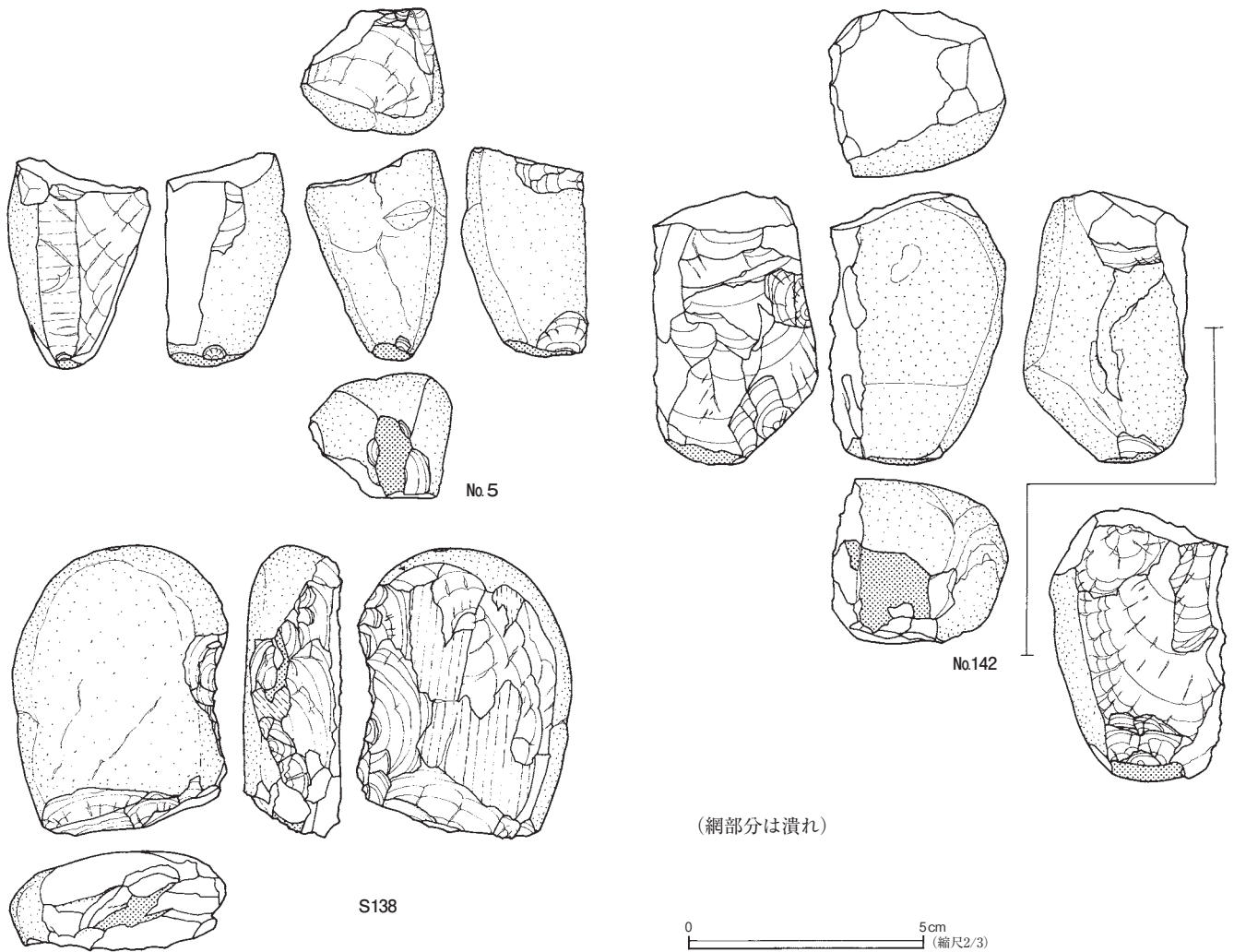
石英母岩4 破片は、剥片が3点。分布は、住居跡の南北方向に7.2mほどの範囲に及ぶ。(第24図4)

石英母岩5 破片は、剥片が3点。分布は、住居跡の南西部で2.4mほどの範囲に収まる。(第24図4)

メノウ母岩1 破片は、石核が1点と剥片が10点の11点で、そのうち石核を含む5点が接合した(メノウ接合資料1)。分布は、住居跡の南部で東西方向に4.0mほどの範囲に及ぶ。(第24図5)

メノウ母岩2 破片は、石核が1点と剥片が8点の9点で、石核を含む6点、剥片のみの3点が、それぞれに接合した(メノウ接合資料2・3)。分布は、住居跡の南東隅で1.6mほどの範囲に収まる。(第24図6)

これらの母岩別の分布には、同一母岩の破片の集中が共通しながらも、全ての破片が狭い範囲に収まる一群と、一部の破片が離れて広い範囲に及ぶ一群とが見られた。



第25図 第47号住居跡の石英礫器

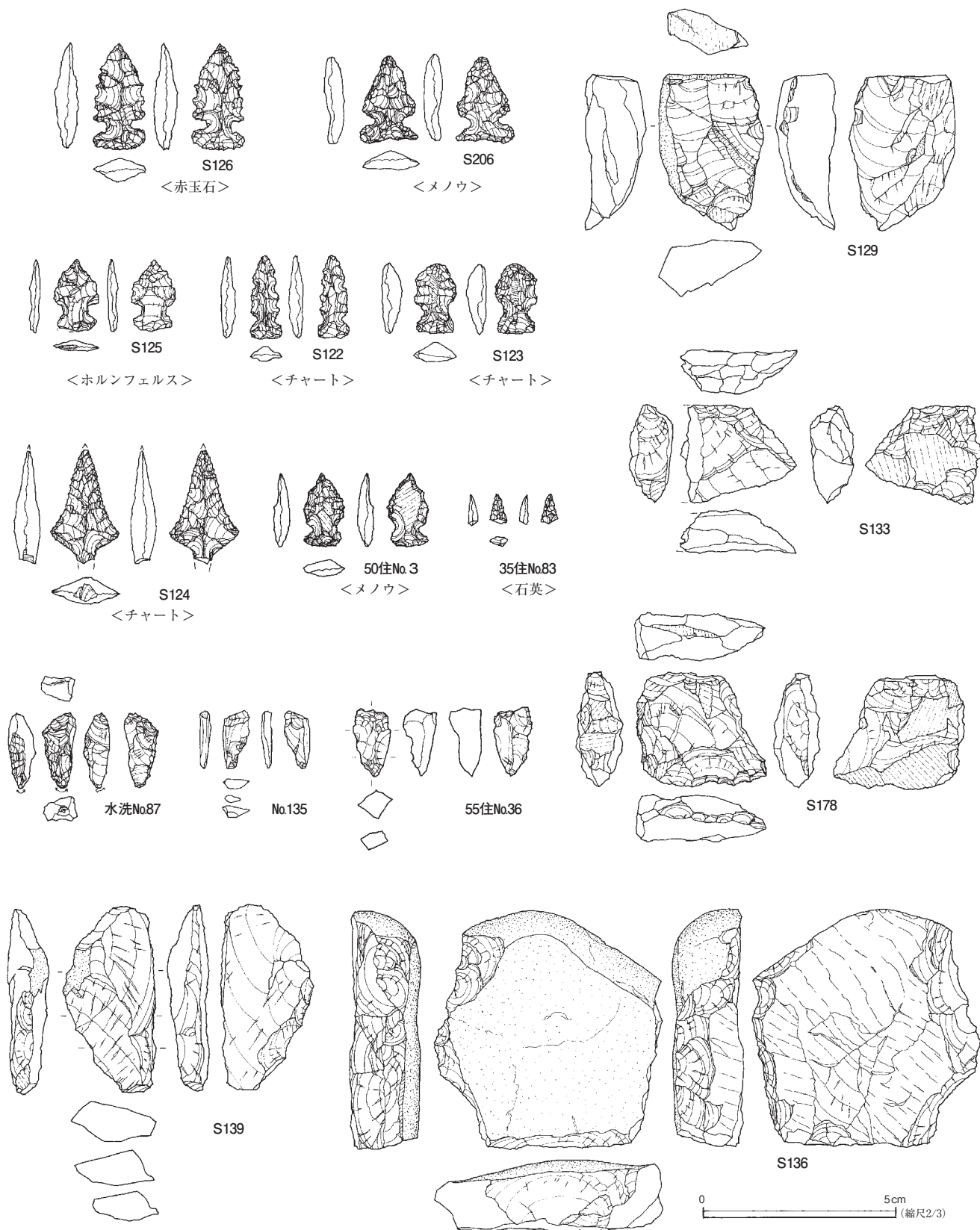
遺跡における石英片の分布には、耕運による拡散の方向性があることを指摘したが、石英母岩1とメノウ母岩1の分布には、これに直交する方向の分布も認められた。これも、弥生時代後期前半の土器片について、同一個体の破片が分布する状況によく一致している。第47号住居跡における石英、メノウの分布は、住居あるいは住居跡という空間における作業の痕跡がそのまま遺棄されたものではなく、住居跡内への廃棄により形成されたものと考えられるのである。

4 石英とメノウの剥片剥離

石英は、その石材の性状から、一回の加撃で複数の分割した破片が生成され、剥離を読み取り難いものも少なくない。しかし、母岩別の資料を石核、剥片と記載したように、第47号住居跡から出土した石英には、加撃による剥離の痕跡を明瞭に認める破片がある。

石英の礫器 石英を素材として、加工と使用の痕跡が認められる石器に、3点の礫器がある(第25図)。いずれも最大長60mm以下と小型であり、No.5とNo.142は槌状、S138は斧状を呈する。一方の端部に敲打痕と見られる潰れが形成されている。この部位が、槌状のNo.5とNo.142ではともに、自然面ではなく剥離面であったと推定され、斧状のS138は、表裏の両面の剥離により、刃部のような尖りが形成されている。残された自然面の湾曲からは3点とも、長軸70mmほどの円礫に近い原石を加工して製作されたものと考えられた。これら礫器の製作には、剥片と破片の生成が伴う。

石英の母岩1接合資料1(第27図)は、その大きさと形状から、槌状の礫器の製作を目的とした欠損品と推定される。端部が分割により破損し、製作が中断されたのであろう。また、潰れの痕跡を有する微細な破片(S64, 水洗No.94)も検出されており、第47号住居跡には、礫器

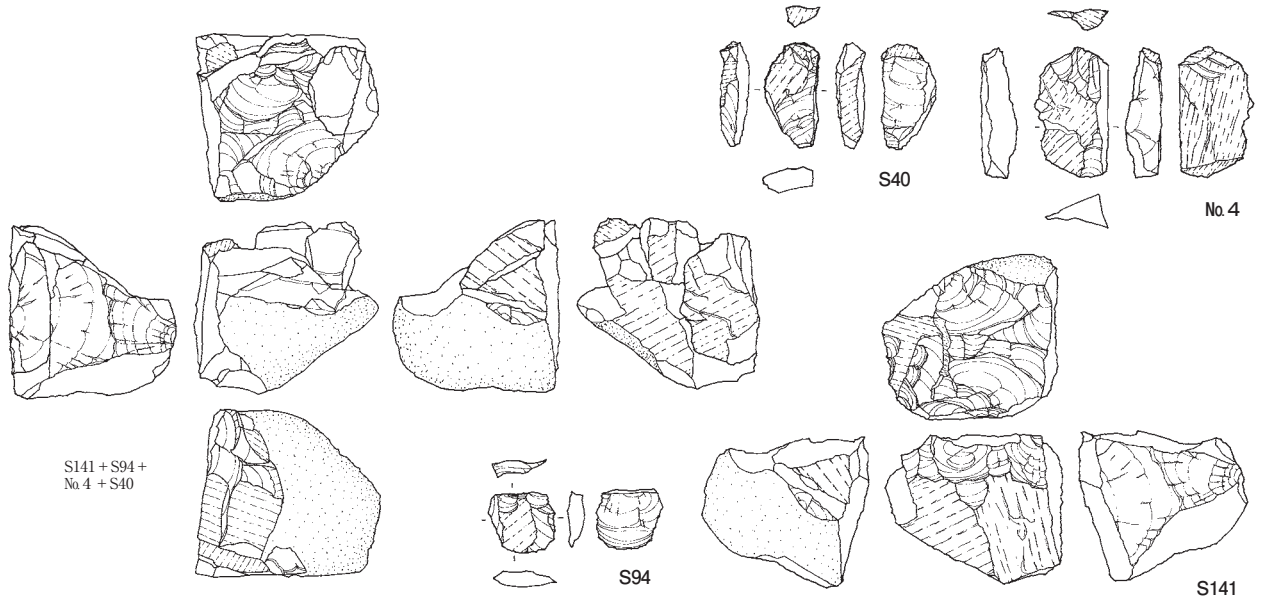


第26図 第47号住居跡の剥片石器(参考のため他住居跡の石器3点を含む)

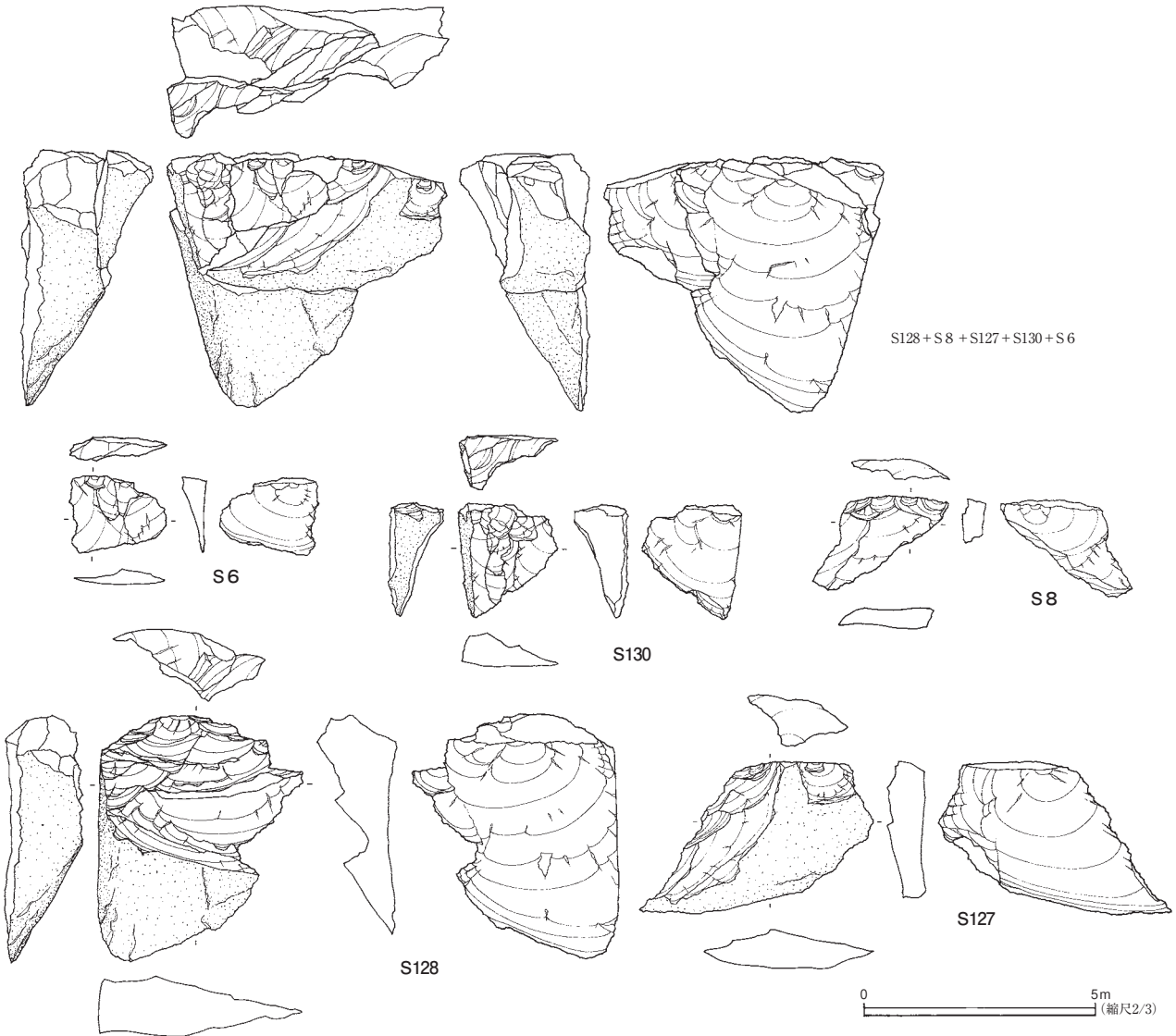
の使用に伴い欠損した破片も含まれていると考えられるのである。

石英の剥片石器 二次的な剥離が施された石英の剥片あるいは破片は、5点が抽出された(第26図)。そのう

ちS136とS178は、節理で分割するように剥離された横長剥片である。打面に対向する縁辺に微細な剥離が観察されたが、これらは、両極打法に伴う剥離の可能性もある。S129とS139は、縦長剥片の側縁部に剥離が観察さ

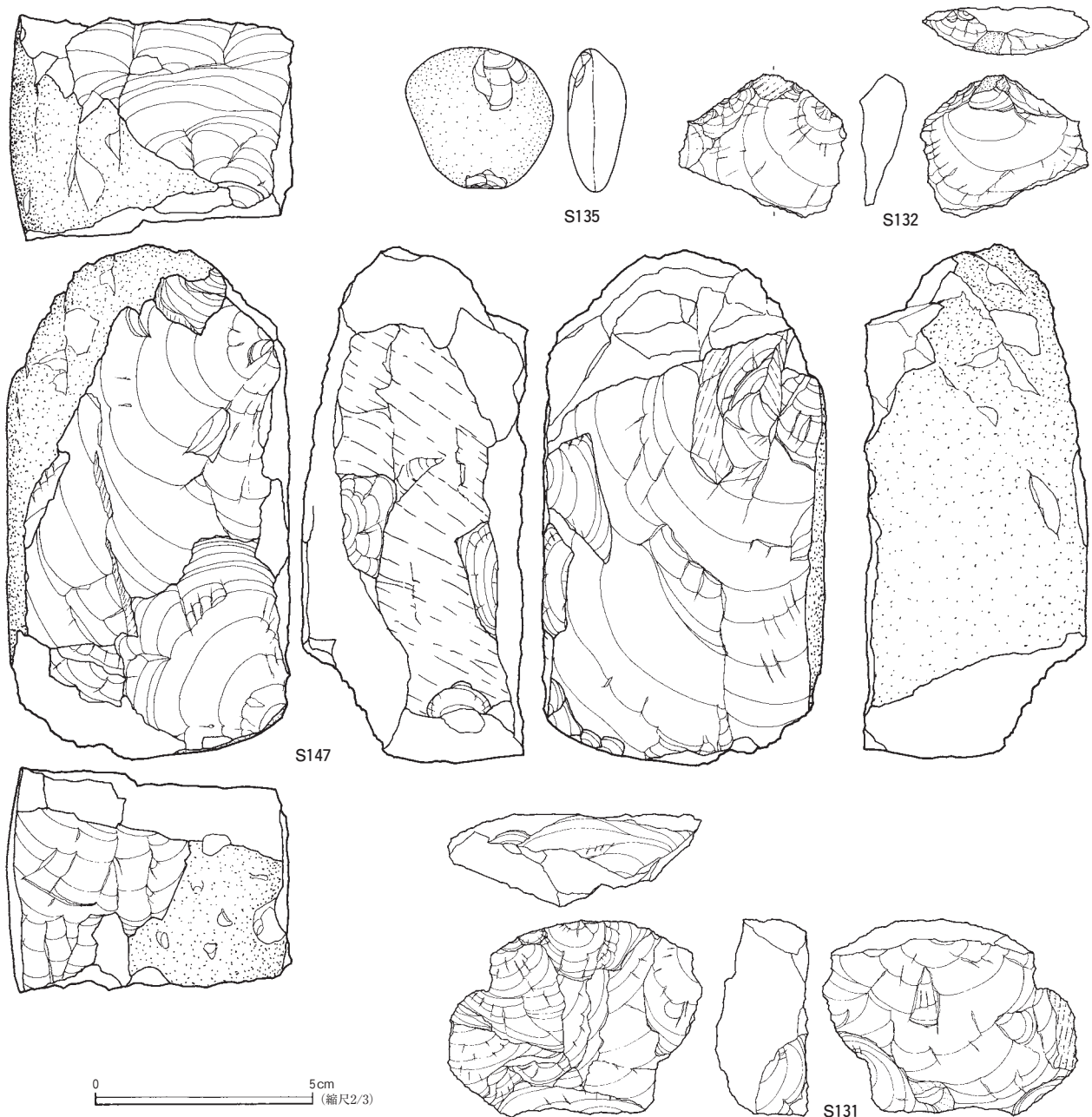


石英母岩 1 接合資料 1



石英母岩 2 接合資料 2

第27図 第47号住居跡の石英接合資料



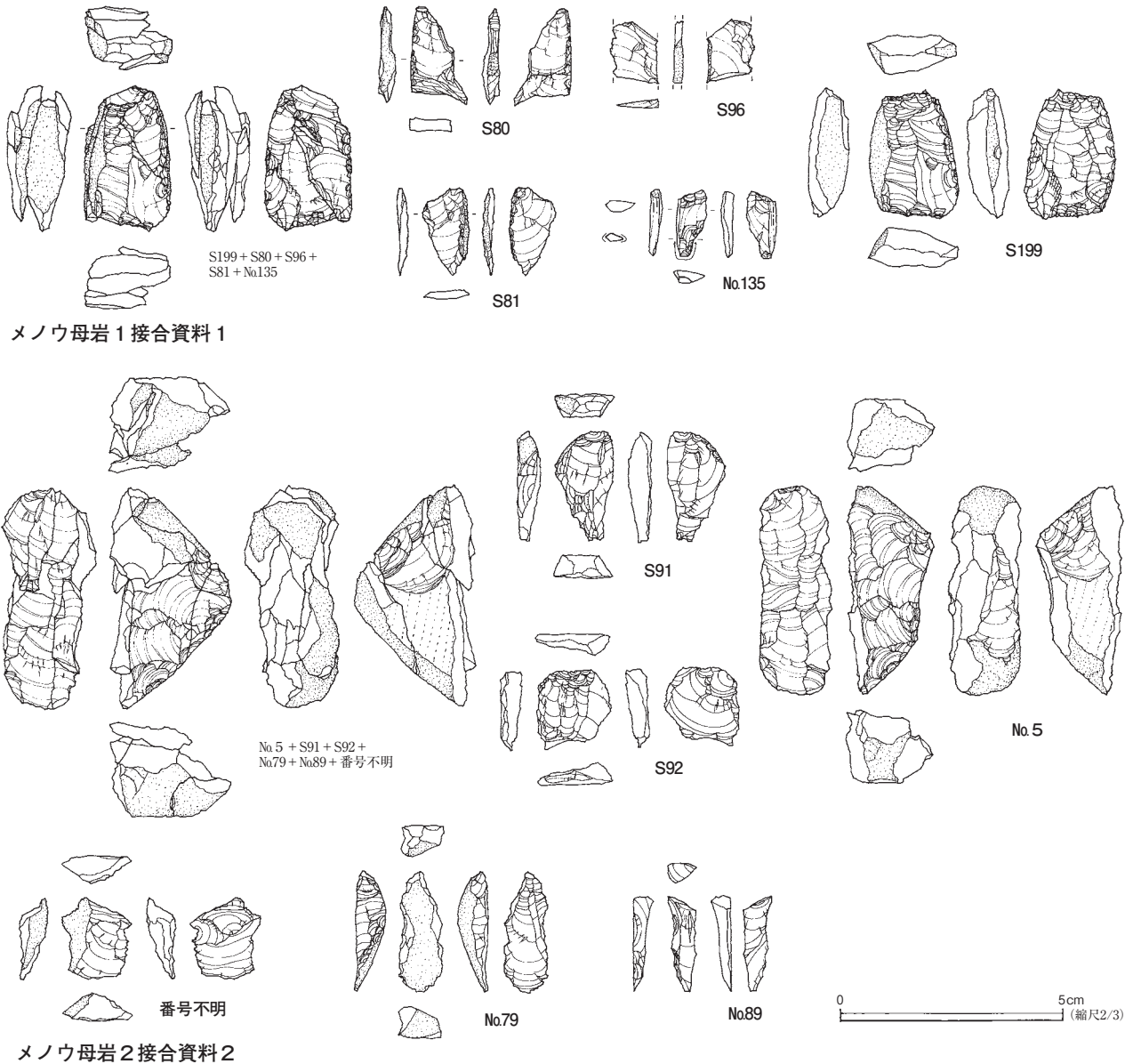
第28図 第47号住居跡の石英資料

れた。S129には、剥片の全体に摩耗が認められる。S136は、節理で分割した扁平な破片であり、両側縁に明瞭な加工が施されている。右側縁には、直線か緩やかな凸状を作るように剥離が並び、刃部の先端には摩耗が観察される。刃角は70～90°の急傾斜であり、搔器に相当する石器と捉えられる。

これら5点、さらにS131、S132などの剥片(第28図)は、礫器の素材に推定された70mmほどの礫から生成されたものではない。S147の石核(第28図)から推定されるのは、長軸150mmほどの円礫であり、このような大きさ

の原石から、剥離されたものと考えられる。石英の母岩2接合資料2(第27図)には、原石を分割し、その分割面を打面とした連続的な剥片剥離が窺える。第47号住居跡には、剥片石器とともに、その製作に伴い生成された剥片と破片も含まれていると考えられるのである。

メノウの剥片石器 二次的な剥離が施されたメノウの剥片は、2点を抽出した(第26図)。水洗No87とNo135はともに、縦長剥片の端部を加工した石錐であり、水洗No87の先端部には、鏡面状に光沢を有した使用の痕跡が観察される。他にも、第55号住居跡からNo36の石錐が検



第29図 第47号住居跡のメノウ接合資料

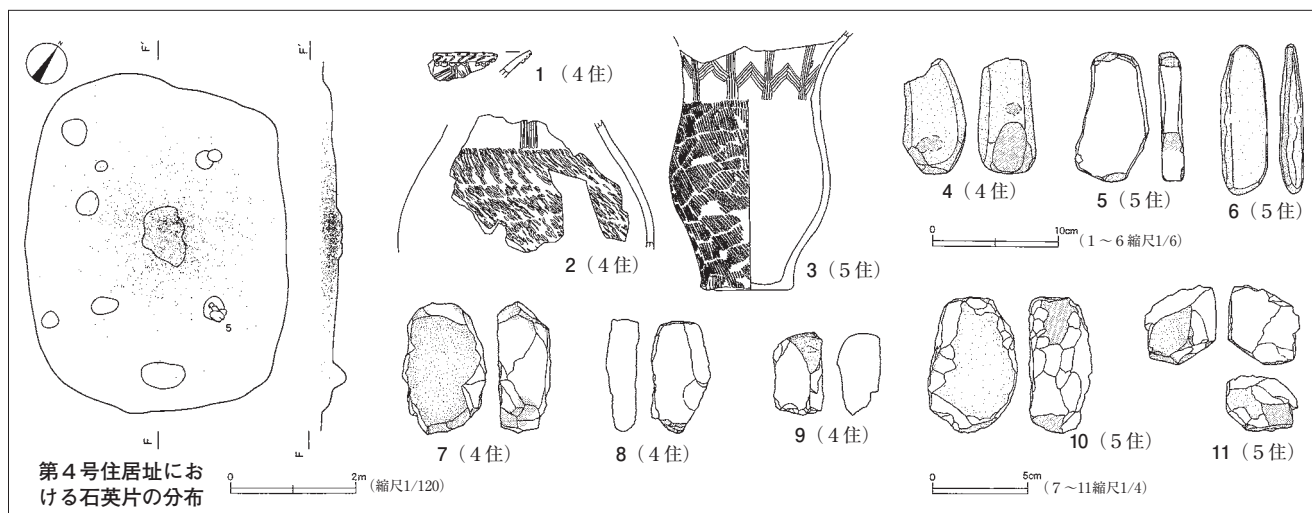
出されている(第26図)。

メノウの母岩1 接合資料1(第29図)からは、No.135の石錐が製作されている。原石は、長軸35mmほどの扁平な円礫と推定され、長軸方向の加撃により縦長剥片が連続的に剥離されている。残核のS199は、楔状を呈する。母岩2 接合資料2(第29図)は、長軸50mmほどの円礫が原石と推定され、縦長剥片が連続的に剥離されている。これも、選択された原石の大きさ、剥片の形状から、縦長剥片を利用した小型の石器の製作を目的としたものと考えられる。つまり、石錐の製作と捉えることには違反していない。第47号住居跡には、石錐の製作と使用の痕跡が、石英の石器群の製作と使用の痕跡に重複する。

剥片剥離と台石・敲石 台石の上に原石あるいは石

核を載せて上方からの加撃で剥片を剥離する両極打法の痕跡が、メノウの母岩1や母岩2には明瞭に認められる。石英についても、メノウの母岩1とほぼ同じ大きさの原石と見られるS135には、上方の剥片剥離に伴い生成された小さな剥離の痕跡が、対向する縁辺に残されている。石英の礫器であるS138にも、刃部に対向した端部に敲打のような痕跡が観察される。石英、メノウの剥片剥離には両極打法が多用されていたと考えられる。

第47号住居跡からは、S151とS152という凹石を転用した砂岩の台石が2点出土している(第23図)。ともに表面には、敲打痕と見られる傷跡が観察された。また、砂岩、安山岩、ホルンフェルスなどの敲石が出土しており、なかでもS137には、形状と使用痕の位置から、メノウ



第30図 下郷遺跡における石英片の分布、敲石、石英礫器（[[関口他2001]より引用して構成）

の母岩1や石英礫器のS138のような扁平な原石を対象として、鈍のように振り下ろす加撃が想定される。また、S146とS175には、やはり形状と使用痕の位置から、石英の母岩1のような打面が形成された剥片剥離に機能したことが想定される。つまり、第47号住居跡には、石器製作の道具も合わせて廃棄されたと考えられるのである。

茨城県南部で石英の破片が多量に検出された遺跡のうち、S137のように側縁を使用するタイプの敲石は土浦市の西原遺跡[江幡1994]、原出口遺跡[江幡1995]、根鹿北遺跡[関口他1997]や、石岡市中川津遺跡[櫻井他2011]で、S146とS175のように棒状の端部を使用するタイプの敲石は、これらの遺跡に加えて、つくば市玉取山遺跡[奥沢2006]でも報告されている。2つのタイプの敲石が石英を素材とした石器製作の道具として使用されたという想定は支持されよう。特に、下郷遺跡の第4号及び第5号住居跡は、石英の破片に伴い敲石(第30図4～6)と台^{註2}石、さらに石英礫器(第30図7～11)も抽出されており、鷹ノ巣遺跡の第47号住居跡の状況に良く一致する。

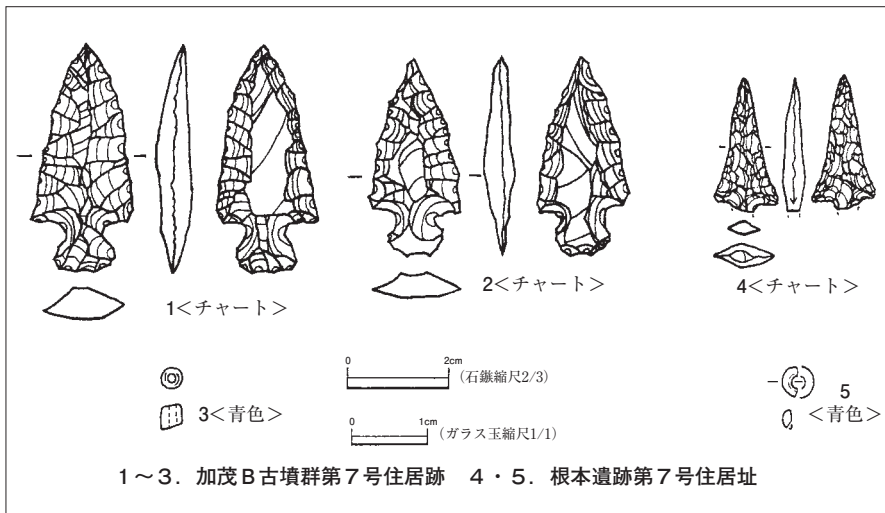
茨城県南部においては、石英の破片が被熱による破碎で生成された可能性も示されている[中村2000, 奥沢2006]。しかし、少なくとも鷹ノ巣遺跡については、そのような破片の生成は認められない。被熱の痕跡を有する石英の破片は6点であり、1.2%に過ぎない。むしろ、剥片剥離が明瞭なメノウには、14点あり、11.9%を占めている。但し、被熱の痕跡を有するメノウの剥片の1点は、母岩2接合資料3の一部で、被熱の痕跡が認められ

ない剥片と接合する。つまり、被熱は、剥片の剥離から廃棄までの間に位置付けられるのである。

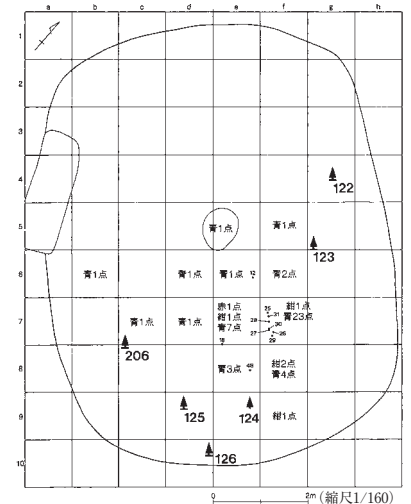
5 アメリカ式石鏃とガラス玉

アメリカ式石鏃 第47号住居跡からは、「アメリカ式石鏃」と呼ばれる石鏃が5点検出されている。茎の端部を欠損することから、アメリカ式石鏃という同定に至らない有茎石鏃も1点あり、合計6点の石鏃がここに集中する。アメリカ式石鏃は、他に、隣接する第50号住居跡に混入して1点が出土している。これが、後世の耕作により、20点の石英の破片とともに移動したものであれば、6点あるいは7点ものアメリカ式石鏃が、第47号住居跡に包含されていたことになる(第26図)。

7点の石鏃の石材は、S122・S123・S124の3点がチャート、S206と第50号住居跡No.3の2点がメノウ、S126の1点が赤玉石、S125の1点がホルンフェルスである。このうちチャート、赤玉石、ホルンフェルスという石材については、製作に伴う剥片等は全く検出されていない。また、メノウについても、透明度の高い石質のものを素材としており、剥片剥離の痕跡が残された母岩とは明らかに識別される。つまり、アメリカ式石鏃は、第47号住居跡に残された石器製作の痕跡とは直接的な関係を持たないと捉えられた。但し、第55号住居跡からは、石英で製作された石鏃の先端部の破片が検出されており、石英を素材とするアメリカ式石鏃も、栃木県御新田遺跡[細谷1987]や、福島県遠窪遺跡[柴田1979]、千葉県高部宮ノ前遺跡[小宮1984]に報告されている。検出さ



第31図 アメリカ式石鏃とガラス玉が出土した事例
 ([川井2008], [中村他1996]より引用して構成)



第32図 第47号住居跡におけるアメリカ式石鏃とガラス玉の分布

れた破片は、石英でも透明度の高い石質に見えるが、全体が明らかでないことから、鷹ノ巣遺跡における石英を素材としたアメリカ式石鏃の製作について、これを完全に否定することはできない。

ガラス玉との伴出 茨城県内では、桜川市加茂B古墳群[川井2008]の第7号住居跡において2点のアメリカ式石鏃と1点のガラス玉(第31図1～3)が検出されている。また、美浦村根本遺跡[中村他1996]の第7号住居址では1点の有茎石鏃と1点のガラス玉(第31図4・5)が報告されている。有茎石鏃は、茎の端部を欠損し、アメリカ式石鏃という同定に至らないものである。ともに稀少な遺物が、住居跡という狭い空間に共存して検出されることに着目したい。弥生時代後期の大型住居跡の床面から、威信財が遺棄されたように検出される状況については、方形周溝墓などの埋葬施設において副葬品が検出される状況に重ね合わせ、埋葬の痕跡という解釈を示して「屋内墓」と呼んでいる[鈴木2008]。鷹ノ巣遺跡の第47号住居跡についても、ガラス玉の検出により、「屋内墓」の可能性を指摘してある[鈴木2010]。アメリカ式石鏃についても、威信財の副葬という捉え方が導かれることになった。^{註3}

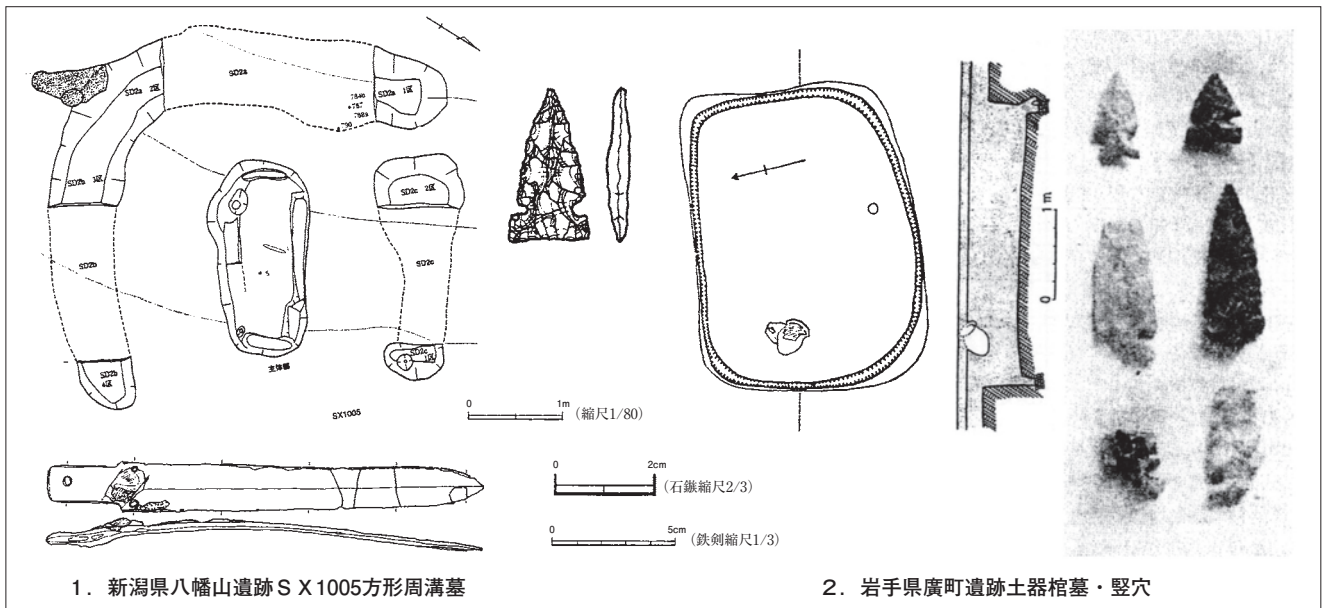
埋葬施設からの検出事例 埋葬施設と考えられている遺構から、アメリカ式石鏃が検出された事例もある。

新潟県八幡山遺跡[渡邊他2001]のS X 1005方形周溝墓においては、埋葬主体部から鉄剣とともにアメリカ式石鏃が1点検出された(第33図1)。アメリカ式石鏃は完形品であり、「出土状態から副葬品と考えられよう」[渡邊

1995]という解釈が示されている。^{註4}

岩手県廣町遺跡[伊東1954]では、土器棺墓の棺身に相当する土器内から、アメリカ式石鏃が5点検出された(第33図2)。「石鏃はいづれも横になつてゐる甕の下壁に接して発見されたので、土と共に後に甕内に流れ込んだものでなく、最初から土器内に納めて埋められたものと思はれた」と観察されている。また、5点とも一部を欠損することについては、「これらの石鏃は意識的に尾翼を打ち込んで甕の中に納められたものではないかといふことを考えさせる」とも指摘された。さらに興味深いのは、この土器棺墓が、長軸3.2m、短軸2.5mで隅丸方形の堅穴の覆土中に形成されたものであり、堅穴内の「床面に接するか、或はそれに近い深部の黒土層中」からは、完形品のアメリカ式石鏃が1点、細形管玉が25点、ガラス玉が2点検出されていることである。これは、「屋内墓」に土器棺墓が重複して形成された事例と捉えておきたい。

第47号住居跡においては、7e・fグリッドの位置を中心に直径4mほどの範囲から、57点のガラス玉が検出されている。6点の石鏃は、その範囲の周縁に位置していた(第32図)。また、ガラス玉のほとんどは床面の直上か床面に近い覆土中から検出されたのに対して、アメリカ式石鏃には、ガラス玉よりも高い垂直位置で検出されたものもある。アメリカ式石鏃とガラス玉が相伴するとしても、異なる条件が関与したことを考慮しなければならないのであろう。



第33図 アメリカ式石鏃を伴う埋葬施設(〔渡邊^他2001〕, 〔伊東1954〕より引用して構成)

6 おわりに

第47号住居跡に見られた石英とメノウの破片の分布は、主に石器製作の痕跡であり、その製作の道具であった台石・敲石等の礫石器とともに廃棄されたものと捉えられた。一方、アメリカ式石鏃は、石器製作の痕跡とは区別され、ガラス玉とともに「屋内墓」へ副葬されたものという見解を示した。アメリカ式石鏃は、それ自体が威信財であったのか、例えば飾り弓の付属品であったのか、今後の調査による展開を待ちたい。

さて、石英を素材とした石器は、何に使用されたものであろうか。石英は、鷹ノ巣遺跡から直線距離で4.5kmほどの磯崎海岸において、長軸196mmまでの円礫が採集できることを確認しており、遠隔地からもたらされるような特別な石材ではない。近在から入手した原石による石器製作が、製作の残滓と道具のみならず、使用された石器までも含めて一箇所に廃棄されている状況は、「簡単な使い捨ての礫器の様な物として使用した」という、西原遺跡における江幡良夫の想定に見合う。これが、用途を考察する基本的な条件となるものであろう。また、石英礫器の端部には敲打痕を認めながらも、これをそのまま敲石と捉えるには違和を覚える。それは、礫器自体が敲石での加工を必要とし、その敲石には異なる石材の礫が、用途に適合した大きさと形状で選択されていることにある。敲打痕は、使用の結果としての痕跡ではなく、機能面を調整した痕跡であるのかもしれない。両極打法では、打面への敲打痕の形成が剥離の作業の延長上にあ

る。石英は、その剥離面の性状により選択された石材であったことを考えるべきなのであろう。硬くガラス質でありながら、触れただけで対象物を傷つけるような鋭利さは持たない。これも、用途を考察する条件に加えてみよう。さらに、鷹ノ巣遺跡において、石英の破片を加工した搔器のような刃部の石器が伴うこと、これらにメノウの石鏃が伴うことを、一連の作業に使用した道具の組合せとして見るならば、皮革の加工、特に獣皮の皮なめしという作業が思い浮んでくる。掌に収まるような大きさに製作された石英礫器は、平坦に調整された剥離面を利用して、獣皮から脂肪を掻き取る作業に使用されたのではないかと^{註5}。獣皮という素材は、様々な道具の一部に利用されていたはずであり、各々の集団が狩猟の手段を持ち得た時代であるならば、自らが原料を入手する機会に遭遇することになる。その機会ごとに対応した作業の痕跡であった可能性を仮説として提示しておきたい。

住居跡における石英片の集中的な分布に、祭祀性を強調する必要はあるのだろうか。日立市鹿野場遺跡〔館野^他1979〕において、ローム層中から検出された多量の石英片を想起されたい。まず必要とされているのは、石器としての分析と考えるのである。

註1 茨城県南部に限定される現象ではない。茨城県北部においても、東海村部原北遺跡〔茂木^他1982〕の4号住居跡に「かなりの石屑(フレーク)」が検出され、「コアやフレークに乳白色の石英が多い」ことが記載されている。また、千葉県北部においても、笹原遺跡〔飯塚^他1981〕の第3号

住居地に「石英片6点」の報告がある。これらは後期前半の事例であり、千葉県北部では、中期後半の南羽鳥タダメキ第2遺跡[栗原^他2000]からも「石英製石核」等が出土している。

註2 「石皿」と報告された石器の表面には、多数の敲打痕が残されており、これを台石と認めた。また、「石英製の敲打痕付石器」については、本稿に引用した第30図7～11の5点のみを石英礫器と捉えた。他は、剥片剥離に伴う敲打の痕跡と観察している。

註3 水戸市安戸星古墳[茂木^他1982]では、「南土器群中」から2点のガラス玉が、「後方部盛土内」から1点の有茎石鏃(茎部欠損)が出土している。「南土器群」は「十王台式」であり、埋設されていた土器棺が、古墳の築造に伴い破壊されたものと想定するならば、石鏃も伴う可能性が指摘できる。

註4 八幡山遺跡の報告書[渡邊^他2001]では、「石鏃による傷を受けたまま埋葬された」という解釈も示されている。

註5 「多孔質安山岩の模造磨石を用いた筆者の実験によるなら、シカの生皮の脂肪をゴシゴシ洗うような感覚で、難なくこそげ落せた。また、実際円礫だと、シャープなエッジがないため、皮を傷めずにこそげ落とせる」[堤2011]という、堤隆による所見が参考となる。

参考文献

- 飯塚博和^他 1981 『千葉県柏市笹原遺跡(1980年度発掘調査報告書)』笹原遺跡調査会
- 石原正敏 1996 「アメリカ式石鏃再考」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会 179-197頁
- 伊東信雄 1954 「岩手県佐倉村発見の弥生式遺跡」『古代学』第3巻第2号 144-154頁
- 井上義安 1994 『那珂湊市鷹ノ巣遺跡』那珂湊市鷹ノ巣遺跡発掘調査会
- 色川順子^他 2008 『鷹ノ巣 - 第2次調査の成果 -』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第37集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 江幡良夫 1994 『原田北遺跡Ⅱ 西原遺跡 土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』茨城県教育財団文化財調査報告第85集 財団法人茨城県教育財団
- 江幡良夫 1995 『原出口遺跡 土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』茨城県教育財団文化財調査報告第94集 財団法人茨城県教育財団
- 海老原郁雄 2004 「アメリカ式石鏃とその周辺」『唐澤考古』第23号 1-16頁
- 大淵敦志^他 1998 『六十塚遺跡 - 茨城県土浦市所在の古代集落跡の調査 -』田村・神宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集 土浦市教育委員会
- 奥沢哲也 2006 『玉取向山遺跡 県立つくば養護学校(仮称)整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第263集 財団法人茨城県教育財団
- 奥沢哲也 2006 「茨城県南部における弥生時代の石英片出土について」『年報』25(平成17年度) 財団法人茨城県教育財団 51-56頁
- 川井伸也 2008 『加茂B古墳群 金谷遺跡 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書X V』茨城県教育財団文化財調査報告第304集 財団法人茨城県教育財団
- 栗原敦司^他 2000 『南羽鳥遺跡群Ⅳ 成田カントリークラブゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ)』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第156集 財団法人印旛郡市文化財センター
- 黒澤春彦 2001 「土浦周辺における弥生時代後期の様相」『土浦市立博物館紀要』第11号 1-14頁
- 小宮 孟 1984 『東総用水 高部宮ノ前遺跡・今郡カチ内遺跡・小座ふちき遺跡・青馬前畑遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 櫻井完介^他 2011 『中津川遺跡 一般国道6号千代田石岡バイパス(かすみがうら市市川～石岡市東大橋)事業地内埋蔵文化財調査報告書5』茨城県教育財団文化財調査報告第338集 財団法人茨城県教育財団
- 柴田俊彰 1979 「福島市内の弥生時代の遺跡・遺物(1)」『福島考古』第20号 73-85頁
- 鈴木素行^他 2001 『武田西端遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第21集 ひたちなか市教育委員会・財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 鈴木素行 2008 「『屋内土壙墓』からの眺望 - 弥生時代後期「十王台式」の埋葬を考えながら -」『地域と文化の考古学』Ⅱ 明治大学文学部考古学研究室編 有限会社六一書房 443-458頁
- 鈴木素行 2010 「続・部田野のオオツタノハ - 茨城県域における弥生時代「再埋葬後」の墓制について -」『古代』第123号 1-51頁
- 関口 満^他 1997 『根鹿北遺跡・栗山窯跡発掘調査報告書 土浦市今泉霊園拡張工事事業地内埋蔵文化財調査報告書』土浦市教育委員会
- 関口 満^他 2001 『下郷遺跡・下郷古墳群 佐々木建設株式会社土砂採取工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』土浦市教育委員会
- 館野 孝^他 1979 『日立市鹿野場遺跡発掘調査報告書』日立市文化財調査報告第6集 日立市教育委員会
- 堤 隆 2011 『最終水期における細石刃狩猟民とその適応戦略』株式会社雄山閣
- 中村哲也^他 1996 『茨城県美浦村根本遺跡』陸平研究所報告2 美浦村・陸平調査会
- 中村哲也 2000 『茨城県稲敷郡美浦村野中遺跡 - 第2次発掘調査報告書 -』美浦村教育委員会
- 古川知明・石原正敏 1986 「アメリカ式石鏃に関する一考察」『新潟市文化財調査報告書 六地山遺跡 - 1982年発掘調査を中心に -』新潟市教育委員会 33-44頁
- 細谷正策 1987 『御新田遺跡・富士前遺跡・ヤツチャラ遺跡・下り遺跡 宇都宮競馬場附属きゅう舎建設地内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第85集 栃木県教育委員会
- 茂木雅博^他 1982 『常陸安戸星古墳』安戸星古墳調査団
- 茂木雅博^他 1982 『常陸部原遺跡』東海村教育委員会
- 渡邊朋和 1995 「新津市八幡山遺跡確認調査の概要」『新潟県考古学会連絡紙』22 4-5頁
- 渡邊朋和^他 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』新津市埋蔵文化財発掘調査報告書 新津市教育委員会

第7表 弥生時代石器一覧表

挿 図	出土位置	遺物番号	器 種	石 材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備 考
第25図	SI47	No5	礫器	石英	45	30	26	42.4	2007年度「敲石」として報告
	SI47	No142	礫器	石英	58	37	34	113.6	2007年度「敲石」として報告
	SI47	S138	礫器	石英	60	45	20	92.1	2007年度「敲石」として報告
第26図	SI47	S126	石鏃	赤玉石	28	14	6	1.7	2007年度報告, アメリカ式石鏃
	SI47	S206	石鏃	メノウ	23	15	5	1.3	2007年度報告, アメリカ式石鏃
	SI47	S125	石鏃	ホルンフェルス	19	12	3	0.5	2007年度報告, アメリカ式石鏃
	SI47	S122	石鏃	チャート	22	8	4	0.6	2007年度報告, アメリカ式石鏃
	SI47	S123	石鏃	チャート	19	11	5	1.0	2007年度報告, アメリカ式石鏃
	SI47	S124	石鏃	チャート	30	18	7	2.2	
	SI50	No3	石鏃	メノウ	19	11	4	0.7	アメリカ式石鏃
	SI35	No83	石鏃	石英	8	5	2	0.1	2007年度報告
	SI47	水洗No87	石鏃	メノウ	20	9	7	1.2	2007年度報告
	SI47	No135	石鏃	メノウ	15	7	3	0.3	
	SI55	No36	石鏃	メノウ	19	10	8	1.2	
	SI47	S129	剥片	石英	41	29	12	18.7	2007年度報告, 加工痕有り, 全体に摩滅
	SI47	S133	剥片	石英	26	30	11	7.9	2007年度報告, 加工痕有り
	SI47	S178	剥片	石英	30	34	11	13.1	2007年度報告, 加工痕有り
SI47	S139	剥片	石英	48	24	10	12.1	2007年度報告, 加工痕有り	
SI47	S136	搔器	石英	62	59	17	93.2	2007年度「削器」として報告	
第27図	SI47	S40	剥片	石英	21	11	6	1.7	
	SI47	No4	剥片	石英	26	15	8	2.6	
	SI47	S94	剥片	石英	12	13	4	0.7	
	SI47	S141	石核	石英	30	36	34	39.5	
	SI47	S6	剥片	石英	17	21	6	1.5	
	SI47	S130	剥片	石英	25	22	12	3.9	
	SI47	S8	剥片	石英	21	29	5	2.4	
	SI47	S128	剥片	石英	45	54	17	32.8	
	SI47	S127	剥片	石英	34	51	8	13.5	
第28図	SI47	S135	石核	石英	33	34	14	19.3	2007年度「敲石」として報告
	SI47	S132	剥片	石英	34	39	11	10.6	
	SI47	S147	石核	石英	117	65	51	593.8	
	SI47	S131	剥片	石英	46	60	22	54.4	
第29図	SI47	S80	剥片	メノウ	22	13	4	1.9	
	SI47	S96	剥片	メノウ	14	11	3	0.5	
	SI47	S81	剥片	メノウ	19	10	2	0.4	
	SI47	S199	石核	メノウ	29	21	9	6.0	2007年度「楔状石核」として報告
	SI47	S91	剥片	メノウ	25	14	5	1.7	
	SI47	S92	剥片	メノウ	18	17	5	1.4	
	SI47	不明	剥片	メノウ	19	16	7	1.1	
	SI47	No79	剥片	メノウ	28	10	7	1.7	
	SI47	No89	剥片	メノウ	22	7	5	0.4	
	SI47	No5	石核	メノウ	48	20	16	14.8	

* 第23図掲載の石器については2007年度報告を参照とする。

V 古墳時代の遺構と遺物

1 調査の概要

鷹ノ巣遺跡では、古墳時代前期の住居跡8基、後期の住居跡16基を検出した。

住居跡の分布 古墳時代前期の住居跡はB地区の中央から西側に、後期の住居跡はその大半がB地区の南西側のやや傾斜地に分布する。一辺が7m以上の第28・50号住居跡は、A地区からB地区にかけての住居が密集しない台地平坦部に位置する。前期の住居跡同士および後期の住居跡同士の重複はみられない。

住居跡の規模 住居跡を長軸長で比較すると、最大が前期は第52号住居跡の7.98mで、後期は第28号住居跡の8.00m、最小が前期が第59号住居跡の5.72mで、後期が第30号住居跡の4.83mである。後期の第48号住居跡は一部が調査区外にあり、確認できた長軸の長さだけで6.45mあるため、この住居跡も大型に属する。

長軸長の数値で分類すると、前期は5.72～5.80mの規模の住居跡が2基、6.00～6.37mの規模の住居跡が4基、7.51～7.98mの規模の住居跡が2基となり、6m台の規模の住居跡が半数を占める。後期は4m台の規模の住居跡が1基、5.45～5.86mの規模の住居跡が3基、6.08～6.89mの規模の住居跡が10基、7.00～8.00mの規模の住居跡が2基となり、前期と同様に6mの規模の住居跡が半数以上を占める。

住居跡の形態 ほとんどの住居跡が正方形に近い形態を呈する。第28・34B・50号住居跡は、南壁中央部の出入り口と思われる部分が住居壁外へ突出する。

住居跡の主軸 前期の主軸は、 $N-4 \sim 20^\circ - W$ が

3基、 $N-4 \sim 57^\circ - E$ が3基、真北のものが2基ある。主軸の集中する方向は、 $W-4^\circ - N \sim N-4^\circ - E$ で、主軸はほぼ北を向いたものが多い。

後期的主軸は、 $N-1 \sim 105^\circ - W$ が10基、 $N-1 \sim 61^\circ - E$ が5基、真北のものが1基ある。主軸の集中する方向は、 $W-10^\circ - N \sim N-10^\circ - E$ で、主軸はほぼ北を向いたものが多い。

竈 竈は、ほとんどの住居跡で北壁に構築されている。第31B号住居跡は壁の手前に構築された初期竈である。第49号住居跡は東壁の中央よりやや南に寄った場所にあり、すぐ近くには貯蔵穴と出入り口ピットがあるため、古い形態の竈の構築状況を呈する。

竈の構築材には、灰白色や黄白色の粘土が使用されている。竈の構造で、住居構築の際にローム土を土手状に残し袖部とするものが多くみられた。

貯蔵穴 「貯蔵穴」と思われるピットを有する住居跡は、第28・34B・36・37・42・48・49・50・51・64号住居跡の10基である。竈のある住居跡の「貯蔵穴」と思われるピットの位置をみると、竈の造られた壁に対面する壁側に掘られたもので壁の中央より左側(第51号住居跡)、中央(第36・37・48・64号住居跡)、中央で外側に突出(第28・34B・50号住居跡)、竈の造られた壁側に掘られたもので竈の右側(第42号住居跡)、竈の造られた壁側に掘られたもので竈の左側(第49号住居跡)の5つに分類できる。



第28号住居跡



第30号住居跡

V 古墳時代の遺構と遺物



第34図 鷹ノ巣遺跡古墳時代住居跡分布図(グリッドは1辺10m, 淡線:前期・濃線:後期)

第8表 鷹ノ巣遺跡古墳時代住居跡一覧表

前期

住居跡番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	主軸	炉址	備考
40B	H・I-14・15	6.00	5.76	N-14°-E	1・石有	
41	H・I-12・13	7.51	7.44	N-20°-W	1・石無	2007年度報告
43	F・G-11	5.80	(2.99)	N	1・石有	2007年度報告
46	D・E-11	6.30	6.15	N-4°-W	無	
52	F・G-12	7.98	7.73	N-20°-W	1・石有	
59	G・H-13・14	5.72	5.22	N	1・石有	2007年度報告
60	F-12・13	6.25	6.19	N-57°-E	1・石有	2007年度報告
62	E・F-13・14	6.37	6.37	N-4°-E	無	

後期

住居跡番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	主軸	竈位置	備考
28	B・C-7・8	8.00	7.97	N-8°-W	北壁	
30	E-8・9	4.83	4.74	N-10°-W	北壁	
31B	H-16・17	(6.89)	5.67	N-9°-W	北側	2007年度報告
34B	D-15・16	6.30	6.15	N-1°-E	北壁	
36	F・G-15・16	6.64	6.30	N	北壁	
37	G・H-16・17	6.43	6.22	N-2°-E	北壁	
39	I-16・17	5.45	(5.00)	N-1°-W	北壁	
40A	I-15	6.08	5.99	N-4°-W	北壁	
42	H-11・12	5.86	(4.90)	N-3°-W	北壁	2007年度報告
45	F-11	6.30	6.16	N-24°-W	北壁	
48	B・C-10・11	(6.45)	(5.34)	N-4°-W	-	2007年度報告
49	H・I-13・14	6.50	6.33	N-105°-W	東壁	2007年度報告
50	C・D-12・13	7.00	6.90	N-6°-E	北壁	2007年度報告
51	D-12	5.65	5.56	N-10°-E	北壁	2007年度報告 炭化種子(マメ類)検出
53	G・H-12・13	6.20	6.17	N-1°-W	北壁	2007年度報告
64	F・G-14・15	6.20	6.08	N-61°-E	炉	2007年度報告

2 2005年度古墳時代前期の住居跡の調査

第40B号住居跡

遺構 H・I-14・15区に位置する。住居北東隅を第54号住居跡に、南壁を40A号住居跡に掘り込まれている。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は6.00×5.76m。壁高は東壁28cm、西壁34cm、北壁43cm。主軸方向はN-14°-Eを指す。壁周溝は確認できないが、ピット4の西側に間仕切り状の溝がみられる。床面は、壁周辺以外に硬化面がみられる。

竪穴部覆土は、凹レンズ状に下層に褐色土、中層に黒褐色土、上層に暗褐色土が堆積する。

炉址はピット1と4を結んだ線より若干南側に位置する。床面を10cm程掘り込んでいる。地山はほとんど被熱しておらず、覆土に少量の焼土がみられるのみである。

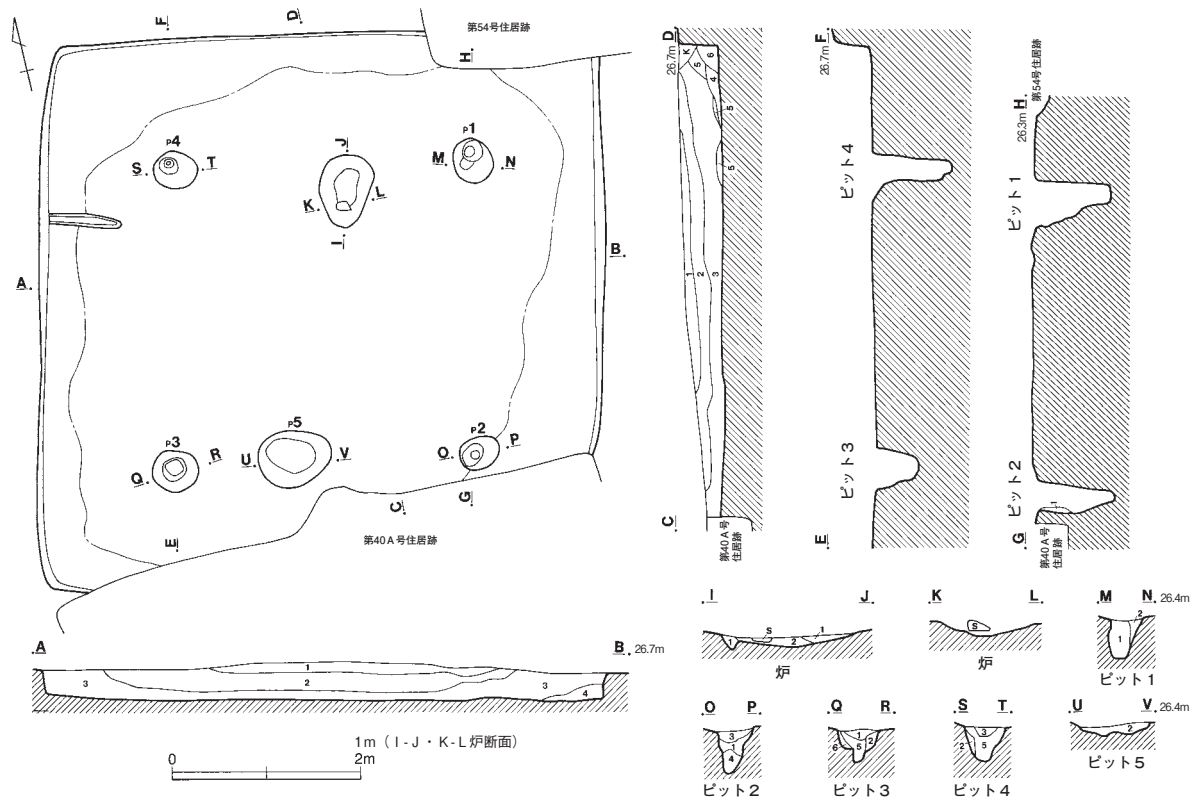
炉址の東西の床面は、特に硬化していた。炉床の南側に炉石が置かれていた。炉石は被熱し、非常にもろく、遺物としての実測はできなかった。石材は凝灰質泥岩である。

ピットは5基検出された。ピット1～4は主柱穴と思われる。床面からの深さは、ピット1が80cm、ピット2が88cm、ピット3が47cm、ピット4が86cmである。

住居掘形は浅く、明確ではない。

遺物の出土状況 遺物は、住居全体に分布しているが、数は少ない。遺物の垂直分布をみると、第3層の床面直上もしくは覆土下層に位置するものと、第2層の中層に位置するものがみられる。

遺物 遺物に完形品はなく、全てが破損品である。



第40B号住居跡堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まり有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第3層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第5層：黒褐色土層(ローム粒・炭化物粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第6層：暗褐色土層(ローム粒を多量、径約1cmロームブロックを少量含む 締まりやや有り)

第40B号住居跡ピット1～5堆積覆土

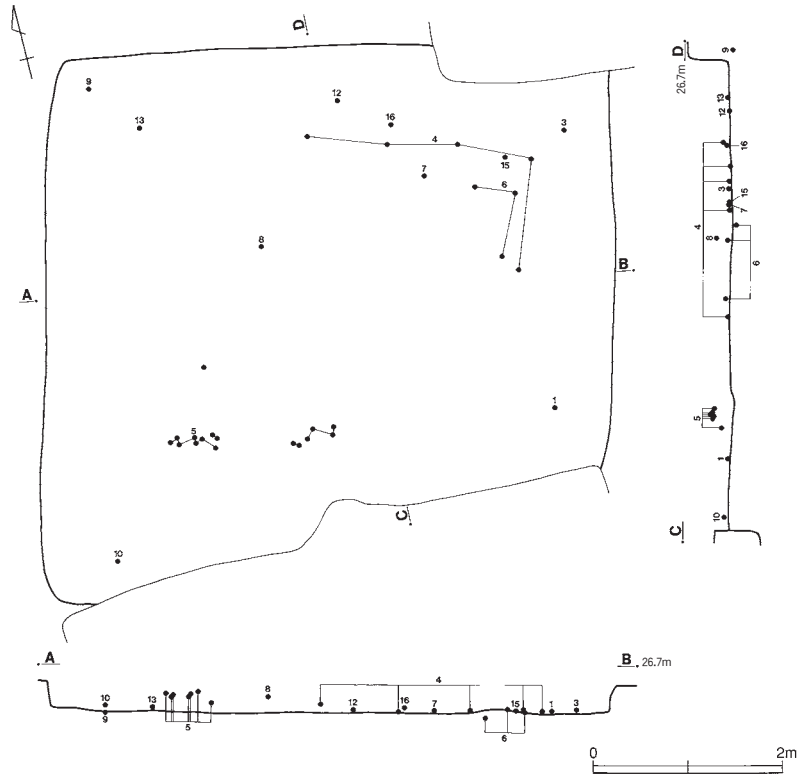
- 第1層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)

- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第3層：黒褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第4層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まり無し)
- 第5層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第6層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)

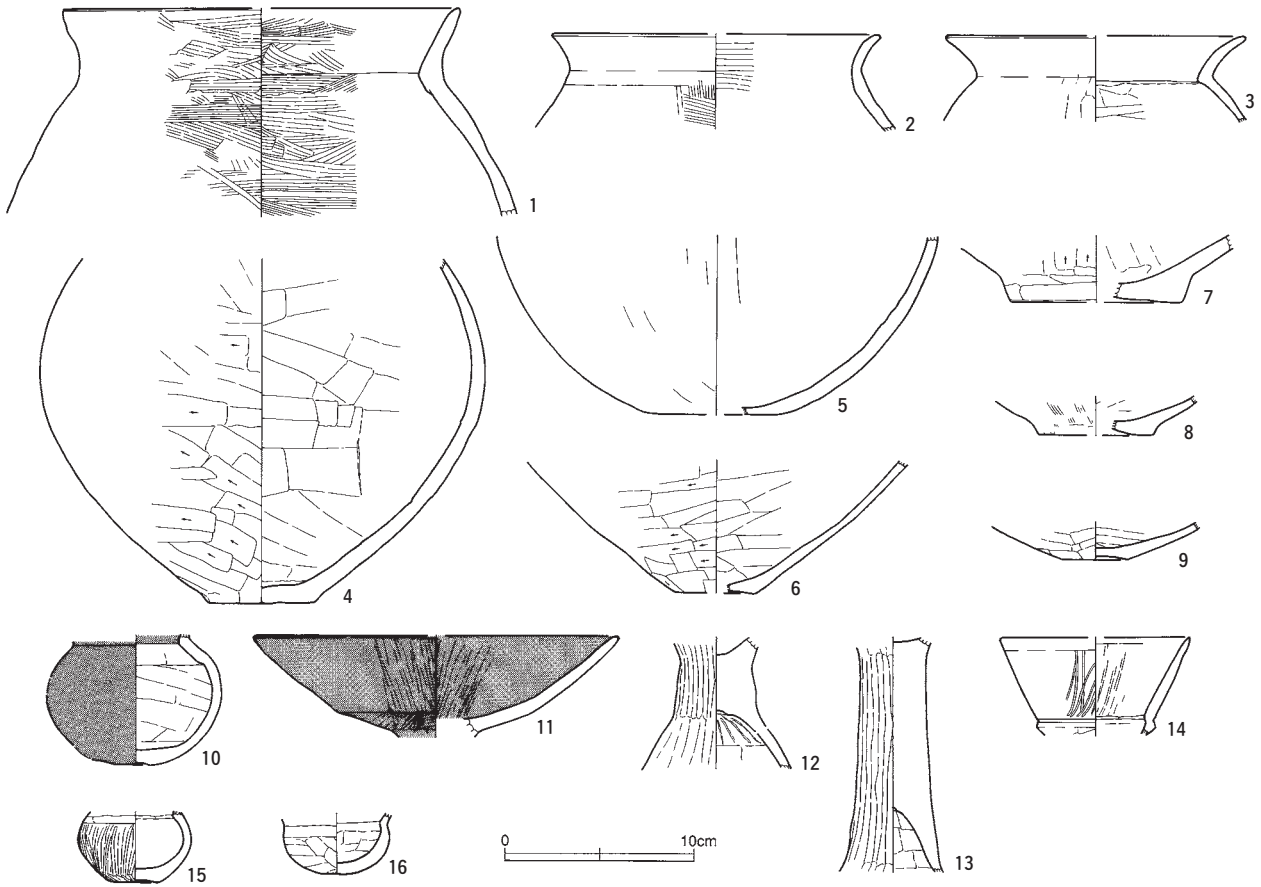
第40B号住居跡炉址堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を少量、焼土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を少量含む 締まりやや有り)

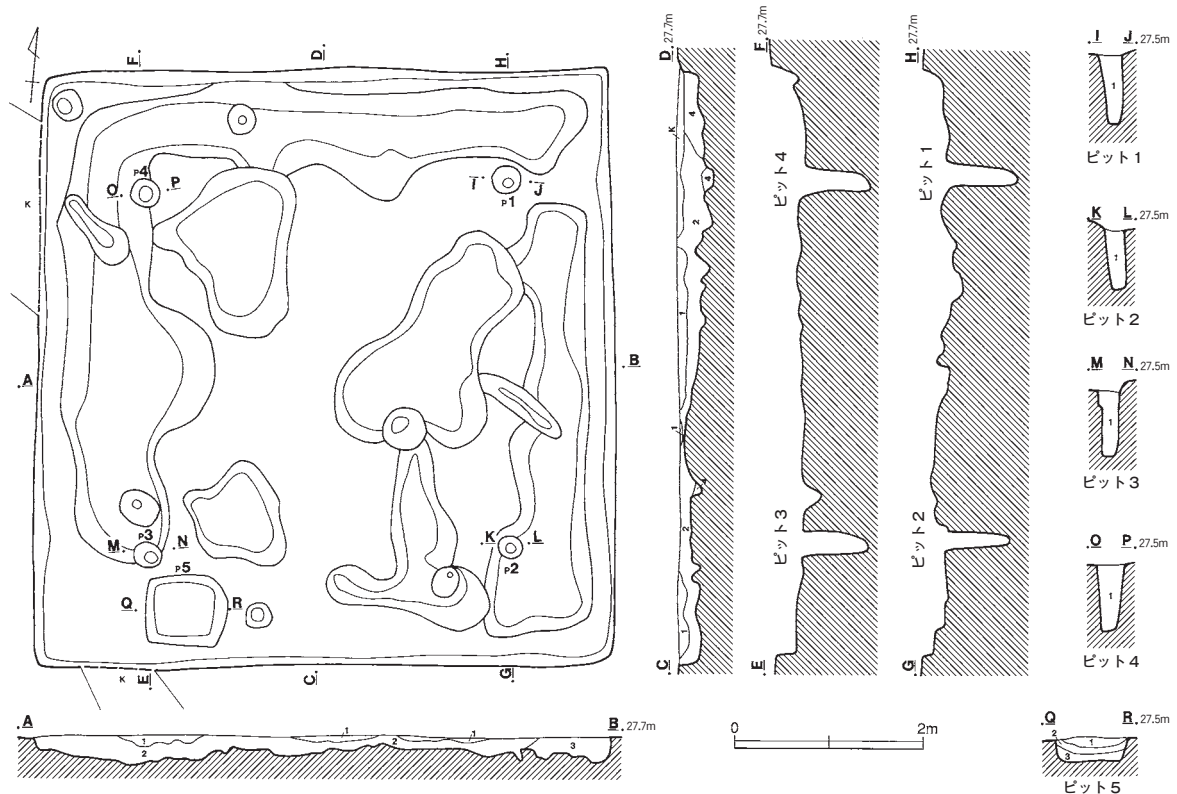
第35図 第40B号住居跡



第36図 第40B号住居跡遺物出土状況



第37図 第40B号住居跡出土遺物(濃網：赤彩)



第46号住居跡堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まり有り)
- 第3層：暗褐色土層(ロームブロック・ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第4層：黒褐色土層(ロームブロックを多量, ローム粒を少量含む 締まり有り)

第46号住居跡ピット1～4堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まり無し)

第46号住居跡ピット5堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まり有り)



第38図 第46号住居跡

1・2の甕形土器には、刷毛調整がみられる。10の壺形土器と11の高杯形土器は、赤彩されている。高坏形土器は、脚部が柱状で柱実のものがある。小型丸底壺形土器は、凹み底(15)とやや平底(16)のものがある。

第46号住居跡

遺構

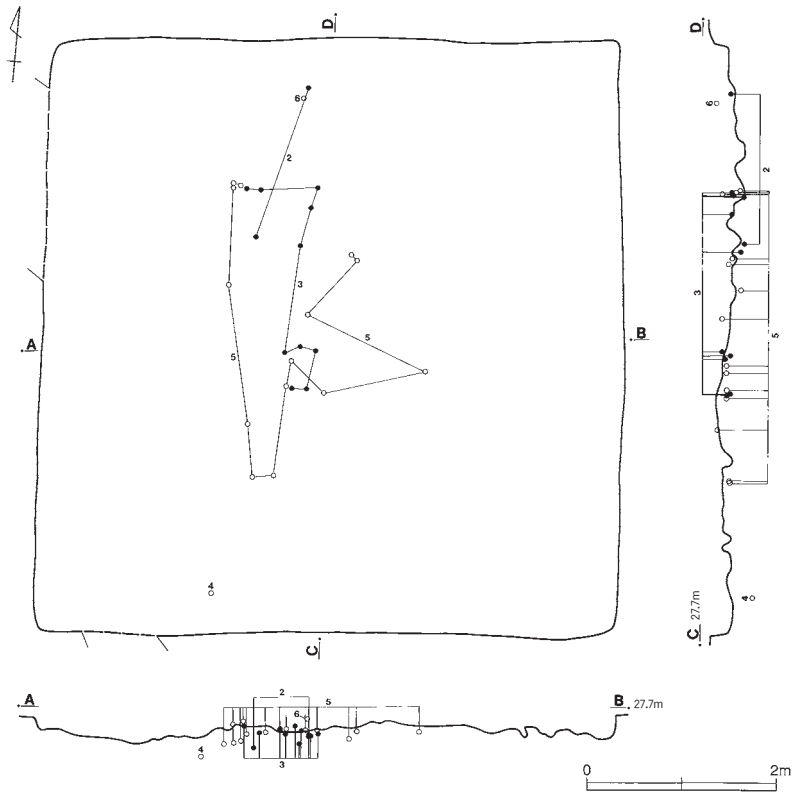
D・E-11区に位置する。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は6.30×6.15m。壁高は東壁26cm、

西壁11cm、南壁20cm、北壁22cm。主軸方向はN-4°-Wを指す。床面は張られておらず、掘形のような状態であった。

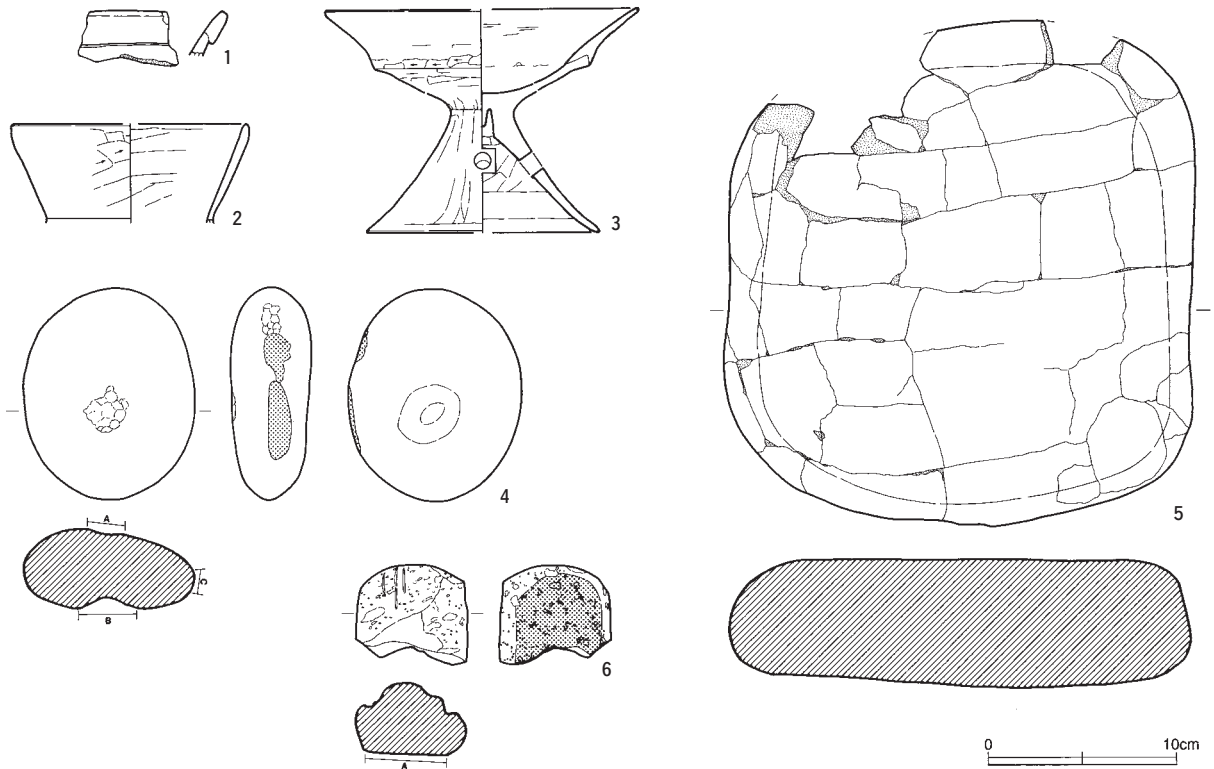
竪穴部覆土は、暗褐色土層が堆積する。

炉址は確認できない。

ピットは5基検出された。ピット1～4は主柱穴、ピット5は貯蔵穴と思われる。床面からの深さは、ピット1が76cm、ピット2が66cm、ピット3が70cm、ピット4が



第39図 第46号住居跡遺物出土状況図



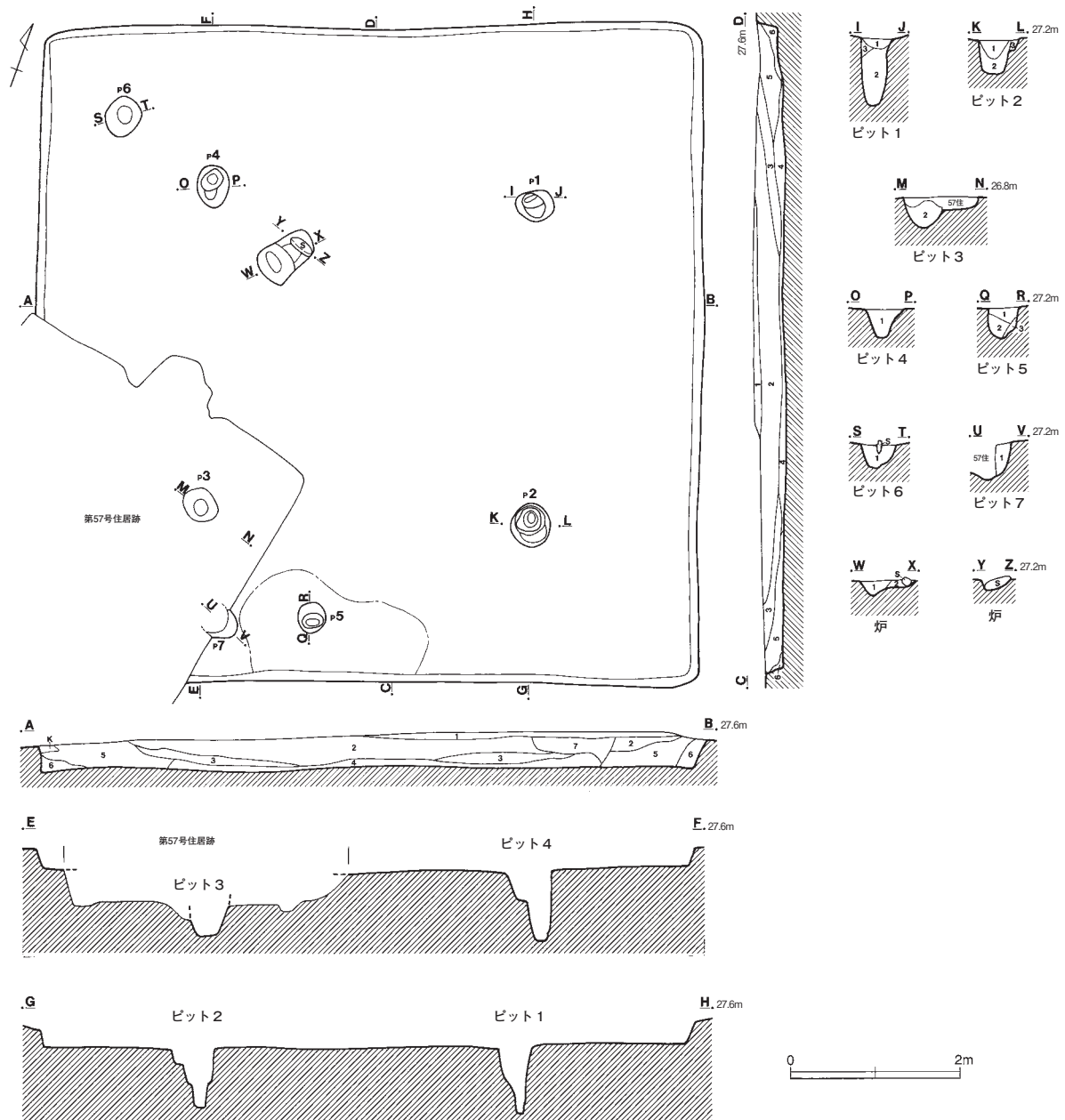
第40図 第46号住居跡出土遺物(淡網：砥面)

70cm, ピット5が20cmである。

当遺構は、平面形が方形で、支柱穴も確認できるため住居と判断したが、床面が張られていない特異な遺構である。同じような例が第62号住居跡で見られる。

遺物の出土状況 遺物は少ない。遺物の垂直分布をみると、第2層やピット5の覆土中に位置する。

遺物 遺物に完形品はなく、全てが破損品である。第40図3の高坏形土器は、脚部がハの字に開く器形で、



第52号住居跡堆積覆土

- 第1層：表土
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第3層：黒褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第4層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第5層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第6層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第7層：暗褐色土層(締まり無し)

第52号住居跡ピット1～6堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)

- 第2層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第3層：明褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)

第52号住居跡ピット7堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(径約1cmロームブロック・ローム粒を少量含む 締まりやや有り)

第52号住居跡炉址堆積覆土

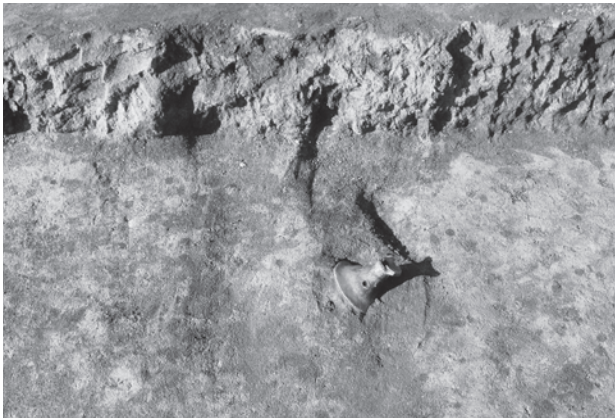
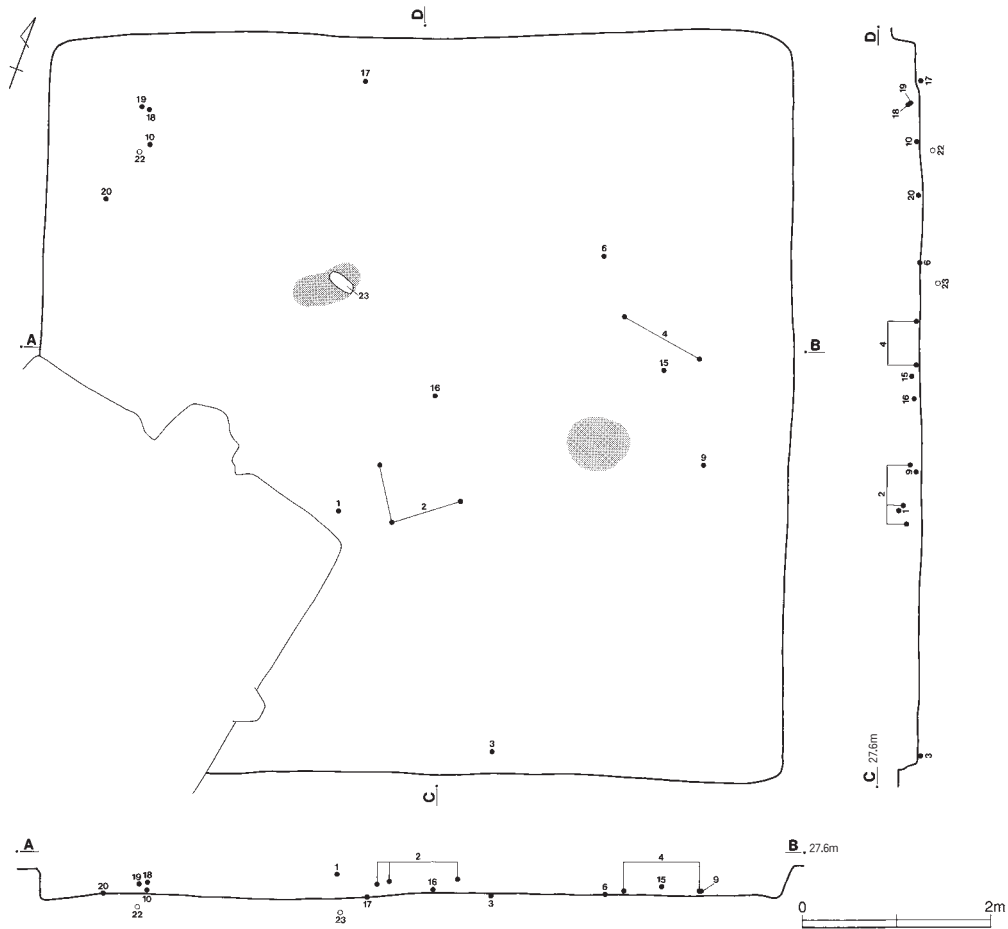
- 第1層：暗褐色土層(炭化物粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(第1層より暗い 炭化物粒を微量に含む 締まりやや有り)

第41図 第52号住居跡

孔が3ヶ所ある。杯部と脚部の接合は、杯部が脚部にソケット状に接合する。4は3面に敲打による凹みがあり、側面には擦り痕もみられる。5は全体が被熱し、破片化している。

第52号住居跡

遺構 F・G-12区に位置する。南西隅を第57号住居跡に掘り込まれている。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は7.98×7.73m。壁高は東壁35cm、西壁33cm、南壁21cm、北壁25cm。主軸方向はN-20°-Wを指す。



第42図 第52号住居跡遺物出土状況(濃網：焼土)

壁周溝は確認できない。床面は、出入口と思われるピット5周辺に硬化面がみられる。

竪穴部覆土は、凹レンズ状に下層に褐色土、上層に暗褐色土が堆積する。

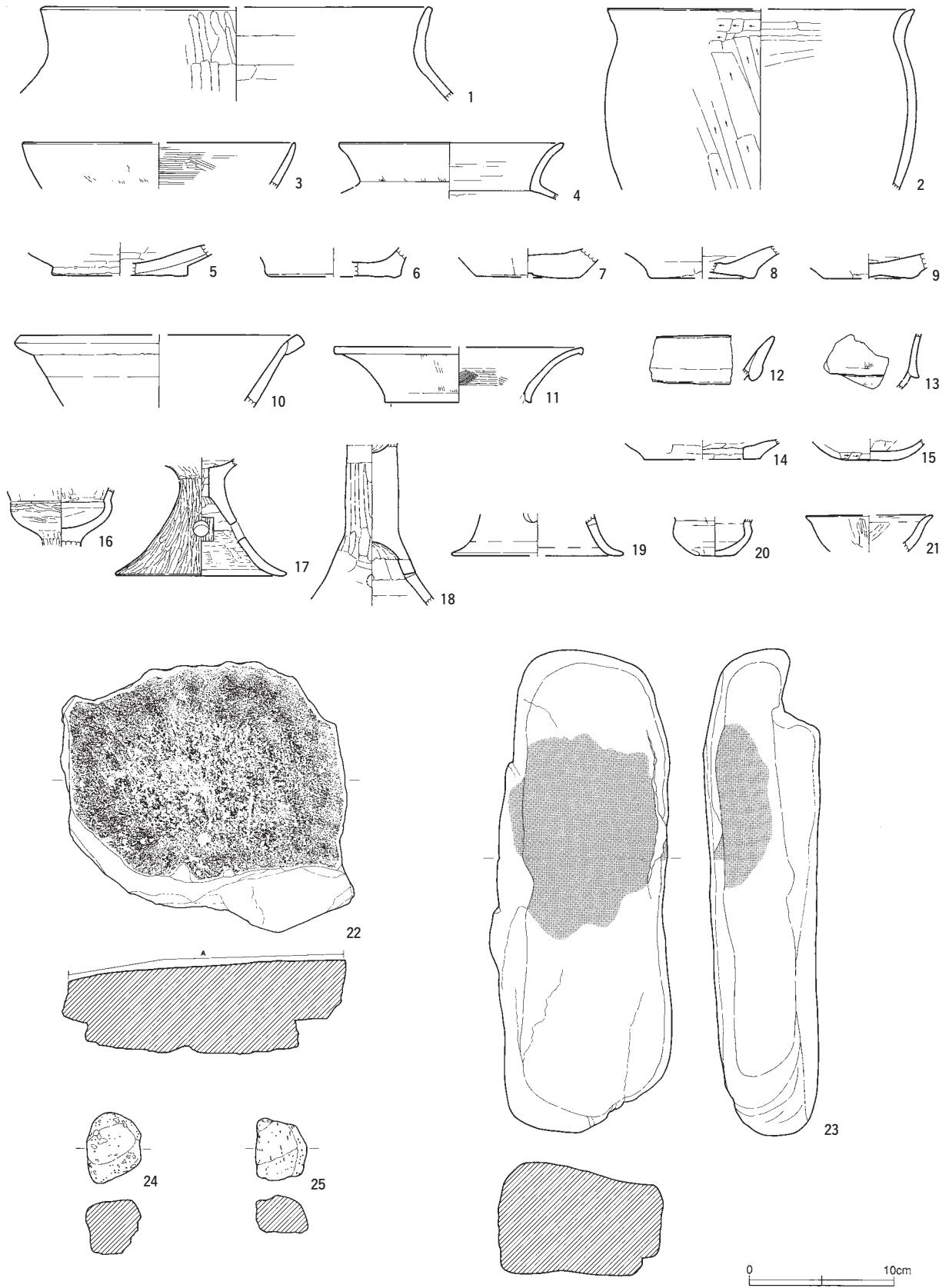
炉址はピット1と4を結んだ線よりやや南側で、ピット4に寄った場所に位置する。床面を10～20cm程掘り込んでいる。地山はほとんど被熱しておらず、覆土に少量の炭化物粒がみられるのみである。炉床の北側に炉石が置かれていた。炉石は一部被熱している。石材は砂岩

である。

ピットは7基検出された。ピット1～4は主柱穴、ピット5は出入口施設に伴うものと思われる。床面からの深さは、ピット1が81cm、ピット2が68cm、ピット3が推定75cm、ピット4が82cm、ピット5が35cm、ピット6が26cm、ピット7が44cmである。

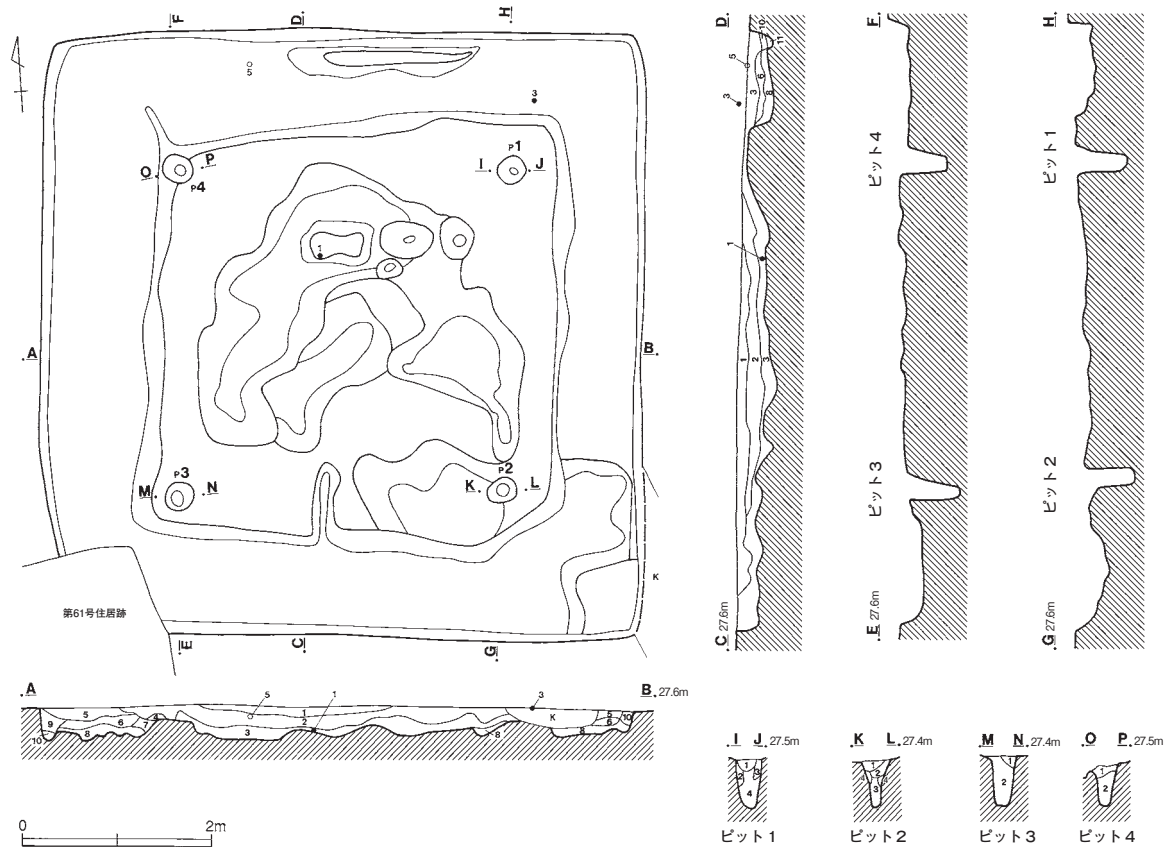
住居掘形は浅く、明確ではない。

遺物の出土状況 遺物は少ない。遺物の垂直分布をみると、床面直上から覆土下層に位置するものが多い。



第43図 第52号住居跡出土遺物(濃網：被熱痕)

V 古墳時代の遺構と遺物



第62号住居跡堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まり有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を少量、焼土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第3層：褐色土層(ロームブロック・ローム粒を多量に含む 締まり有り)
- 第4層：明褐色土層(ロームブロックを多量に含む 締まりやや有り)
- 第5層：暗褐色土層(ロームブロックを少量含む 締まりやや有り)
- 第6層：黒褐色土層(ロームブロック・黒色土を少量含む 締まりやや有り)
- 第7層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第8層：褐色土層(ロームブロック・ローム粒を多量、黒色土を少量含む 締まりやや有り)
- 第9層：黒褐色土層(ロームブロック・黒色土を少量含む 締まり有り)
- 第10層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第11層：褐色土層(ロームブロックを多量に含む 締まりやや有り)

第62号住居跡ピット1堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第2層：明褐色土層(ローム土を主体とする 締まり有り)
- 第3層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まり有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)

第62号住居跡ピット2堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まり無し)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第4層：明褐色土層(ローム土を主体とする 締まり有り)

第62号住居跡ピット3堆積覆土

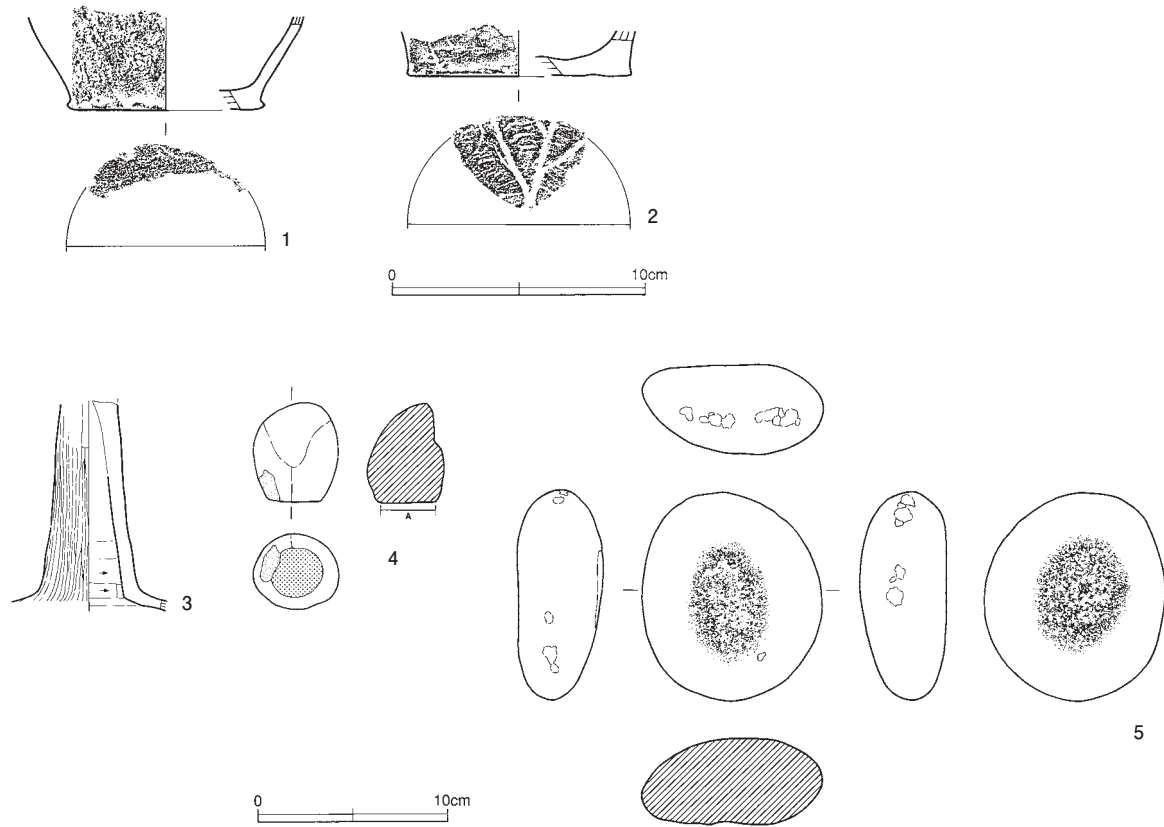
- 第1層：黒褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第2層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まり有り)

第62号住居跡ピット4堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まり無し)



第44図 第62号住居跡・遺物出土状況



第45図 第62号住居跡出土遺物(淡網：擦痕)

第43図3・17・20は床面直上で出土した。22の石は、ピット6の覆土に刺さったような状態で出土した。

遺物 遺物に完形品はなく、全てが破損品である。11～13は複合口縁の壺形土器片で、14の底部は焼成前穿孔である。18と19は同一個体と思われる。

第62号住居跡

遺構 E・F-13・14区に位置する。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は6.37×6.37m。壁高は東壁21cm、西壁35cm、南壁26cm、北壁24cm。主軸方向はN-4°-Eを指す。床面は張られておらず、掘形のような状態であった。

竪穴部覆土は、下層に褐色土、中層に暗褐色土、上層に黒褐色土が堆積する。

炉址は確認できない。

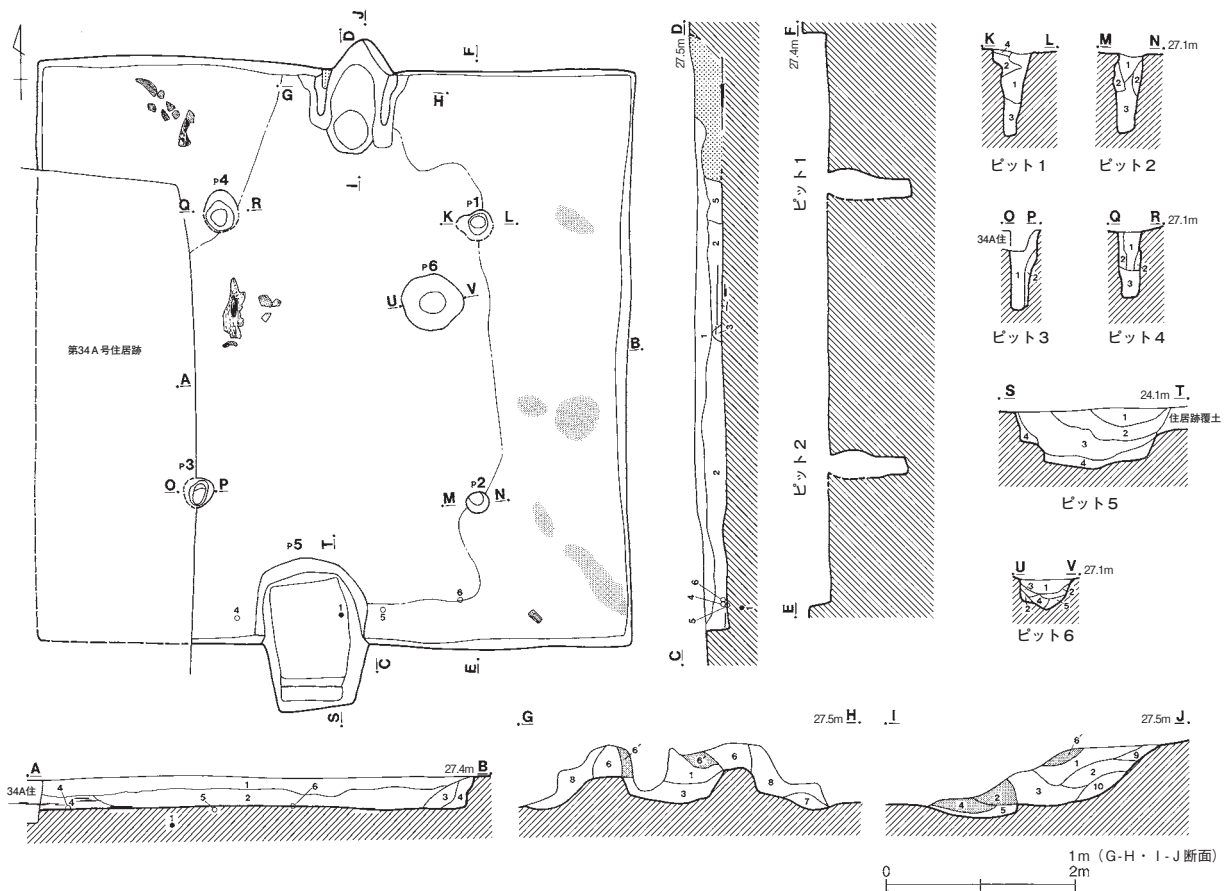
ピットは4基検出された。ピット1～4は主柱穴と思われる。ピットの底面で硬化はみられない。床面からの深さは、ピット1が55cm、ピット2が50cm、ピット3が56cm、ピット4が49cmである。

当遺構は、第46号住居跡同様に、平面形が方形で、主柱穴も確認できるため住居と判断したが、床面が張られていない特異な遺構である。

遺物の出土状況 遺物は少ない。遺物の垂直分布をみると、第2層中に位置する。

遺物 遺物は全て破損品で、非常に少ない。第45図1・2と3は時期の違う遺物で、第46号住居跡から推測すると、3の遺物が当遺構に伴うものと考えられる。

3 2005年度古墳時代後期の住居跡の調査



第34B号住居跡堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層（ローム粒を少量含む 締まりやや有り）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒を多量、径約2cmロームブロックを微量に含む 締まりやや有り）
- 第3層：褐色土層（ローム粒を多量に含む 締まりやや有り）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒を少量含む 締まりやや有り）
- 第5層：暗褐色土層（白色粘土ブロック・白色粘土粒を多量、ローム粒を少量含む 締まりやや有り）

第34B号住居跡ピット1～4堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒を少量含む 締まりやや有り）
- 第2層：褐色土層（ピット掘形 ローム粒を多量に含む 締まり有り）
- 第3層：暗褐色土層（柱痕 ローム粒を多量に含む 締まり無し）
- 第4層：褐色土層（住居張床 ロームブロックを多量に含む 締まり有り）

第34B号住居跡ピット5堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒を少量含む 締まりやや有り）
- 第2層：黒褐色土層（ローム粒を少量、径1～3cmロームブロックを微量に含む 締まりやや有り）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒を多量、炭化物粒を少量含む 締まりやや有り）
- 第4層：褐色土層（ローム粒を多量、径1～3cmロームブロックを少量含む 締まりやや有り）

第34B号住居跡ピット6堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒・焼土粒を多量に含む 締まりやや有り）
- 第2層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒を多量に含む 締まり有り）
- 第3層：灰褐色土層（灰色砂粒を多量、ローム粒を少量含む 締まり有り）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒を多量、焼土粒を少量含む 締まり有り）
- 第5層：黒褐色土層（ローム粒を少量、焼土粒を微量に含む 締まり有り）

第34B号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層（ローム粒を少量、焼土粒を微量に含む 締まり有り）
- 第2層：橙褐色土層（ローム粒・焼土粒を多量に含む 締まり有り）
- 第3層：褐色土層（ローム粒を多量、焼土粒を少量含む 締まりやや有り）
- 第4層：橙褐色土層（火床面 焼土粒を多量に含む 締まりやや有り）
- 第5層：褐色土層（被熱によりローム土が赤化した部分がある 締まりやや有り）
- 第6層：暗褐色土層（粘土粒を少量、ローム粒を微量に含む 締まり有り）
- 第6'層：暗褐色土層（第6層が被熱し赤化した土層 締まりやや有り）
- 第7層：褐色土層（ローム粒を多量に含む 締まり有り）
- 第8層：暗褐色土層（ローム粒・焼土粒を少量含む 締まり有り）
- 第9層：暗褐色土層（焼土粒を少量、ローム粒を微量に含む 締まり有り）
- 第10層：暗褐色土層（焼土粒を多量、ローム粒・炭化物粒・灰色砂粒を少量含む 締まり有り）

第46図 第34B号住居跡・遺物出土状況（濃網：焼土・淡網：粘土）

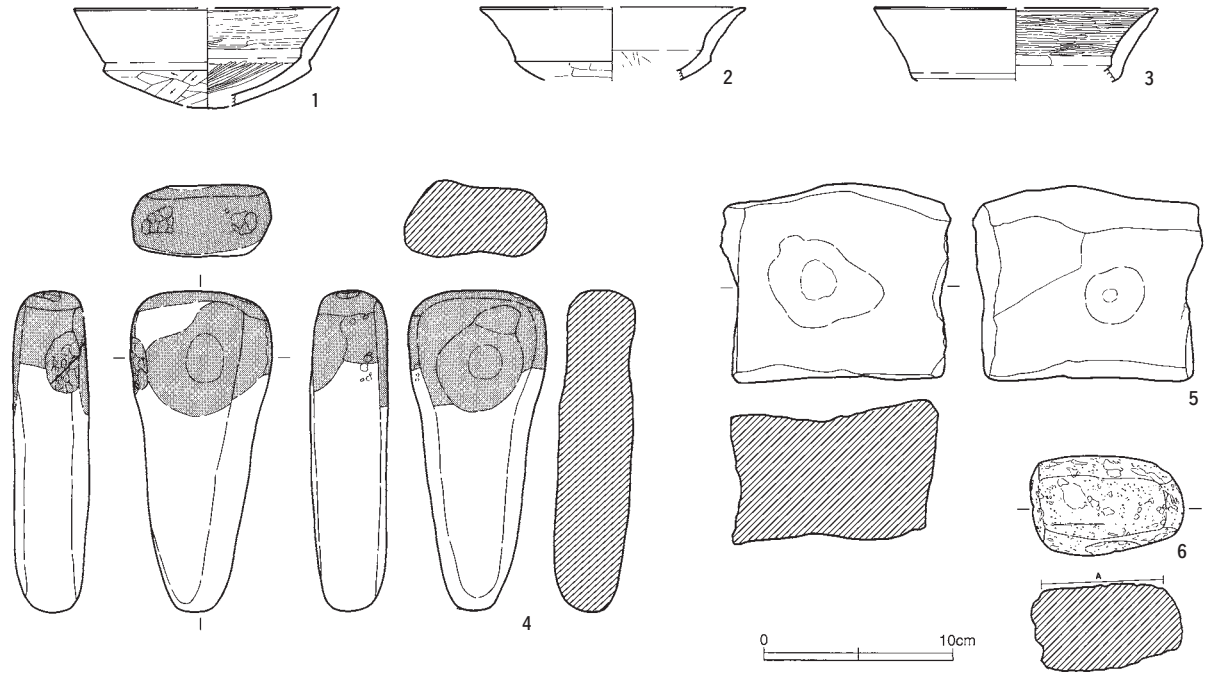
第34B号住居跡

遺構 D-15・16区に位置する。南西側を第34A号住居跡に掘り込まれている。平面形は、方形を呈するが、南壁は外側に約70cm張り出す。竪穴部の規模は、6.30×6.15m。壁高は東壁32cm、南壁26cm、北壁26cm。主軸

方向はN-1°-Eを指す。壁周溝は確認できない。床面は、竈前から南壁にかけて帯状に硬化している。

竪穴部覆土は、下層に暗褐色土、上層に黒褐色土が堆積する。床面の一部には、焼土や炭化物がみられる。

竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存



第47図 第34B号住居跡出土遺物(濃網: 敲打痕)



第34B号住居跡竈

状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部が比較的よく残っている。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して袖部としている。

ピットは6基検出された。ピット1～4は主柱穴、ピット5は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が87cm、ピット2が80cm、ピット3が84cm、ピット4が70cm、ピット5が62cm、ピット6が33cmである。

住居掘形は浅く、明確ではない。

遺物の出土状況 図化出来た遺物はピット5付近からのもので、数は少ない。

遺物 第47図1の杯形土器は、体部内面に放射状のヘラミガキがみられる。4には、敲打痕が4面にみられる。

第36号住居跡

遺構 F・G-15・16区に位置する。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は、6.64×6.30m。壁高は東壁40cm、西壁34cm、南壁28cm、北壁52cm。主軸方向は真北を指す。壁周溝は確認できない。床面は、竈前から南壁にかけて帯状に硬化している。ピット5の周囲には、床面から約5cmの土手状の高まりがある。

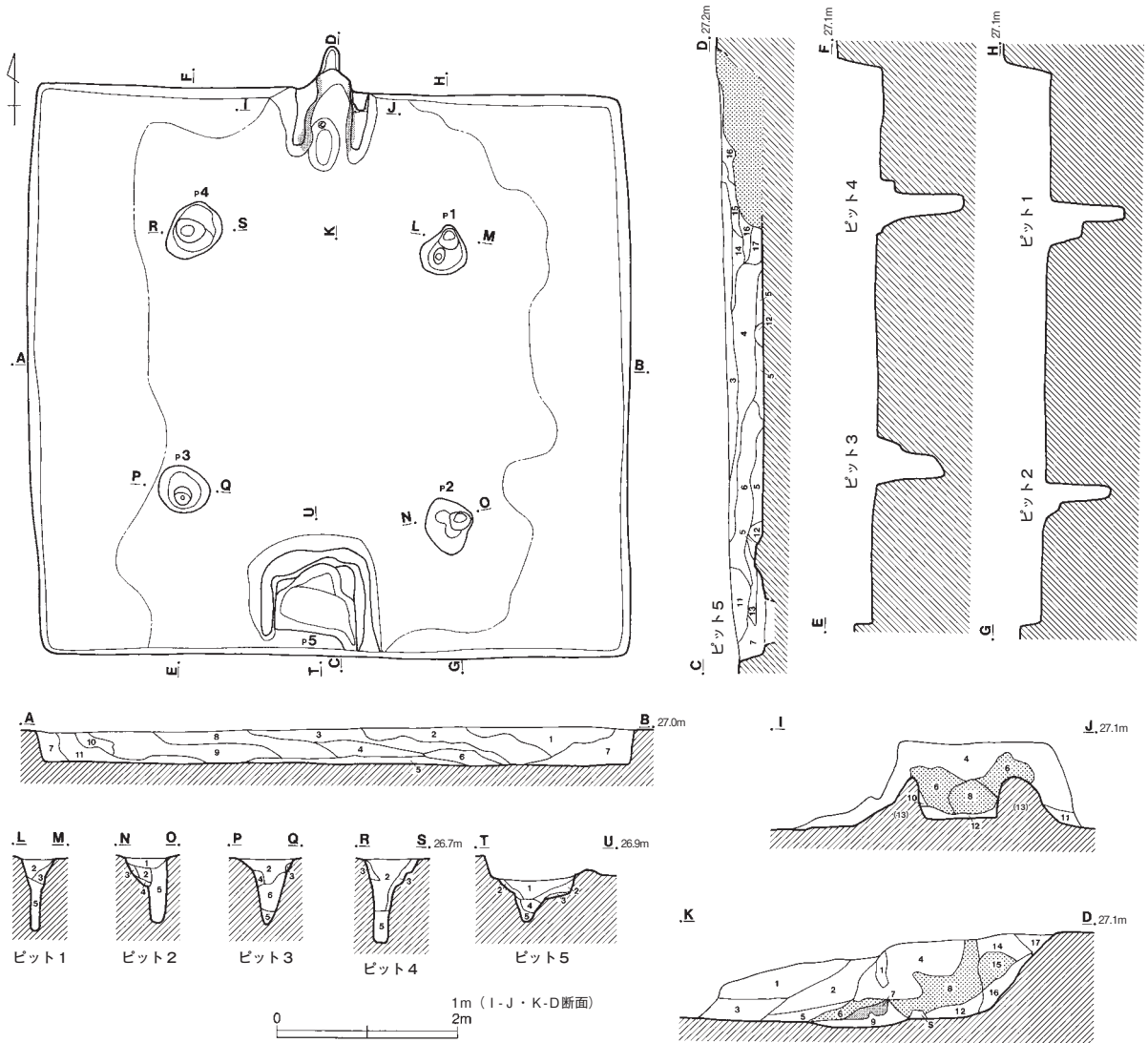
竪穴部覆土は、黒褐色土と暗褐色土、褐色土がマダラ状に堆積する。ロームブロックを含む明褐色土の第6層や第10層は人為的埋土の可能性がみられた。

竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部が比較的よく残っている。また、土製の支脚も使用時の状態で検出した。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残し、その上に灰白色粘土を貼って袖部としている。袖部の燃焼部側は被熱し赤化している。第6層と第8層の粘土は天井部のものと思われる。

ピットは5基検出された。ピット1～4は主柱穴、ピット5は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が82cm、ピット2が70cm、ピット3が75cm、ピット4が95cm、ピット5が47cmである。

住居掘形は浅く、明確ではない。

遺物の出土状況 図化出来た遺物は少ない。第50図



第36号住居跡堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒を少量，径約1cmロームブロックを微量に含む 縮まりやや有り）
- 第2層：褐色土層（ローム粒を多量，径1～3cmロームブロックを少量含む 黒色土がシミ状にみられる 縮まりやや有り）
- 第3層：暗褐色土層（第1層に似た土層 ローム粒を少量，径約1cmロームブロックを微量に含む 縮まりやや有り）
- 第4層：黒褐色土層（ローム粒を少量含む 黒色土がシミ状に見られる 縮まりやや有り）
- 第5層：褐色土層（ローム粒・炭化物粒を少量，径約1cmロームブロックを微量に含む 縮まり強く有り）
- 第6層：明褐色土層（人為の埋土か ローム粒を多量，径1～5cmロームブロックを少量含む 縮まり有り）
- 第7層：明褐色土層（ローム粒を多量，炭化物粒を微量に含む 黒色土がシミ状にみられる 縮まりやや有り）
- 第8層：褐色土層（ローム粒を多量，径約1cmロームブロックを微量に含む 縮まり有り）
- 第9層：暗褐色土層（ローム粒を多量，径1～2cmロームブロックを少量，炭化物粒を微量に含む 黒色土がシミ状に見られる 縮まり有り）
- 第10層：明褐色土層（人為の埋土か ローム粒を多量，径1～2cmロームブロックを少量含む 縮まり有り）
- 第11層：暗褐色土層（ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り）
- 第12層：ロームブロック（縮まり有り）
- 第13層：黒褐色土層（ローム粒を少量，径約1cmロームブロック・黒色粒

を微量に含む 縮まりやや有り）

- 第14層：暗褐色土層（ローム粒を多量，径約1cmロームブロックを少量，白色粘土粒を微量に含む 黒色土がシミ状に見られる 縮まり有り）
- 第15層：黒褐色土層（ローム粒を微量に含む 縮まり有り）
- 第16層：暗褐色土層（ローム粒・白色粘土粒を少量含む 縮まり有り）
- 第17層：暗褐色土層（ローム粒を少量，白色粘土粒を微量に含む 縮まり有り）

第36号住居跡ピット1～4堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒を多量に含む 縮まり有り）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒を多量，径約1cmロームブロックを少量含む 縮まりやや有り）
- 第3層：褐色土層（ローム土を主体とする 縮まりやや有り）
- 第4層：褐色土層（ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り）
- 第5層：褐色土層（ローム粒を多量に含む 縮まり無し）
- 第6層：暗褐色土層（ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り）

第36号住居跡ピット5堆積覆土

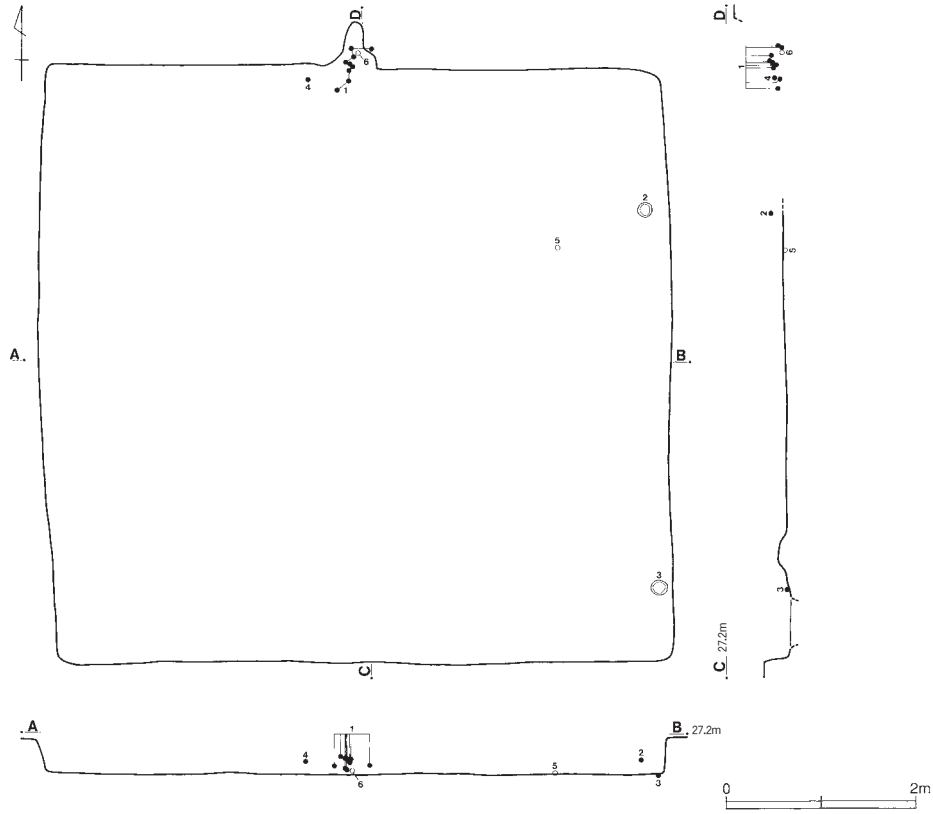
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒を少量，径約1cmロームブロックを微量に含む 縮まりやや有り）
- 第2層：褐色土層（ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り）
- 第3層：褐色土層（ローム粒を多量に含む 縮まり強く有り）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒を多量，径1～5cmロームブロックを少量含む 縮まり有り）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒を多量に含む 縮まり無し）

第48図 第36号住居跡（濃網：焼土・淡網：粘土）

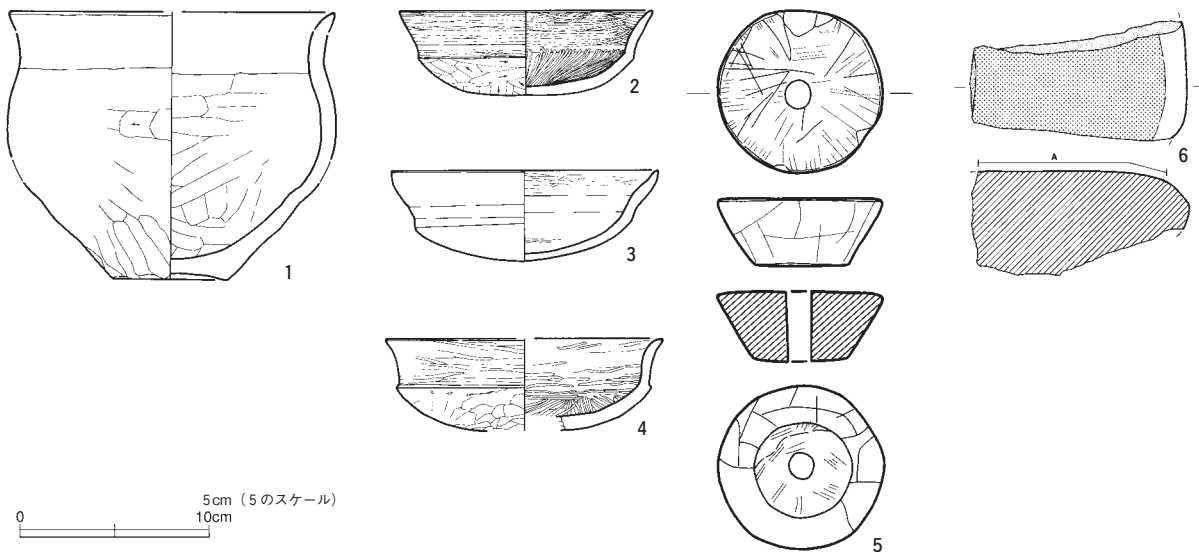
第36号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を多量、灰白色粘土粒を微量に含む 締まり有り)
- 第2層：褐色土層(ローム粒を多量、灰白色粘土粒を少量含む 締まり有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を少量、径約1cmロームブロック・灰白色粘土粒を微量に含む 締まり有り)
- 第4層：褐色土層(ローム粒・灰白色粘土粒を少量含む 締まり有り)
- 第5層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まり有り)
- 第6層：灰白色粘土層(袖・天井部 灰白色粘土を主体とする ローム粒を多量、焼土粒を少量含む 締まり有り)
- 第7層：橙色土層(天井部内側 焼土を主体とする 締まり有り)
- 第8層：灰白色粘土層(天井部 灰白色粘土を主体とする 焼土粒を少量含む 締まり有り)

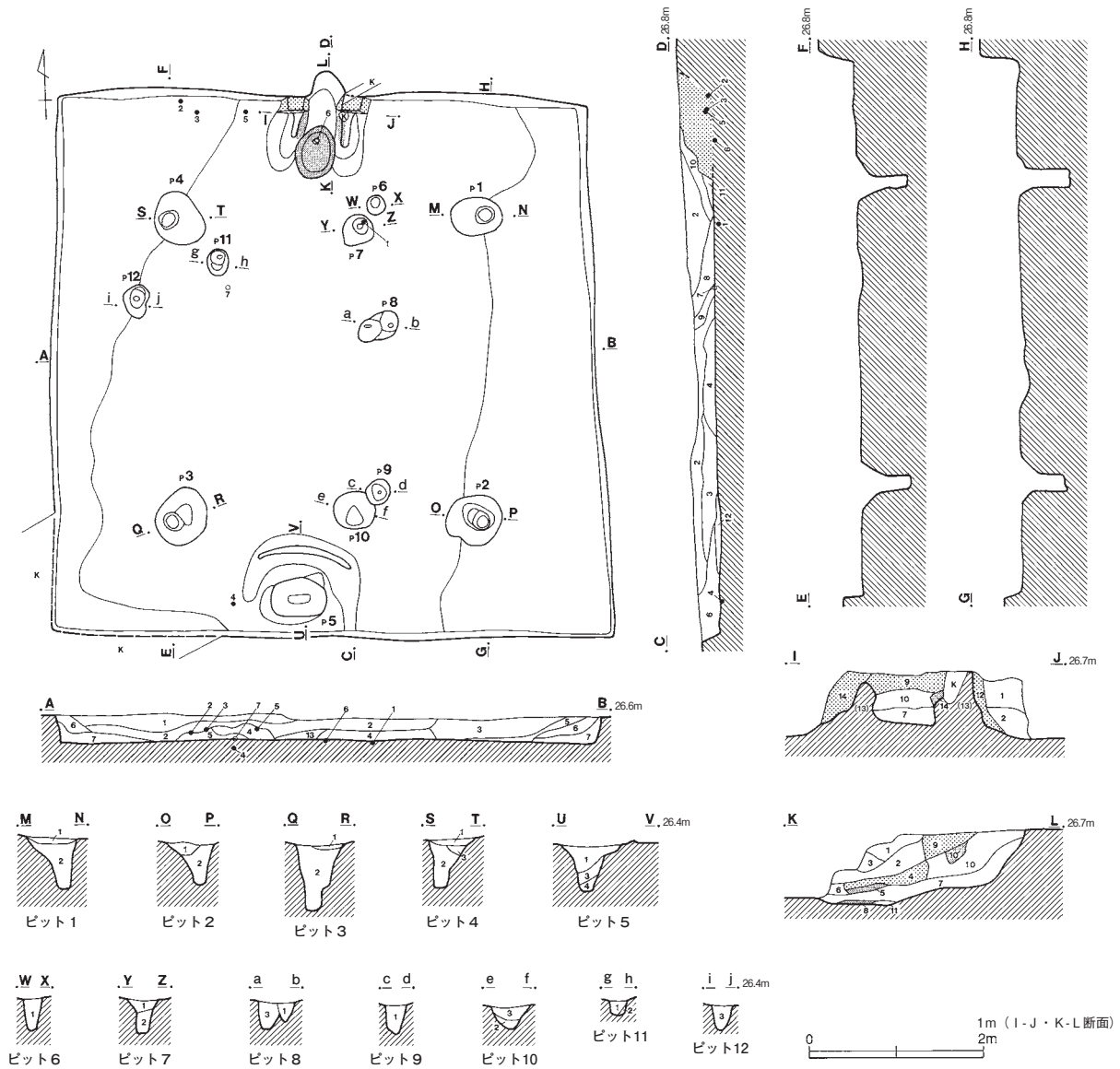
- 第9層：暗褐色土層(ローム粒を多量、焼土粒を少量含む 締まり有り)
- 第10層：灰白色粘土と橙色土の混合層(締まりやや有り)
- 第11層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第12層：褐色土層(灰白色粘土粒・焼土粒を多量、ローム粒を少量含む 締まり有り)
- 第13層：褐色ローム土層(地山のローム土を袖として利用している 締まり有り)
- 第14層：灰褐色土層(灰白色粘土粒を多量、ローム粒・焼土粒を少量含む 締まり有り)
- 第15層：灰白色粘土層(天井部 灰白色粘土を主体とする 締まり有り)
- 第16層：暗褐色土層(灰白色粘土粒を多量、ローム粒・焼土粒を少量含む 締まり有り)
- 第17層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まり有り)



第49図 第36号住居跡遺物出土状況



第50図 第36号住居跡出土遺物(淡網：砥面)



第37号住居跡堆積覆土

- 第1層：褐色土層(ローム粒を多量, 径約1cmロームブロックを少量含む 縮まりやや有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒を多量, 径約1cmロームブロック・炭化物粒・焼土粒を微量に含む 縮まりやや有り)
- 第3層：褐色土層(径約1cmロームブロック・ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り)
- 第4層：褐色土層(ローム粒を多量, 径1~3cmロームブロックを少量含む 縮まり強く有り)
- 第5層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 縮まりやや有り)
- 第6層：黒褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り)
- 第7層：暗褐色土層(ローム粒を少量, 炭化物粒を微量に含む 縮まりやや有り)
- 第8層：黒褐色土層(ローム粒を少量, 径約1cmロームブロックを微量に含む 縮まり有り)
- 第9層：褐色土層(径1~2cmロームブロック・ローム粒を少量含む 縮まりやや有り)
- 第10層：暗褐色土層(ローム粒・灰色粘土粒を少量, 径約1cmロームブロックを微量に含む 縮まりやや有り)
- 第11層：黒褐色土層(ローム粒を少量, 灰色粘土粒を微量に含む 縮まりやや有り)
- 第12層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 縮まり強く有り)
- 第13層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 縮まりやや有り)

第37号住居跡ピット1~5堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り)
- 第2層：明褐色土層(径約1cmロームブロック・ローム粒を多量に含む 縮まり無し)
- 第3層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 縮まりやや有り)

第37号住居跡ピット6~12堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒を少量含む 縮まりやや有り)
- 第2層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を少量, 径約1cmロームブロックを微量に含む 縮まりやや有り)

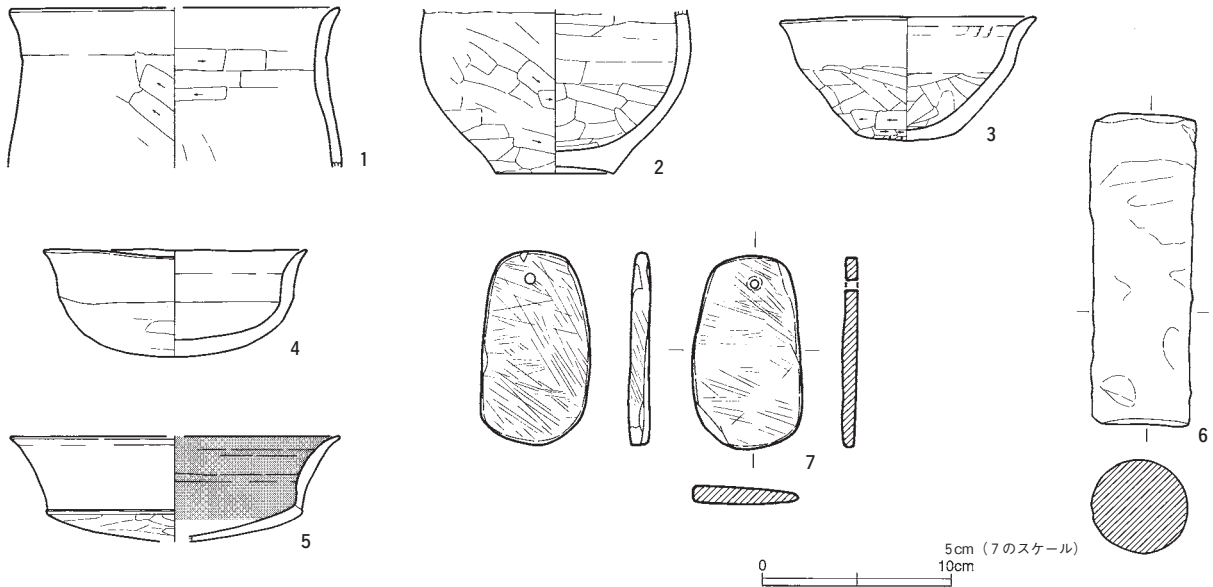
第37号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を多量, 焼土粒を微量に含む 縮まり有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を少量, 焼土粒を微量に含む 縮まり有り)
- 第3層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まり有り)
- 第4層：灰色粘土と暗褐色土の混合層(天井部か 焼土粒を少量含む 縮まり有り)
- 第5層：橙褐色土層(天井部内側 焼土粒を多量, ローム粒を少量含む 縮まり有り)
- 第6層：焼土ブロック(縮まり有り)
- 第7層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を微量に含む 縮まり有り)
- 第8層：橙色土層(火床面 焼土を主体とする 縮まり有り)
- 第9層：灰白色粘土層(天井部 灰白色粘土を主体とする ローム粒・焼土粒を少量含む 縮まり有り)

第51図 第37号住居跡・遺物出土状況(濃網：焼土・淡網：粘土)

第10層：灰褐色土層(ローム粒・焼土粒を多量、灰白色粘土粒を少量含む 締まり有り)
 第10'層：灰褐色土層(第10層に焼土ブロックを多く含む土層 締まり有り)
 第11層：褐色土層(被熱によりローム土が赤化した部分がある 締まり有り)

第12層：灰白色粘土層(袖部 灰白色粘土を主体とする 締まり有り)
 第13層：褐色ローム土層(地山のローム土を袖として利用している 締まり有り)
 第14層：橙色土層(被熱により袖部の粘土が赤化した部分 締まり有り)



第52図 第37号住居跡出土遺物(濃網：赤彩)



第37号住居跡



第37号住居跡竈

1の鉢形土器は、竈内で出土した土器片が接合した。2・3の杯形土器は逆位の状態で、2は覆土中層、3は床面直上から出土した。5の石製の紡錘車は、床面直上で倒位の状態で出土していることから、廃棄時には有機物の芯を装着していた可能性が考えられる。

遺物 2の杯形土器は、体部内面に放射状のヘラミガキがみられる。5の紡錘車は滑石製である。

第37号住居跡

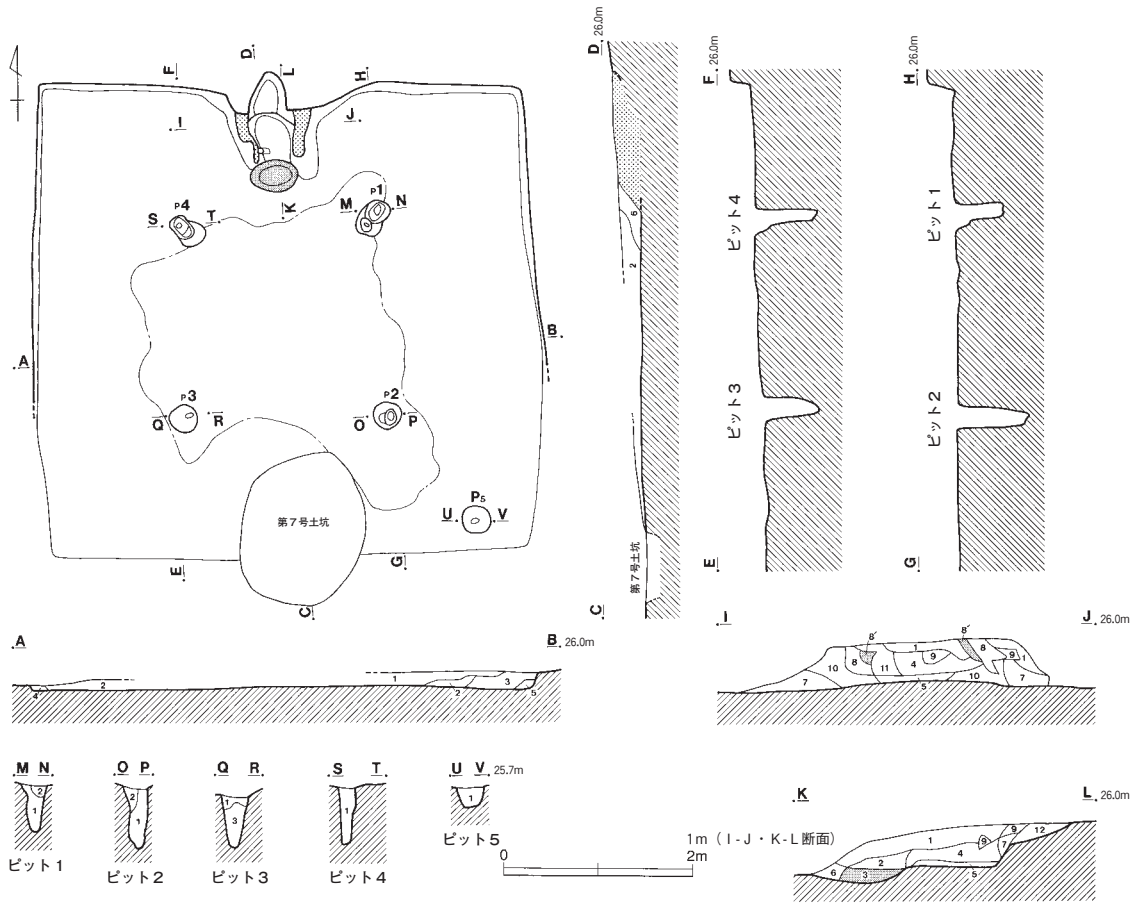
遺構 G・H-16・17区に位置する。南西隅は、攪乱をうけている。平面形は、方形を呈する。竈穴部の規模は、6.43×6.22m。壁高は東壁27cm、西壁32cm、南

壁22cm、北壁46cm。主軸方向はN-2°-Eを指す。壁周溝は確認できない。床面は、竈前から南壁にかけて硬化している。ピット5の周囲には、床面から約2cmの土手状の高まりがある。

竈穴部覆土は、黒褐色土と暗褐色土、褐色土がマダラ状に堆積する。ロームブロックを含む褐色土の第1層や第3層は人為的埋土の可能性がみられた。

竈は、竈穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部が比較的よく残っている。また、土製の支脚も使用時の状態で検出した。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竈穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム

V 古墳時代の遺構と遺物



第39号住居跡堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒を少量含む 締まり有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒・炭化物粒を微量に含む 締まり有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を少量、径約2cmロームブロック・炭化物粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第4層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第5層：明褐色土層(ローム土を主体とする 締まりやや有り)
- 第6層：暗褐色土層(白色粘土粒を多量、ローム粒を微量に含む 締まり有り)

第39号住居跡ピット1～4 堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒を多量、径1～2cmロームブロックを少量含む 締まり無し)
- 第2層：褐色土層(ローム土を主体とする 締まり無し)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まり無し)

第39号住居跡ピット5 堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まり有り)

第39号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：黒色土層(ローム粒・焼土粒を微量に含む 締まり有り)

- 第2層：橙褐色土層(焼土粒を多量、白色粘土粒を少量含む 締まり有り)
- 第3層：橙色土層(火床面 焼土を主体とする 締まり有り)
- 第4層：暗褐色土層(炭化物粒・焼土粒・径1～3cm礫を少量、ローム粒を微量に含む 締まり有り)
- 第5層：暗褐色土層(ローム粒を多量、焼土粒を少量含む 締まり有り)
- 第6層：褐色土層(ローム粒を多量、焼土粒・白色粘土粒を少量含む 締まり有り)
- 第7層：褐色土層(ローム粒・焼土粒を多量に含む 締まり有り)
- 第8層：黄白色粘土層(砂質黄白色粘土を主体とする 締まり有り)
- 第8'層：黄白色粘土層(第8層が被熱し橙色化した土層)
- 第9層：ロームブロック(締まり有り)
- 第10層：黒色土層(白色粘土粒を少量、ローム粒・焼土粒を微量に含む 締まり有り)
- 第11層：暗褐色土層(焼土粒を少量、白色粘土粒を微量に含む 締まり有り)
- 第12層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まり有り)

第53図 第39号住居跡(濃網：焼土・淡網：粘土)

土を掘り残し、その上に灰白色粘土を貼って袖部として
いる。袖部の燃焼部側は被熱し赤化している。火床面は
竈断面の第8層部分で、焼土が約2cmの厚さで堆積して
いる。火床面下の地山のローム土も被熱している。第9
層の粘土は天井部のものと思われる。

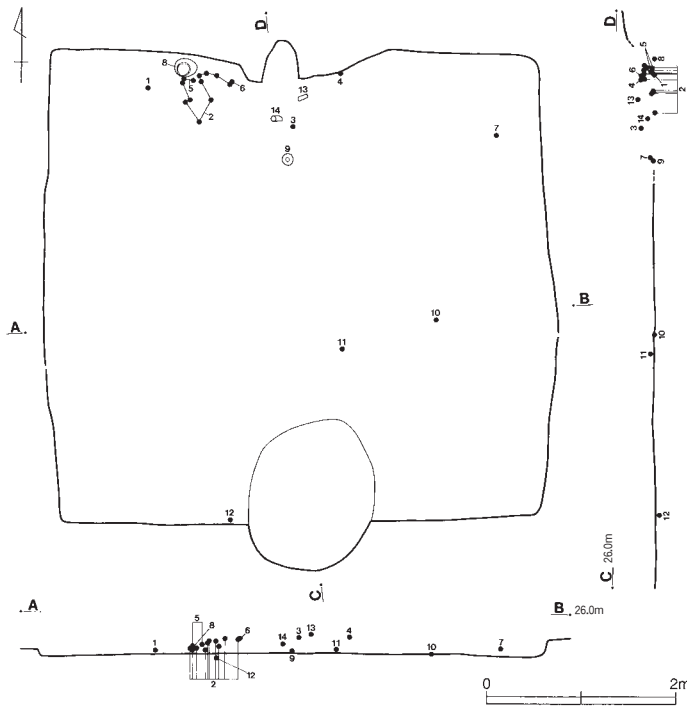
ピットは12基検出された。ピット1～4は主柱穴、ピッ
ト5は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット
1が58cm、ピット2が50cm、ピット3・4が58cm、ピッ

ト5が53cmである。

住居掘形は浅く、明確ではない。

遺物の出土状況 図化できた遺物は、竈周辺とピッ
ト5周辺から出土している。第52図4の杯形土器は逆位
の状態、床面直上から出土した。7の石製模造品も、
床面直上で出土した。

遺物 遺物は内外面とも摩滅しているものが多
い。5の内面は、中心部を残して赤彩されている。7の



第54図 第39号住居跡遺物出土状況

石製模造品は、鎌と思われる。

第39号住居跡

遺構 I-16・17区に位置する。斜面部に位置し、南壁の立ち上がりを確認することが出来ず、床面を精査することにより住居の形を推定した。また、南壁中央部分を第7号土坑に掘り込まれている。竪穴部の規模は5.45×(5.00)m。壁高は東壁9cm、西壁18cm、北壁22cm。主軸方向はN-1°-Wを指す。壁周溝は確認できない。床面は、竪穴部中央が硬化している。

竪穴部覆土は、黒褐色土と暗褐色土が主体である。

竈は、南壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃烧部が比較的よく残っている。また、土製の支脚も原位置を保っているものと思われる。袖部は、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、壁が内側にやや出張る形状に地山のローム土を掘り残し、そこからは黄色粘土を使って延長するように構築している。火床面は竈断面第3層部分で、焼土が約15cmの厚さで堆積している。

ピットは5基検出された。ピット1～4は支柱穴と思われる。床面からの深さは、ピット1が50cm、ピット2が76cm、ピット3が57cm、ピット4が64cm、ピット5が21cmである。

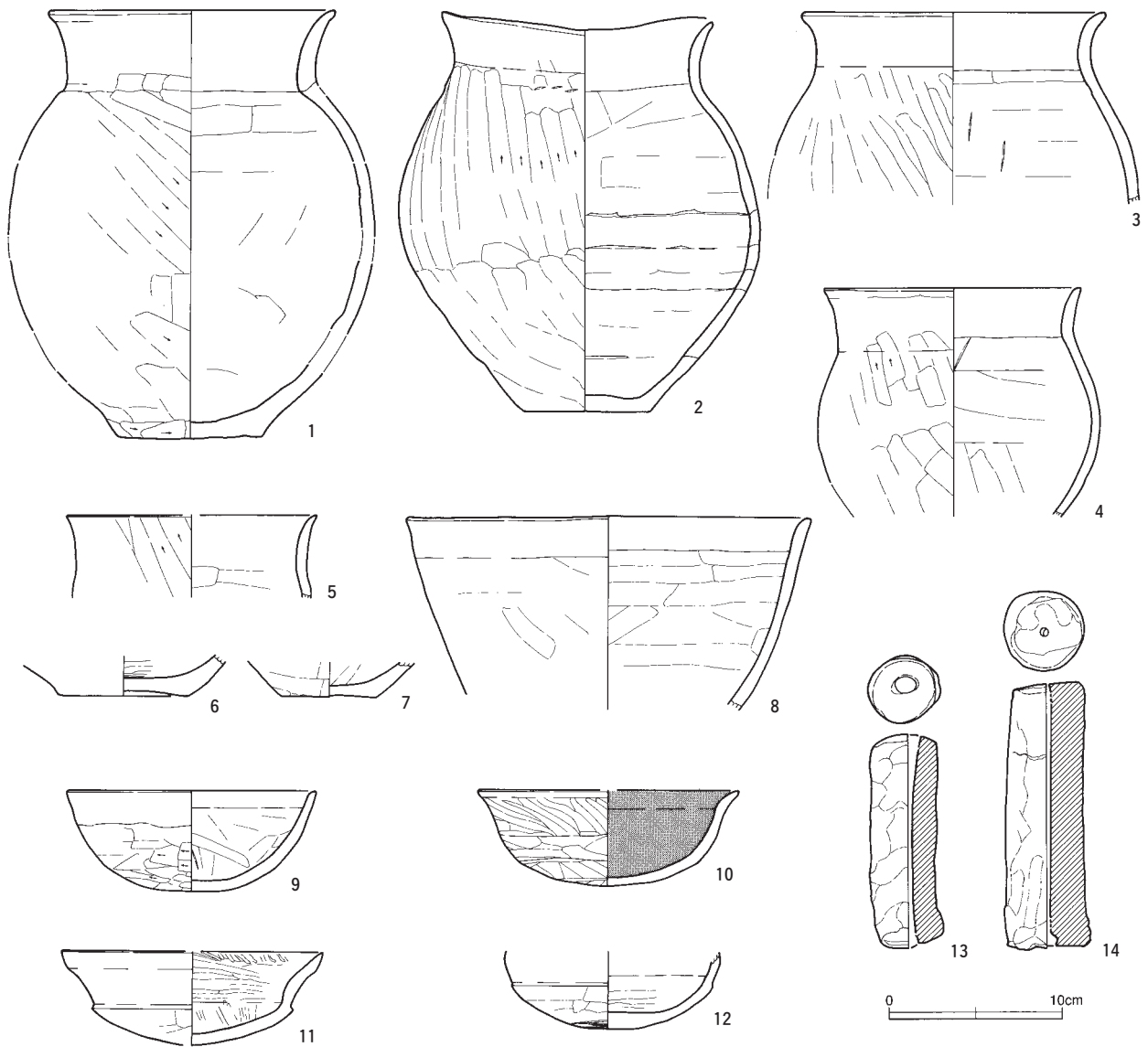
住居掘形は、竈から南壁中央部分が帯状に高く、東西壁側が深く掘られている。

遺物の出土状況 遺物は、竈周辺に多く、そのほとんどが床面直上で出土している。第55図8の鉢形土器は、逆位で、9の杯形土器は正位の状態出土した。

遺物 杯形土器は、椀状のものや、口縁部と体部の間に稜をもち、口縁部が大きく外反する器形がある。10の杯形土器の内面は赤彩されている。13・14の土製品は、管状土錘の形状を呈するが、長さが10cmを超えており、確実に土錘とは判断できない。

第40A号住居跡

遺構 I-15区に位置する。北側は、第40B号住居跡を掘り込んでいる。南西隅は、耕作による攪乱をうけている。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は6.08×5.99m。壁高は東壁40cm、西壁31cm、南壁14cm、北壁43cm。主軸方向はN-4°-Wを指す。壁周溝は、北壁の西側から西壁にかけてみられる。幅9～15cm、床面からの深さ4～7cmを測る。床面には、東西4.6m、南北4.9mのほぼ方形の凹みがみられる。壁周辺の床面との高低差は約10cmである。調査当初は、住居が重複しているものと考えていたが、覆土の堆積状況や遺物の出土状況、掘形の調査等から、住居の重複ではないことがわかった。



第55図 第39号住居跡出土遺物(濃網：赤彩)

しかし、床に凹みのある理由は不明である。床面に硬化面はみられない。

竈穴部覆土は、黒褐色土を主体とする。床面の一部には、焼土や炭化物がみられる。

竈は、北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部が比較的良好に残っている。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竈穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残し、その上に礫を多量に含む灰白色粘土を貼って袖部としている。袖部の燃焼部側は被熱し赤化している。火床面は竈断面の第6層部分で、焼土が約8cmの厚さで堆積している。燃焼部からは土製の支脚が出土している。支脚は、5点の土師器の土器片が重ねられた上に乗った

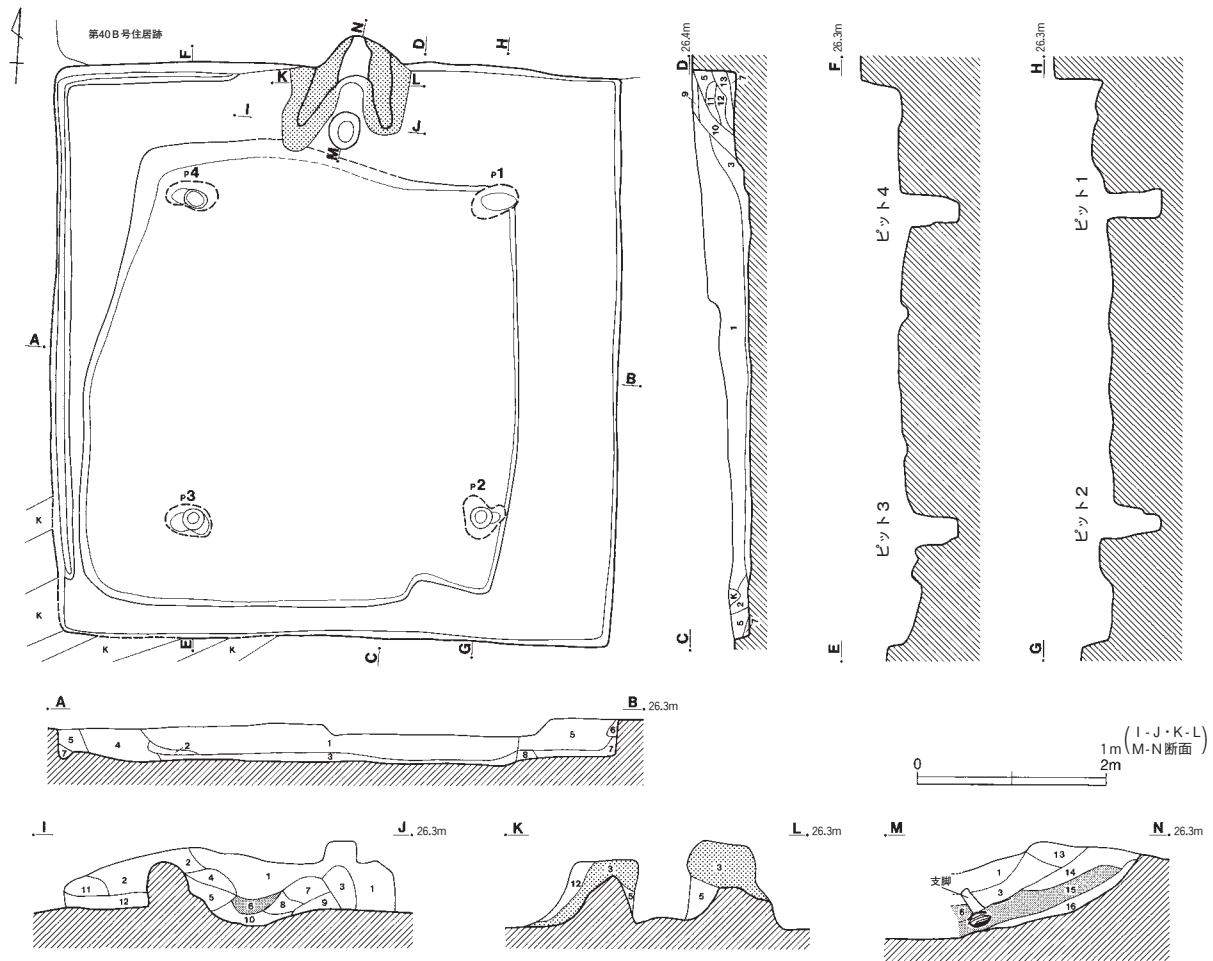
状態で出土しているため、土器片は支脚の高さを調整するために使用されたものと考えられる。

ピットは、4基検出された。ピット1～4は支柱穴と思われる。床面からの深さは、ピット1が55cm、ピット2が63cm、ピット3が62cm、ピット4が64cmである。

住居掘形は浅く、明確ではない。

遺物の出土状況 遺物は、覆土中のものが多く、床面直上から出土したのは第58図1だけである。また、全てが破損品である。2の甕形土器は、竈内の支脚の周辺から出土しているため、竈で使用されたものと思われる。

遺物 杯形土器は、14・15が黒色処理、17が赤彩されている。28は黒色で、鹿角製品の可能性がある。



第40A号住居跡堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒を少量、径約1cmロームブロックを微量に含む 締まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を多量、径約1cmロームブロックを少量含む 締まりやや有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第5層：暗褐色土層(ローム粒を多量含む 締まりやや有り)
- 第6層：褐色土層(ローム土を主体とする 締まりやや有り)
- 第7層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第8層：褐色土層(ローム粒を多量、径約1cmロームブロックを少量含む 締まりやや有り)
- 第9層：暗褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第10層：褐色土層(ローム粒を多量、径約1cmロームブロック・白色粘土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第11層：褐色土層(ローム粒を多量、焼土粒・炭化物粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第12層：黒褐色土層(白色粘土を少量、焼土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第13層：黒褐色土層(ローム粒・白色粘土を多量に含む 締まりやや有り)

第40A号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：灰褐色土層(ローム粒・焼土粒を多量、灰白色粘土を少量、炭化

物粒を微量に含む 締まり有り)

- 第2層：灰褐色土層(灰白色粘土を多量、ローム粒・焼土粒を微量に含む 締まり強く有り)
- 第3層：灰白色粘土層(径1～5cmの礫を多量に含む 締まり有り)
- 第4層：灰褐色土層(焼土粒・炭化物粒を多量、灰白色粘土を少量含む 締まり有り)
- 第5層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒・炭化物粒を少量含む 締まり有り)
- 第6層：橙色土層(火床面 焼土粒を多量に含む 締まり有り)
- 第7層：橙褐色土層(焼土粒を多量、灰白色粘土を少量含む 締まり有り)
- 第8層：褐色土層(ローム粒・焼土粒を少量含む 締まり有り)
- 第9層：明褐色土層(ローム土を主体とする 締まり有り)
- 第10層：褐色土層(ローム粒・焼土粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第11層：褐色土層(ローム粒を多量、焼土粒を微量に含む 締まり有り)
- 第12層：黒色土層(ローム粒を微量に含む 締まり有り)
- 第13層：灰褐色土層(灰白色粘土・焼土粒を多量、径1～5cmの礫・黒色土を少量含む 締まりやや有り)
- 第14層：暗赤色土層(灰白色粘土・焼土粒を多量、径1～5cmの礫を少量含む 締まりやや有り)
- 第15層：暗赤色土層(焼土粒を多量、径1～5cmの礫を少量含む 締まりやや有り)
- 第16層：暗褐色土層(ローム粒を多量、焼土粒を少量含む 締まり有り)

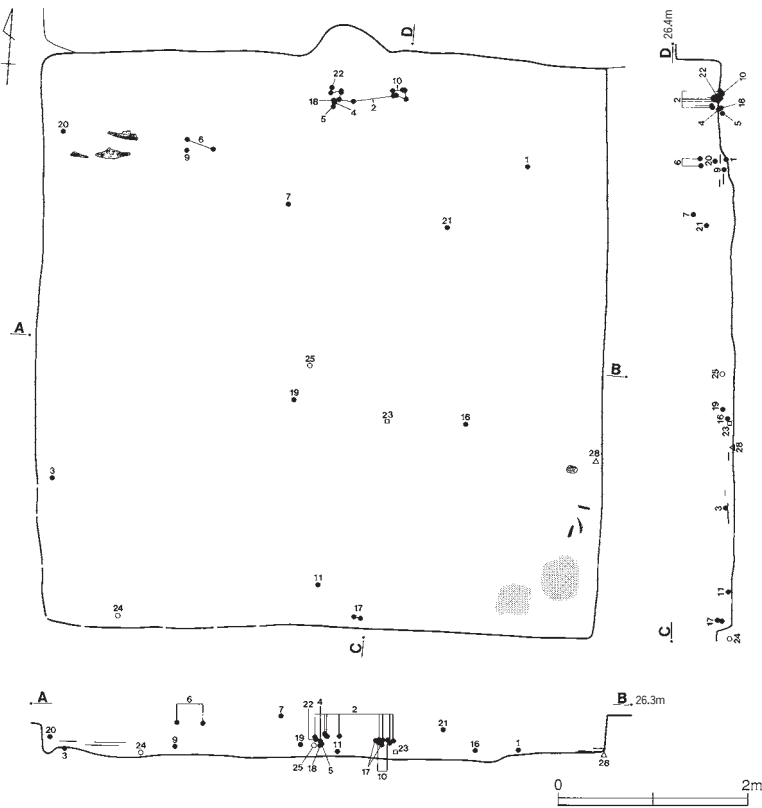
第56図 第40A号住居跡(濃網：焼土・淡網：粘土)

第45号住居跡

遺構

F-11区に位置する。東側は、第55号住居跡を掘り込んでいる。全体に耕作による攪乱をうけているが、床面まではおよんでいない。平面形は、方形を

呈する。竪穴部の規模は6.30×6.16m。壁高は西壁58cm、南壁63cm、北壁65cm。主軸方向はN-24°-Wを指す。壁周溝は東壁と西壁の一部を除き、それ以外にみられる。幅10～15cm、床面からの深さ2～8cmを測る。床面は、



第57図 第40A号住居跡遺物出土状況(濃網：焼土)



第40A号住居跡



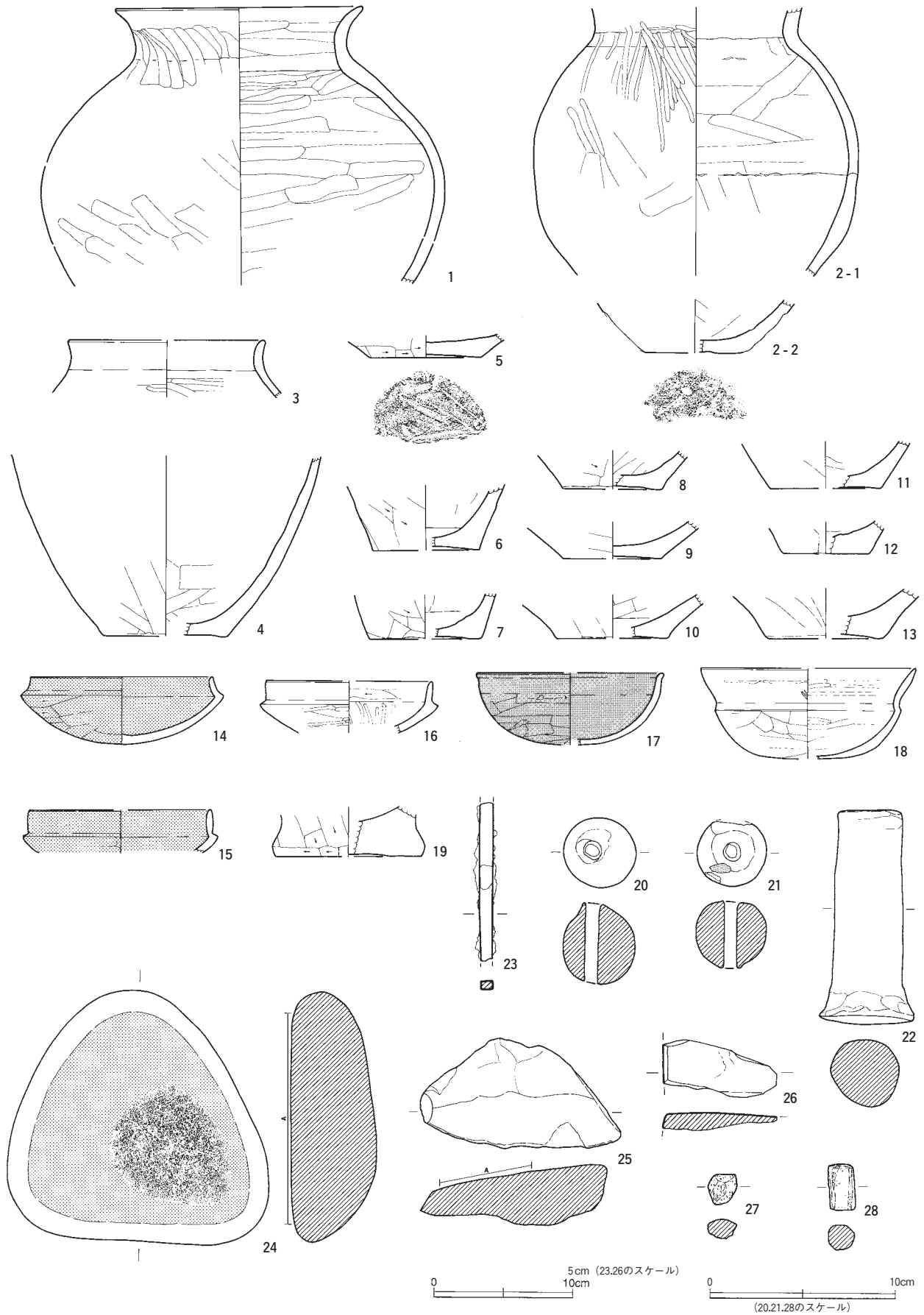
第40A号住居跡竈内遺物出土状況

ほぼ全体が硬化している。

炭化材は、形状の残りのよくないものも含めて31点の取り上げを行った。炭化材の検出状況は、竈穴部の壁際の床面直上にみられ、出土状況から上屋構造における配置を表すような方向のものがみられた。炭化材は、形状の観察から丸材が多い。その中で形状の残りのよいもの4点を樹種同定した結果、コナラ属コナラ亜属コナラ節(1点)と、コナラ属コナラ亜属クヌギ節(1点)、モクレン属(1点)、クリ(1点)と同定された[パリノ報告]。焼土は、炭化材の周囲にみられる。

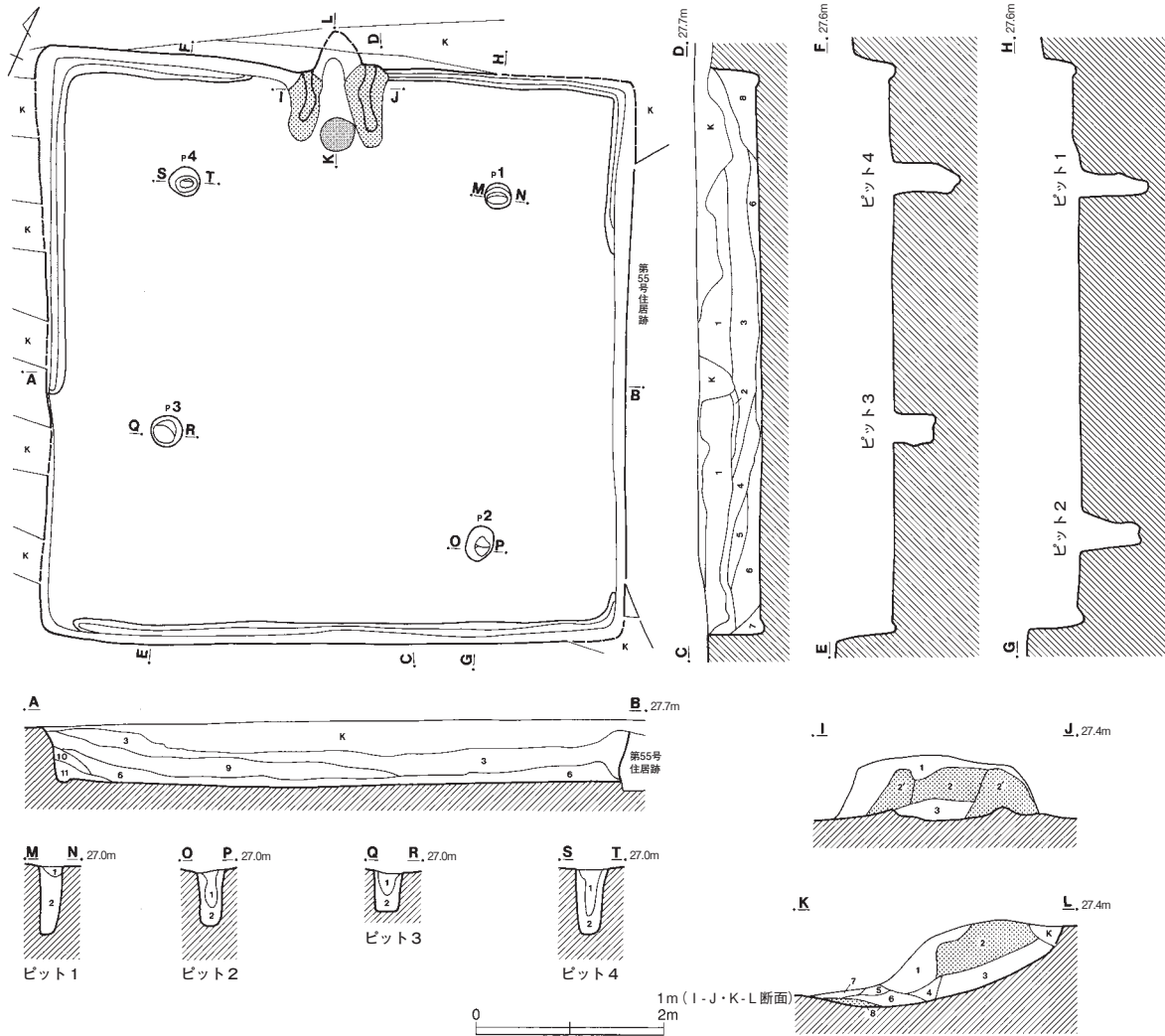
竈穴部覆土は、凹レンズに下層に褐色土層、上層に暗褐色土層が堆積する。

竈は、北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部が比較的良好に残っている。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竈穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残し、その上に砂質の黄白色粘土を貼って袖部としている。袖部の燃焼部側は被熱し赤化している。火床面は竈断面の第8層部分で、焼土が約4cmの厚さで堆積している。燃焼部からは土製の支脚が出土しているが、そ



第58図 第40A号住居跡出土遺物(土器-濃網:赤彩・淡網:黒色処理/石-淡網:砥面)

V 古墳時代の遺構と遺物



第45号住居跡堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第5層：黒褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第6層：褐色土層(ローム粒を多量, ロームブロック・炭化物粒・焼土粒を少量含む 締まり有り)
- 第7層：褐色土層(ロームブロックを多量に含む 締まりやや有り)
- 第8層：褐色土層(ローム粒を多量, 黄色粘土粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第9層：暗褐色土層(ローム粒を多量, ロームブロックを少量含む 締まりやや有り)
- 第10層：黒褐色土層(締まりやや有り)
- 第11層：暗褐色土層(ローム粒を多量, ロームブロックを少量含む 締まりやや有り)

第45号住居跡ピット1～4堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を少量, 炭化物粒を微量に含む 締まり無し)
- 第2層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まり無し)

第45号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(黄白色砂質土を少量, 焼土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第2層：黄白色砂質土層(黄白色砂質土を主体とする 締まりやや有り)
- 第2'層：黄白色砂質土層(袖部 黄白色砂質土を主体とする 締まり有り)
- 第3層：暗褐色土層(焼土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第4層：暗褐色土層(焼土粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第5層：暗橙褐色土層(焼土粒を少量含む 締まり有り)
- 第6層：暗橙褐色土層(焼土粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第7層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第8層：橙色焼土層(火床面 焼土を主体とする 締まりやや有り)

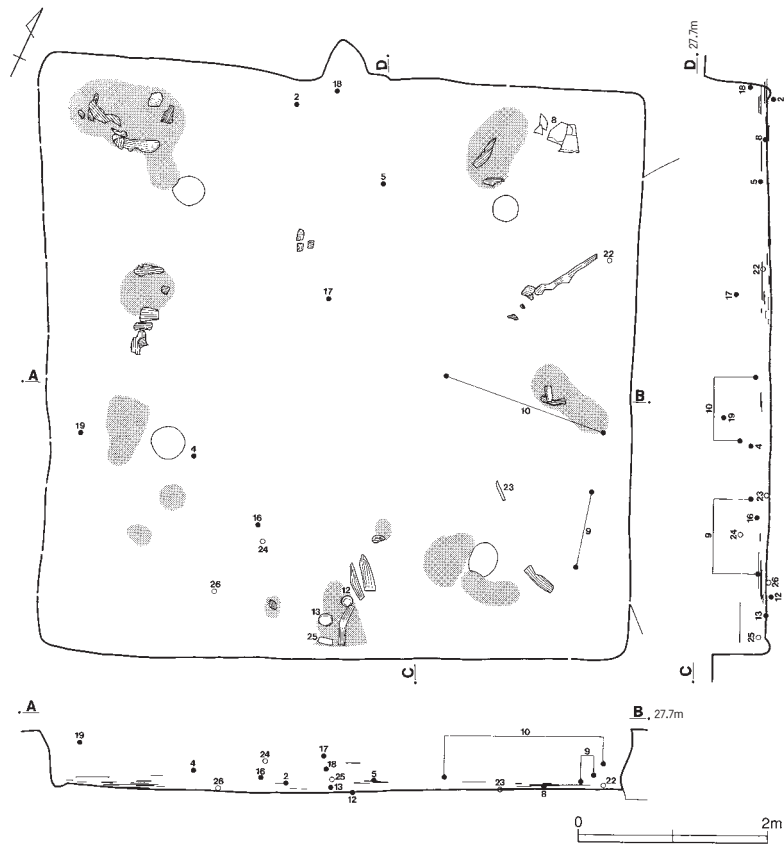
第59図 第45号住居跡(濃網：焼土・淡網：粘土)

の出土状況は使用時の場所から抜かれ、再び竈内に廃棄されたようにみられる。

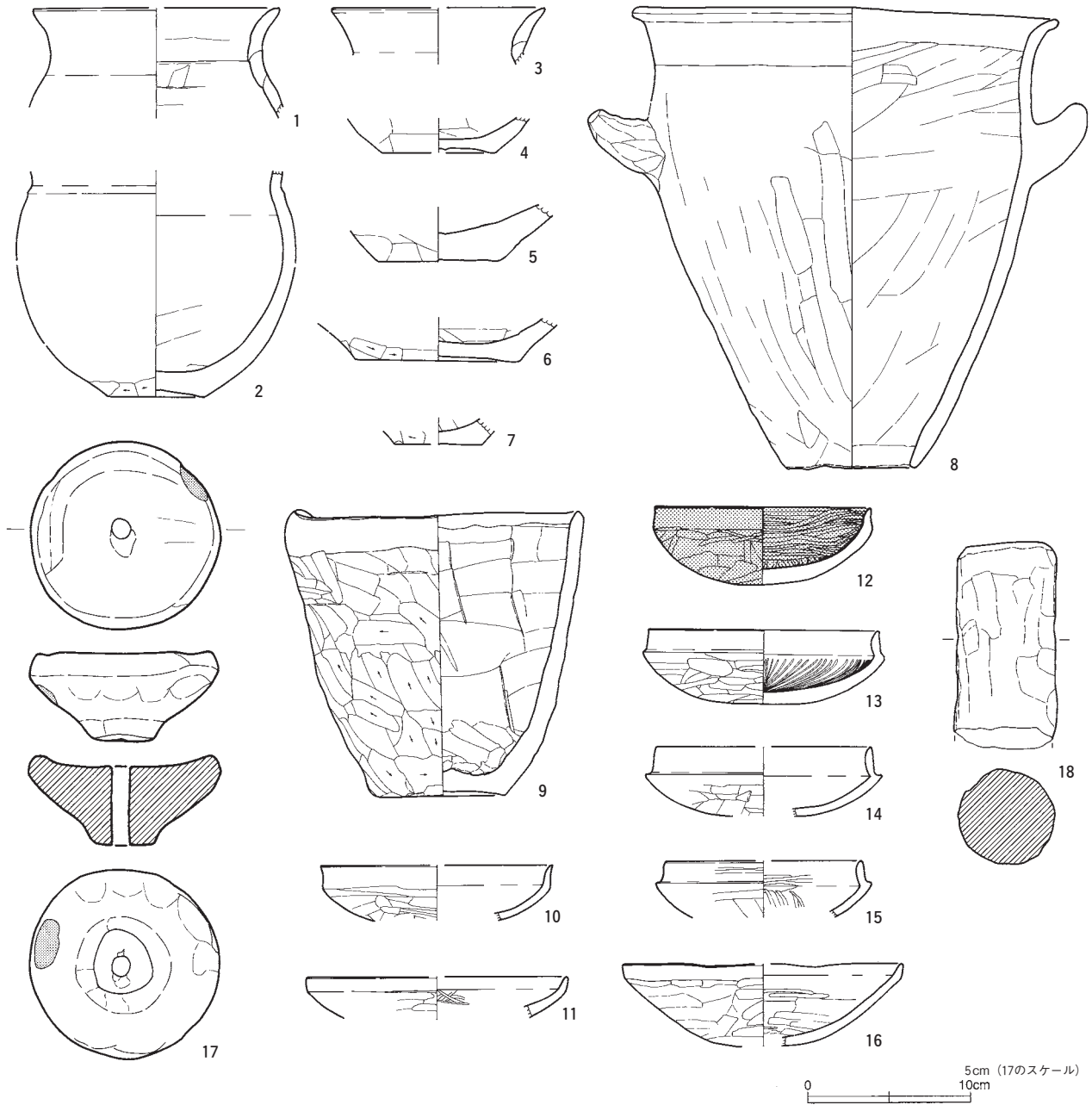
ピットは、4基検出された。ピット1～4は支柱穴と思われる。床面からの深さは、ピット1が75cm, ピット2が62cm, ピット3が44cm, ピット4が72cmである。

住居掘形は浅く、明確ではない。

遺物の出土状況 出土遺物は竈穴部の壁際で、床面直上のものと覆土中層以上のものがある。第61図の8の甑形土器と、12・13の杯形土器は床面直上で出土した完形品で、12・13は正位の状態であった。第62図22・



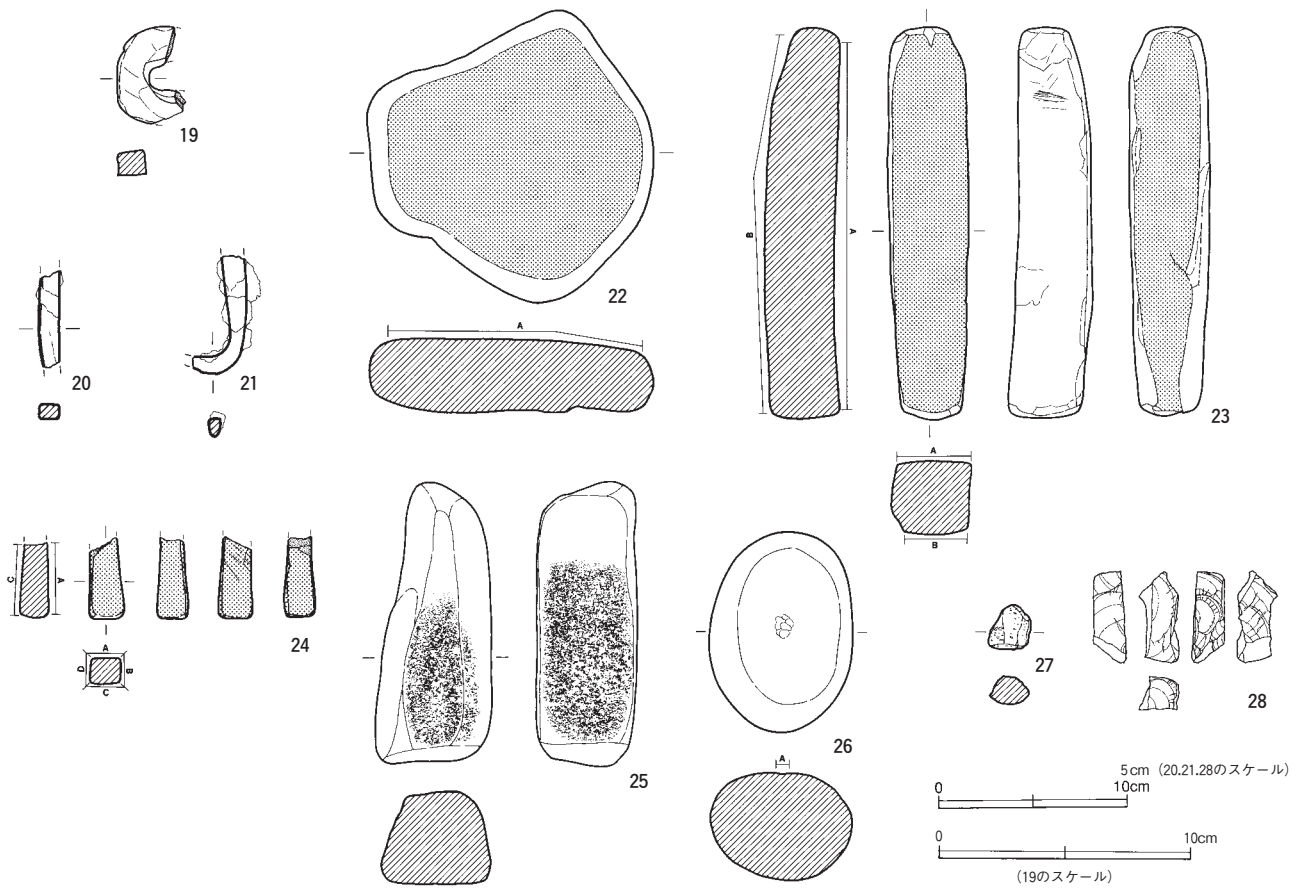
第60図 第45号住居跡遺物出土状況(濃網：焼土)



第61図 第45号住居跡遺物出土(1) (12-淡網：黒色処理・17-淡網：欠損)

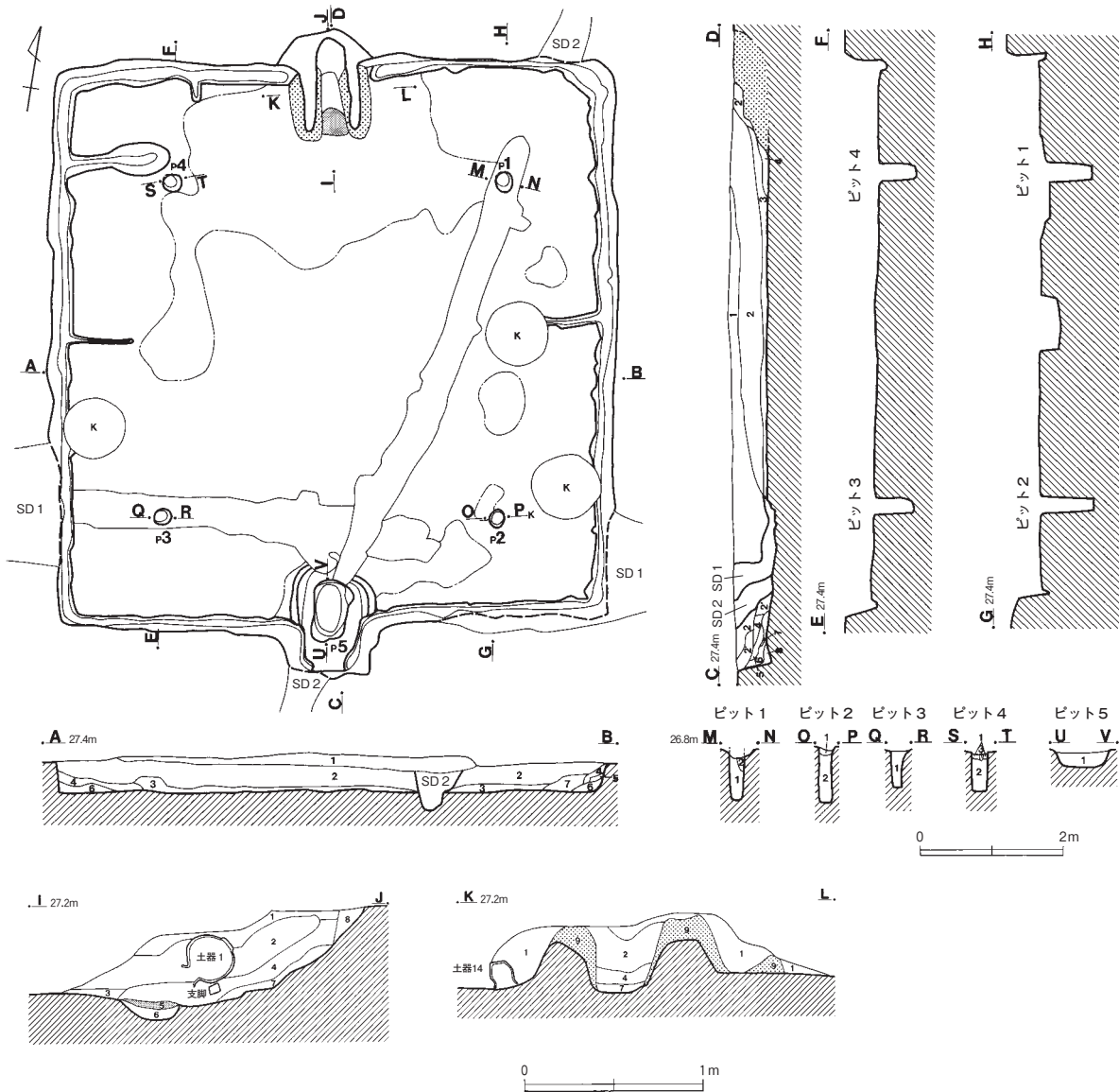
23・25・26の石製品も、床面直上の遺物である。

遺物 8の甑形土器は完形品で、外面に把手がある。9の鉢形土器もほぼ完形品で、口縁部内面が摩滅している。12の杯形土器は黒色処理されている。13の杯形土器の体部内面には、放射状にヘラミガキがみられる。21の鉄製品は釣針と思われる。22・23・24は砥石、25・26は敲石である。28は管玉の未完成品と考えられる。石材は緑色凝灰岩と推定される。



第62図 第45号住居跡遺物出土(2) (淡網：砥面)

4 2012年度住居跡の調査



第28号住居跡堆積覆土

- 第1層：黒色土層(黒ボク土の土層 縮まり有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒・炭粒微量含む やや縮まり有り)
- 第2'層：暗褐色土層(2層よりやや炭粒が多い)
- 第3層：褐色土層 (ローム粒少量含む 炭粒・焼土粒やや多量含む 縮まりやや有り)
- 第4層：褐色土層 (ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む 縮まりやや有り)
- 第5層：黒色土層(ローム粒少量含む 炭粒やや多量含む 縮まりやや有り)
- 第6層：暗褐色土層(ローム粒多量含む 炭粒やや多量含む 縮まりやや有り)
- 第7層：暗褐色土層(ローム粒多量含む 炭粒やや多量含む 第6層よりやや暗い色調)
- 第8層：明褐色土層(ローム土主体 縮まりややあり 粘性有り)

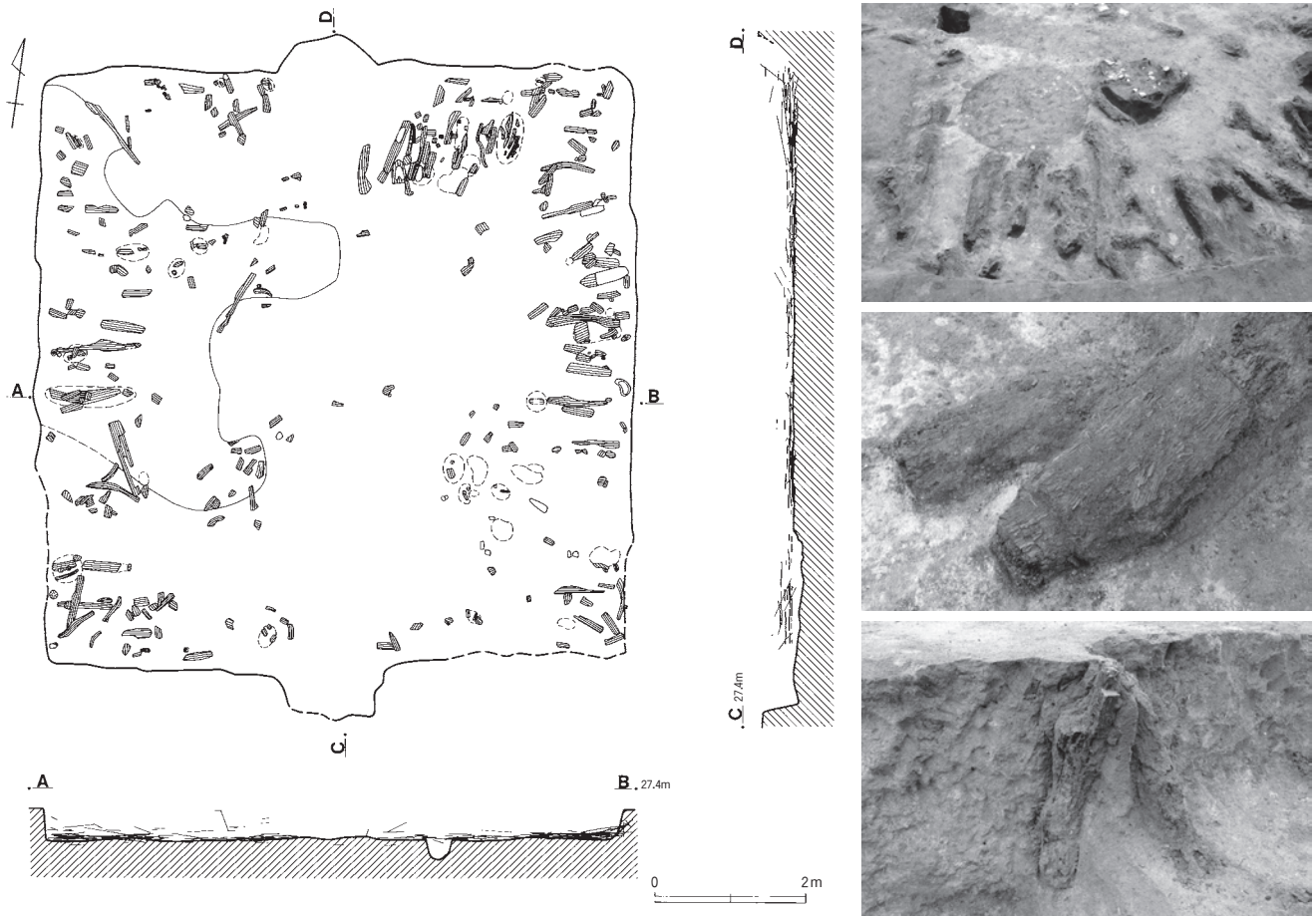
第28号住居跡ピット1～5堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒少量含む 縮まり無し)
- 第2層：褐色土層(ローム粒多量含む 縮まり無し)
- 第3層：黒褐色土層(ローム粒微量含む 縮まり無し)

第28号住居跡 竈堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒多量含む 黄色粘土粒少量含む 縮まりやや有り)
- 第2層：褐色土層(ローム粒・黄色粘土ブロック・黄色粘土粒多量含む 縮まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(焼土粒少量含む 粘土質 縮まり有り)
- 第4層：暗褐色土層(黄色粘土粒・焼土粒多量含む 縮まり無し)
- 第5層：赤色土層(火床面 焼土主体 縮まり無し)
- 第6層：明褐色土層(焼土粒少量含む 火床面下のローム土 縮まり無し)
- 第7層：褐色土層(竈掘形 第6層に似る 縮まりやや有り)
- 第8層：暗褐色土層(ローム粒微量含む 縮まりやや有り)
- 第9層：黄色砂質粘土層(縮まりやや有り 粘性無し)

第63図 第28号住居跡(濃網：焼土・淡網：粘土)



第64図 第28号住居跡炭化材出土状況

第28号住居跡

遺構 B・C-7・8区に位置する。第1・2号溝状遺構に掘り込まれている。平面形は、方形を呈するが、南壁は外側に約60cm張り出す。竪穴部の規模は、8.00×7.97m。壁高は東壁40cm、西壁43cm、南壁44cm、北壁59cm。主軸方向はN-8°-Wを指す。壁周溝は、竪穴部を全周する。幅12~20cm、床面からの深さ5~9cmを測る。床面は、竈前付近とピット5付近が硬化している。ピット5の周囲には、床面から約3cmの土手状の高まりがある。

炭化材は、270点を図化し、その中で形状の残りのよいもの62点の取り上げを行った。炭化材の検出状況は、壁際に多く、壁に沿って傾斜するものもあるが、そのほとんどが床面に接する状態を示した。また、出土状況から上屋構造における配置を表すような方向のものがみられた。炭化材は、形状の観察から丸材が多い。材の上にカヤ状の屋根材が被った状態で出土した例もみられた。焼土は、炭化材の周囲にみられる。

竪穴部覆土は、下層に褐色土、上層に暗褐色土が堆積

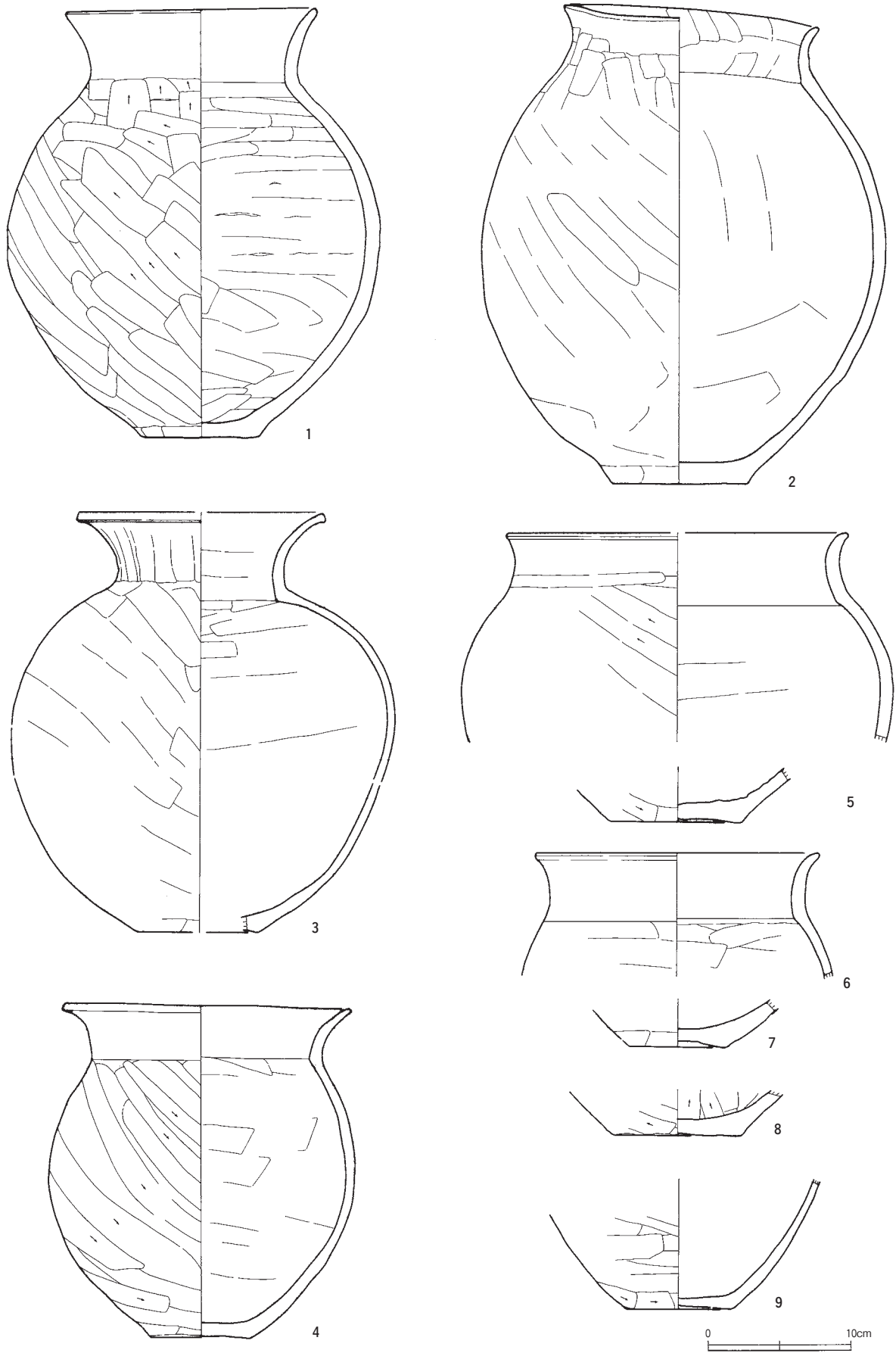
する。床面には、焼土や炭化物がみられる。

竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部が比較的よく残っている。燃焼部からは、土製の支脚の基部だけが残存していた。袖部は粘土等を芯として構築したのではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に砂質の黄白色粘土を貼って袖部としている。火床面は竈断面の第5層部分で、焼土が約4cmの厚さで堆積している。

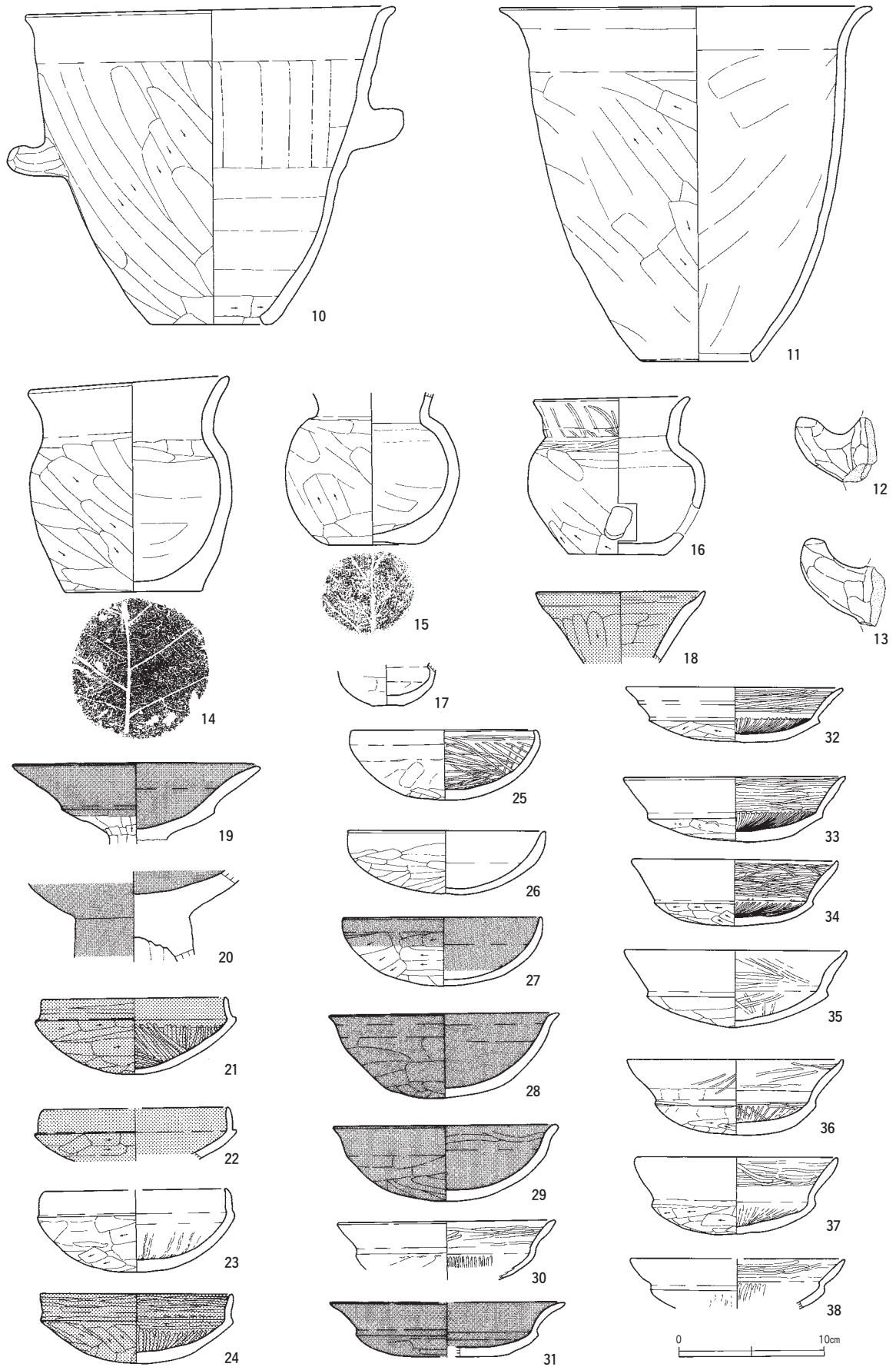
ピットは5基検出された。ピット1~4は支柱穴、ピット5は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が74cm、ピット2が75cm、ピット3が58cm、ピット4が52cm、ピット5が22cmである。

住居掘形は浅く、明確ではない。

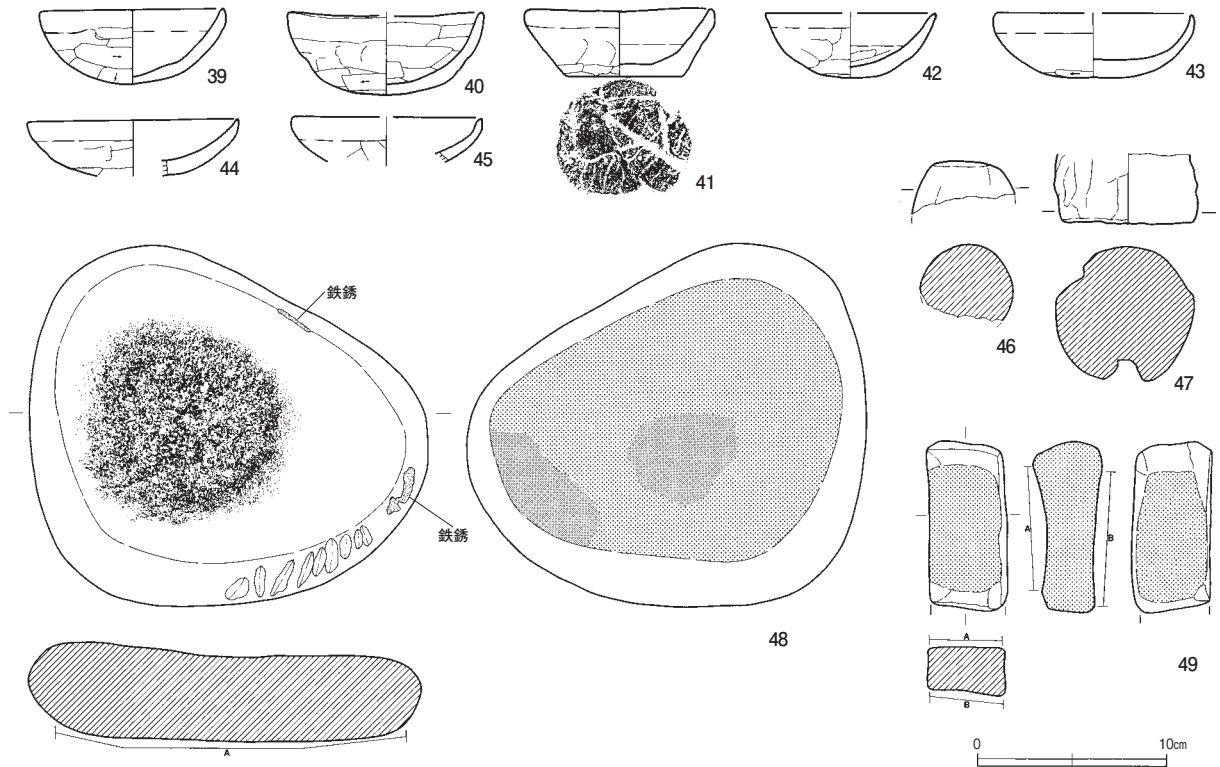
遺物の出土状況 遺物は、竈周辺と出入り口周辺に多く、竪穴部中央は少ない。遺物の垂直分布をみると、床面直上の遺物と壁側に堆積した土層の中位に位置するものがみられるが、土器に時期差は認められない。注目されるのは、出入り口付近から一列に並んだ状態で出土



第66図 第28号住居跡出土遺物(1)



第67図 第28号住居跡出土遺物(2) (濃網：赤彩・淡網：黒色処理)



第68図 第28号住居跡出土遺物(3) (濃網：敲打痕の集中・淡網：砥面)

した杯形土器である。これらの杯形土器は正位の状態
で壁際のは壁により掛かるようにやや斜めの状態に
なっている。また、一部の土器は完全に重なった状態か
ややずれて重なった状態で、一列にきれいに並べた状態
ではない。これらの杯形土器以外の土器も、完形品やそ
の場で破片化したものが多い。このような遺物の出土状
況から、土器は住居跡廃絶時のもので、当住居跡に伴う
一括性の高い資料と考えられる。

出入り口周辺の杯形土器以外の完形品またはほぼ完
形品の出土状況は、第66図1の甕形土器が竈内で逆位、
2・4の甕形土器が倒位、第67図の10の甕形土器が逆
位、14・16の壺形土器が逆位の状態で出土した。第68図
39～45の小型の杯形土器はピット1の南側に集中して
出土した。17と49は覆土上層からの出土で、当遺構に伴
う遺物ではないと思われる。

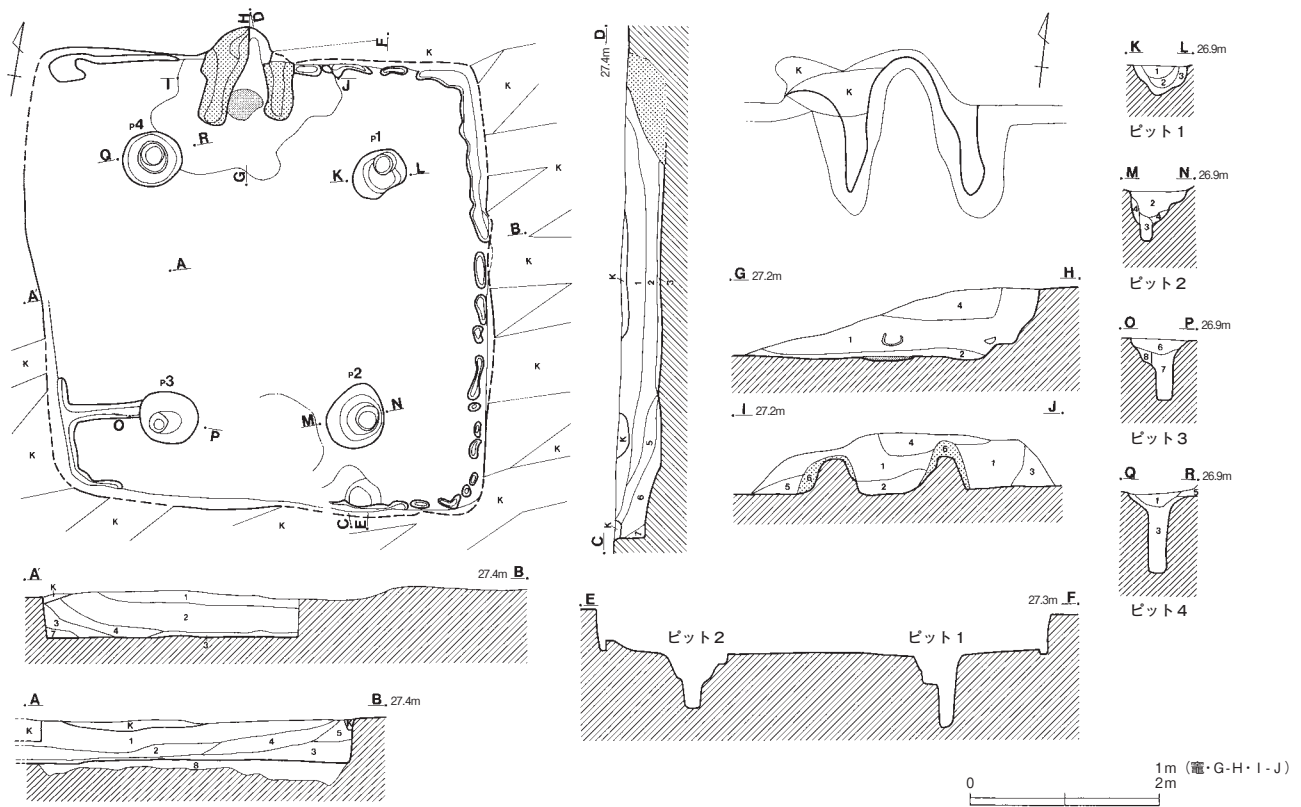
遺物 甕形土器はやや胴長の形を呈する。甕形土
器は把手が付くものと付かないものがある。甕形土器、
甕形土器とも、外面は斜め方向のヘラ削りがみられる。
1・2の甕形土器と10・11の甕形土器は、外面器面の状
況から竈で使用された可能性が考えられる。壺形土器の
14・15の底部には、木葉痕がみられる。16の胴部下位に
は、焼成後外側から穿孔された孔がみられる。高杯形土

器は19・20とも赤彩される。杯形土器は、口縁部が体部
との境に稜をもって内湾するものや直立するもの、体部
との境に稜をもたず内湾するもの、直立するもの、外反
するもの、体部との境に稜をもって大きく外反するもの
がある。体部内面の調整には、放射状のヘラミガキがみ
られるものがある。また、27～29・31には赤彩、21・
22・24には黒色処理がされている。39～45の小型の杯
形土器は手づくね土器と思われる。48は、両面に敲打痕
がみられ、さらに砥面もみられる。溝状の砥面と鉄錆の
付着から、鉄製品の砥石の可能性が考えられる。完形品
の土器内の土を水洗したところ、25・26・37より炭化種
子を検出した。

第30号住居跡

遺構 E-8・9区に位置する。耕作による攪乱
をうけている。当遺構は、2007年度と2012年度に分けて
調査を実施したため、一部未調査部分が生じた。平面形
は、方形を呈する。竪穴部の規模は、4.83×4.74m。壁
高は東壁45cm、西壁45cm、南壁44cm、北壁42cm。主軸方
向はN-10°-Wを指す。壁周溝は、竪穴部の東壁にみ
られるが、ピットが連続するような部分もある。幅7～
17cm、床面からの深さ3～9cmを測る。床面は、南壁中

V 古墳時代の遺構と遺物



第30号住居跡堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒微量含む 締まりやや有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒少量含む)
- 第3層：褐色土層(ローム粒多量含む ロームブロック少量含む 締まりやや有り)
- 第4層：黒褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第5層：褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第6層：暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第7層：暗褐色土層(ローム粒多量含む ロームブロック少量含む 締まりやや有り)
- 第8層：黄褐色土層(掘形 ローム土層 締まり有り 粘性有り)

第30号住居跡ピット1～4堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：黒色土と褐色土の混合層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第3層：褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや無し)
- 第4層：褐色土層(ローム土主体 締まりやや有り)

- 第5層：暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第6層：黒色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第7層：褐色土層(柱痕 ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第8層：褐色土層(掘形 ローム粒多量含む 締まりやや有り 第7層よりやや明るい)

第30号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(白色粘土粒・焼土粒・ローム粒少量含む 締まり有り)
- 第2層：黄白色土層(粘土層 ローム粒多量含む 締まり有り 粘性有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒少量含む 焼土粒微量含む 締まり有り)
- 第4層：黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まり有り)
- 第5層：褐色土と黄白色粘土の混合層(締まり有り)
- 第6層：白色土層(粘土層 径1～2cmの礫を含む 締まり有り)
(ローム粒多量含む 炭粒微量含む 締まりやや有り 粘性有り)

第69図 第30号住居跡(濃網：焼土・淡網：粘土)

中央付近が硬化している。南壁の中央よりやや東には、床面から約10cmのローム土の高まりがある。また、その周囲には、径20cmほどの範囲で小礫が薄く堆積していた。

竪穴部覆土は、凹レンズ状に下層に褐色土、中層に黒褐色土、上層に暗褐色土が堆積する。

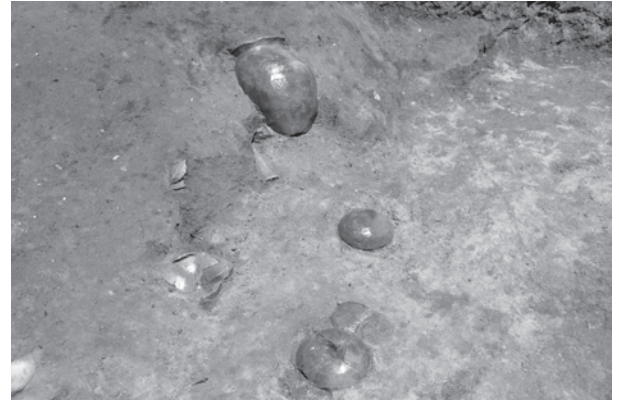
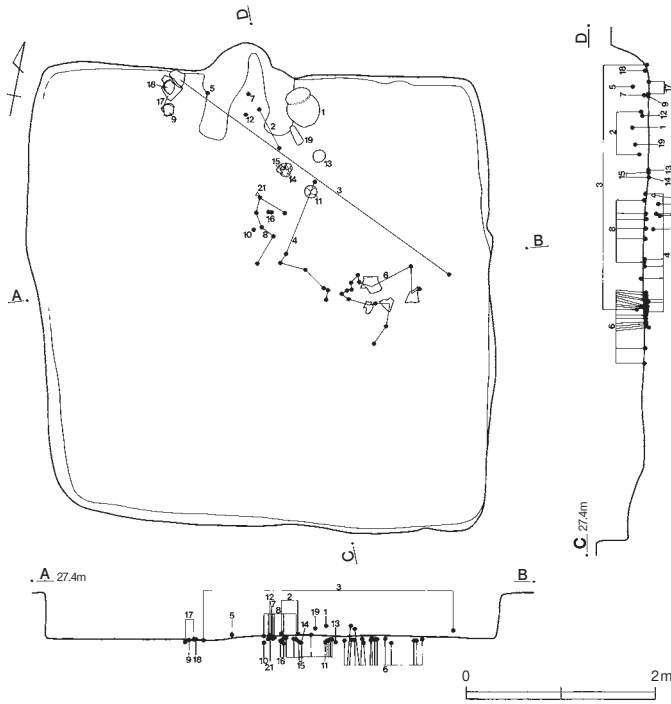
竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部が比較的良好に残っている。燃焼部からは土製の支脚が出土しているが、その出土状況は使用時の場所から抜かれ、再び竈内に廃棄した様相がみられる。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に礫を含

む白色粘土を貼って袖部としている。火床面は竈断面の第7層部分で、焼土が約2cmの厚さで堆積している。

ピットは4基検出された。ピット1～4は主柱穴と思われる。床面からの深さは、ピット1が80cm、ピット2が59cm、ピット3が64cm、ピット4が84cmである。

住居掘形は浅く、明確ではない。

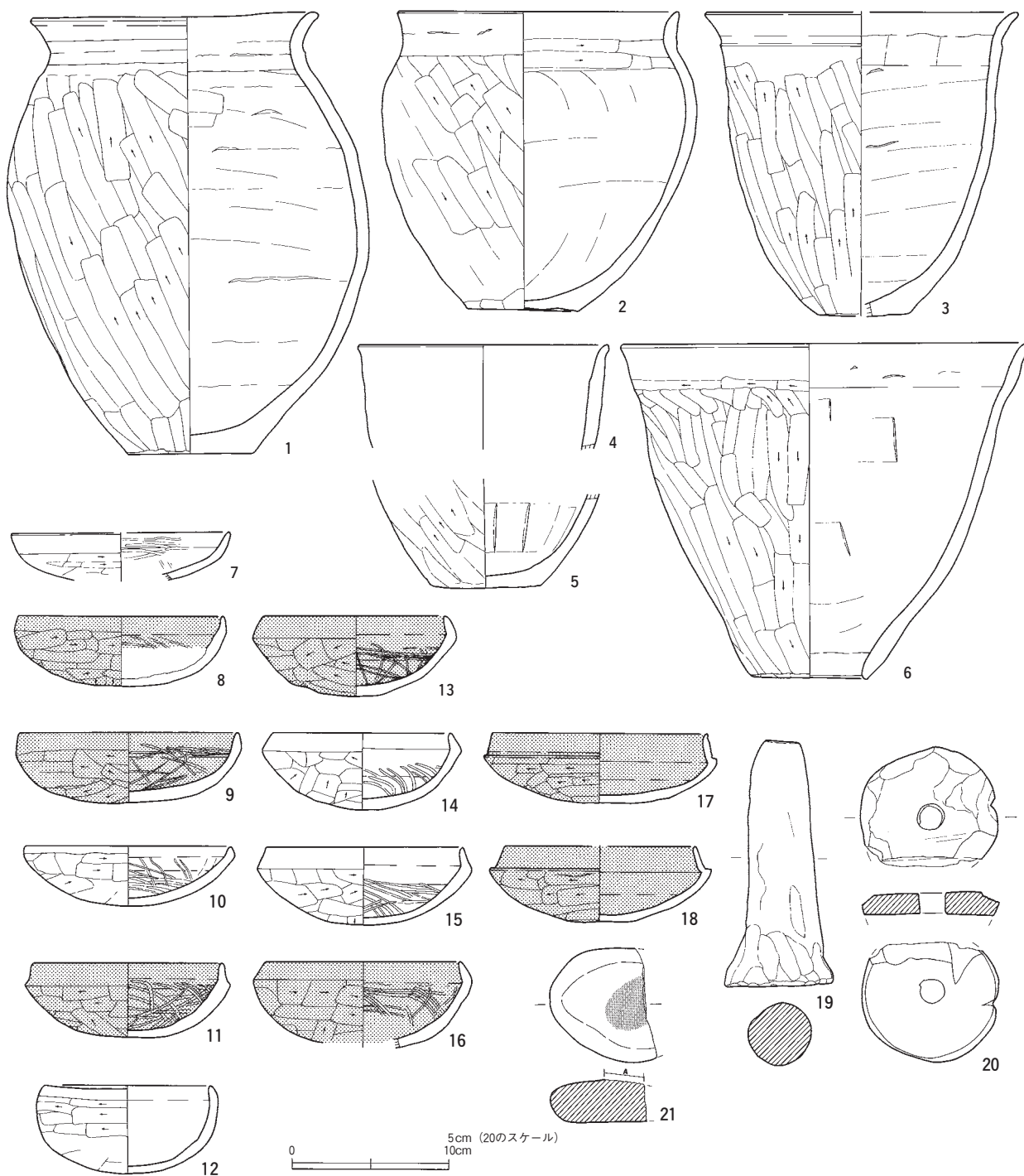
遺物の出土状況 遺物は、竈周辺から竪穴部中央にかけて出土した。遺物の垂直分布をみると、ほとんどの遺物が床面直上に位置する。土器は完形品やその場で破片化したものが多い。このような遺物の出土状況から、土器は住居跡廃絶時のもので、当住居跡に伴う一括性の高い資料と考えられる。



第70図 第30号住居跡遺物出土状況

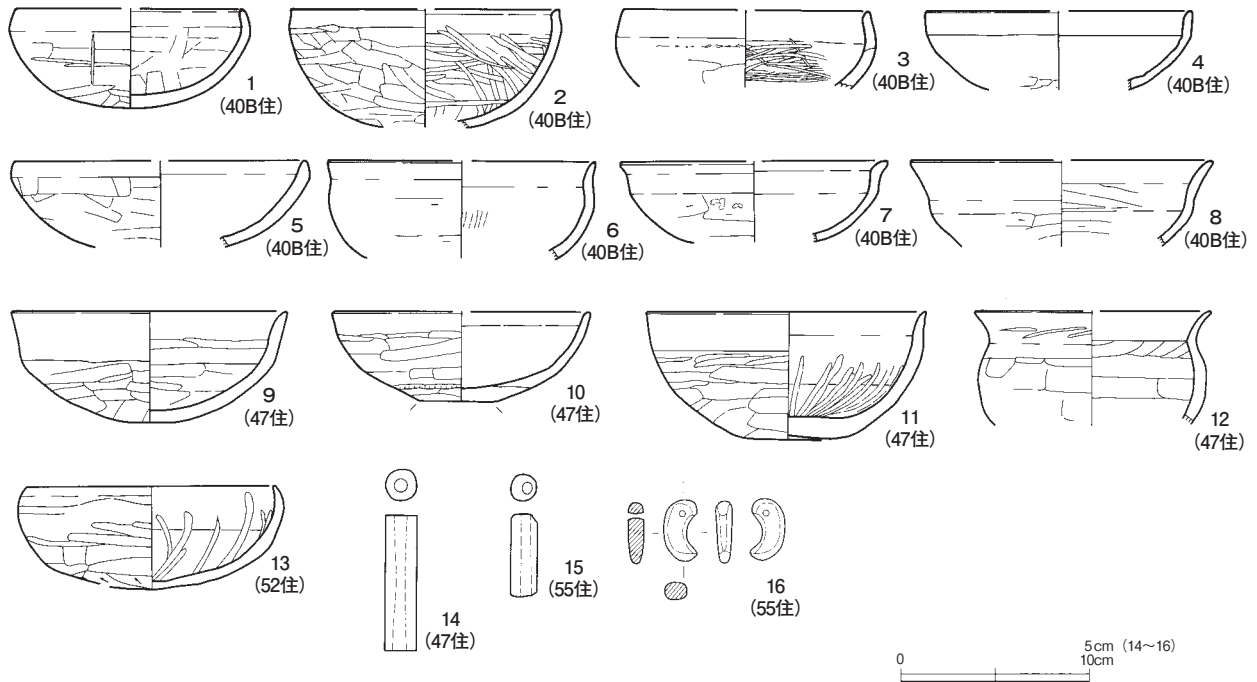
完形品またはほぼ完形品の出土状況は、第71図1・2の甕形土器がほぼ正位で、2の脇には12の杯形土器が倒位で、11・13の杯形土器は逆位で、9・10は正位で、14と15は14を下にして合子状であった。

遺物 甕形土器は比較的胴長の形を呈する。杯形土器は、口縁部がやや開くもの(7)、直立するもの(8～11)、内湾するもの(12～16)、体部との境に稜をもって内湾するもの(17・18)がある。また、8・9・11・13・16～18は黒色処理がされている。1・2・9・12・14の土器内の土を水洗したところ、1・2・9より炭化種子を検出した。



第71図 第30号住居跡出土遺物(濃網：敲打痕の集中・淡網：黑色処理)

5 遺構に伴わない古墳時代の遺物



第72図 遺構に伴わない古墳時代の遺物

ここでは、弥生時代の第47・55号住居跡、古墳時代前期の第40B・52号住居跡から出土した古墳時代の遺物を掲載する。

これらの遺物が出土した住居跡は、遺物の時期の住居跡と重複しているものはないことから、遺物はその遺構が窪地として残っている時に投棄された可能性が考えられるものである。

第40B号住居跡(第72図1～8) 遺構の時期は古墳時代前期である。図化できたのは、杯形土器8点である。この中に完形品はない。杯形土器はみな深身で、丸底を呈する。外面には、口縁部と体部との境に明確な稜をもつ形状はみられず、その形状から古墳時代後期の第17・48号住居跡との関連が推定できる。

第47号住居跡(第72図9～12・14) 遺構の時期は弥生時代である。図化できたのは、小型甕形土器1点と椀形土器1点、杯形土器2点、管玉1点である。この中に完形品はないが、比較的残存しているものがある。椀形土器と杯形土器はみな深身で、10は平底を呈する。形状から古墳時代中期と推定されるが、関連する住居跡は推定できない。管玉は、当住居跡から出土している古墳時代前期の遺物に伴うものと考えられる。

第52号住居跡(第72図13) 遺構の時期は古墳時代前期である。図化できた遺物は杯形土器1点である。

第55号住居跡(第72図15・16) 遺構の時期は弥生時代である。図化できた遺物は、管玉1点と勾玉1点である。石材は2点とも滑石である。勾玉は小型で、当住居跡から出土している古墳時代前期の遺物に伴うものと考えられる。

6 古墳時代遺物観察表

凡例：法量に記載した部位の計測値の単位は「cm」である。括弧内の数値は、復元された口径や底径、最大径、または残存高を示す。

2005年度古墳時代前期

第40B号住居跡

1 台帳：P22 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部～胴部上位20% 法量：口径(20.6), 器高(11.0) 色調：外面黄褐色～黒褐色, 内面にぶい黄橙色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外内面とハケ。 使用痕：外面器面にスス状物が付着している。 備考：-

2 台帳：40A住No.7・8 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部10% 法量：口径(17.2), 器高(5.1) 色調：外面赤橙色, 内面橙色 胎土：砂(白少, 透多, 黒微) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部ハケ。内面口縁部ハケ, 胴部ナデ。 使用痕：- 備考：外面器面にスス状物が付着している。

3 台帳：40A住P15 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部10% 法量：口径(15.6), 器高(4.6) 色調：橙色 胎土：礫(白微, 灰微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。 使用痕：- 備考：外面器面の一部が剥離している。

4 台帳：P2・4・7・14・21 材質：土師器 器種：甕 残存：胴部中～下位50%, 底部100% 法量：器高(18.2), 最大径(23.6), 底径5.7 色調：橙～暗橙～暗褐色～黒褐色 胎土：礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面胴部中位ヘラナデ, 下位～底部ヘラナデ。内面ヘラナデ。 使用痕：- 備考：-

5 台帳：P25～29・31・35, No.3・5 材質：土師器 器種：甕 残存：胴部下位～底部30% 法量：器高(9.5), 底径(8.0) 色調：外面赤橙色, 内面暗赤褐色 胎土：礫(茶微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ?。内面ヘラナデ。 使用痕：- 備考：外面器面全体が磨滅している。内面器面の一部が剥離している。

6 台帳：P12・18・59 材質：土師器 器種：甕 残存：胴部下位～底部20% 法量：器高(7.5), 底径(4.0) 色調：橙～暗褐色～黒褐色 胎土：礫(灰微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。 使用痕：外面器面の一部にスス状物が付着している。 備考：-

7 台帳：P6 材質：土師器 器種：甕 残存：底部50% 法量：器高(3.6), 底径(9.0) 色調：橙～暗褐色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多, 黒微) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。 使用痕：- 備考：-

8 台帳：P57 材質：土師器 器種：甕 残存：底部40% 法量：器高(2.1), 底径(6.0) 色調：外面黄褐色～黒色, 内面黄褐色 胎土：砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面胴部ヘラナデ・ハケ, 底部ヘラナデ。内面ヘラナデ。 使用痕：- 備考：-

9 台帳：P61 材質：土師器 器種：甕 残存：底部100% 法量：器高(2.0), 底径3.4 色調：外面黒色, 内面浅黄褐色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。 使用痕：- 備考：-

10 台帳：P51, No.5・11・19 材質：土師器 器種：壺 残存：胴部70%, 底部100% 法量：最大径9.2, 器高(6.9), 底径2.2 色調：外面赤～橙～黒褐色, 内面橙色 胎土：砂(白少, 透小) 焼成：良好 技法等：外面赤彩のため不明。内面ヘラナデ。外面全面と内面口縁部が赤彩されている。 使用痕：- 備考：外面器面がやや磨滅している。

11 台帳：No.5 材質：土師器 器種：高杯 残存：杯部20% 法量：口径(19.2), 器高(5.4) 色調：赤色 胎土：砂(白多, 透多, 黒微) 焼成：良好 技法等：外内面ヘラミガキ。外内面とも赤彩されている。 使用痕：- 備考：-

12 台帳：P3 材質：土師器 器種：高杯 残存：脚部100% 法量：器高(7.0) 色調：外面にぶい橙～褐～暗褐色, 内面橙～暗褐色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラミガキ。内

面ヘラナデ。 使用痕：- 備考：-

13 台帳：P1 材質：土師器 器種：高杯 残存：脚部100% 法量：器高(12.3) 色調：外面橙～褐～黒褐色, 内面黒褐色 胎土：砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラミガキ。内面ヘラナデ。 使用痕：- 備考：-

14 台帳：No.18 材質：土師器 器種：埴 残存：10% 法量：口径(10.0), 器高(5.2) 色調：外面にぶい橙～黒褐色, 内面橙色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透少, 黒少) 焼成：良好 技法等：外内面口縁部上位ヨコナデ, 中位～下位ヘラナデ・ヘラミガキ, 体部ヘラナデ。外面口縁部と体部の堺に1条の沈線。 使用痕：- 備考：-

15 台帳：P9 材質：土師器 器種：埴 残存：胴部～底部100% 法量：最大径6.0, 器高(3.8), 底径2.3 色調：にぶい黄橙～暗褐色～黒褐色 胎土：砂(白少, 透多, 黒微), 骨針多 焼成：良好 技法等：外面胴部上位ヘラナデ, 中位～下位ヘラミガキ, 底部ヘラナデ。内面ヘラナデ。 使用痕：- 備考：-

16 台帳：P5 材質：土師器 器種：埴 残存：胴部～底部100% 法量：最大径5.7, 器高(3.3) 色調：黄褐色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多, 黒微) 焼成：良好 技法等：外面胴部上位ヨコナデ, 中位～底部ヘラナデ。内面ヘラナデ。 使用痕：- 備考：-

第46号住居跡

1 台帳：No.5 材質：土師器 器種：壺 残存：口縁部10%未満 法量：- 色調：浅黄褐色 胎土：砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ, 指ナデ。内面ハケ。 使用痕：- 備考：外内面とも器面が磨滅している。

2 台帳：P6・28 材質：土師器 器種：壺? 残存：口縁部10% 法量：口径(12.4), 器高(5.2) 色調：にぶい橙～暗褐色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部上位ヘラナデ, 下位ヘラナデ。内面ヘラナデ。 使用痕：- 備考：-

3 台帳：P4・5・14・19～21・23・25～27, No.4・5・8・9 材質：土師器 器種：高杯 残存：杯部80%, 脚部40% 法量：口径(16.7), 器高11.8, 底径(12.4), 孔径1.0 色調：橙～浅黄褐色 胎土：小石(白微), 礫(白少, 灰微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面杯部上位ヘラナデ後ヘラナデ, 下位～脚部中位ヘラナデ, 下位ヨコナデ。内面杯部ヘラナデ・ヘラミガキ, 脚部上位ヘラナデ, 中位～下位ヨコナデ。 使用痕：- 備考：孔は脚部に3ヶ所。内面杯部器面の一部が剥離している。

4 台帳：S12 材質：砂岩 種類：敲石・擦石 法量：長11.2, 幅9.1, 厚4.2, 重量619.5g 色調：黄白色 備考：敲打による凹みが3面(A～C)あり, 側面に擦り痕がみられる。

5 台帳：S3～5・7～11・13～16・18・20, No.2～5・9・12 材質：砂岩 種類：- 法量：長26.7, 幅24.8, 厚6.5, 重量7184.0g 色調：灰～オリーブ灰～暗赤褐色 備考：全体が被熱し, 破片化している。石中に化石がある。

6 台帳：S17 材質：軽石 種類：砥石 法量：長5.2, 幅5.9, 厚3.9, 重量21.41g 色調：黄白色 備考：砥面Aの一面と, 溝状の研磨痕3条がみられる。

第52号住居跡

1 台帳：P15 (, No.4・5・11) 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部20% 法量：口径(27.0), 器高(6.5) 色調：黄褐色～褐色 胎土：砂(白少, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 胴部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。 使用痕：- 備考：-

2 台帳：P18～20, No.4 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部

～胴部中位20% 法量：口径(21.0), 最大径(21.4), 器高(12.5) 色調：外面赤橙～黒褐色, 内面橙～黒褐色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面口縁部ヘラナデ, 胴部ナデ。 使用痕：－ 備考：－

3 台帳：P21, No.5 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部20% 法量：口径(18.8), 器高(3.1) 色調：赤橙色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヨコナデ後若干のハケ。内面ハケ。 使用痕：－ 備考：－

4 台帳：P4・5 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部90% 法量：口径15.4, 器高(3.9) 色調：外面にぶい黄～黒褐色, 内面にぶい黄色。 胎土：砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外内面ヨコナデ・若干のハケ。 使用痕：外面器面にスス状物が付着している。 備考：－

5 台帳：No.8 材質：土師器 器種：甕 残存：底部20% 法量：器高(2.2), 底径(9.4) 色調：外面暗褐色, 内面赤色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：－

6 台帳：P6 材質：土師器 器種：甕 残存：底部20% 法量：器高(2.0), 底径(9.2) 色調：外面にぶい黄橙色, 内面灰黄色 胎土：礫(白微, 灰微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外内面ヘラナデ?。 使用痕：－ 備考：外内面とも器面が磨滅している。

7 台帳：No.7 材質：土師器 器種：甕 残存：底部20% 法量：器高(2.0), 底径(7.0) 色調：褐色 胎土：礫(茶微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：－

8 台帳：No.3 材質：土師器 器種：甕 残存：底部20% 法量：器高(2.2), 底径(7.0) 色調：外面黒褐色, 内面橙色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面胴部ヘラナデ, 底部ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：－

9 台帳：P2 材質：土師器 器種：甕 残存：底部40% 法量：器高(1.8), 底径(6.0) 色調：外面褐～暗褐色, 内面暗褐色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：－

10 台帳：P12 材質：土師器 器種：壺? 残存：口縁部10% 法量：口径(19.0), 器高(5.0) 色調：にぶい黄橙色 胎土：砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部上位ヨコナデ, 下位ヘラナデ。内面ヨコナデ。 使用痕：－ 備考：－

11 台帳：No.6 (No.13) 材質：土師器 器種：壺 残存：口縁部20% 法量：口径(17.0), 器高(3.8) 色調：にぶい黄橙色 胎土：礫(白少), 砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヨコナデ後若干のハケ。内面ヨコナデ・ハケ。複合口縁。 使用痕：－ 備考：－

12 台帳：No.7 材質：土師器 器種：壺? 残存：口縁部10%未滿 法量：－ 色調：橙色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外内面ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：－

13 台帳：No.13 材質：土師器 器種：壺 残存：口縁部10%未滿 法量：－ 色調：浅黄色 胎土：砂(白少, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面ハケ。内面ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：外内面とも器面が磨滅している。

14 台帳：No.8 材質：土師器 器種：壺? 残存：底部10% 法量：器高(1.8), 底径(8.0), 孔径(5.6) 色調：にぶい黄橙色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：焼成前穿孔。

15 台帳：P3 材質：土師器 器種：壺? 残存：底部100% 法量：器高(1.5), 底径4.0 色調：橙色 胎土：礫(灰微), 砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：－

16 台帳：P14, No.9 材質：土師器 器種：高杯 残存：杯部体部70% 法量：器高(4.0) 色調：赤橙色 胎土：礫(白微, 灰微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラミガキ。内面口縁部ヘラミガキ, 体部ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：－

17 台帳：P9 材質：土師器 器種：器台 残存：脚部100% 法量：

器高(8.1), 底径(11.8) 色調：外面赤～橙～暗褐色, 内面杯部赤色, 脚部橙色 胎土：砂(白少, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面ヘラミガキ。内面杯部～脚部上位ヘラナデ, 中位ヘラナデ・ハケ, 下位ヨコナデ。孔は3個。 使用痕：内面脚部接地面が磨滅している。 備考：－

18 台帳：P10 材質：土師器 器種：高杯 残存：脚柱部100%, 裾部10% 法量：器高(11.2) 色調：黄褐色 胎土：砂(白少, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面上位ヘラナデ, 中位ヘラミガキ, 下位ヘラナデ。内面ヘラナデ。裾部に孔あり。 使用痕：－ 備考：－

19 台帳：P23 材質：土師器 器種：高杯? 残存：脚部10% 法量：器高(2.8), 底径(11.8) 色調：外面赤橙色, 内面橙色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外内面上位～中位ヘラナデ, 下位ヨコナデ。孔あり。 使用痕：－ 備考：－

20 台帳：P11 材質：土師器 器種：埴 残存：胴部～底部100% 法量：器高(2.6), 底径2.7 色調：浅黄～黒褐色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面胴部上位～中位ヘラナデ, 下位～底部ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：－

21 台帳：No.7・8 材質：土師器 器種：器台? 残存：杯部10% 法量：口径(8.8), 器高(2.5) 色調：外面にぶい黄橙色, 内面橙色 胎土：砂(白少, 透少) 焼成：良好 技法等：外内面ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

22 台帳：S6 材質：砂岩 種類：台石 法量：長18.0, 幅19.8, 厚6.2, 重量2694.9g 色調：灰色 備考：敲打による凹みと擦痕はAの1面。

23 台帳：S8 材質：砂岩 種類：炉石 法量：長33.4, 幅12.0, 厚8.0, 重量4900.0g 色調：灰～暗赤色 備考：2面に被熱痕がある。

24 台帳：No.4 材質：軽石 種類：砥石 法量：長4.9, 幅3.8, 厚3.8, 重量12.40g 色調：浅黄～にぶい浅黄色 備考：－

25 台帳：No.5 材質：軽石 種類：砥石 法量：長4.3, 幅3.5, 厚2.6, 重量9.35g 色調：灰白～灰オリープ色 備考：－

第62号住居跡

1 台帳：P4 材質：弥生土器 器種：壺 残存：底部27% 法量：底径(7.8) 色調：外面褐～黒褐色, 内面淡褐色 胎土：細, 白, 透, 多 焼成：良好 技法等：外面胴部RをL巻き?。底部砂痕orナデ調整。 使用痕：－ 備考：－

2 台帳：No.12 材質：弥生土器 器種：壺 残存：底部16% 法量：底径(8.8) 色調：淡褐色 胎土：細, 透, 少 焼成：良好 技法等：外面胴部縦位ヘラナデ, 底部木葉痕。 使用痕：－ 備考：－

3 台帳：P1 材質：土師器 器種：高杯 残存：脚部90%, 裾部10% 法量：器高(11.2) 色調：外面赤色, 内面にぶい橙～褐色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラミガキ。内面脚部ヘラ削り, 裾部ヨコナデ。外面が赤彩されている。 使用痕：－ 備考：外面器面に炭化物が付着している。

4 台帳：No.12 材質：ホルンフェルス 種類：擦石 法量：長5.3, 幅4.5, 厚4.0, 重量132.2g 色調：灰色 備考：擦痕はAの一面。

5 台帳：S1 材質：砂岩 種類：敲石 法量：長11.1, 幅9.6, 厚4.6, 重量637.6g 色調：灰色 備考：敲打痕は5面にみられる。

2005年度古墳時代後期

第34B号住居跡

1 台帳：SK5P1 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径(14.0), 稜径(11.0), 器高(5.2) 色調：橙色 胎土：礫(透微), 砂(白少, 透多, 黒微) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部上位～中位ヨコナデ後ヘラミガキ, 下位ヨコナデ, 体部ヘラナデ後放射状にヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

2 台帳：No.2・3 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径(14.0), 稜径(10.4), 器高(3.9) 色調：赤褐色 胎土：砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

3 台帳：No.2・3 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部20%

V 古墳時代の遺構と遺物

法量：口径(15.0), 器高(3.9) **色調**：橙色 **胎土**：砂(白少, 透多) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部?。内面口縁部ヘラミガキ, 体部? **使用痕**：－ **備考**：－

4 **台帳**：S1 **材質**：砂岩 **種類**：敲石 **法量**：長17.0, 幅7.5, 厚4.2, 重量699.1g **色調**：淡黄色 **備考**：敲打痕は4面にみられ, 敲打による大きな凹みも2箇所ある。

5 **台帳**：S2 **材質**：砂岩 **種類**：台石 **法量**：長12.0, 幅10.3, 厚6.9, 重量1536.3g **色調**：淡黄色 **備考**：敲打による大きな凹みも2箇所ある。

6 **台帳**：S3 **材質**：軽石 **種類**：砥石 **法量**：長8.0, 幅5.3, 厚4.4, 重量34.80g **色調**：淡黄色 **備考**：砥面はA1面。

第36号住居跡

1 **台帳**：P8～10・14～16・18・20・21 **材質**：土師器 **器種**：鉢 **残存**：口縁部10%, 胴部30%, 底部100% **法量**：口径(17.3), 最大径(17.4), 器高14.2, 底径6.0 **色調**：外面橙～褐～暗褐色, 内面褐～暗褐色 **胎土**：小石(白微), 礫(白少), 砂(白少, 透多, 黒多) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ?, 胴部ヘラナデ・ヘラ削り, 底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。 **使用痕**：外面は二次焼成をうけている。 **備考**：－

2 **台帳**：P2 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：完形 **法量**：口径13.4, 稜径11.4, 器高4.5 **色調**：外面橙～淡橙～黒色, 内面橙色 **胎土**：砂(白少, 透少, 黒微) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部横位ヘラミガキ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヘラミガキ, 体部放射状のヘラミガキ。 **使用痕**：－ **備考**：－

3 **台帳**：P1 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：ほぼ完形 **法量**：口径14.1, 稜径11.5, 器高4.8 **色調**：外面橙～浅黄色, 内面橙色 **胎土**：砂(白少, 透多) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り?。内面ヘラミガキ。 **使用痕**：口唇部が摩滅している。 **備考**：外面口縁部下位～体部・内面口縁部下位～体部上位は器面の一部が剥離している。

4 **台帳**：P4 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：20% **法量**：口径(14.6), 稜径(13.4), 器高(4.9) **色調**：外面橙～にぶい橙色, 内面橙色 **胎土**：礫(赤少), 砂(白微, 透微) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヘラミガキ, 体部ヘラナデ。内面不定方向にヘラミガキ。 **使用痕**：－ **備考**：－

5 **台帳**：S1 **材質**：滑石 **種類**：紡錘車 **法量**：長径4.4, 短径2.6, 厚1.7, 孔径0.6～0.7, 重量50.59g **色調**：濃紺色 **備考**：線刻あり。

6 **台帳**：S2 **材質**：砂岩 **種類**：砥石 **法量**：長11.6, 幅6.2, 厚7.1, 重量522.83g **色調**：灰～にぶい橙色 **備考**：被熱している。砥面はA1面。

第37号住居跡

1 **台帳**：P7, No.3・11 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：口縁部～胴部上位20% **法量**：口径(17.4), 器高(8.5) **色調**：外面橙色, 内面暗褐色 **胎土**：砂(白多, 透多, 黒少) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 頸部ヘラ削り, 胴部ヘラナデ。 **使用痕**：－ **備考**：－

2 **台帳**：P3 **材質**：土師器 **器種**：鉢 **残存**：胴部30%, 底部100% **法量**：最大径(14.3), 器高(8.7), 底径6.2 **色調**：外面赤～浅黄～褐～暗褐色, 内面浅黄色 **胎土**：砂(白多, 透多) **焼成**：良好 **技法等**：外面胴部ヘラナデ・一部ヘラ削り, 底部ヘラ削り。内面ヘラナデ。 **使用痕**：外面が二次焼成をうけている。 **備考**：－

3 **台帳**：P2, No.6 **材質**：土師器 **器種**：椀 **残存**：60% **法量**：口径(13.5), 器高6.6, 底径5.2 **色調**：外面にぶい橙色, 内面橙色 **胎土**：礫(白微), 砂(白少, 透多, 黒微) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部上位ヘラナデ, 下位～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ・一部ヘラ削り, 体部ヘラナデ。 **使用痕**：－ **備考**：－

4 **台帳**：P4 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：90% **法量**：口径14.0, 器高5.7 **色調**：浅黄色 **胎土**：礫(白微, 灰微), 砂(白少, 透多) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り?。内面不明。

使用痕：－ **備考**：外内面とも器面が摩滅している。

5 **台帳**：P1 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：30% **法量**：口径(17.4), 稜径(13.5), 器高(5.6) **色調**：外面赤～橙～黒色, 内面赤～にぶい橙色 **胎土**：砂(白多, 透多) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ, 口縁部～体部中位赤彩。 **使用痕**：－ **備考**：－

6 **台帳**：P8 **材質**：土師質 **種類**：支脚 **残存**：完形 **法量**：長16.5, 径4.5～5.4 **色調**：橙～褐～暗褐色 **胎土**：砂(白多, 透多, 灰少) **焼成**：良好 **技法等**：ユビナデ。 **使用痕**：二次焼成をうけている。 **備考**：－

7 **台帳**：S1 **材質**：滑石 **種類**：鎌か **法量**：長5.1, 幅2.9, 厚0.4, 重量13.61g **色調**：青灰色 **備考**：側面は3面が面取りしており, 面取りしていない1面は刃部の表現か。

第39号住居跡

1 **台帳**：P2 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：口縁部80%, 胴部30%, 底部100% **法量**：口径16.4, 最大径(21.2), 器高(25.0), 底径8.4 **色調**：橙～褐～暗褐色 **胎土**：礫(白少), 砂(白多, 透多) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 胴部斜位ヘラナデ・ヘラ削り, 底部木葉痕・ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。 **使用痕**：－ **備考**：内面胴部器面の一部が剥離している。

2 **台帳**：P5・6・8・10・12～15・24・28 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：口縁部～胴部60%, 底部100% **法量**：口径15.6, 最大径20.9, 器高23.3, 底径7.3 **色調**：外面暗赤～褐～暗褐色, 内面橙～褐色 **胎土**：礫(白微), 砂(白少, 透多, 灰少) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ヘラ削り, 下位～底部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ, 胴部中位に輪積痕が残る。 **使用痕**：－ **備考**：器形が歪んでいる。粗いつくり。

3 **台帳**：P27 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：口縁部～胴部上位70% **法量**：口径16.6～17.4, 器高(11.2) **色調**：橙～にぶい橙色 **胎土**：砂(白多, 透多, 黒少) **焼成**：良好 **技法等**：口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。 **使用痕**：－ **備考**：内面器面の一部が剥離している。

4 **台帳**：P32 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：口縁部～胴部60% **法量**：口径14.8, 最大径16.3, 器高(13.3) **色調**：外面橙～にぶい橙～赤～褐色, 内面暗褐色 **胎土**：砂(白少, 透多) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ヘラナデ, 下位ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。 **使用痕**：外面が二次焼成をうけ, 器面の一部が剥離している。 **備考**：－

5 **台帳**：P3・7 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：口縁部20% **法量**：口径(14.4), 器高(4.8) **色調**：外面橙色, 内面褐色 **胎土**：砂(白少, 透多, 黒少) **焼成**：良好 **技法等**：外面ヘラ削り後ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ, 頸部ヘラナデ。 **使用痕**：－ **備考**：－

6 **台帳**：P31, No.11 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：底部70% **法量**：器高(2.4), 底径7.5 **色調**：外面橙色, 内面浅黄色 **胎土**：礫(白微), 砂(白多, 透多, 灰少) **焼成**：良好 **技法等**：ヘラナデ。 **使用痕**：－ **備考**：外内面とも器面の一部が剥離している。

7 **台帳**：P16 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：底部50% **法量**：器高(2.1), 底径5.5 **色調**：外面浅黄～黒色, 内面浅黄色 **胎土**：礫(白微), 砂(白多, 透多) **焼成**：良好 **技法等**：外面胴部ヘラナデ, 底部ヘラ削り。内面ヘラナデ。 **使用痕**：－ **備考**：内面器面の一部が剥離している。

8 **台帳**：P25 **材質**：土師器 **器種**：鉢 **残存**：口縁部～胴部中位100% **法量**：口径21.5～23.4, 器高(11.4) **色調**：褐～暗褐色 **胎土**：砂(白少, 透多, 黒多) **焼成**：良好 **技法等**：口縁部ヨコナデ, 胴部丁寧なヘラナデ。 **使用痕**：－ **備考**：－

9 **台帳**：P26 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：口縁部80%, 体部100% **法量**：口径14.4, 器高5.8 **色調**：にぶい橙色 **胎土**：礫(白微), 砂(白少, 透多, 黒少) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後一部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。 **使用痕**：－ **備考**：－

10 **台帳**：P19 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：40% **法量**：口径

(15.0), 器高5.6 色調:外面浅橙色, 内面赤色 胎土:砂(白少, 透多, 黒微) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り後ヘラミガキ。内面ヘラナデ, 赤彩。 使用痕:- 備考:-

11 台帳:P17, No.1・2 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径(15.0), 稜径(11.6), 器高5.5 色調:外面橙~黒色, 内面橙色 胎土:砂(白微, 透微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面ヘラミガキ。 使用痕:- 備考:内面体部器面の一部が剥離している。赤色に発色する胎土。

12 台帳:P21 材質:土師器 器種:杯 残存:口縁部10%, 体部60% 法量:稜径(11.6), 器高(4.5) 色調:浅黄~黒色 胎土:砂(白少, 透多, 灰少), 骨針微 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部上位ヘラナデ, 下位ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。 使用痕:- 備考:-

13 台帳:P29 材質:土師質 種類:不明 残存:完形 法量:長12.5, 最大径4.0, 孔径1.1~1.7 色調:橙~暗褐色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:ユビナデ。 使用痕:- 備考:-

14 台帳:P33 材質:土師質 種類:不明 残存:完形 法量:長15.6, 最大径4.9, 孔径0.5 色調:橙~黒褐色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:ユビナデ。 使用痕:- 備考:-

第40A号住居跡

1 台帳:40C住P6 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部100%, 胴部上位~中位60% 法量:口径17.8~18.2, 最大径(29.1), 器高(20.0) 色調:外面橙~にぶい黄橙色, 内面にぶい黄橙色 胎土:小石(白微), 礫(白少), 砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後下位はヘラ削り, 胴部ヘラナデ・一部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後下位はヘラナデ, 胴部ヘラナデ・ナデ。 使用痕:- 備考:-

2 台帳:40C住P14・39・44・47・48・54・57・60・63 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部~胴部中位30%, 底部40% 法量:最大径(23.4), 器高(19.3), 底径(7.0) 色調:橙~黒褐色 胎土:砂(白少, 透多, 黒多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後一部ヘラミガキ, 胴部上位ヘラミガキ・ヘラナデ, 中位ヘラナデ, 底部木葉痕。内面口縁部ヨコナデ, 胴部~底部ヘラナデ。 使用痕:外面胴部中位~底部は二次焼成をうけている。内面胴部器面の一部にスス状物が付着している。 備考:外面底部器面の一部が被熱により剥離している。

3 台帳:40C住P2 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(14.0), 器高(6.3) 色調:外面暗赤褐色, 内面橙~暗褐色 胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラナデ・一部ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。 使用痕:- 備考:外面器面が二次焼成をうけている。内面器面の一部が剥離している。

4 台帳:40C住P46 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部下位~底部10% 法量:器高(13.0), 底径(9.0) 色調:赤色 胎土:礫(白微), 砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面胴部ヘラナデ, 底部不明。内面ヘラナデ・ナデ。 使用痕:- 備考:外内面とも器面がやや摩滅している。

5 台帳:40C住P49 材質:土師器 器種:甕 残存:底部50% 法量:器高(1.6), 底径8.0 色調:外面赤~橙色, 内面橙色 胎土:礫(白微), 砂(白少, 透多, 黒少), 骨針微 焼成:良好 技法等:外面胴部ヘラ削り, 底部木葉痕・一部ヘラナデ。内面ヘラナデ。 使用痕:- 備考:-

6 台帳:P13・14 材質:土師器 器種:甕 残存:底部40% 法量:器高(4.7), 底径(7.6) 色調:外面褐色, 内面橙色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:- 備考:外内面とも器面の一部が剥離している。

7 台帳:P12 材質:土師器 器種:甕 残存:底部40% 法量:器高(3.2), 底径(8.0) 色調:外面黄橙~黒褐色, 内面黄橙色 胎土:砂(白少, 透多, 黒微) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:- 備考:内面器面が摩滅している。

8 台帳:No.2 材質:土師器 器種:甕 残存:底部40% 法量:器高(2.8), 底径(7.2) 色調:外面橙~黄橙~黒褐色, 内面赤~橙色 胎

土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面胴部ヘラ削り, 底部ヘラナデ。内面ヘラナデ。 使用痕:- 備考:-

9 台帳:P22 材質:土師器 器種:甕 残存:底部30% 法量:器高(2.7), 底径(7.0) 色調:外面赤褐色, 内面橙色 胎土:礫(白微), 砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ?。 使用痕:- 備考:内面器面の所々が剥離している。

10 台帳:40C住P62・64 材質:土師器 器種:甕 残存:底部20% 法量:器高(3.1), 底径(8.0) 色調:外面にぶい橙~暗褐色, 内面橙色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 灰少) 焼成:良好 技法等:外面胴部ヘラナデ?, 底部ヘラ削り?。内面ヘラナデ。 使用痕:- 備考:外面器面が摩滅している。

11 台帳:No.3 材質:土師器 器種:甕 残存:底部10% 法量:器高(3.4), 底径(8.0) 色調:外面にぶい橙色, 内面褐~暗褐色 胎土:礫(白微), 砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:ヘラナデ。 使用痕:- 備考:-

12 台帳:No.14 材質:土師器 器種:甕 残存:底部10% 法量:器高(2.3), 底径(6.0) 色調:にぶい橙色 胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:- 備考:-

13 台帳:40C住No.4 材質:土師器 器種:甕 残存:底部10% 法量:器高(3.6), 底径(8.0) 色調:外面にぶい赤褐色, 内面にぶい褐色 胎土:礫(白少, 灰微), 砂(白少, 透多, 灰微) 焼成:良好 技法等:ヘラナデ? 使用痕:- 備考:外内面とも器面が摩滅している。

14 台帳:P1, No.3・7 材質:土師器 器種:杯 残存:60% 法量:口径(13.0), 稜径(14.6), 器高4.9 色調:橙~黒色 胎土:砂(白少, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面ヨコナデ。外内面とも全面が黒色処理されていた痕がみられる。 使用痕:- 備考:口縁端部のほとんどが欠損している。

15 台帳:No.3・8・11 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(13.0), 稜径(14.0), 器高(3.1) 色調:外面黒褐色, 内面浅黄~黒褐色 胎土:砂(白少, 透少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面ヨコナデ。外内面とも黒色処理されている。 使用痕:- 備考:-

16 台帳:40C住P3, 40C住No.8 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(12.0), 稜径(12.9), 器高(3.7) 色調:浅黄色 胎土:礫(白微, 灰微), 砂(白少, 透少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ・ヘラミガキ。内面口縁部上位ヨコナデ, 下位ヘラ削り, 体部ヘラミガキ。 使用痕:- 備考:-

17 台帳:40C住P3・36 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(13.4), 器高(5.2) 色調:外面赤~橙色, 内面赤色 胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ?。外内面とも赤彩されている。 使用痕:- 備考:-

18 台帳:40C住P53 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(15.4), 稜径(13.4), 器高(6.5) 色調:赤~橙色 胎土:小石(白微), 砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後一部ヘラミガキ, 体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後一部ヘラミガキ, 体部ヘラナデ・ヘラミガキ。 使用痕:- 備考:内面器面の一部に黄白色粘土が付着している。

19 台帳:P6 材質:土師器? 器種:不明 残存:底部50% 法量:器高(3.6), 底径(10.6) 色調:赤~褐色 胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面胴部ヘラ削り, 底部ヘラナデ。内面ヘラナデ。 使用痕:- 備考:-

20 台帳:40C住P1 材質:土師質 種類:土錘 法量:長4.4, 最大径3.9, 孔径0.7~0.8, 重量60.43g 備考:穿孔の際の工具の引き抜き痕がみられる。

21 台帳:P8 材質:土師質 種類:土錘 法量:長3.6, 最大径3.8, 孔径0.7~0.9, 重量45.61g 備考:残存80%

22 台帳:40C住P43 材質:土師質 種類:支脚 残存:完形 法量:長15.5, 上部径4.3~4.7, 底部径6.8~7.0 色調:赤色 胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:ナデ・ヘラナデ。 使用痕:二次焼成

V 古墳時代の遺構と遺物

をうけており、器面の一部に粘土が付着している。備考：－

23 台帳：I1 材質：鉄 種類：鉄鏃 残存：頸部片 法量：長(5.7), 最大幅0.4, 最大厚0.3, 重量3.44g 備考：－

24 台帳：40C住S1 材質：砂岩 種類：砥石・台石 法量：長18.8, 幅18.0, 厚6.2, 重量2958.2g 色調：灰白色 備考：砥面はA1面。敲打による凹みがみられる。

25 台帳：S4 材質：砂岩 種類：砥石 法量：長13.3, 幅7.9, 厚3.9, 重量416.29g 色調：灰白色 備考：砥面はA1面。被熱している。

26 台帳：No.3 材質：白雲母片岩 種類：不明 法量：長4.1, 幅1.7, 厚0.6, 重量5.68g 色調：青灰色 備考：研磨痕はみられない。

27 台帳：No.3 材質：軽石 種類：砥石 法量：長2.2, 幅2.1, 厚1.4, 重量1.43g 色調：灰白色 備考：

28 台帳：P28 材質：鹿角？ 種類：－ 法量：長2.5, 幅1.5, 厚1.4, 重量4.18g 色調：黒色 備考：表面を削って整形している。

第45号住居跡

1 台帳：No.11・15・23 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部～胴部10% 法量：口径(15.0), 器高(7.5) 色調：橙色 胎土：礫(白微), 砂(白微, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ?。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕：－ 備考：外内面とも器面がやや摩滅している。

2 台帳：P30, No.28 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部10%, 胴部20%, 底部100% 法量：最大径(17.2), 器高(14.0), 底径6.0 色調：外面橙～黄橙～黒褐色, 内面橙～暗褐色 胎土：礫(白少), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部上位～中位不明, 下位ヘラ削り, 底部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ナデ。使用痕：－ 備考：外面が二次焼成をうけている。外内面とも器面が摩滅している。

3 台帳：No.14 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部20% 法量：口径(13.0), 器高(3.5) 色調：黄褐色 胎土：砂(白少, 透多, 灰微) 焼成：良好 技法等：ヨコナデ。使用痕：－ 備考：－

4 台帳：P7 材質：土師器 器種：甕 残存：底部30% 法量：器高(2.2), 底径(7.0) 色調：浅黄～黒褐色 胎土：砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕：－ 備考：－

5 台帳：P1, No.11 材質：土師器 器種：甕 残存：底部100% 法量：器高(3.4), 底径(7.4) 色調：外面浅黄色, 内面黒褐色 胎土：礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ。内面不明。使用痕：－ 備考：外面器面の一部にスス状物が付着している。内面器面の大半が剥離している。

6 台帳：No.11・14 材質：土師器 器種：甕 残存：底部80% 法量：器高(2.7), 底径(10.0) 色調：外面橙～にぶい橙色, 内面暗褐色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕：－ 備考：－

7 台帳：No.11 材質：土師器 器種：不明 残存：底部40% 法量：器高(1.6), 底径(5.4) 色調：外面浅黄色, 内面黒褐色 胎土：砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：ヘラナデ。使用痕：－ 備考：－

8 台帳：P26 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部～胴部上位90%, 中位～底部100% 法量：口径25.8, 器高28.4, 孔径8.0 色調：外面赤～橙～浅黄～黒褐色, 内面浅黄色 胎土：小石(白微), 礫(白微), 砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ヘラナデ・ナデ, 中位～下位ヘラナデ・ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕：外面胴部下位の器面が摩滅している。備考：内面胴部器面が摩滅している。

9 台帳：P15・16, No.12・22 材質：土師器 器種：鉢 残存：口縁部90%, 胴部～底部100% 法量：口径17.0～18.0, 器高17.7, 底径7.6 色調：外面赤～橙～浅黄～褐～黒褐色, 内面橙～浅黄色 胎土：礫(白少), 砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部～底部ヘラ削り。内面ヘラナデ。外面胴部器面が凸凹している。使用痕：内面口縁部が摩滅している。甕とセットで利用した痕か。備考：－

10 台帳：P20・24 材質：土師器 器種：杯 残存：20% 法量：口

径(14.2), 器高(3.4) 色調：外面黒色, 内面にぶい赤褐色 胎土：礫(灰微), 砂(白微, 透少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ・ヘラミガキ。内面ヨコナデ。使用痕：－ 備考：－

11 台帳：No.10・12 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径(16.0), 器高(2.6) 色調：外面赤～暗褐色, 内面暗褐色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。使用痕：－ 備考：－

12 台帳：P28 材質：土師器 器種：杯 残存：完形 法量：口径13.2, 稜径13.4, 器高4.8 色調：浅黄～黒色 胎土：砂(白微, 透少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ・ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。外内面とも黒色処理されているとみられる。使用痕：－ 備考：－

13 台帳：P27 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部70%, 体部100% 法量：口径14.0, 稜径14.8, 器高4.6 色調：外面橙～暗橙色, 内面橙色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ・ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヨコナデ後放射状にヘラミガキ。使用痕：口縁部が所々欠損している。備考：－

14 台帳：No.8 材質：土師器 器種：杯 残存：20% 法量：口径(13.2), 稜径(14.5), 器高(4.3) 色調：にぶい褐色 胎土：砂(白少, 透少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面ヨコナデ。使用痕：－ 備考：－

15 台帳：No.10・20 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径(12.0), 稜径(13.3), 器高(3.5) 色調：外面橙色, 内面にぶい橙色 胎土：砂(白微, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラナデ。内面ヘラナデ・ヘラミガキ。使用痕：－ 備考：－

16 台帳：P9, No.13 材質：土師器 器種：杯 残存：30% 法量：口径(17.2), 器高(5.1) 色調：赤～橙色 胎土：礫(白少, 灰微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ・ヘラミガキ。内面口縁部～体部上位ヨコナデ, 中位～下位ヘラミガキ。使用痕：－ 備考：－

17 台帳：P2 材質：土師質 種類：紡錘車 残存：完形 法量：上面径5.7～5.9, 下面径1.8～2.0, 厚2.8, 孔径0.5～0.6, 重量67.86g 色調：黄褐～黒褐色 胎土：砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：ナデ。使用痕：孔周辺に擦れなし。備考：－

18 台帳：P32 材質：土師質 種類：支脚 残存：－ 法量：長(12.8), 最大厚6.0 色調：赤～橙～にぶい橙色 胎土：礫(白少), 砂(白少, 透多, 灰少) 焼成：良好 技法等：ナデ・ヘラナデ。使用痕：二次焼成をうけている。備考：－

19 台帳：P6 材質：土師質 種類：不明 残存：－ 法量：長3.9, 最大幅1.3, 最大厚0.9, 重量7.89g 色調：浅黄～黄灰色 胎土：砂(透少) 焼成：良好 技法等：ヘラナデ・ナデ。備考：－

20 台帳：No.9 材質：鉄 種類：鉄鏃? 残存：茎部片? 法量：長(2.6), 最大幅0.5, 最大厚0.4, 重量2.18g 備考：－

21 台帳：No.18 材質：鉄 種類：釣針 残存：－ 法量：長(3.1), 最大幅0.6, 最大厚0.5, 重量2.34g 備考：－

22 台帳：S3 材質：砂岩 種類：砥石 法量：長15.5, 幅15.2, 厚3.9, 重量1217.2g 色調：灰白～浅黄色 備考：砥面はA1面。

23 台帳：S2 材質：石英片岩 種類：砥石 法量：長20.8, 幅4.2, 厚3.5, 重量655.6g 色調：明オリープ灰～浅黄色 備考：砥面はA・B2面。他1面に擦痕がみられる。

24 台帳：S6 材質：石英片岩 種類：砥石 法量：長4.3, 幅1.8, 厚1.4, 重量20.03g 色調：黄白色 備考：砥面はA～D4面。

25 台帳：S7 材質：砂岩 種類：敲石 法量：長14.9, 幅6.1, 厚4.9, 重量710.7g 色調：灰白色 備考：敲打痕が2箇所みられる。

26 台帳：S5 材質：砂岩 種類：敲石 法量：長10.7, 幅7.6, 厚5.7, 重量624.9g 色調：灰色 備考：敲打痕はA1箇所。

27 台帳：No7 材質：軽石 種類：砥石 法量：長2.4, 幅2.2, 厚1.5,

重量2.63g 色調：灰白色 備考：－

28 台帳：No.19 材質：緑色凝灰岩 種類：管玉未成品 法量：長2.3, 幅1.0, 厚0.8, 重量1.74g 色調：緑灰色 備考：－

2012年度

第28号住居跡

1 台帳：P79 材質：土師器 器種：甕 残存：完形 法量：口径17.4, 胴径26.0, 器高29.8～30.2, 底径8.2 色調：外面橙～黄橙～にぶい黄褐～黒褐色, 内面橙色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ナデ。使用痕：外面胴部下位～底部に粘土の付着が見られる。内面胴部下位の器面の一部が剥離している。備考：－

2 台帳：P18 材質：土師器 器種：甕 残存：完形 法量：口径17.0～18.0, 胴径28.1, 器高32.0～33.5, 底径9.4 色調：外面橙～にぶい黄橙～黄灰～黒褐色, 内面橙～にぶい黄褐～黒褐色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 頸部～胴部ヘラ削り後ヘラナデ, 底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラナデ, 胴部ヘラナデ・ナデ。使用痕：外面胴部中位～底部が磨滅しており, 粘土の付着もみられる。内面胴部の一部が剥離している。備考：－

3 台帳：P26・27・63, No.3・4・7・9・11・14・16・21・22 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部20%, 頸部～胴部上位60%, 中位10%, 下位～底部20% 法量：口径(17.0), 胴径(26.7), 器高29.5, 底径(8.3) 色調：外面橙～黄橙～にぶい黄橙～黒褐色, 内面にぶい黄褐色 胎土：砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部縦方向のヘラナデ, 胴部～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ナデ。使用痕：内面胴部下位の器面が剥離している。備考：内外面とも器面が磨滅している。

4 台帳：P78 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部80%, 胴部90%, 底部100% 法量：口径18.8, 胴径21.4, 器高23.0～23.5, 底径7.0 色調：橙～にぶい黄橙～黒褐色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕：外面が二次焼成を受けている。内面胴部器面の一部が剥離している。備考：－

5 台帳：P28・29・34, No.1・2・4・5・8・10・12・13, 表土No.1 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部～胴部上位30%, 底部70% 法量：口径(23.6), 最大径(30.6), 器高(15.0, 4.0), 底径9.0 色調：外面赤～橙～にぶい黄褐～黒褐色, 内面にぶい黄褐色 胎土：砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部上位・底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ヘラナデ, 下位不明。使用痕：－ 備考：内外面とも器面が磨滅しており, 内面は一部剥離している。外面が二次焼成を受けている。

6 台帳：P82 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部50% 法量：口径20.0, 器高(8.7) 色調：外面暗赤褐色, 内面にぶい黄褐色 胎土：砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ヘラナデ。使用痕：－ 備考：内外面とも二次焼成を受けている。

7 台帳：P53, No.3・9・15・21 材質：土師器 器種：甕 残存：底部100% 法量：器高(3.4), 底径7.0 色調：にぶい黄褐色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面不明。使用痕：－ 備考：内外面とも二次焼成を受けている。内面器面が剥離している。

8 台帳：P66, No.1・3 材質：土師器 器種：甕 残存：底部90% 法量：器高(3.1), 底径9.0 色調：にぶい黄褐色 胎土：砂(白少, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：内外面ともヘラ削り。使用痕：－ 備考：－

9 台帳：P63, No.3・6・9・14 材質：土師器 器種：甕 残存：胴部下位～底部50% 法量：器高(9.2), 底径7.4 色調：外面にぶい黄褐色,

内面灰褐色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ?。使用痕：内面器面が薄く剥離している。備考：－

10 台帳：P19・60・68 材質：土師器 器種：甕 残存：完形 法量：口径25.0, 器高22.0, 孔径7.0 色調：外面橙～褐色, 内面橙～にぶい黄橙～黄褐色 胎土：礫(白微, 灰微), 砂(白多, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ, 孔周辺ヘラ削り。使用痕：外面器面が二次焼成を受けている。備考：－

11 台帳：P20, No.2・3・4・11・12 材質：土師器 器種：甕 残存：90% 法量：口径25.6, 器高24.5, 孔径6.8～7.0 色調：外面橙～黄褐～黒褐色, 内面橙色 胎土：礫(白微, 灰微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕：外面器面が磨滅している。孔周辺はひどく磨滅している。備考：－

12 台帳：No.1 材質：土師器 器種：甕 残存：把手部 法量：－ 色調：にぶい橙色 胎土：砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：ヘラナデ・ユビナデ。使用痕：－ 備考：－

13 台帳：P23 材質：土師器 器種：甕 残存：把手部 法量：－ 色調：にぶい橙色 胎土：砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：ヘラナデ・ユビナデ。使用痕：－ 備考：－

14 台帳：P64 材質：土師器 器種：壺 残存：口縁部90%, 胴部～底部100% 法量：口径13.6, 器高14.8, 底径9.6 色調：外面橙～浅黄～褐～黒褐色, 内面浅黄～褐色 胎土：礫(白少), 砂(白多, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り, 底部木葉痕。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ナデ。使用痕：内面胴部器面の一部が剥離している。備考：－

15 台帳：No.2, SD2P1 材質：土師器 器種：壺 残存：口縁部下位～底部90% 法量：胴径12.0, 器高(10.5), 底径6.0 色調：外面浅黄～黒褐色, 内面浅黄色 胎土：砂(白多, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・一部ヘラ削り, 底部木葉痕。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ナデ。使用痕：－ 備考：外面器面全体が磨滅している。器面の整形が荒く凸凹している。

16 台帳：P44・45・50・51, No.3・17・21 材質：土師器 器種：壺 残存：口縁部60%, 胴部～底部100% 法量：口径10.8, 胴径12.2, 器高10.9, 底径6.6 色調：外面浅黄～褐～黒褐色, 内面浅黄色 胎土：砂(白多, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 頸部ヘラミガキ, 胴部上位～中位ヘラナデ, 下位～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ナデ。胴部下位に焼成後外から開けた孔が一つある。使用痕：内面胴部器面の一部が剥離している。備考：－

17 台帳：P24 材質：土師器 器種：小型壺 残存：胴部10%, 底部100% 法量：器高(2.8), 底径2.0 色調：橙色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面胴部ヘラナデ, 底部ヘラ削り。内面ヘラナデ・ナデ。使用痕：－ 備考：－

18 台帳：No.2・4 材質：土師器 器種：壺 残存：口縁部40% 法量：口径(11.6), 器高(5.0) 色調：黒褐色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部上位ヨコナデ, 下位ヘラ削り。内面口縁部上位ヨコナデ後ヘラミガキ, 下位ヘラナデ。内外面とも黒色処理されている。使用痕：－ 備考：－

19 台帳：P32・33・39～43, No.1・3 材質：土師器 器種：高坏 残存：杯部80% 法量：口径17.1, 器高(5.6) 色調：外面赤～浅黄色, 内面赤色 胎土：砂(白少, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ナデ。外面口縁部～体部上位と内面が赤彩されている。使用痕：－ 備考：－

20 台帳：P1・36 材質：土師器 器種：高坏 残存：杯部と脚部の接合部のみ 法量：器高(6.2) 色調：外面赤～浅黄色, 内面杯部赤色, 内面脚部浅黄色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面不明。内面杯部不明, 脚部ナデ。外面と内面杯部は赤彩されている。使用痕：－ 備考：内外面とも器面が非常に磨滅している。

V 古墳時代の遺構と遺物

21 台帳：P8 材質：土師器 器種：杯 残存：70% 法量：口径12.5, 最大径13.9, 器高5.3 色調：黒褐色 胎土：砂(白少, 透少), 白雲母含む 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ後若干のヘラミガキ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ・ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理されている。 使用痕：－ 備考：－

22 台帳：No.2 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径(12.6), 最大径(13.8), 器高(3.7) 色調：外面黒褐色, 内面オリーブ褐色 胎土：砂(白少, 透少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面ヨコナデ。内外面とも黒色処理されている。 使用痕：－ 備考：－

23 台帳：P80 材質：土師器 器種：杯 残存：40% 法量：口径(12.4), 最大径(13.6), 器高5.6 色調：外面浅黄～黒色, 内面浅黄色 胎土：砂(白少, 透少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部～体部上位ヨコナデ, 中位～下位ヘラナデ後若干のヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

24 台帳：P9・12, No.24 材質：土師器 器種：杯 残存：完形 法量：口径12.9, 最大径13.3, 器高4.8 色調：黒褐～浅黄色 胎土：砂(白少, 透少), 白雲母含む 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラナデ後放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理されている。 使用痕：－ 備考：－

25 台帳：P5・6, No.3 材質：土師器 器種：杯 残存：完形 法量：口径12.5, 器高4.9 色調：外面橙～褐色, 内面赤色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部～体部上位ヨコナデ, 中位ナデ, 下位ヘラ削り。内面ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：内面器面の一部が剥離している。

26 台帳：P3 材質：土師器 器種：杯 残存：完形 法量：口径13.3, 器高4.5 色調：外面橙～黒褐色, 内面赤褐～橙～褐色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部～体部上位ヨコナデ, 下位ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：内面器面の一部が剥離している。

27 台帳：P46～49・52, No.1・3・21 材質：土師器 器種：杯 残存：完形 法量：口径13.5, 器高4.8 色調：にぶい橙～赤色 胎土：砂(白少, 透多, 赤微) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部～体部上位ヨコナデ, 中位～下位ヘラナデ。外面口縁部と内面口縁部～体部中位が赤彩されている。 使用痕：口縁部端部が磨減している。 備考：－

28 台帳：P7 材質：土師器 器種：杯 残存：完形 法量：口径15.8, 器高5.8 色調：外面赤～黒色, 内面赤色 胎土：礫(灰微), 砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。内外面とも赤彩されている。 使用痕：－ 備考：内面器面の一部が剥離している。

29 台帳：P10・72 材質：土師器 器種：杯 残存：完形 法量：口径15.2, 器高5.3 色調：外面赤～橙～黒色, 内面赤色 胎土：礫(灰微), 砂(白少, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ・ヘラミガキ?。内外面とも赤彩されている。 使用痕：－ 備考：内面器面の一部が剥離している。

30 台帳：P14・16・17, No.18 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部～体部上位70% 法量：口径14.8, 器高(4.1) 色調：赤～黒褐色 胎土：砂(白少, 透少, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラナデ後放射状にヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

31 台帳：P53, No.3・17 材質：土師器 器種：杯 残存：20% 法量：口径(16.2), 器高3.8 色調：外面赤～にぶい黄褐～黒色, 内面赤色 胎土：砂(白少, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部～体部中位ヨコナデ, 下位ナデ?。内外面とも赤彩されている。 使用痕：－ 備考：－

32 台帳：P12・55～57・69・73・76, No.1・5・18・22 材質：土師器 器種：杯 残存：60% 法量：口径14.7, 器高3.8 色調：赤～赤

褐～黒褐色 胎土：砂(白少, 透少, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラナデ後放射状にヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

33 台帳：P65・81, No.26 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部60%, 体部100% 法量：口径15.2, 器高4.6 色調：外面橙～にぶい橙色, 内面橙色 胎土：砂(白少, 透少, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部上位ヘラナデ・ナデ, 下位ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラナデ後放射状にヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

34 台帳：P22 材質：土師器 器種：杯 残存：完形 法量：口径14.2, 器高4.6 色調：橙色 胎土：礫(白微, 灰微), 砂(白少, 透少, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

35 台帳：P74 材質：土師器 器種：杯 残存：完形 法量：口径15.1, 器高5.4 色調：橙色 胎土：礫(白微, 灰微), 砂(白多, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：内外面とも器面が磨減している。

36 台帳：P6, No.3・18 材質：土師器 器種：杯 残存：70% 法量：口径14.8, 器高5.7 色調：外面橙～赤褐色, 内面黄橙～赤褐色 胎土：砂(白少, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部上位ナデ, 下位ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：内面器面の一部が剥離している。

37 台帳：P4・11 材質：土師器 器種：杯 残存：完形 法量：口径13.7, 器高5.3 色調：にぶい黄橙～にぶい褐～褐色 胎土：砂(白少, 透少, 黒微) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラナデ後放射状にヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：内面体部器面の一部が剥離している。

38 台帳：P6・13・15・77, No.18 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部～体部上位20% 法量：口径(14.6), 器高(3.5) 色調：橙色 胎土：砂(白多, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラナデ後放射状にヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

39 台帳：P28, No.2・4・12 材質：土師器 器種：小型杯 残存：70% 法量：口径9.8, 器高3.9 色調：にぶい黄褐～黒褐色 胎土：砂(白少, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ナデ。外面に輪積み痕を残す。 使用痕：－ 備考：－

40 台帳：No.1・4 材質：土師器 器種：小型杯 残存：30% 法量：口径(10.3), 器高4.2～4.4 色調：にぶい黄褐～黒褐色 胎土：砂(白少, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部上位ヘラナデ・ナデ, 下位ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：器形が歪んでいる。

41 台帳：P28, No.2・4 材質：土師器 器種：小型杯 残存：70% 法量：口径9.8, 器高3.6, 底径6.0 色調：にぶい黄褐～黒褐色 胎土：砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部上位ナデ, 下位ヘラ削り, 底部木葉痕。内面口縁部～体部上位ヨコナデ, 下位ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：－

42 台帳：P28, No.2・4 材質：土師器 器種：小型杯 残存：20% 法量：口径(9.0), 器高3.5 色調：外面橙～にぶい黄橙色, 内面ににぶい黄橙色 胎土：砂(白少, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部上位ヘラナデ・ナデ, 下位ヘラ削り。内面口縁部～体部上位ヨコナデ, 下位ナデ。 使用痕：－ 備考：－

43 台帳：P28, No.2・4・7 材質：土師器 器種：小型杯 残存：40% 法量：口径(10.2), 器高3.5 色調：にぶい黄褐～黒褐色 胎土：砂(白少, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部上位ナデ, 下位ヘラ削り。内面ヨコナデ。 使用痕：－ 備考：－

44 台帳：P28, No.2・4 材質：土師器 器種：小型杯 残存：20%

法量：口径(11.2), 器高(3.1) **色調**：橙～にぶい黄褐～黒褐色 **胎土**：砂(白少, 透多, 黒多) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部上位ナデ, 下位ヘラ削り。内面ヨコナデ。 **使用痕**：－ **備考**：－

45 **台帳**：P28, No.2 **材質**：土師器 **器種**：小型杯 **残存**：10% **法量**：口径(10.0), 器高(2.5) **色調**：にぶい黄褐色 **胎土**：砂(白少, 透多, 黒少) **焼成**：良好 **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面ヨコナデ。 **使用痕**：－ **備考**：－

46 **台帳**：P31 **材質**：土師質 **種類**：支脚 **残存**：上位のみ **法量**：長(2.8), 最大径5.0 **色調**：黄橙色 **胎土**：砂(白多, 透多) **焼成**：良好 **技法等**：ヘラナデ・ナデ。 **使用痕**：表面に粘土の付着が見られる。 **備考**：－

47 **台帳**：P61, No.3・9 **材質**：土師質 **種類**：支脚 **残存**：下位のみ **法量**：長(3.8), 底径7.0 **色調**：にぶい黄褐色 **胎土**：砂(白多, 透多) **焼成**：良好 **技法等**：ヘラナデ・ナデ。 **使用痕**：外面器面が非常に磨滅している。 **備考**：－

48 **台帳**：S18 **材質**：砂岩 **種類**：敲石・砥石 **法量**：長21.0, 幅19.1, 厚4.7, 重量2789.9g **色調**：黄灰色 **備考**：両面に敲打痕がみられる。一面には鉄錆の付着と溝状の砥面がみられ, もう一面は全体的に砥面Aがみられる。

49 **台帳**：S1 **材質**：流紋岩 **種類**：砥石 **法量**：長9.0, 幅4.2, 厚2.0～3.7, 重量171.3g **色調**：灰白色 **備考**：砥面はA・B2面。

第30号住居跡

1 **台帳**：P5 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：完形 **法量**：口径17.7, 胴径22.8, 器高28.0～28.2, 底径8.0 **色調**：外面にぶい黄橙～褐～黒褐色, 内面黄橙～にぶい黄橙色 **胎土**：礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 胴部～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ナデ。輪積痕が見られる。焼成良好。 **使用痕**：外面が二次焼成を受けている。内面胴部中位～下位の器面が薄く剥離している。 **備考**：－

2 **台帳**：P7・49, No.7・14 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：口縁部～胴部上位90%, 下位～底部100% **法量**：口径17.8, 胴径20.1, 器高19.1, 底径7.0 **色調**：外面橙～にぶい黄橙～にぶい黄褐色～黒褐色, 内面橙～にぶい褐色 **胎土**：礫(白少), 砂(白多, 透多) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 胴部～底部ヘラ削り。内面口縁部上位ヨコナデ, 下位ヘラ削り, 胴部ヘラナデ・ナデ。焼成良好。 **使用痕**：外面胴部下位の器面が磨滅している。 **備考**：－

3 **台帳**：P38・42, No.6・7・9 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：口縁部～胴部50%, 底部10% **法量**：口径20.0, 器高19.5, 底径6.0 **色調**：外面赤褐～橙～にぶい黄褐～黒褐色, 内面にぶい黄橙～にぶい黄褐～黒褐色 **胎土**：礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 胴部～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。焼成良好。 **使用痕**：外面が二次焼成を受けており, 煤状物が付着している。内面器面の一部が剥離している。 **備考**：－

4 **台帳**：P3・18～23, No.5～11 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：口縁部～胴部中位100% **法量**：口径16.0, 器高(6.7), **色調**：橙～にぶい黄橙～にぶい黄褐～黒褐色 **胎土**：砂(白多, 透多) **技法等**：焼成良好。 **使用痕**：－ **備考**：内外面とも二次焼成を受け, 器面がひどく磨滅している。

5 **台帳**：P52, No.6・9・15 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：底部100% **法量**：底径6.8, 器高(7.0) **色調**：外面橙～黄橙～黒褐色, 内面にぶい黄褐色～黒褐色 **胎土**：礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) **技法等**：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。焼成良好。 **使用痕**：外面が二次焼成を受けている。 **備考**：－

6 **台帳**：P24～35・37・46～48, No.5・6・9・11 **材質**：土師器 **器種**：甕 **残存**：口縁部80%, 胴部～底部100% **法量**：口径25.8, 器高21.3, 底径6.8 **色調**：外面橙～黄橙～にぶい黄橙～黒色, 内面橙～黄橙～にぶい黄褐色 **胎土**：礫(白微, 灰微), 砂(白多, 透多, 黒少) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。焼成良好。 **使用痕**：内外面とも胴部下位～孔周辺が磨滅している。

備考：－

7 **台帳**：P51 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：10% **法量**：口径(14.0), 器高(3.1) **色調**：赤褐～暗赤褐色 **胎土**：砂(白多, 透多) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ後ヘラミガキ。焼成良好。 **使用痕**：－ **備考**：内外面とも二次焼成を受けている。

8 **台帳**：P10・11・13～15・17 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：60% **法量**：口径13.1, 器高4.5 **色調**：明黄褐～にぶい黄橙～黒褐色 **胎土**：礫(白微), 砂(白多, 透多) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部上位ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。焼成良好。 **使用痕**：－ **備考**：内面体部器面が剥離している。

9 **台帳**：P40 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：40% **法量**：口径13.8, 器高4.6 **色調**：にぶい黄橙～黒褐色 **胎土**：砂(白多, 透多) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。焼成良好。 **使用痕**：－ **備考**：－

10 **台帳**：P16, No.7 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：90% **法量**：口径13.0, 最大径13.5, 器高3.9 **色調**：にぶい黄橙～黒褐色 **胎土**：砂(白多, 透多) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り・ヘラナデ。内面口縁部～体部上位ヨコナデ, 下位ヘラナデ後ヘラミガキ。焼成良好。 **使用痕**：－ **備考**：－

11 **台帳**：P4 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：90% **法量**：口径12.0, 最大径13.1, 器高4.8 **色調**：外面にぶい黄橙～黒褐色, 内面黒褐色 **胎土**：砂(白多, 透多) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。焼成良好。 **使用痕**：口縁端部が磨滅している。 **備考**：－

12 **台帳**：P50 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：完形 **法量**：口径10.6, 最大径11.6, 器高5.7 **色調**：にぶい黄橙～にぶい黄褐色 **胎土**：砂(白多, 透多, 黒多) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ?。焼成良好。 **使用痕**：－ **備考**：内外面とも器面が磨滅し, 一部剥離している。外面に煤状物が付着している。

13 **台帳**：P2 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：完形 **法量**：口径11.6, 最大径13.0, 器高5.2 **色調**：にぶい黄橙～にぶい黄褐色 **胎土**：砂(白多, 透多) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部～体部上位ヨコナデ, 下位ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。焼成良好。 **使用痕**：口縁端部が磨滅している。 **備考**：－

14 **台帳**：P9 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：90% **法量**：口径11.3, 最大径12.7, 器高4.9 **色調**：外面明黄褐～黒褐色, 内面黒褐色 **胎土**：礫(赤微), 砂(白多, 透多) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部～体部上位ヨコナデ, 下位ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。焼成良好。 **使用痕**：口縁端部が磨滅している。 **備考**：－

15 **台帳**：P8・9, No.14 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：完形 **法量**：口径12.6, 最大径13.7, 器高5.0 **色調**：明黄褐～にぶい黄橙～黒褐色 **胎土**：礫(白微), 砂(白多, 透多) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部～体部上位ヨコナデ, 下位ヘラナデ後ヘラミガキ。焼成良好。 **使用痕**：－ **備考**：－

16 **台帳**：P12・45 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：80% **法量**：口径12.5, 最大径13.9, 器高(5.6) **色調**：外面にぶい黄橙～にぶい黄褐色, 内面にぶい黄褐色 **胎土**：砂(白多, 透多, 黒多) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。焼成良好。 **使用痕**：口縁端部が磨滅している。 **備考**：－

17 **台帳**：P43・44 **材質**：土師器 **器種**：杯 **残存**：50% **法量**：口径13.8, 最大径14.9, 器高4.4 **色調**：黒褐色 **胎土**：砂(白多, 透多) **技法等**：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部～体部上位ヨコナデ, 下位ヘラナデ。内外面とも黒色処理。焼成良好。 **使用痕**：口縁端部が磨滅している。 **備考**：－

V 古墳時代の遺構と遺物

18 台帳：P41 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部20%，体部50% 法量：口径(12.1)，最大径14.1，器高4.8 色調：黒褐色 胎土：礫(灰微)，砂(白多，透多) 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁部～体部上位ヨコナデ，下位ヘラナデ。内外面とも黒色処理。焼成良好。 使用痕：－ 備考：製作時の粘土板が残る。

19 台帳：P6 材質：土師質 器種：支脚 残存：完形 法量：長15.6，短径2.5，長径6.9 色調：橙～にぶい黄橙～褐～灰褐色 胎土：砂(白多，透多，黒多) 技法等：ナデ・ユビナデ。焼成良好。 使用痕：被熱した粘土の付着が見られる。 備考：－

20 台帳：表土No.2 材質：頁岩 種類：紡錘車 法量：径4.4，厚0.8，孔径1.2～1.3，重量18.3g 色調：青灰色 備考：破損品。

21 台帳：S4 材質：砂岩 種類：敲石 法量：長7.3，幅6.8，厚2.7，重量173.7g 色調：灰色 備考：敲打痕はAの一面。

遺構に伴わない古墳時代の遺物

1 台帳：40B住P44・53，No.5 材質：土師器 器種：杯 残存：70% 法量：口径(12.0)，最大径(12.7)，器高5.3 色調：外面橙～赤色，内面赤色 胎土：礫(白微)，砂(白少，透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部上位ヘラナデ？，下位ヘラ削り。内面ヘラナデ。外面体部にヘラ記号。 使用痕：－ 備考：口縁部端部のほとんどが欠失している。内外面とも器面が磨滅している。

2 台帳：40B住P24，No.5 材質：土師器 器種：杯 残存：60% 法量：口径(14.2)，器高(6.3) 色調：赤～暗赤色 胎土：砂(白少，透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。 使用痕：－ 備考：－

3 台帳：40B住No.3・5 材質：土師器 器種：杯 残存：30% 法量：口径(13.0)，最大径(13.8)，器高(4.1) 色調：外面橙～黒色，内面橙色 胎土：礫(白微，透少)，砂(白少，透少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

4 台帳：40B住No.2～5 材質：土師器 器種：杯 残存：20% 法量：口径(14.0)，器高(4.2) 色調：外面にぶい赤色，内面赤色 胎土：礫(白微)，砂(白多，透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部上位～中位ヘラナデ，下位ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラミガキ？。 使用痕：－ 備考：内外面とも器面の一部が剥離している。

5 台帳：40B住P43・46・48・54，No.5 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部80%，体部40% 法量：口径(15.6)，器高(4.6) 色調：外面赤～黒色，内面赤色 胎土：礫(白少)，砂(白多，透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ？。 使用痕：－ 備考：内面体部器面の大半が薄く剥離している。

6 台帳：40B住No.7・13 材質：土師器 器種：杯 残存：20% 法量：口径(14.0)，器高(5.2) 色調：赤色 胎土：礫(白微)，砂(白少，透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ・ヘラ削り？。内面口縁部不明，体部ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：外面器面は磨滅しており，内面器面の大半が剥離している。

7 台帳：40B住P10・33，No.5 材質：土師器 器種：杯 残存：30% 法量：口径(14.0)，器高(4.3) 色調：外面にぶい橙～黒褐色，内面にぶい橙～褐色 胎土：礫(白微)，砂(白少，透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，体部不明。 使用痕：－ 備考：内面器面の所々が薄く剥離している。

8 台帳：40B住No.5 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径(16.0)，器高(4.6) 色調：外面赤～浅黄色，内面赤色 胎土：砂(白少，透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部上位ヘラ削り，下位ヘラナデ。内面口縁部上位ヨコナデ，下位ヘラナデ，体部ヘラナデ・ヘラ削り。 使用痕：－ 備考：－

9 台帳：47住P15～17 材質：土師器 器種：杯 残存：80% 法量：口径14.5，器高5.9 色調：外面明黄褐～黒色，内面明黄褐色 胎土：砂(白少，透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ

削り後ヘラナデ・ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ・ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

10 台帳：47住P3 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部～体部40%，底部100% 法量：口径13.5，器高4.7，底径4.0 色調：赤～黒色 胎土：砂(白多，透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ，底部木葉痕。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ・ヘラミガキ？。 使用痕：－ 備考：外面器面の一部に煤状物が付着している。体部下位に粘土板の接合面がみられる。内面器面が非常に磨滅している。

11 台帳：47住P356・358，No.79 材質：土師器 器種：椀 残存：80% 法量：口径14.5，器高6.7～6.9，底径4.0 色調：外面橙～黒色，内面橙色 胎土：砂(白少，透少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ・ヘラミガキ，底部ヘラ削り。内面口縁部～体部中位ヨコナデ，下位ヘラナデ・ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

12 台帳：47住P35・54・55 材質：土師器 器種：小型甕 残存：口縁部～胴部上位50% 法量：口径(12.4)，器高(6.1) 色調：外面橙～黒色，内面橙色 胎土：礫(白微)，砂(白多，透多，黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，胴部ヘラ削り後ヘラナデ・ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：－

13 台帳：52住P19 材質：土師器 器種：杯 残存：90% 法量：口径13.0，器高5.5 色調：外面赤～黒色，内面赤色 胎土：砂(白多，透多，黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部上位ナデ，中位ヘラナデ・ヘラミガキ，下位ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：－

14 台帳：47住S5 材質：細粒凝灰岩 種類：管玉 法量：径0.8，長3.6，孔径0.2～0.4，重量4.26g 色調：緑灰色 備考：孔は両側より穿孔。

15 台帳：55住S1 材質：滑石 種類：管玉 法量：径0.7，長2.2，孔径0.2，重量1.51g 色調：オリープ灰色 備考：孔は両側より穿孔。両側の孔周辺が紐擦れしている。

16 台帳：55住S13 材質：滑石 種類：勾玉 法量：長1.6，幅0.6，厚0.4，孔径0.1～0.2，重量0.94g 色調：青緑色 備考：孔は両側より穿孔。

Ⅵ 奈良・平安時代の遺構と遺物

1 調査の概要

鷹ノ巣遺跡では、奈良・平安時代の遺構として、住居跡を16基、溝状遺構1条を検出した。

住居跡の時期 出土した遺物から推定すると、以下のようなになる。

- ・ 8世紀第1四半期(3基)：第29・38・44号住居跡
- ・ 8世紀第2四半期(2基)：第32・34A号住居跡
- ・ 8世紀第3四半期(4基)：第33・63・65・67号住居跡
- ・ 8世紀第4四半期(1基)：第61号住居跡
- ・ 8世紀後半？(1基)：第31A号住居跡
- ・ 9世紀第2四半期(1基)：第57号住居跡

・ 9世紀中葉(2基)：第58・66号住居跡

・ 9世紀第3四半期(2基)：第54・56号住居跡

住居跡の分布 8世紀第2～4四半期の住居跡は調査区北側の台地の比較的平坦な位置に分布するのに対して、8世紀第1四半期と9世紀の住居跡は、調査区南側のやや傾斜地に分布する。

住居跡の規模 主軸長で比較すると、最大が第32号住居跡の8.61mで、最小が第67号住居跡の2.26mである。8mを超える大型住居跡と2m強の小型住居跡の存在が、鷹ノ巣遺跡の特徴の一つである。

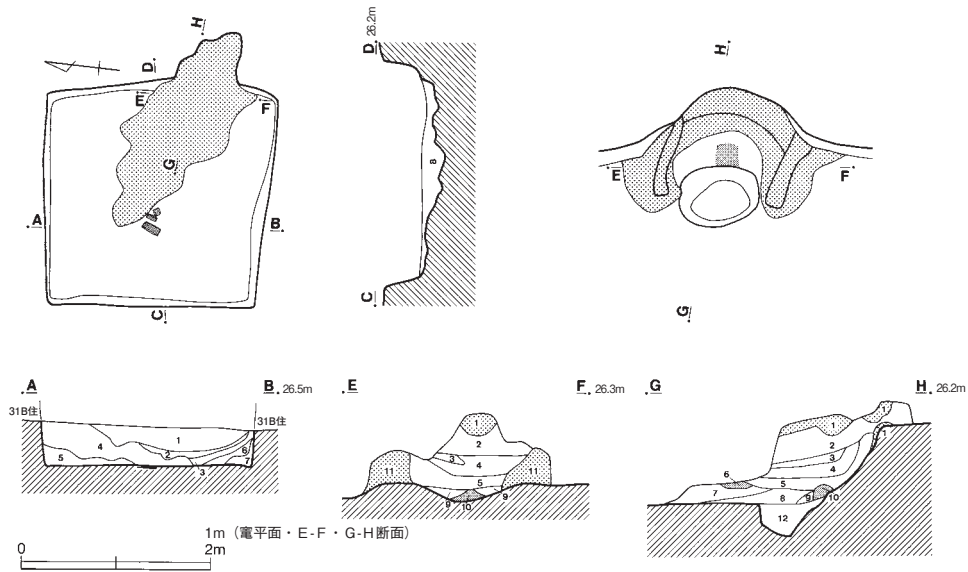


第73図 奈良・平安時代住居跡分布図(グリッドは1辺10m)

第9表 奈良・平安時代住居跡一覧表

住居跡番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	主軸	竈位置	備考
29	D-5・6	4.27	3.86	N-7°-E	北壁	
31A	H-17	2.40	2.38	N-83°-E	東壁	
32	C・D-17・18	8.61	8.15	N	北壁	2007年度報告
33	D・E-16・17	6.26	6.19	N-8°-W	北壁	2007年度報告
34A	D・E-15・16	6.08	5.67	N-3°-E	北壁	2007年度報告
38	H-15・16	4.96	4.87	N-12°-E	北壁	2007年度報告
44	G-11	5.02	4.80	N-12°-E	北壁	
54	H・I-14・15	3.82	3.44	N-5°-E	北壁	
56	H-17	3.08	3.04	N-3°-E	北壁	
57	G-12	4.26	3.88	N-14°-E	北壁	2007年度報告
58	H-14	3.62	3.52	N-3°-W	北壁	
61	F-13・14	3.52	3.52	N-20°-W	北壁	
63	D・E-13・14	3.36	3.33	N-75°-E	南東隅	2007年度報告
65	D-17・18	5.26	4.79	N-11°-W	北壁	2007年度報告
66	F-15・16	2.28	1.96	N-3°-E	北壁	
67	D-14	2.26	1.86	N-6°-W	北東隅	2007年度報告 炭化種子(イネ)検出

2 2005年度住居跡の調査



第31A号住居跡堆積覆土

- 第1層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を少量, ロームブロックを微量に含む 縮まりやや有り)
- 第3層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り)
- 第4層：褐色土層(ロームブロックを多量, 黒色土を少量含む 縮まりやや有り)
- 第5層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り)
- 第6層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り)
- 第7層：明褐色土層(ロームブロックを多量に含む 縮まりやや有り)
- 第8層：暗褐色土とロームブロックの混合層(掘形埋土 径約1~3cm ロームブロック・ローム粒を多量に含む 縮まり有り)

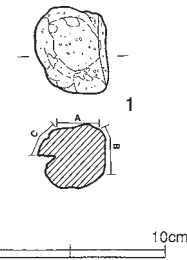
第31A号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：黄白色粘土層(黄白色粘土を主体とする 縮まり有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒を少量含む 縮まり有り)
- 第3層：黄白色粘土と黒褐色土の混合層(ローム粒を多量に含む 縮まり有り)
- 第4層：黒褐色土層(第2層に似る ローム粒を少量含む 縮まり有り)
- 第5層：黒褐色土層(ローム粒・焼土粒・白色粘土を少量含む 縮まりやや有り)
- 第6層：橙色土層(焼土粒を多量に含む 縮まりやや有り)
- 第7層：白色粘土と黒褐色土の混合層(焼土粒を微量に含む 縮まりやや有り)
- 第8層：黒褐色土層(ローム粒・焼土粒を少量含む 縮まりやや有り)
- 第9層：暗褐色土層(ローム粒を多量, 焼土粒を少量含む 縮まりやや有り)

第10層：橙色土層(火床面 焼土を主体とする 縮まりやや有り)

第11層：黄白色粘土層(袖部 黄白色粘土を主体とする 縮まり有り)

第12層：黒褐色土層(径1~2cmロームブロック・ローム粒を少量含む 縮まりやや有り)



第74図 第31A号住居跡・出土遺物(濃網：焼土・淡網：粘土)

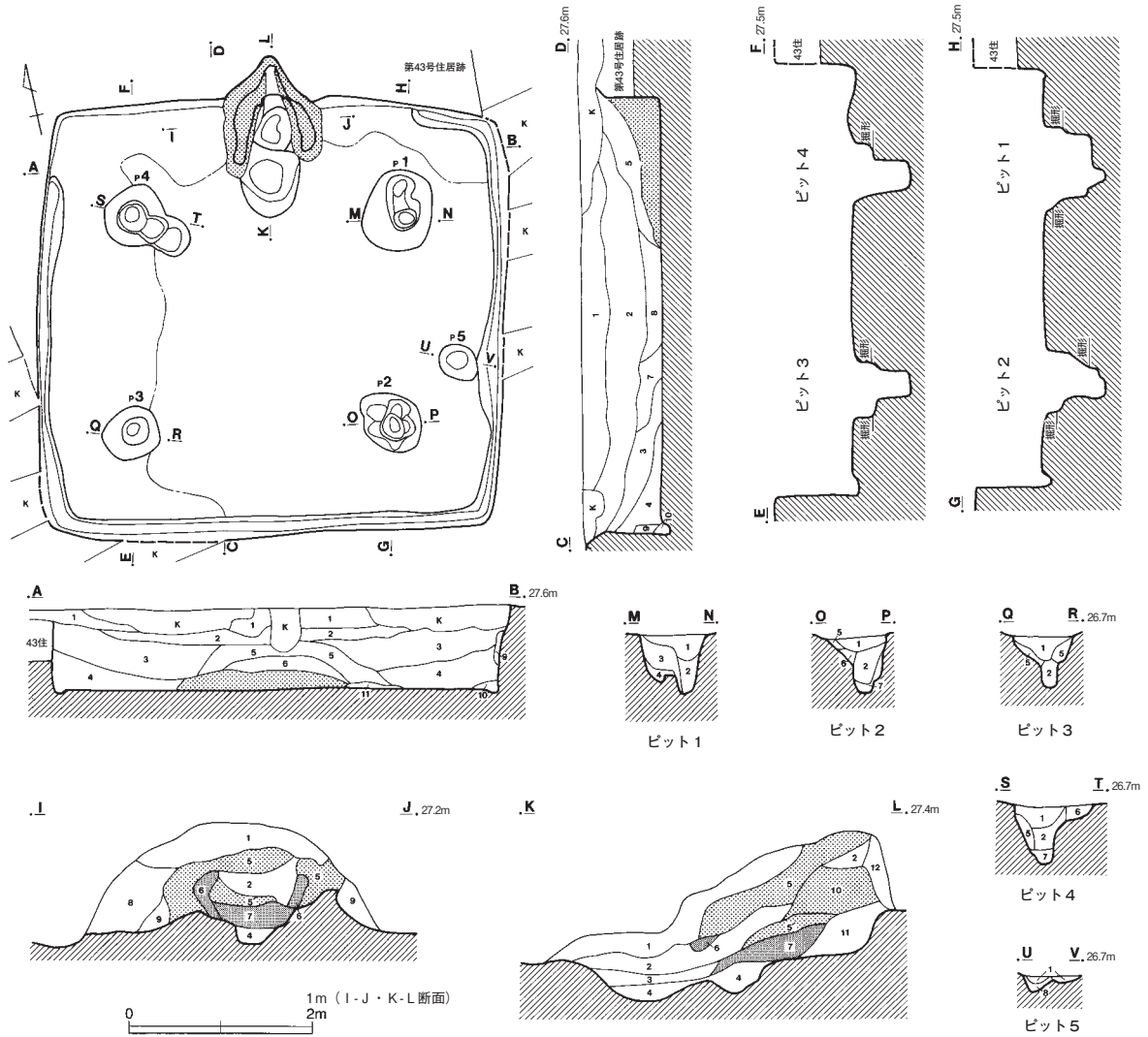
第31A号住居跡

遺構

H-17区に位置する。第31B号住居跡を掘り込んでいる。平面形は、ほぼ方形を呈する。竪穴部の規模は2.40×2.38mである。壁高は東壁・西壁64cm, 南壁70cm, 北壁68cm。主軸方向はN-83°-Eを指す。壁周溝はない。床面に硬化面はみられない。竪穴部覆土は、下層にロームブロックを含む褐色土の第4層や第5層が

堆積し、その上にロームブロックを含まない第1層の褐色土がみられる。

竈は東壁の中央よりやや南に位置する。残存状況は、竈が崩れて構築材の白色粘土が竪穴部中央付近までみられるが、両袖部は残っていた。両袖部先端は竪穴部の壁近くにあるため、竪穴内部への竈の張り出しは少ない。第74図E F断面の第10層に焼土が多量にみられることか



第44号住居跡堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒を微量に含む 縮まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を少量, 焼土粒を微量に含む 縮まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を多量, 焼土粒を少量, 径約1cmロームブロックを微量に含む 縮まりやや有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒を少量, 径約1cmロームブロック・炭化物粒・焼土粒を微量に含む 縮まりやや有り)
- 第5層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を多量, 径約2cm焼土ブロックを微量に含む 縮まりやや有り)
- 第6層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を多量, 径1~3cmロームブロック・炭化物粒・黄色粘土粒を少量含む 縮まりやや有り)
- 第7層：褐色土層(径1~5cmロームブロック・ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り)
- 第8層：暗褐色土層(ローム粒を多量, 径約2cmロームブロックを少量, 焼土粒を微量に含む 縮まりやや有り)
- 第9層：褐色土層(ローム粒を多量, 焼土粒を少量含む 縮まり無し)
- 第10層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まり無し)
- 第11層：橙色土層(焼土粒を主体とする 炭化物粒を多量に含む 縮まりやや有り)

第44号住居跡ピット1~5堆積覆土

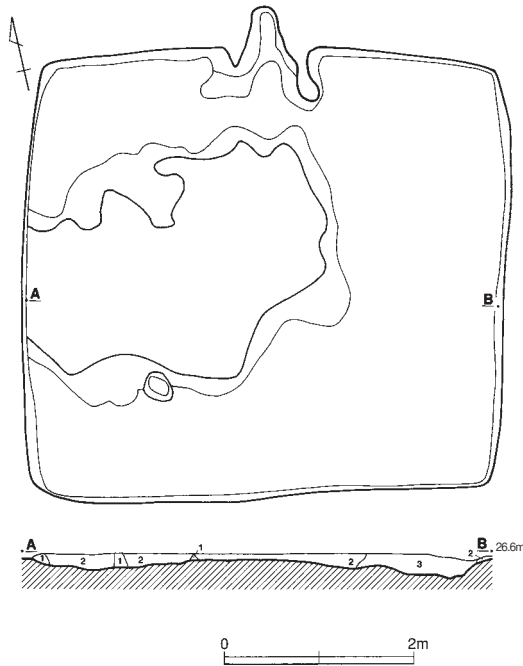
- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を少量, 炭化物粒を微量に含む 縮まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(柱痕 ローム粒を多量, 径約1cmロームブロックを少量含む 縮まり無し)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を極多量, 径1~2cmロームブロックを多量に含む 縮まり有り)
- 第4層：褐色土層(径1~5cmロームブロックを多量に含む 縮まり強く有り)

- 第5層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り)
- 第6層：褐色土層(ローム粒を極多量, 径1~5cmロームブロックを多量に含む 縮まりやや有り)
- 第7層：暗褐色土層(ローム粒を極多量, 径1~2cmロームブロックを多量に含む 縮まり強く有り)
- 第8層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まりやや有り)

第44号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(黄白色粘土ブロック・黄白色粘土粒を少量, 焼土粒を微量に含む 縮まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(黄白色粘土粒・焼土粒を少量, ローム粒を微量に含む 縮まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を少量含む 縮まりやや有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒を多量, 径1~3cmロームブロックを少量含む 縮まりやや有り)
- 第5層：黄褐色砂質土層(黄褐色砂質土を主体とする 一部被熱により赤化している 縮まり有り)
- 第5'層：黄褐色砂質土層(第5層に暗褐色土が少量混じる土層 縮まり有り)
- 第6層：橙褐色砂質土層(第5層が被熱した土層 縮まりやや有り)
- 第7層：褐色土層(径1~3cm焼土ブロック・焼土粒を少量含む 縮まりやや有り)
- 第8層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を微量に含む 縮まりやや有り)
- 第9層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 縮まり有り)
- 第10層：黄白色砂質土層(天井部 黄白色砂質土を主体とする 縮まりやや有り)
- 第11層：黒褐色土層(煙道部 ローム粒・焼土粒・粘土粒を少量含む 縮まりやや有り)
- 第12層：暗褐色土層(第43号住居跡覆土)

第75図 第44号住居跡(濃網: 焼土・淡網: 粘土)



第44号住居跡掘形堆積覆土

- 第1層：明褐色土層（ローム土を主体とする 締まり有り）
- 第2層：黒褐色土層（径1～3cmロームブロック・ローム粒を多量に含む 締まり有り）
- 第3層：褐色土層（径1～3cmロームブロック・ローム粒を多量に含む 締まり有り）

第76図 第44号住居跡掘形

ら、ここが火床面と思われる。煙道部は、壁面に粘土を張って煙突とし、その粘土が被熱していた。

ピットは竈の前に1基検出した。床面からの深さは32cmを測る。

住居掘形は、竈付近が他よりも深く掘り込まれる。

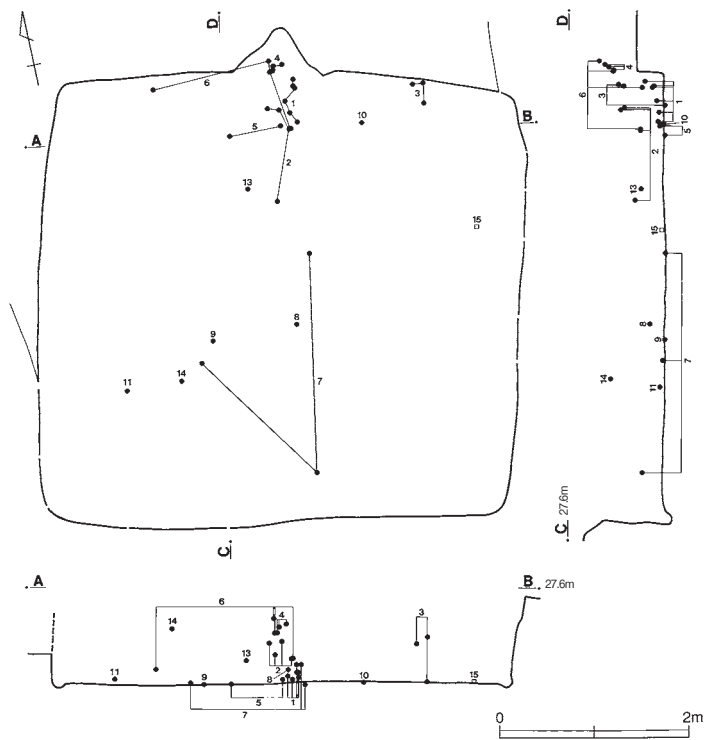
遺物の出土状況 出土遺物は非常に少なく、図化できる遺物は第74図1の軽石しかない。竪穴部中央付近から炭化材が3点出土した。

遺物 図化できた遺物は軽石1点である。

住居の年代は、図化できない土器片から8世紀後半と推測される。

第44号住居跡

遺構 G-11区に位置する。第43号住居跡の一部を掘り込んでいる。東西方向に耕作によるトレンチャーが入り、覆土上層が攪乱されている。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は5.02×4.80m。壁高は東壁96cm、西壁92cm、南壁83cm、北壁79cm。主軸方向はN-12°-Eを指す。壁周溝は全周せず、北壁の一部と東壁・南壁・西壁にみられ、幅8～20cm、床面からの深さ3～



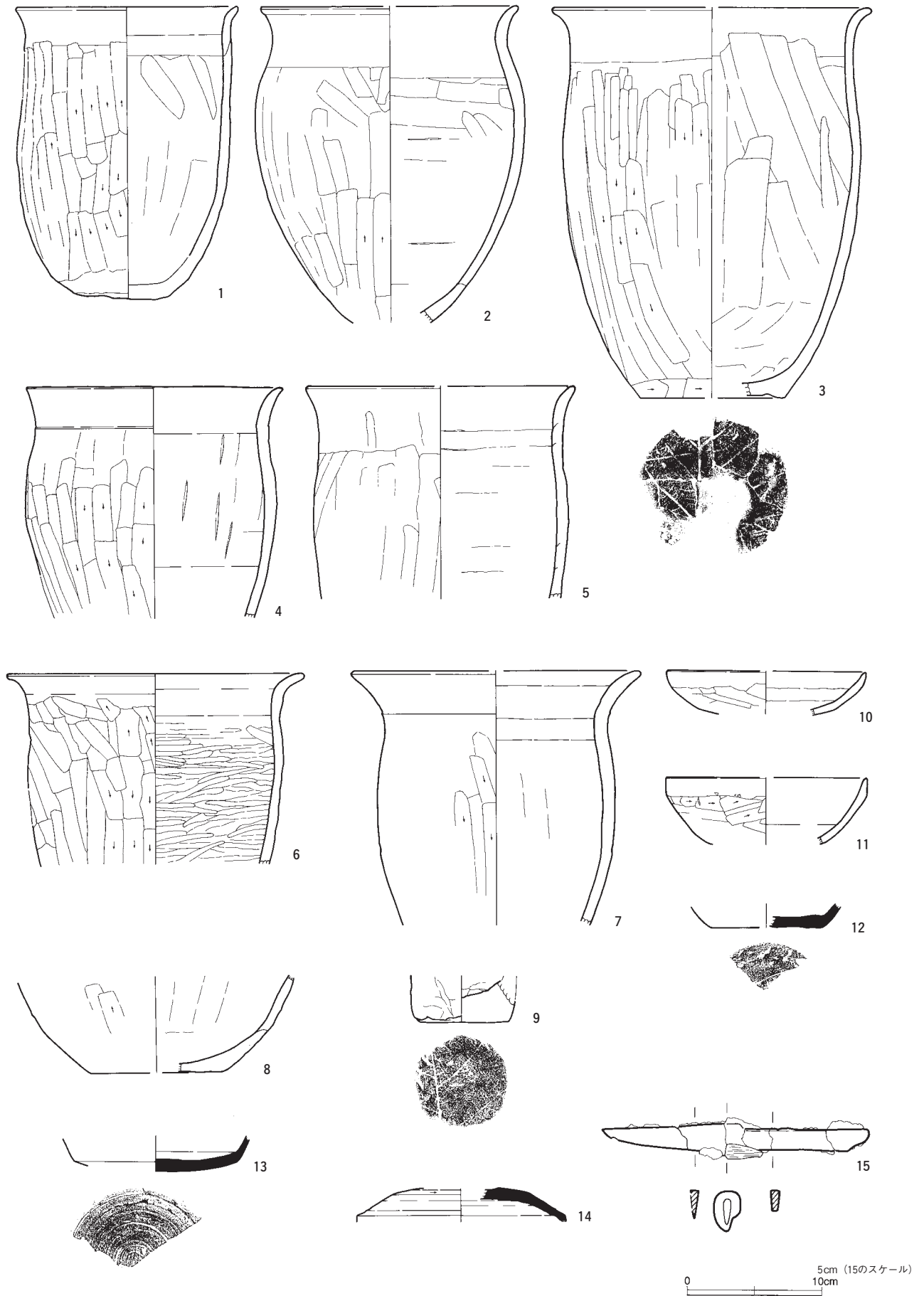
第77図 第44号住居跡遺物出土状況

7cmを測る。床面は北壁際と西壁際を除いて硬化している。

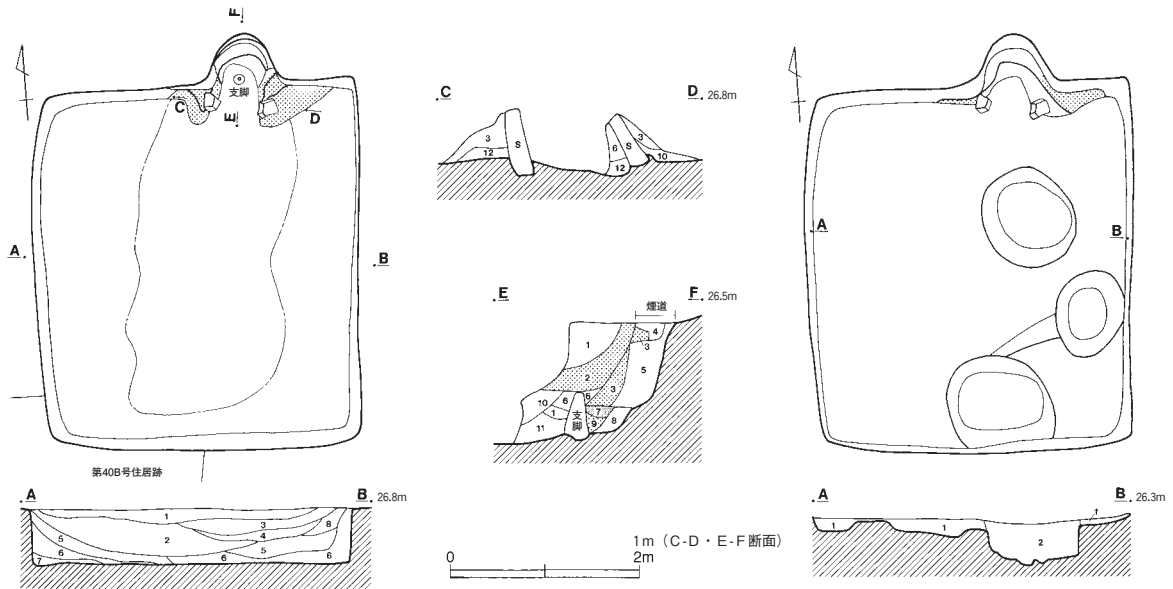
竪穴部覆土は、暗褐色土が主体で自然堆積と思われる。竈は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は、非常によい。竈の構築材として黄白色砂質粘土が使用されている。壁面への掘り込みは、40cm程突出する。煙道部の一部は、第43号住居跡の覆土を利用している。第11層は煙道部内に堆積した土層で、その上層の粘土は被熱し赤化している。燃焼部には多量の焼土がみられる。袖部の下部は、地山のローム土を竪穴部掘削の際に掘り残して利用している。

ピットは5基検出された。ピット1～4は主柱穴、ピット5は出入り口施設に伴うものと思われる。床面からの深さは、ピット1・2が67cm、ピット3が64cm、ピット4が65cm、ピット5が17cmである。主柱穴のピット1～4にみられる第2層は、締まりがなく柱痕と思われる。第3～6層は掘形覆土。ピット1の北側とピット4の東側に埋め戻されているピットを確認した。

住居掘形は、竪穴部の西壁から中央部以外を深く掘り込んでいる。



第78図 第44号住居跡出土遺物



第54号住居跡堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：褐色土層(ローム粒を多量、径1～3cmロームブロックを少量含む 締まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を多量、径1～3cmロームブロックを微量に含む 締まりやや有り)
- 第4層：黒褐色土層(ローム粒を多量、径約1cmロームブロックを少量含む 締まりやや有り)
- 第5層：黒褐色土層(ローム粒を少量、径1～3cmロームブロックを微量に含む 締まり有り)
- 第6層：暗褐色土層(ローム粒を少量、径約1cmロームブロックを微量に含む 締まり有り)
- 第7層：黒褐色土層(ローム粒を少量、径約1cmロームブロックを微量に含む 締まりやや有り)
- 第8層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)

第54号住居跡竈堆積覆土

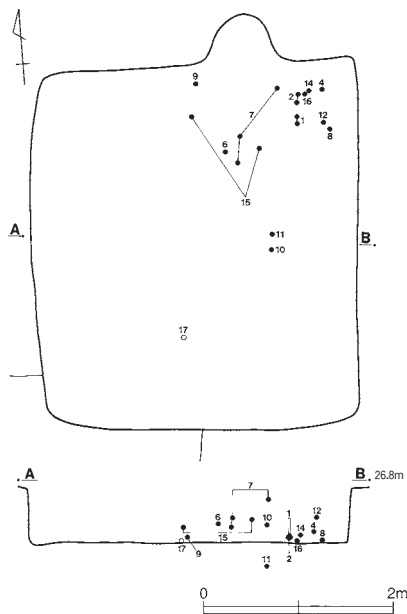
- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まり有り)
- 第2層：明褐色土層(径約0.5cmロームブロック・ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)

- 第3層：黄褐色砂層(竈構築材 黄褐色砂を主体とする 締まりやや有り)
- 第4層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第5層：黒褐色土層(径約2cm焼土ブロック・焼土粒を少量、ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第6層：暗褐色土層(ローム粒を少量、焼土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第7層：橙褐色土層(焼土を主体とする 締まりやや有り)
- 第8層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第9層：灰色灰層(灰を主体とする 締まり無し)
- 第10層：暗褐色土層(ローム粒を多量、焼土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第11層：暗褐色土層(焼土粒を少量、ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第12層：灰褐色粘土層(袖部下部 灰褐色粘土を主体とする 締まり有り)

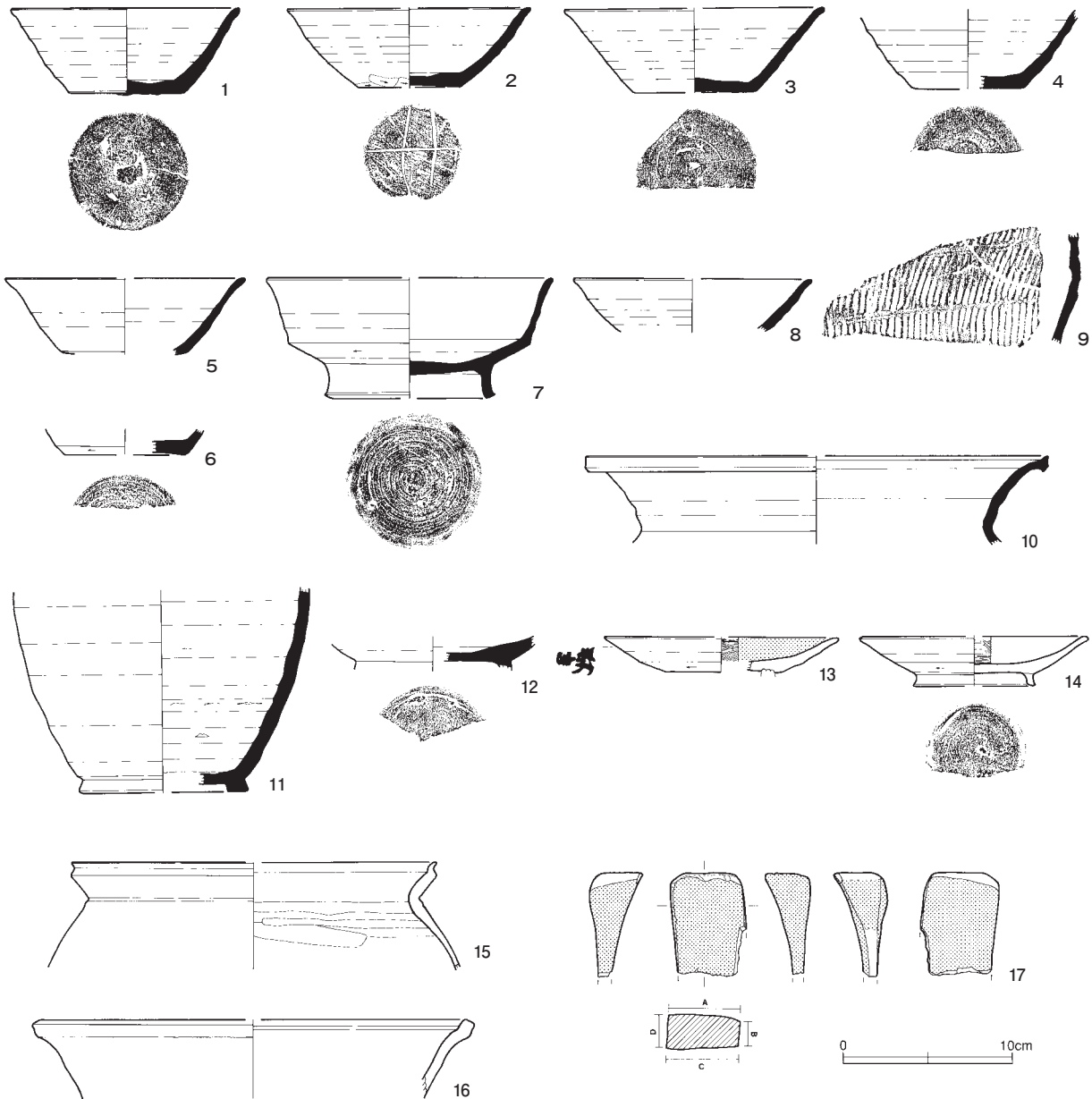
第54号住居跡掘形堆積覆土

- 第1層：褐色ローム土層(ローム粒を多量に含む 締まり強く有り)
- 第2層：褐色土層(径1～5cmロームブロック・ローム粒を多量に含む 締まり有り)

第79図 第54号住居跡・掘形(濃網：焼土・淡網：粘土)



第80図 第54号住居跡遺物出土状況



第81図 第54号住居跡出土遺物(土器-網: 黒色処理/石-網: 砥面)

遺物の出土状況 出土した遺物は全て破損品で、その多くが覆土下層から床面直上で出土した。第78図1は竈内から出土した。13・14の須恵器は覆土中層から上層で出土しており、他の遺物と共伴するものではない。15の刀子は床面直上で出土した。

遺物 1や3の甕は、外面がヘラ削りされ二次焼成をうけている。10・11の土師器杯の外面は、口縁部がヨコナデで体部がヘラ削りである。15の刀子の茎部には木質が若干みられる。

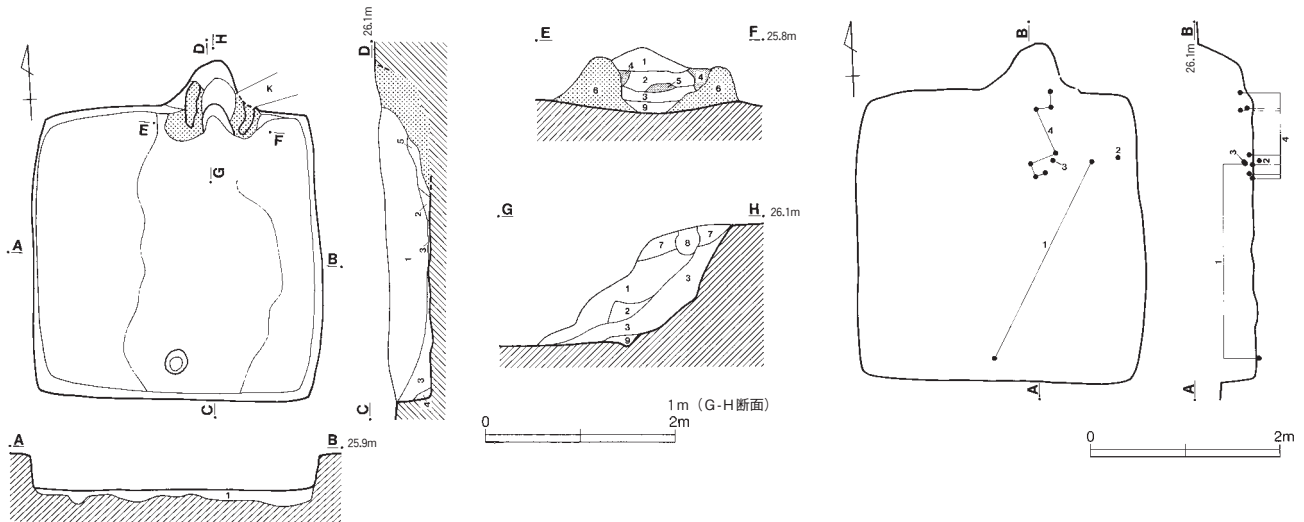
遺物群の時期は、7世紀末から8世紀初頭に位置付けられる。

第54号住居跡

遺構 H・I-14・15区に位置する。第40B号住居跡の一部を掘り込んでいる。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は、3.82×3.44m。壁高は東壁57cm、西壁60cm、南壁52cm、北壁54cm。主軸方向はN-5°-Eを指す。壁周溝は確認できない。床面は、竈から南壁中央に向かって帯状に硬化している。

竪穴部覆土は、凹レンズ状で褐色土と黒褐色土が交互に堆積する。

竈は、竪穴部北壁の中央よりやや東に構築されている。残存状況はよく、天井部と袖部が残り、泥岩の支脚が原位置を保っている。竈の構築材として、黄褐色の砂質土



第56号住居跡堆積覆土

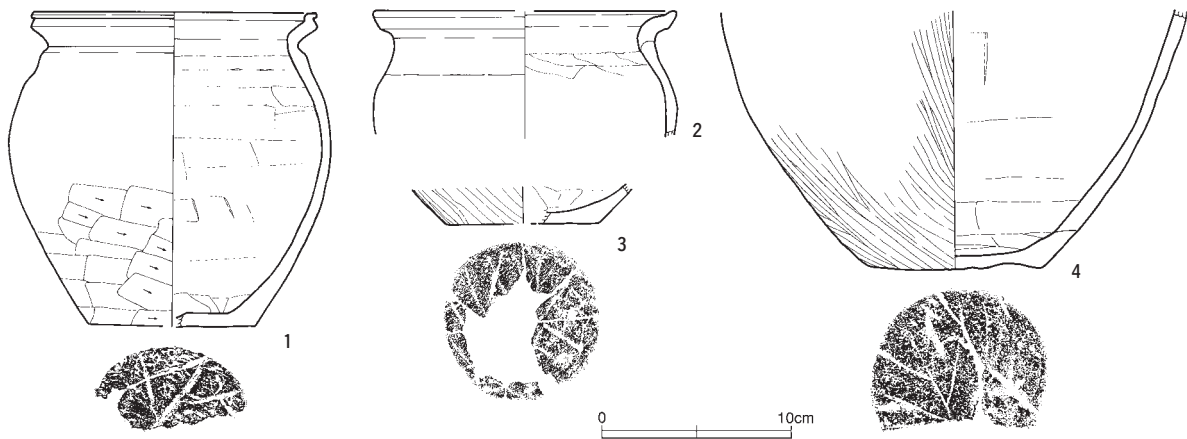
- 第1層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：褐色土層(ローム粒を多量, ロームブロックを少量含む 締まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第4層：明褐色土層(ロームブロックを多量に含む 締まり無し)
- 第5層：明褐色土層(白色粘土粒を少量含む 締まりやや有り)

第56号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒・白色粘土を少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：橙褐色土層(焼土粒を多量, 白色粘土を少量含む 締まりやや有り)

- 第3層：黒褐色土層(焼土粒を少量含む 締まり無し)
- 第4層：橙色粘土層(袖部粘土内側が被熱し橙色化した層 締まりやや有り)
- 第5層：橙色土層(焼土を主体とする 締まりやや有り)
- 第6層：白色粘土層(袖部 白色粘土を主体とする 締まり有り)
- 第7層：黒褐色土層(ローム粒・白色粘土・焼土粒を微量に含む 締まり有り)
- 第8層：暗灰色粘土層(暗灰色粘土を主体とする 締まり強く有り)
- 第9層：黒色土層(径約0.5cmロームブロック・ローム粒を少量含む 締まりやや有り)

第82図 第56号住居跡・遺物出土状況(濃網：焼土・淡網：粘土)



第83図 第56号住居跡出土遺物

が使用されている。煙道部は第79図 E F 断面を見ると、ほぼ垂直に立ち上がる。燃烧部には焼土がほとんど見られず、火床面ははっきりしない。両袖部先端には、方柱状の泥岩の切石が使われている。切石は竈穴部の壁近くにあるため、竈穴内部への竈の張り出しは少ない。

ピットは確認できない。

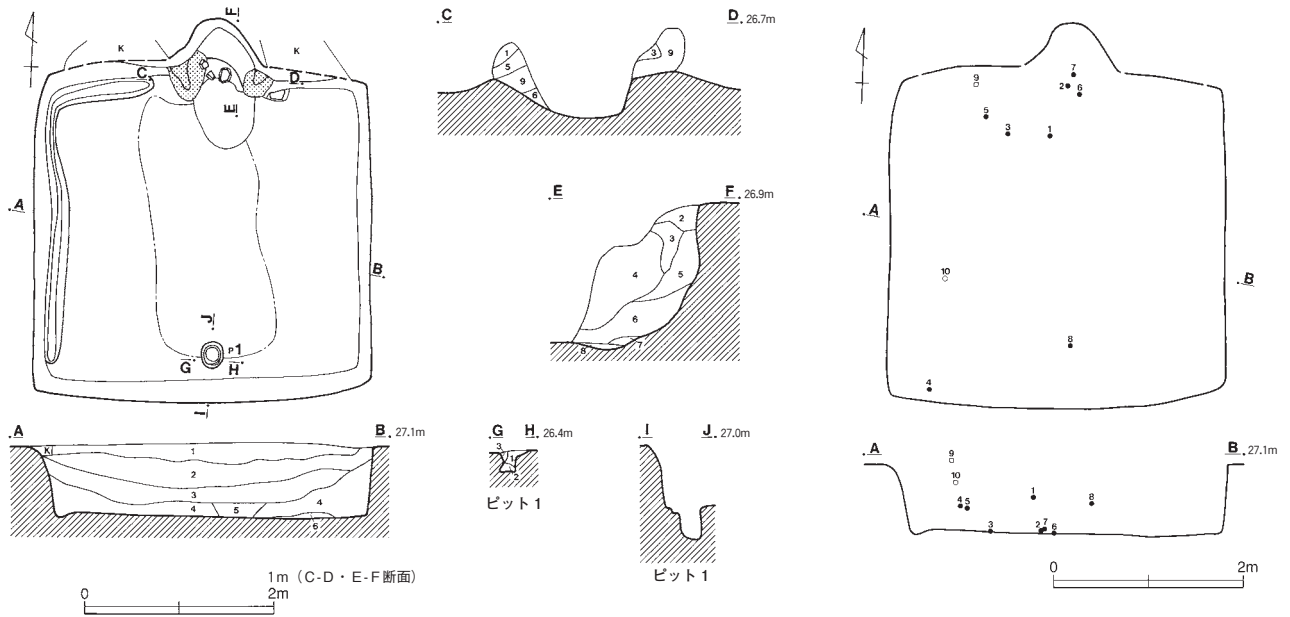
住居掘形は、部分的に深く掘り込まれており、竈穴部中央付近には径約1m、深さ約50cmの土坑状の掘り込み

もみられる。

遺物の出土状況 出土遺物は少なく、すべて破損品である。遺物の分布は竈前に多く、垂直分布では覆土下層から床面直上に位置する。

遺物 第81図13の土師器有台皿の外表面体部には、横位の墨書がみられるが、文字は判別できない。17は凝灰岩の砥石である。

遺物群の時期は、9世紀第3四半期に位置付けられる。



第58号住居跡堆積覆土

- 第1層：黒色土層(黒ボク土を主体とする 締まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第3層：黒褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒を多量、径約1cmロームブロックを微量に含む 締まりやや有り)
- 第5層：褐色土層(ローム粒を多量、径約1cmロームブロックを少量含む 締まりやや有り)
- 第6層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を多量に含む 締まりやや有り)

第58号住居跡ピット堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第3層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まり無し)

第58号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第3層：黄褐色粘土層(黄褐色粘土を主体とする 締まりやや有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第5層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒・粘土粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第6層：暗褐色土層(径約1cmロームブロック・ローム粒・焼土粒・粘土粒を少量、焼土ブロックを微量に含む 締まりやや有り)
- 第7層：黒色土層(焼土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第8層：褐色ローム土層(被熱し、一部が橙色化している 締まりやや有り)
- 第9層：黄褐色土層(ローム土と黄褐色の混合層 締まりやや有り)

第84図 第58号住居跡・遺物出土状況(網：粘土)

第56号住居跡

遺構 H-17区に位置する。第31B号住居跡の一部を掘り込んでいる。竈の一部が耕作による攪乱をうけている。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は、3.08×3.04m。壁高は東壁40cm、西壁37cm、南壁41cm、北壁50cm。主軸方向はN-3°-Eを指す。壁周溝は確認できない。床面は、竈から南壁中央に向かって帯状に硬化している。

竪穴部覆土は、自然堆積で暗褐色土が堆積する。

竈は、竪穴部北壁の中央よりやや東に構築されている。残存状況は、天井部が崩落しているが比較的良好である。竈の構築材として、白色粘土が使用されている。燃烧部には焼土がほとんど見られず、火床面ははっきりしない。両袖部の内側は、被熱により赤化している(第4層)。袖部先端は竪穴部の壁近くにあるため、竪穴内部への竈の張り出しは少ない。

ピットは1基確認した。当ピットは出入り口施設に伴うものと思われる。

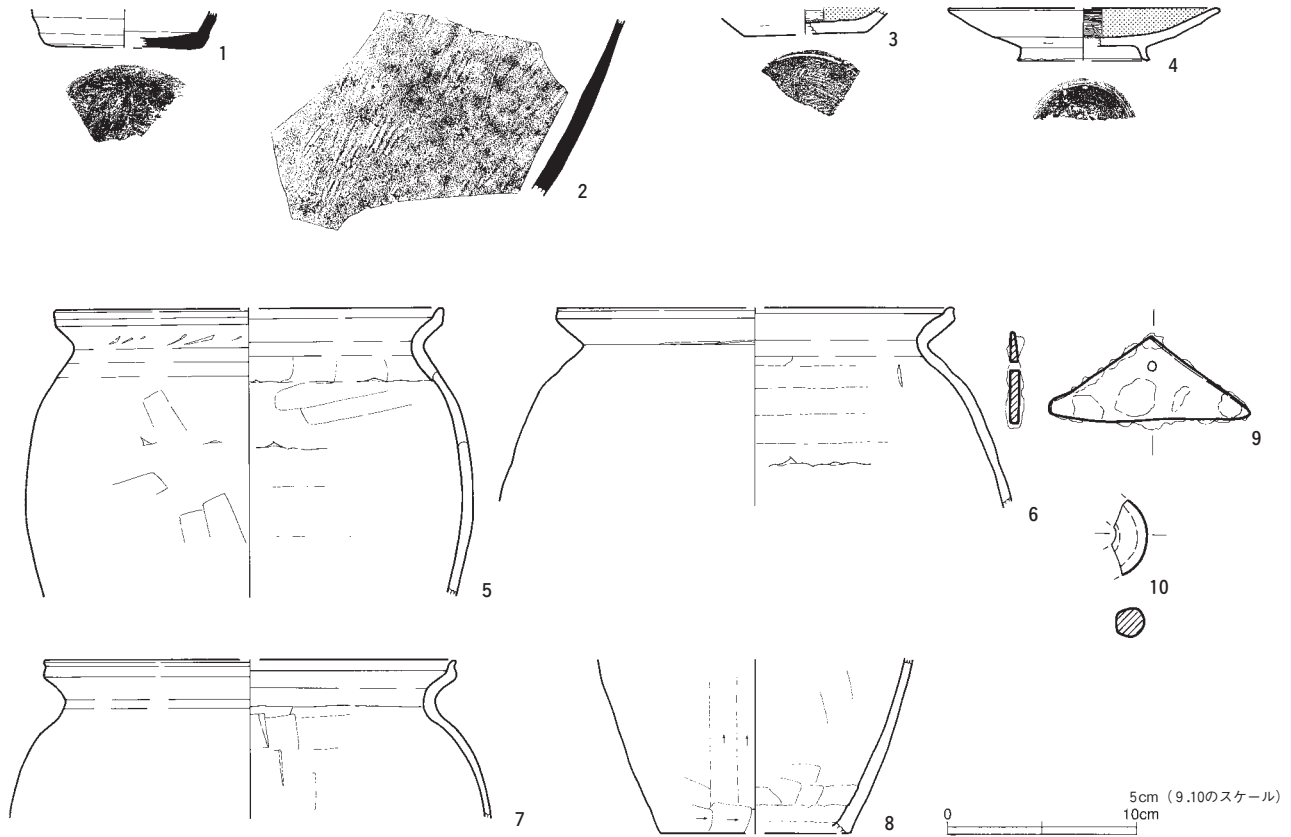
遺物の出土状況 出土遺物は少なく、すべて破損品である。図化できた遺物は床面直上から出土した。

遺物 図化できた遺物は、土師器甕4点である。遺物群の時期は、9世紀第3四半期に位置付けられる。

第58号住居跡

遺構 H-14区に位置する。北壁の上部が耕作による攪乱をうけている。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は3.62×3.52m。壁高は東壁73cm、西壁70cm、南壁66cm、北壁77cm。主軸方向はN-3°-Wを指す。壁周溝は西壁から北壁の一部にみられ、幅5~12cm、床面からの深さ2~3cmを測る。床面は、竈から南壁中央に向かって帯状に硬化している。

竪穴部覆土は、凹レンズ状で下から順にローム粒を多



第85図 第58号住居跡出土遺物(網：黒色処理)

量に含む暗褐色土の第4層，黒褐色土の第3層，暗褐色土の第2層，「黒ボク土」を主体とする黒色土の第1層と堆積する。

竈は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は悪く，両袖部の一部が残るのみである。竈の構築材として黄褐色粘土が使用されている。煙道部は第84図E F断面を見ると，ほぼ垂直に立ち上がる。袖部はローム土と黄褐色砂質土で構築されている。両袖部先端は竪穴部の壁にほぼ接しているため，竪穴内部への竈の張り出しはほとんどない。燃焼部には，方柱状の泥岩の切石が3点みられ，これらは支脚として使用された可能性がある。

ピットは1基検出された。当ピットは出入り口施設に伴うものと思われる。ピットの床面からの深さは40cmである。

住居掘形は，部分的に深く掘り込まれており，竪穴部中央付近には径約50cm，深さ約54cmの土坑状の掘り込みもみられる。

遺物の出土状況 出土遺物は少ない。図化できた遺物は，第85図2・3・6・7は床面直上，1・4・5・8は覆土中層，9・10は覆土上層に位置する。接合関係

を持つ遺物はない。

遺物 図化できた遺物は，須恵器杯1点，甕1点，土師器杯1点，有台皿1点，甕4点，火打金1点，瑪瑙製の勾玉1点である。土器に完形品はない。

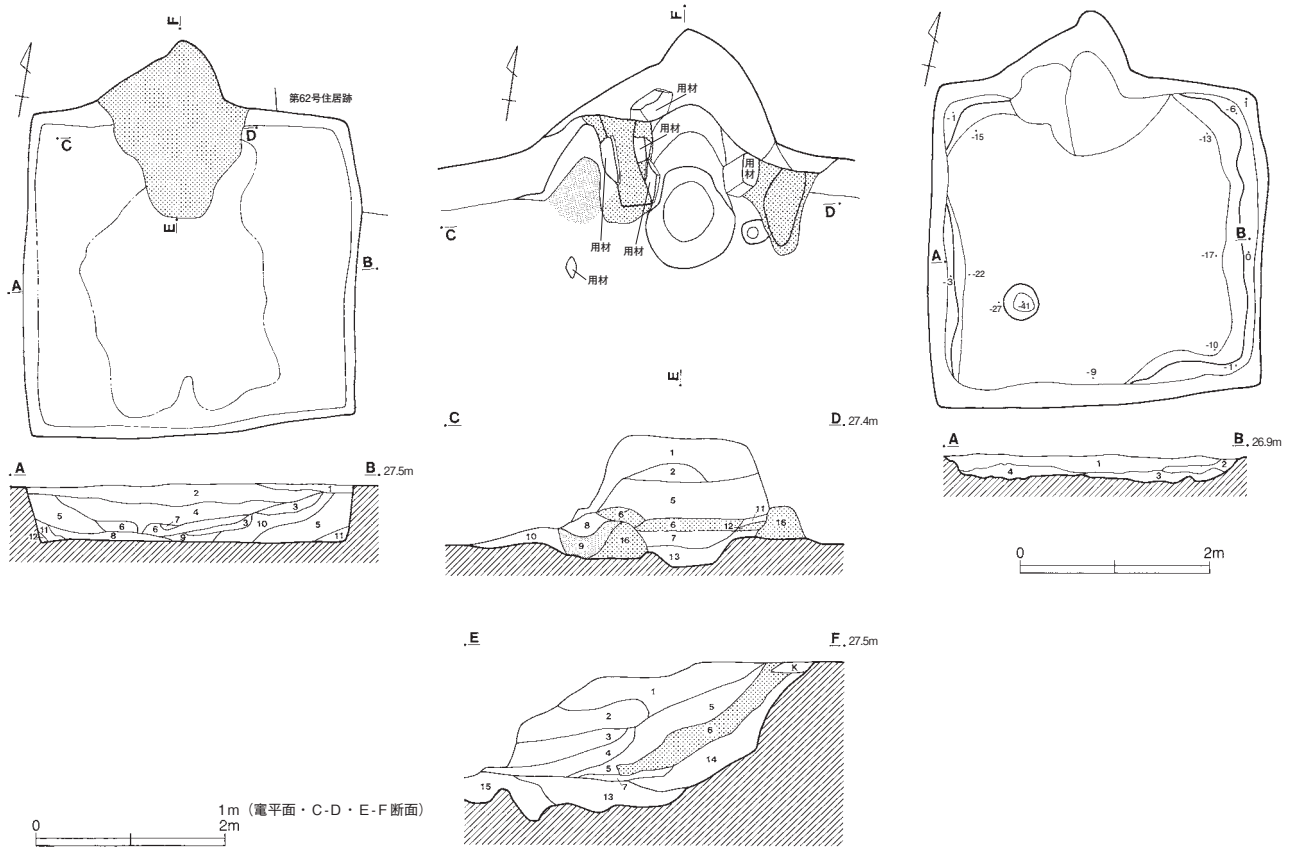
遺物群の時期は，9世紀中葉に位置付けられる。

第61号住居跡

遺構 F-13・14区に位置する。第62号住居跡の一部を掘り込んでいる。平面形は，方形を呈する。竪穴部の規模は，3.52×3.52m。壁高は東壁58cm，西壁56cm，南壁53cm，北壁66cm。主軸方向はN-20°-Wを指す。壁周溝は確認できない。床面は，竈から南壁中央に向かって帯状に硬化している。

竪穴部覆土は，自然堆積で暗褐色土が主体である。

竈は，竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は，天井部が崩落し，袖部の一部が残るのみである。竈の構築材として，白色粘土が使用されている。両袖部の内側及び西側の袖部内部には方柱状の切石の泥岩が設置されている。袖部先端は竪穴部の壁近くにあるため，竪穴内部への竈の張り出しは少ない。当竈の西側には，



第61号住居跡堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まり有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒を少量, 焼土粒を微量に含む 締まり有り)
- 第3層：黒褐色土層(ローム粒を少量含む 締まり有り)
- 第4層：暗褐色土層(第2層よりやや明るい ローム粒を少量, 焼土粒を微量に含む 締まり有り)
- 第5層：暗褐色土層(ローム粒を多量, 炭化物粒・焼土粒を微量に含む 締まり有り)
- 第6層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まり有り)
- 第7層：黄白色砂質粘土層(黄白色砂質粘土を主体とする 締まり有り)
- 第8層：暗褐色土層(径約1cmロームブロック・ローム粒を少量, 焼土粒を微量に含む 締まり有り)
- 第9層：暗褐色土層(ローム粒を多量, 径約1cmロームブロックを少量含む 締まり有り)
- 第10層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まり有り)
- 第11層：褐色土層(ローム粒を極多量, 炭化物粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第12層：暗褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)

第61号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を少量, 焼土粒を微量に含む 締まり有り)
- 第2層：白色粘土と暗褐色土の混合層(ローム粒を少量含む 締まり有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第4層：暗褐色土層(白色粘土粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第5層：暗褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第6層：白色粘土層(天井部 炭化物粒・焼土粒を少量含む 締まりやや有り)

有り)

- 第6'層：白色粘土層(天井部 炭化物粒・焼土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第7層：暗褐色土層(焼土粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第8層：白色粘土と焼土ブロックの混合層(締まりやや有り)
- 第9層：暗褐色土層(焼土粒を主体とする 締まりやや有り)
- 第10層：暗褐色土層(白色粘土粒・焼土粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第11層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第12層：白色粘土層(焼土粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第13層：暗褐色土層(白色粘土粒・焼土粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第14層：暗褐色土層(白色粘土粒を多量, ローム粒・焼土粒・径1~3cm白色粘土ブロックを少量含む 締まりやや有り)
- 第15層：黒褐色土層(掘形 径約1cmロームブロック・ローム粒を少量含む 締まりやや有り)
- 第16層：白色粘土層(袖部 締まりやや有り)

第61号住居跡掘形堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(径1~3cmロームブロック・ローム粒を多量に含む 締まり有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒を多量, 径約1cmロームブロックを少量含む 締まり有り)
- 第3層：褐色土層(径1~3cmロームブロック・ローム粒を多量に含む 締まり有り)
- 第4層：褐色土層(径1~8cmロームブロック・ローム粒を多量, 黒色土を少量含む 締まり有り)

第86図 第61号住居跡・掘形(濃網：焼土・淡網：粘土)

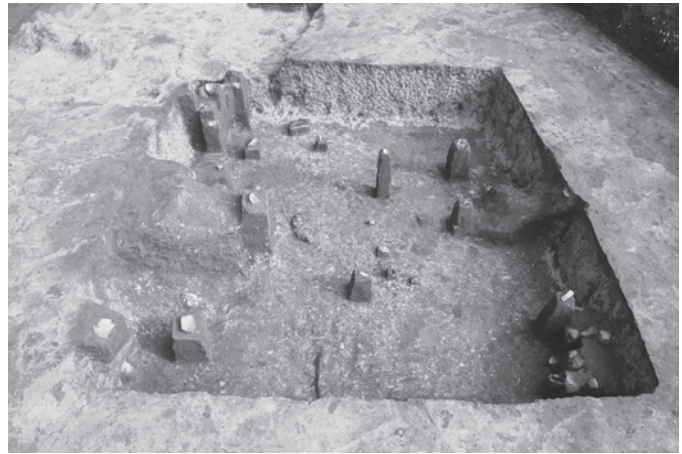
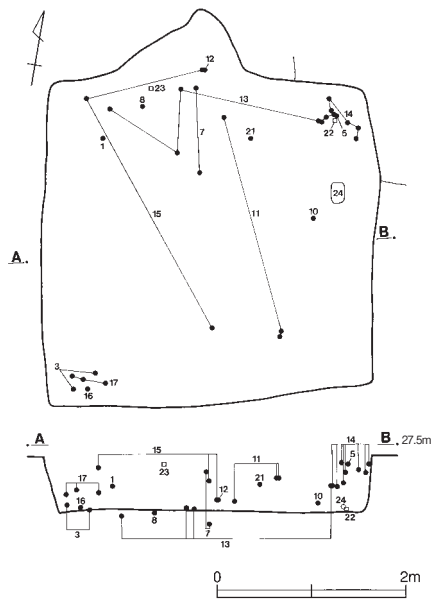
袖部に接する状態で多量の焼土(第9層)がみられ、竈穴部壁面が煙道のように掘り込まれている。このことから、当住居では竈の作り替えが行われていると考えられる。ピットは確認できない。

住居掘形は、竈穴部全体が床面から20~30cm程掘り

込まれている。

遺物の出土状況

出土遺物はすべて破損品である。図化できた遺物は、平面分布では壁際に多く、垂直分布では覆土中層から上層で第5層中に位置するものが多い。第88図11・13・15の甕は竈穴部内で離れた破片が接



第87図 第61号住居跡遺物出土状況

合している。

遺物 図化できた遺物は、須恵器杯6点、有台杯1点、有台盤1点、甕1点、土師器椀1点、甕11点、刀子片1点、鉸具1点、砥石1点である。3の外底部には墨書がみられる。第89図23の銅製品は鉸具で、長四角形を呈し、鉸が2つみられる。24は砂岩の砥石で、砥面が2面みられる。

遺物群の時期は、9世紀第1四半期頃に位置付けられる。

第66号住居跡

遺構 F-15・16区に位置する。竪穴部壁上部の大半が攪乱をうけている。平面形はやや長方形を呈する。竪穴部の規模は2.28×1.96m。壁高は東壁51cm、西壁46cm、南壁60cm、北壁38cm。主軸方向はN-3°-Eを指す。壁周溝は南壁の一部にみられ、幅約10cm、床面からの深さ約6cmを測る。床面は、全体的に軟質である。

竪穴部覆土は、凹レンズ状で下から順にローム粒を多

量に含む褐色土の第4層、暗褐色土の第3層、黒褐色土の第2層、「黒ボク土」を少量含む黒色土の第1層と堆積する。

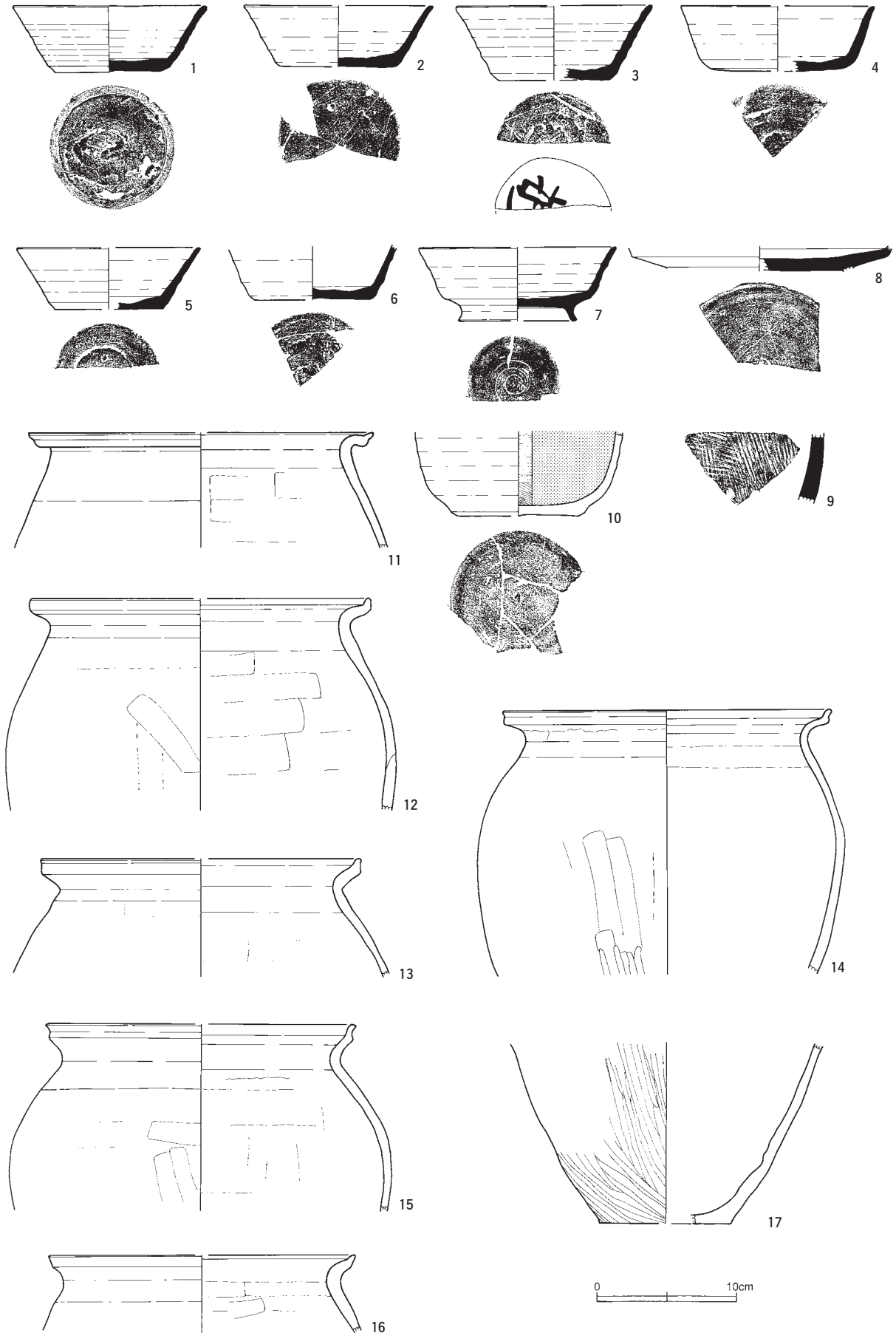
竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は悪い。両袖部先端には方柱状の切石の泥岩が設置されている。切石は竪穴部の壁に接しているため、竪穴内部への竈の張り出しはほとんどない。切石と壁の間には径約3cmの礫が詰まっていた。燃焼部には、泥岩の支脚が原位置を保った状態で出土した。

ピットは1基検出された。当ピットは出入り口施設に伴うものと思われる。ピットの床面からの深さは8cmである。

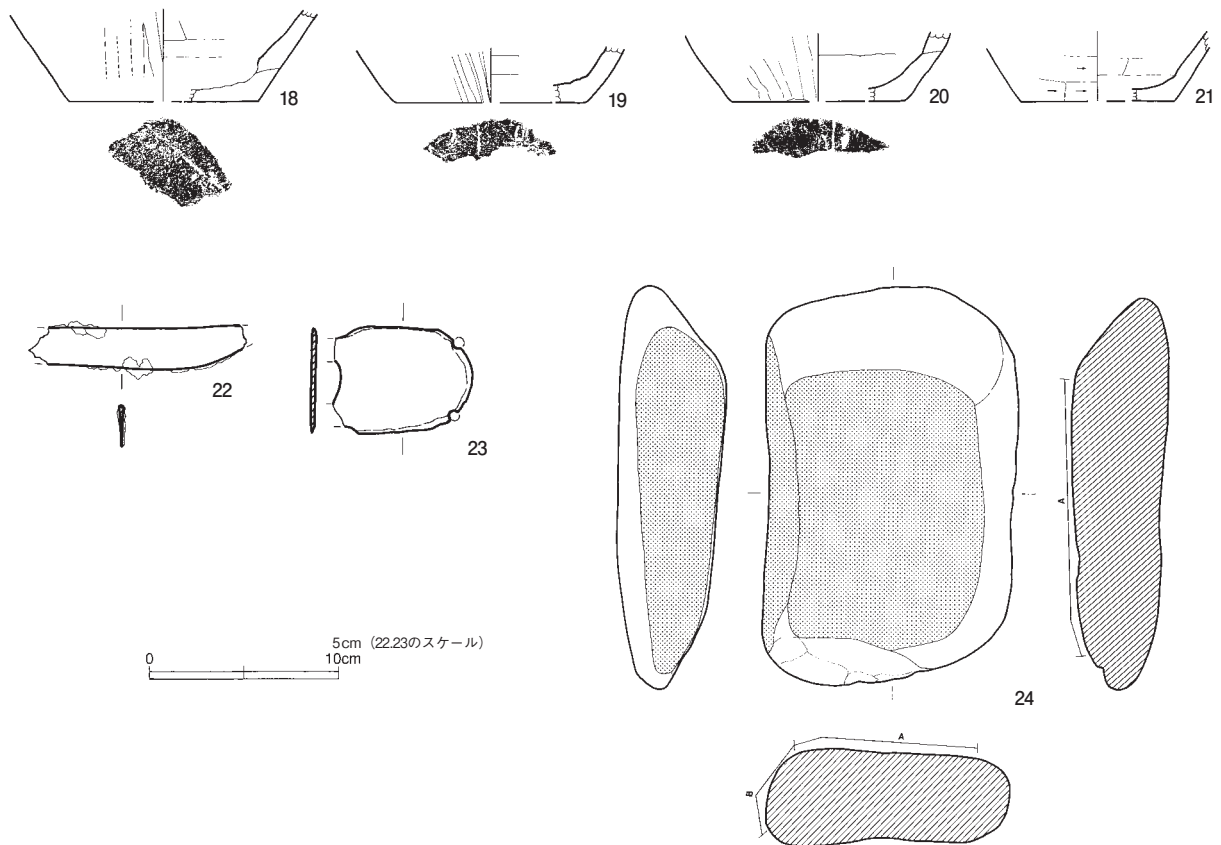
遺物の出土状況 遺物は非常に少ない。図化できた遺物は覆土中層から床面直上で出土した。

遺物 図化できた遺物は、須恵器杯1点と土師器甕2点である。

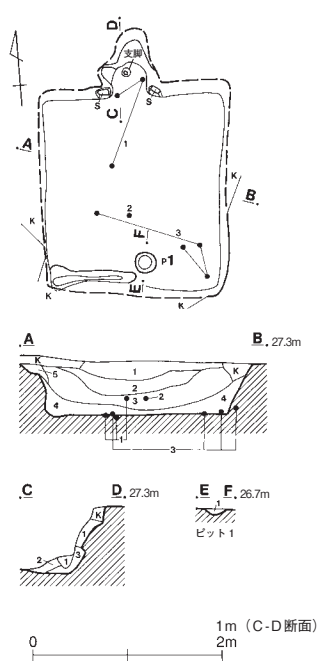
遺物群の時期は、9世紀中葉に位置付けられる。



第88図 第61号住居跡出土遺物(1)(網：黒色処理)



第89図 第61号住居跡出土遺物(2) (網：砥面)



第66号住居跡堆積覆土

- 第1層：黒色土層(黒ボク土を少量, ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を少量, 焼土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第4層：褐色土層(ローム粒を多量, 径1~2cmロームブロックを少量含む 締まりやや有り)
- 第5層：暗褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)

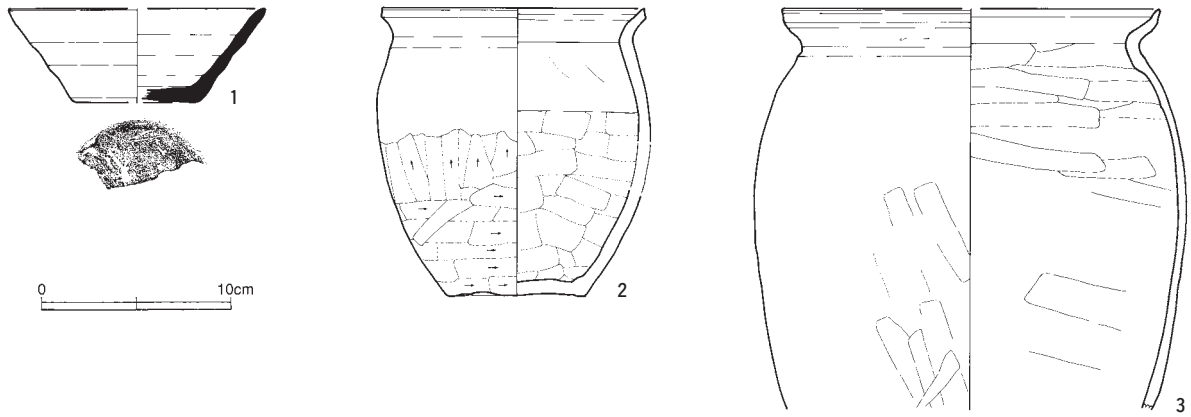
第66号住居跡ビット1堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒を少量含む 締まり有り)

第66号住居跡竈堆積覆土

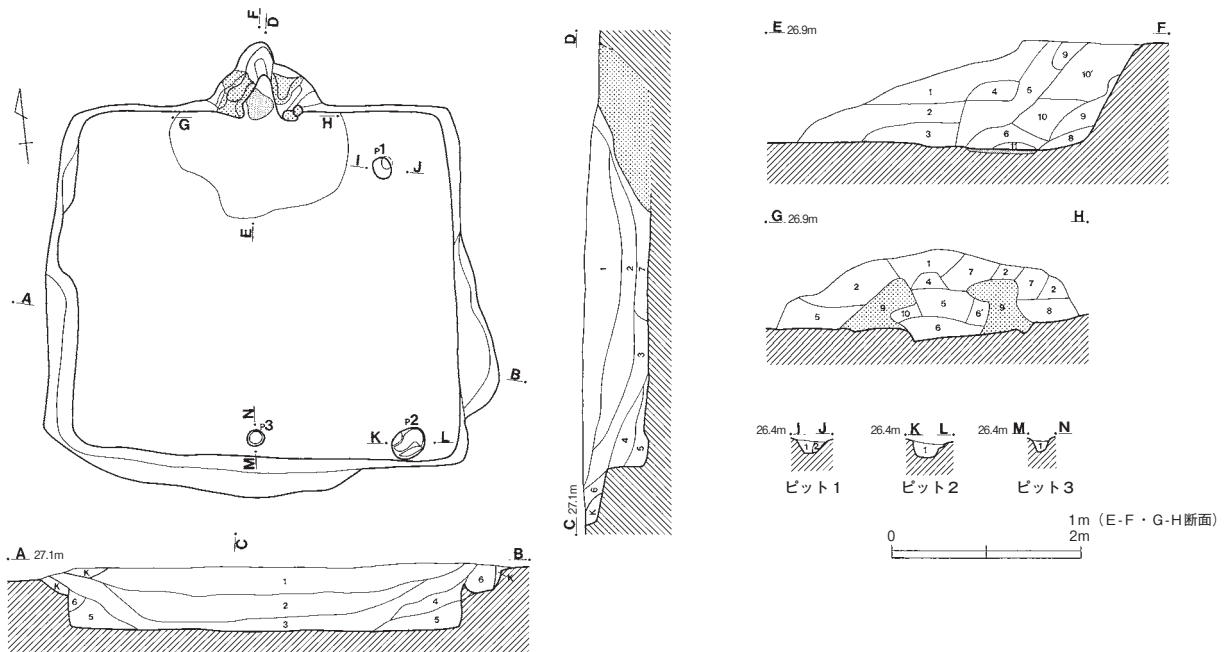
- 第1層：褐色土層(ローム粒を多量に含む 締まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒・焼土粒を微量に含む 締まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒を少量 締まりやや有り)

第90図 第66号住居跡・遺物出土状況



第91図 第66号住居跡出土遺物

3 2012年度住居跡の調査



第29号住居跡堆積覆土

- 第1層：黒色土層(黒ボク土 縮まり有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒微量含む 縮まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒少量含む 縮まりやや有り)
- 第4層：黒褐色土層(ローム粒多量含む 縮まりやや有り)
- 第5層：褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒少量含む 縮まりやや無し)
- 第6層：暗褐色土層(ローム粒少量含む 縮まりやや無し)
- 第7層：褐色土層(ローム粒多量含む 径1cm礫を少量含む 縮まりやや有り)

第29号住居跡ピット1堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒多量含む 縮まりやや有り)
- 第2層：褐色土層(ローム粒多量含む 縮まりやや有り)

第29号住居跡ピット2堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層 (ローム粒多量含む 縮まりやや無し)

第29号住居跡ピット3堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層 (ローム粒多量含む 径1cmロームブロックを少量含む 縮まりやや有り 底面硬化面有り)

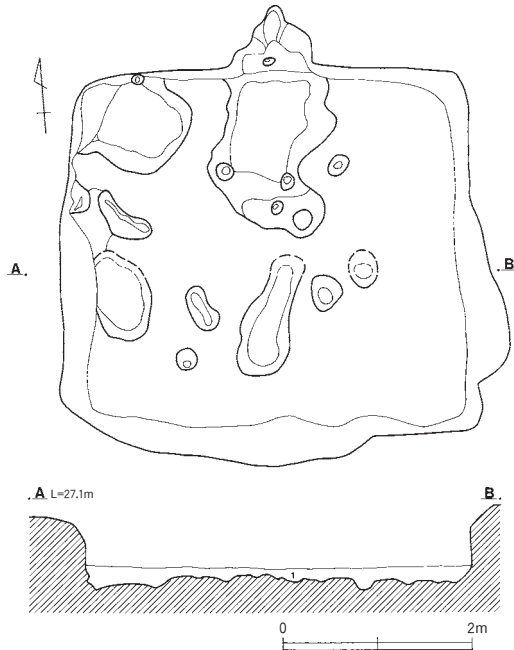
第29号住居跡竈堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒微量・暗黄色砂微量含む 縮まりやや有り)

- 第2層：暗褐色土層(ローム粒少量含む 暗黄色砂微量含む 縮まりやや有り)
- 第3層：黒褐色土層 (ローム粒・焼土粒少量含む 暗黄色砂微量含む 縮まりやや有り)
- 第4層：淡黄褐色土層(暗黄色砂多量含む 焼土粒微量含む 縮まりやや有り)
- 第5層：淡黄褐色土層(暗黄色砂多量含む 焼土粒・炭粒少量含む 縮まりやや有り)
- 第6層：暗黄褐色土層(暗黄色砂・焼土粒多量含む 焼土粒少量含む 縮まりやや無し)
- 第6'層：暗黄褐色土層(第6層より若干焼土が少ない)
- 第7層：黒褐色土層(ローム粒・炭微量含む 縮まりやや有り)
- 第8層：黒色土と暗褐色土層の混合層(ローム粒少量含む 縮まりやや有り)
- 第9層：黄色砂質土(竈用材 縮まり無し 粘性無し)
- 第10層：黄色砂質と焼土ブロックの混合層(縮まり無し 粘性無し)
- 第10'層：(第10層よりやや焼土ブロックが少ない土層)
- 第11層：赤色土層 (焼土ブロック主体 縮まり無し)

第92図 第29号住居跡(濃網：焼土・淡網：粘土)

第29号住居跡



第29号住居跡掘形堆積覆土

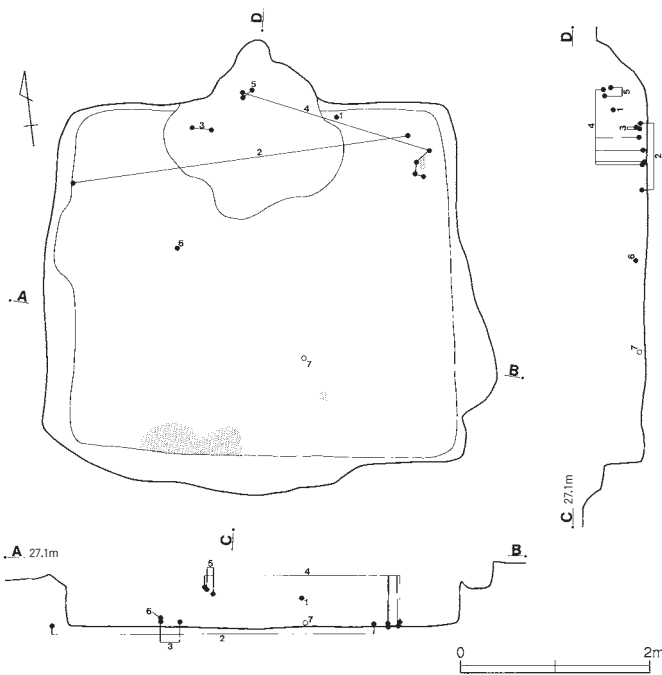
第1層：黄褐色土層(ローム土主体 黒色土がまだら状に混じる 締まり有り)

第93図 第29号住居跡掘形

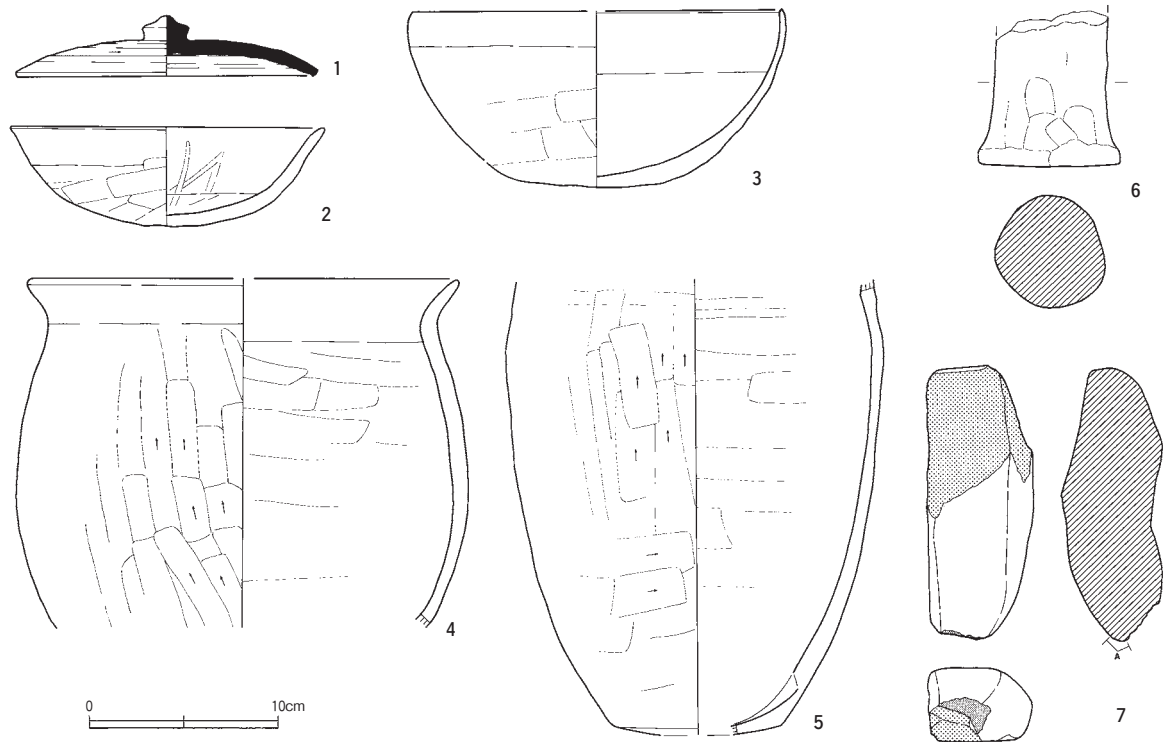
遺構 D-5・6区に位置する。平面形は、方形を呈するが、東壁と南壁の上部がやや外側に膨らむ部分がある。竪穴部の規模は、4.27×3.86m。壁高は東壁64cm、西壁53cm、南壁63cm、北壁47cm。主軸方向はN-7°-Eを指す。壁周溝は確認できない。床面は、硬化しているところが少ない。

竪穴部覆土は、壁際に褐色土層、凹レンズ状に下層に暗褐色土、中層に黒褐色土、上層に黒色土が堆積する。上層の黒色土は、「黒ぼく土」である。

竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部が崩落し、袖部の一部が残るのみである。竈の構築材として、黄白色砂質土が使用されている。袖部先端は竪穴部の壁近くにあるため、竪穴内部への竈の張り出しは少ない。袖部内側と煙道部は粘土やローム土が被熱し、赤化している。火床面は竈断面の第6層下で、地山のローム土が被熱し、ブロック状になっている。



第94図 第29号住居跡遺物出土状況(濃網：焼土)



第95図 第29号住居跡出土遺物(濃網：剥離面・淡網：砥面)

ピットは3基検出された。ピット3は出入り口施設に伴うものと思われる。床面からの深さは、ピット1が13cm、ピット2が14cm、ピット3が15cmである。

住居掘形は、竈周辺はあまり掘り込まれず、その他の竪穴部は床面から6～24cm程掘り込まれている。

遺物の出土状況 出土遺物は非常に少ない。完形品で出土したのは第95図1の蓋で、竈東側で覆土上層から逆位で出土した。2の杯は床面直上から、3の鉢と5の甕は竈内から出土した。4の甕は竪穴部北東隅の床面直上と竈内から出土した破片が接合している。6の支脚は

使用痕がみられるため、竈内から竪穴部中央部に意図的に動かされたものと思われる。

遺物 図化できた遺物は、須恵器蓋1点、土師器杯1点、鉢1点、甕2点、土製支脚1点、敲石1点である。1は胎土の観察から、木葉下窯産と思われる。3～5は二次焼成をうけ、器面の状態が悪い。7は敲石で、敲打面の一部が剥離しているため、使用中に破損し、遺棄されたものと思われる

遺物群の時期は、8世紀第1四半期頃に位置付けられる。

4 奈良・平安時代遺物観察表

凡例：法量に記載した部位の計測値の単位は「cm」である。括弧内の数値は、復元された口径や底径、最大径、または残存高を示す。

第31A号住居跡

1 台帳：No.4 材質：軽石 種類：砥石 法量：長4.5,幅3.7,厚3.3,重量12.06g 色調：黄白色 備考：砥面A・B・Cの3面か。

第44号住居跡

1 台帳：P52～54・57～59, No.24 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部～胴部上位60%, 中位～底部100% 法量：口径16.5, 器高21.9, 底径7.2 色調：橙～浅黄～褐～暗褐色 胎土：小石(灰微), 礫(白少), 砂(白多, 透多) 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部～底部ヘラナデ。焼成良好。使用痕：外面が二次焼成をうけている。備考：外内面とも器面の一部が剥離している。

2 台帳：P33～35・43, No.3～5・7・11・12・24 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部～胴部上位30%, 中位～下位60% 法量：口径(19.0), 最大径(20.0), 器高(23.6) 色調：褐灰～暗褐色 胎土：礫(白少, 赤微), 砂(白多, 透多) 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ヘラナデ, 中位～下位ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。焼成良好。使用痕：- 備考：-

3 台帳：P39～41, No.7・9・11 材質：土師器 器種：甕 残存：40% 法量：口径(23.8), 器高29.1, 底径11.0 色調：黄橙～褐～暗褐色 胎土：小石(白微, 灰微), 礫(白少), 砂(白少, 透少) 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。焼成良好。使用痕：外面が二次焼成をうけている。備考：-

4 台帳：P37・50・51 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部～胴部下位60% 法量：口径19.1, 器高17.3 色調：外面浅黄～褐～褐色, 内面褐色 胎土：礫(白少), 砂(白多, 透多, 黒少) 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ヘラナデ, 中位～下位ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。焼成良好。使用痕：- 備考：-

5 台帳：P49・55 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部80%, 胴部上位40% 法量：口径20.0, 器高(15.8) 色調：橙～褐～暗褐色 胎土：礫(白少), 砂(白多, 透多, 黒少) 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部縦方向にヘラナデ後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。内面に若干輪積痕がみられる。焼成良好。使用痕：- 備考：-

6 台帳：P31・33・38・51, No.3・5・7・9・11・24 材質：土師器 器種：甕? 残存：口縁部～胴部中位80% 法量：口径22.0, 器高(14.2) 色調：黄橙～褐～暗褐色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多) 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラミガキ。焼成良好。使用痕：- 備考：-

7 台帳：P2・8・18 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部40%, 胴部10% 法量：口径(21.4), 器高(19.0) 色調：外面浅黄～暗褐～黒褐色, 内面褐～暗褐色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多) 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ヘラナデ, 中位～下位ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。焼成良好。使用痕：- 備考：-

8 台帳：P17 材質：土師器 器種：甕 残存：胴部下位～底部10% 法量：器高(7.2), 底径(9.8) 色調：外面浅黄～黒色, 内面浅黄色 胎土：小石(白微), 礫(白少, 灰微), 砂(白少, 透多, 黒少), 骨針含 技法等：外面胴部ヘラナデ, 底部不明。内面ヘラナデ。焼成良好。使用痕：- 備考：外面器面の一部が剥離している。

9 台帳：P15 材質：土師器 器種：手づくね土器 残存：底部100% 法量：器高(3.5), 底径6.5 色調：外面橙～暗赤色, 内面暗赤色 胎土：砂(白多, 透多) 技法等：外面胴部ユビナデ, 底部木葉痕。内面ユビナデ。焼成やや不良。使用痕：- 備考：-

10 台帳：P46 材質：土師器 器種：杯 残存：20% 法量：口径(14.8), 器高(3.2) 色調：褐～暗褐色 胎土：礫(白少, 赤微), 砂(白多, 透多) 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面口縁部～体部中位ヨコナデ, 下位ヘラナデ。焼成良好。使用痕：- 備考：-

11 台帳：P10, No.7・9・11 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部50%, 体部30% 法量：口径(15.0), 器高(5.0) 色調：外面に白微

橙色, 内面に白微黄橙～黒色 胎土：砂(白少, 透多) 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面口縁部～体部中位ヨコナデ, 下位ヘラナデ。焼成良好。使用痕：- 備考：-

12 台帳：No.13 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部20% 法量：器高(1.8), 底径(8.2) 色調：灰色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多), 骨針含 技法等：底部回転ヘラナデ後ヘラナデ。外面底部にヘラ記号。焼成硬質。使用痕：- 備考：-

13 台帳：P21 材質：須恵器 器種：有台杯 残存：底部20% 法量：器高(2.7), 底径(12.0) 色調：灰白色 胎土：礫(白少), 砂(白少, 透多) 技法等：底部回転ヘラナデ。焼成硬質。使用痕：- 備考：高台部欠損。

14 台帳：P9 材質：須恵器 器種：蓋 残存：20% (摘み部欠損) 法量：器高(2.5) 色調：灰白色 胎土：礫(白微), 砂(白少, 透多), 骨針含 技法等：外面天井部回転ヘラナデ。焼成硬質。使用痕：- 備考：外内面とも器面が摩滅している。内面に漆と思われるものが付着している。

15 台帳：I1 材質：鉄 種類：刀子 残存：完形か 法量：長10.0, 刃部最大幅1.0, 茎部最大幅0.7, 最大厚0.3, 重量8.47g 備考：茎部に木質が若干みられる。

第54号住居跡

1 台帳：P16・17, No.3 材質：須恵器 器種：杯 残存：口縁部～体部60%, 底部100% 法量：口径13.6, 器高5.1, 底径6.9 色調：灰～褐色 胎土：礫(白多), 砂(白多, 透多), 骨針含 技法等：回転ヘラナデ後ヘラナデ。外面底部にヘラ記号。焼成硬質。使用痕：- 備考：-

2 台帳：P26・27 材質：須恵器 器種：杯 残存：口縁部～体部20%, 底部100% 法量：口径(14.4), 器高4.7, 底径6.0 色調：灰色 胎土：礫(白多), 砂(白多, 透多), 骨針微 技法等：底部手持ちヘラナデ, 外面体部下位ヘラナデ。外面底部にヘラ記号。焼成硬質。使用痕：- 備考：-

3 台帳：No.2・3 材質：須恵器 器種：杯 残存：口縁部～体部20%, 底部40% 法量：口径(15.4), 器高5.0, 底径7.1 色調：浅黄色 胎土：礫(白少), 砂(白少, 透多) 技法等：底部回転ヘラナデ後ヘラナデ。外面底部にヘラ記号。焼成硬質。使用痕：- 備考：-

4 台帳：P15 材質：須恵器 器種：杯 残存：体部～底部20% 法量：器高(4.7), 底径(7.7) 色調：灰白色 胎土：礫(白少), 砂(白多, 透多, 黒少), 骨針含 技法等：回転ヘラナデ後ヘラナデ。焼成硬質。使用痕：- 備考：-

5 台帳：No.2・3 材質：須恵器 器種：杯 残存：口縁部～体部10% 法量：口径(14.2), 器高4.5, 底径(7.5) 色調：灰白色 胎土：礫(白少, 灰微), 砂(白少, 透多, 灰微) 技法等：ロクロ成形。焼成硬質。使用痕：- 備考：-

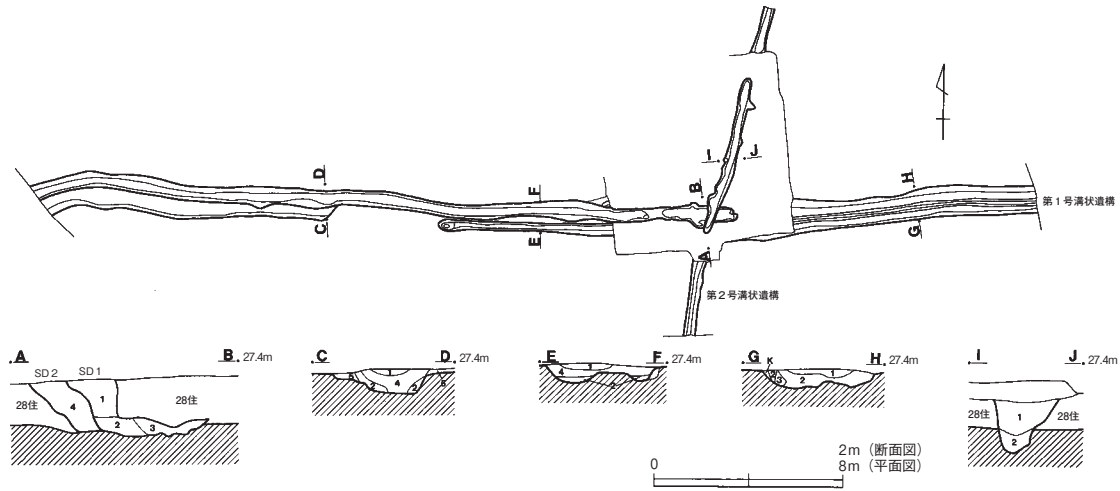
6 台帳：P6 材質：須恵器 器種：杯 残存：体部下位～底部10% 法量：器高(1.5), 底径(7.1) 色調：灰色 胎土：礫(白微, 灰微), 砂(白多, 透多), 骨針含 技法等：底部回転ヘラナデ(ロクロ左回転)。焼成硬質。使用痕：- 備考：-

7 台帳：P7・9・25, No.3 材質：須恵器 器種：有台杯 残存：口縁部～体部20%, 底部30%, 高台部100% 法量：口径(17.0), 器高7.2, 底径(14.2), 高台径9.8～10.0 色調：灰色 胎土：小石(白微), 礫(白多), 砂(白多, 透多, 灰少), 骨針含 技法等：底部回転ヘラナデ後高台部を接合。焼成硬質。使用痕：- 備考：内面底部の一部にスス状物が付着している。

8 台帳：P19 材質：須恵器 器種：椀 残存：口縁部～体部10% 法量：口径(14.1), 器高(3.2) 色調：外面灰褐～黒色, 内面灰褐色 胎土：礫(白多), 砂(白多, 透多) 技法等：ロクロ成形。焼成硬質。使用痕：- 備考：外面器面にスス状物が付着している。

9 台帳：P31, No.2・3・8～10 材質：須恵器 器種：甕 残存：- 法量：- 色調：外面灰色, 内面灰白色 胎土：礫(白微), 砂(白

Ⅶ その他の遺構



第1・2号溝状遺構堆積覆土

AB土層断面

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒微量含む 締まりやや有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む 締まりやや有り)
- 第3層：黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まり やや有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まり強く有り)

CD・EF・GH土層断面

- 第1層：黒色土層(黒ボク土 締まり有り)

- 第2層：黒褐色土層(ローム粒少量含む ロームブロック微量含む 締まり有り)
- 第3層：褐色土層(ローム土主体 締まり有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒微量含む 締まり有り)
- 第5層：褐色土層(ローム粒多量含む)

I J土層断面

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まり強く有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有りAB断面の第2層に似る)

第96図 第1・2号溝状遺構

ここでは、その他の遺構として溝状遺構と土坑を報告する。

1 溝状遺構

溝状遺構は3基検出した。その内、第3号溝状遺構は2007年度に報告を行っている。

第1号溝状遺構 A～E-5～8区に位置する。第28号住居跡を掘り込んでいる。第2号溝状遺構と第28号住居跡内で直交する。第2号溝状遺構との関係は、覆土の観察等から、第2号溝状遺構を掘り込んでいるようにみられたが、同時期に造られた可能性が残る。溝状遺構はほぼ東西方向を軸に延びており、東側・西側ともに調査区外へ続いている。調査区の中央部以外は、2条の溝が併行するような平面形を呈する。確認できた長さは約42.4m、最大幅は約1.4m、深さは確認面から深いところで60cm、浅いところで17cmを測る。覆土は黒褐色土層を主体とする。当遺構に伴う遺物はない。

第2号溝状遺構 B・C-7・8区に位置する。第28号住居跡を掘り込んでいる。溝状遺構はほぼ南北方向

を軸に延びており、北側・南側ともに調査区外へ続いている。確認できた長さは約14.4m、最大幅は約65cm、深さは確認面から深いところで58cm、浅いところで6cmを測る。覆土は暗褐色土層を主体とする。当遺構に伴う遺物はない。

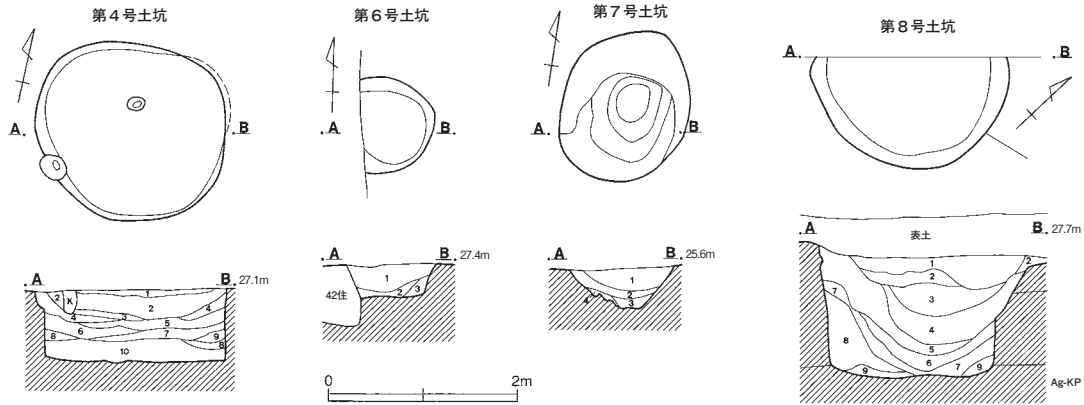
2 土坑

土坑は8基検出した。第1～3号土坑は第1次調査で報告済みである。また、第5号土坑としていたものは第34B号住居跡の一部であることが分かったため、欠番とした。

第4号土坑 F・G-15区に位置する。平面形は円形を呈する。長軸2.00m、短軸1.90m、深さ約75cmを測る。覆土は暗褐色土層を主体とし、最下位にロームブロックを多く含む土層が堆積する。土層の観察から、第1・3・4・8層以外は人為的埋土と考えられる。当遺構に伴う遺物はない。

第6号土坑 H-12区に位置する。第42号住居跡を掘り込んでいる。平面形は円形を呈する。長軸1.06m、

Ⅶ その他の遺構



第4号土坑堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(径1～3cmロームブロック・ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第4層：暗褐色土層(ローム粒微量含む 締まりやや有り)
- 第5層：暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1～2cmロームブロック少量含む 締まり有り)
- 第6層：暗褐色土層(黒色土少量含む 径1～3cmロームブロック・ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第7層：暗褐色土層(径1～2cmロームブロック・ローム粒少量含む 締まり有り)
- 第8層：暗褐色土層(ローム粒少量含む 第3層に似る 締まりやや有り)
- 第9層：黒褐色土層(径1cmロームブロック・ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第10層：暗褐色土層(径1～5cmロームブロック・ローム粒多量含む 締まり有り 層の中で一番大きなブロックを含む土層)

第6号土坑堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(ロームブロック多量に含む 締まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒微量含む 締まりやや有り)

第7号土坑堆積覆土

- 第1層：黒褐色土層(ローム粒微量含む 締まりやや有り)
- 第2層：黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第4層：褐色土層(径1～2cmロームブロック少量含む ローム粒多量含む 締まりやや有り)

第8号土坑堆積覆土

- 第1層：褐色土層(ローム粒多量含む 暗褐色土混じる 締まり有り)
- 第2層：暗褐色土層(第1層から第3層への漸移層 ローム粒少量含む 締まり有り)
- 第3層：黒色土層(ローム粒微量含む 締まり強く有り)
- 第4層：黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まり有り)
- 第5層：黒色土層(ローム粒微量含む 第3層に似る 締まり有り)
- 第6層：黒褐色土層(ローム粒少量含む 径1cmロームブロック微量含む 締まり有り)
- 第7層：暗褐色土層(第8層への漸移層 ローム粒多量含む 径1～3cmロームブロック少量含む)
- 第8層：明褐色土層(ローム土層 ほとんど混じりのないローム土 締まり有り)
- 第9層：暗褐色土層(径1～2cmロームブロック・ローム粒少量含む 締まりやや有り)

第97図 第4・6・7・8号土坑

深さ約34cmを測る。覆土は黒褐色土層を主体とする。当遺構に伴う遺物はない。

第7号土坑 I-16区に位置する。第39号住居跡を掘り込んでいる。平面形は楕円形を呈する。長軸1.65m, 短軸1.34m, 深さ約43cmを測る。覆土は黒褐色土層を主体とする。当遺構に伴う遺物はない。

第8号土坑 C-10区に位置する。第48号住居跡を掘り込んでいる。一部は調査区外のため確認できない。平面形は円形を呈すると思われる。長軸2.11m, 深さ約146cmを測る。覆土は黒褐色土と黒色土を主体として凹レンズ状に堆積し, 下層の第8層はローム土を主体とする土層である。土坑の底面は鹿沼軽石層を掘り込んでいるが, 覆土中にその土はみられない。当土坑が掘り込んでいる第48号住居跡の土坑東側の床面に, ローム土の堆積がみられることから, 当土坑は第48号住居跡が埋没する前に掘られたものと思われる。当遺構に伴う遺物はな

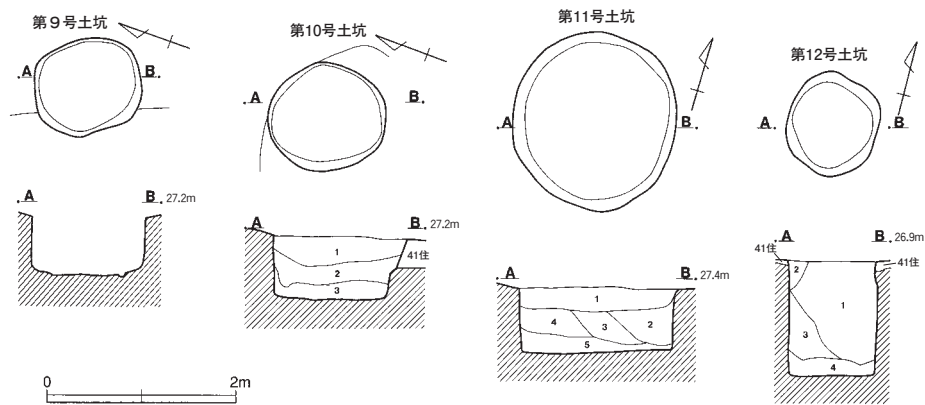
い。

第9号土坑 H-13区に位置する。第41号住居跡を掘り込んでいる。平面形は円形を呈する。長軸1.14m, 短軸1.07m, 深さ約58cmを測る。覆土は不明。当遺構に伴う遺物はない。

第10号土坑 H-13区に位置する。第41号住居跡を掘り込んでいる。平面形は円形を呈する。長軸1.25m, 短軸1.15m, 深さ約68cmを測る。覆土は上層に暗褐色土, 中層以下にロームブロックを含む土層が堆積し, 中層以下は人為的埋土と考えられる。当遺構に伴う遺物はない。

第11号土坑 F-14区に位置する。平面形は円形を呈する。長軸1.90m, 短軸1.73m, 深さ約69cmを測る。覆土は上層に暗褐色土, 中層以下にロームブロックを含む土層が堆積し, 中層以下は人為的埋土と考えられる。当遺構に伴う遺物はない。

第12号土坑 H・I-13区に位置する。第41号住居



第10・11号土坑堆積覆土

- 第1層：暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1～2cmロームロームブロック少量含む 締まりやや有り)
- 第3層：褐色土層(ローム粒極多量含む 径1～2cmロームブロック微量含む 締まりやや有り)
- 第4層：暗褐色土層(径1～2cm ロームブロック少量含む ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第5層：暗褐色土層(径5cmロームブロック微量含む ローム粒少量含む 締まりやや有り)

第12号土坑堆積覆土

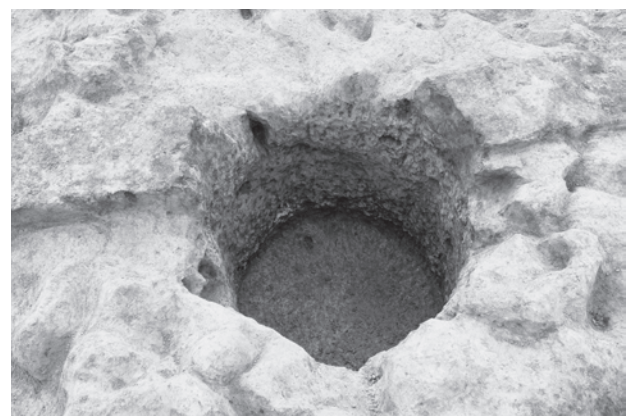
- 第1層：黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第4層：褐色土層(ローム粒多量含む 炭粒微量含む 締まりやや有り 粘性有り)

第98図 第9・10・11・12号土坑

跡を掘り込んでいる。平面形は楕円形を呈する。長軸1.10m、短軸0.96m、深さ約121cmを測る。覆土は黒褐色土を主体とする。当遺構に伴う遺物はない。



第8号土坑



第12号土坑

VIII 自然科学的分析

1 鷹ノ巣遺跡から出土した炭化材の樹種と炭化種実

はじめに

鷹ノ巣遺跡は、那珂川左岸の台地端部付近に位置する。発掘調査により、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代の竪穴住居跡が検出されている。弥生時代後期や古墳時代後期の住居跡の中には住居構築材が炭化した状態で残存している焼失住居も認められる。

本報告では、住居構築材の木材利用を明らかにするため、焼失住居から出土した炭化材の樹種同定を実施する。また、植物利用状況を明らかにするため、住居跡の覆土や土器内の土壌中から得られた種実の同定を実施する。

1 炭化材の樹種同定

(1) 試料

試料は、弥生時代後期の第35号住居跡の炭化材27点、古墳時代後期の第45号住居跡の炭化材4点、第50号住居跡の炭化材7点、第51号住居跡の炭化材20点の合計58点である。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(3) 結果

樹種同定結果を第10表に示す。第51号住居跡C-50は、樹皮(師部)のみで樹種同定に必要な木部細胞が観察できなかったため、種類は不明である。その他の炭化材は、広葉樹7種類(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属

コナラ亜属コナラ節・クリ・エノキ属・モクレン属・エゴノキ属・トネリコ属)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は2-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・エノキ属(*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は2-4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-8細胞幅、1-50細胞高で鞘細胞が認められる。

・モクレン属(*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸~薄く、横断面では角張った

第10表 樹種同定結果

遺 構	時代時期	遺物番号	樹 種
第35号住居跡	弥生時代後期(東中根式)	C-1	クリ
		C-3	エノキ属
		C-5	クリ
		C-6	クリ
		C-7	エノキ属
		C-8	クリ
		C-9	クリ
		C-10	クリ
		C-11	エノキ属
		C-12	クリ
		C-13	クリ
		C-14	クリ
		C-15	クリ
		C-16	クリ
		C-17	エゴノキ属
		C-18	クリ
		C-20	エノキ属
		C-22	クリ
		C-30	エノキ属
		C-34	エノキ属
		C-35	エノキ属
		C-37	エノキ属
		C-38	クリ
		C-39	クリ
C-41	エノキ属		
C-42	エノキ属		
C-43	トネリコ属		
第45号住居跡	古墳時代後期	C-18	モクレン属
		C-21	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C-22	クリ
		C-24	コナラ属コナラ亜属クスギ節
第50号住居跡	古墳時代後期	C-18	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C-48	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-53	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-64	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-69	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-76	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-77	コナラ属コナラ亜属クスギ節
第51号住居跡	古墳時代後期	C-6	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C-15	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-24	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-30	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C-34	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-41	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-44	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-50	樹皮
		C-62	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C-63	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-76	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-80	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-85	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C-91	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-92	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-93	コナラ属コナラ亜属クスギ節
		C-95	コナラ属コナラ亜属クスギ節
C-97	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
C-98	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
C-99	コナラ属コナラ亜属クスギ節		

第11表 遺構別種類構成

時代・遺構		樹種								合計
		クヌギ節	コナラ節	クリ	エノキ属	モクレン属	エゴノキ属	トネリコ属	樹皮	
弥生時代後期(東中根式)	第35号住居跡			15	10		1	1		27
古墳時代後期	第45号住居跡	1	1	1		1				4
	第50号住居跡	6	1							7
	第51号住居跡	15	4						1	20
合計		22	6	16	10	1	1	1	1	58

楕円形～多角形，単独および2～4個が放射方向に複合して散在し，年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し，壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性，1～2細胞幅，1～30細胞高。

・エゴノキ属(*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で，横断面では楕円形，単独または2～4個が複合して散在し，年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性，1～3細胞幅，1～20細胞高。

・トネリコ属(*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で，孔圏部は2～3列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，厚壁の小道管が単独または2～3個が放射方向に複合して配列し，年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，1～3細胞幅，1～30細胞高。

(4)考察

炭化材が出土した住居跡は，弥生時代後期と古墳時代後期に分けられる。各遺構別の種類構成を表11に示す。

弥生時代後期の第35号住居跡から出土した炭化材には，合計で4種類の木材が認められ，クリとエノキ属が比較的多いが，エゴノキ属とトネリコ属は各1点であった。この結果から，住居構築材にクリとエノキ属を中心とした木材利用が推定される。クリとエゴノキ属は二次林の構成種，エノキ属とトネリコ属は川辺林の構成種である。いずれも現在の遺跡周辺でも普通にみられる種類であり，木材は比較的重硬で強度が高い。このことから，遺跡周辺に生育している種類の中から，強度の高い木材

を選択したことが推定される。なお，多く認められたクリは，二次林内に生育するが，関東地方の二次林は通常はコナラ節等が主要素となり，クリが純林を形成することとはなく，本来一緒に生育している。今回，クリが主でエノキ属よりも強度の高いコナラ節が1点も認められない結果は，これまでの住居構築材の樹種同定結果と比較すると，認められることが少ない構成である。コナラ節が斧柄や鋤・鋤等の農耕土木具にも有用な種類であることを考慮すると，意図的にコナラ節を使用していないような状況も考えられる。

ひたちなか市内では，船窪遺跡群の船窪遺跡，半分山遺跡，ほんぼり山遺跡で弥生時代後期の住居跡出土炭化材について樹種同定を実施した例がある(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2005)。船窪遺跡とほんぼり山遺跡では，各1点のみであるが，半分山遺跡では3基の住居跡で合計67点の炭化材について樹種同定を実施している。このうち，比較的分析点数の多い第6号住居跡ではアカガシ亜属，第11号住居跡ではケンボナシ属が多く，住居によって種類構成が異なる結果が得られている。今回多く見られたクリは，第16号住居跡で2点認められたのみで，エノキ属については1点も確認されていないことから，鷹ノ巣遺跡と船窪遺跡群とで木材利用が異なっていたことが推定される。

船窪遺跡群では，猪谷津遺跡で弥生時代後期頃と考えられる堆積物の花粉分析を実施しており，アカガシ亜属，コナラ亜属，シイノキ属が比較的多い結果が得られている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2003)。船窪遺跡群の住居構築材にアカガシ亜属が多い結果は，花粉分析の結果とも調和的であり，周辺植生から木材を利用したことが推定される。船窪遺跡群は，鷹ノ巣遺跡と距離的にも近いが，より海岸に近い位置にある。本遺跡周辺では弥

生時代後期の古植生に関する資料が無いが、比較的近い位置に立地していても船窪遺跡群とは周辺植生が異なっていた可能性もある。

一方、古墳時代後期の住居跡3基から出土した炭化材には、合計で4種類が認められ、クヌギ節が比較的多く、クリとモクレン属は少ない。弥生時代後期に多く見られたクリとエノキ属はクリが1点認められたのみであり、弥生時代後期と古墳時代後期とで住居構築材の木材利用が異なる傾向がある。

古墳時代後期の種類構成を住居別に見ると、第45号住居跡では、クヌギ節、コナラ節、クリ、モクレン属が各1点であり、やや雑多な種類構成で傾向はよくわからない。一方、第50号住居跡および第51号住居跡では、樹皮が1点認められた他は、クヌギ節とコナラ節の2種のみで構成される。この結果から、古墳時代後期では、クヌギ節を主とし、他にコナラ節が利用されることが多かった可能性がある。クヌギ節とコナラ節は、二次林を構成する種類であり、モクレン属も二次林内に生育する種類を含む。現在の植生を考慮すれば、周辺で木材の入手は可能であったと考えられる。

ひたちなか市内では、武田遺跡群と船窪遺跡群で古墳時代後期の住居跡出土炭化材について樹種同定を実施した例がある。今回多く認められたクヌギ節や比較的多かったコナラ節は、船窪遺跡群で認められている。船窪遺跡群の同定結果をみると、全体ではアカガシ亜属やクヌギ節が比較的多いものの、住居別に見ると特定の樹種が多数を占めるような結果は認められず、雑多な種類構成を示す傾向がある。そのため、弥生時代後期と同様に、古墳時代後期の段階でも本遺跡と船窪遺跡群では木材利用が異なっていたことが推定される。

船窪遺跡群の弥生時代後期と古墳時代後期の住居構築材の樹種同定結果を比較すると、構成比は異なるものの、確認されている種類には大きな違いが認められない。そのため、弥生時代後期と古墳時代後期とで周辺植生には大きな変化はなかった可能性がある。住居構築材の木材利用には周辺植生が大きく影響を及ぼしていると考えられることから、今後本遺跡周辺でも古植生に関する調査を実施し、猪谷津遺跡との比較等を行うことが望まれる。

2 種実遺体の同定

(1) 試料

試料は、弥生時代後期(東中根式)とされる第35号住居跡(17点)、第47号住居跡(73点)、第55号住居跡(47点)、古墳時代後期とされる第51号住居跡(1点)、平安時代とされる第67号住居跡(1点)より検出された種実計139点である。各試料の詳細は結果と共に第3～5表に記す。

(2) 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実を抽出する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後の種実は、種類毎に容器に入れて返却する。

(3) 結果

第35号・第51号・第67号住居跡の結果を第12表に、第47号住居跡の結果を第13表に、第55号住居跡の結果を第14表に示す。分析の結果、落葉広葉樹5分類群(オニグルミ、イヌザンショウ属、サンショウ属、ブドウ属、ブドウ科)44個、草本5分類群(イネ、オオムギ、ムギ類、コムギ、マメ類、オナモミ属)362個、計404個の種実が同定された他に、種類・部位不明の種実56個、炭化材76個、木材組織が確認されない種類・部位不明の炭化物255個、昆虫1個、土の塊・礫などの残渣101個が確認された。種実は、全て炭化しており黒色を呈す。栽培植物は、イネ79個、オオムギ50個、ムギ類18個、コムギ7個、マメ類2個の計156個が確認された。以下に各住居跡における種実検出状況を記す。

〈弥生時代後期(東中根式)〉

・第35号住居跡

落葉広葉樹のサンショウ属3個、ブドウ科5個、栽培植物のイネ22個、オオムギ3個、ムギ類1個が検出された。

・第47号住居跡

落葉広葉樹のオニグルミ5個、サンショウ属1個、草本のオナモミ属49個、栽培植物のイネ32個、オオムギ42個、ムギ類16個、コムギ7個、マメ類1個が検出された。

第12表 第35・51・67号住居跡の炭化種実同定結果

住居跡番号	時代	No.	分類群	木本					草本							不明種実	その他						
				○オニグルミ		イヌザンショウ属		○ブドウ属	ブドウ科	●イネ	●オオムギ	●ムギ類	●コムギ	●マメ類	オナモミ属		炭化材	不明炭化物	昆虫	土の塊・礫など			
				核	破片	核	破片														種子	破片	胚乳
第35号住居跡	弥生後期 (東中根式)	1	1c (ベルト)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	
		2	2c (ベルト)	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		4	3a (ベルト)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	3
		5	3b (ベルト)	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	-
		6	3c (ベルト)	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4	-	1
		7	3d (ベルト)	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	3
		8	3e (ベルト)	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	-	11
		10	4c (ベルト)	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4	-	-
		11	5e (ベルト)	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
		12	ピット1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		13	ピット2	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	-	-
		14	ピット3	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1
		15	ピット4	-	-	-	-	-	-	2	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-	3	-	4
		16	ピット5	-	-	-	-	-	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		17	炉	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
		25	4c	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		26	4d	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		第51号住居跡	古墳後期	90	P18内の土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	10	-	-
第67号住居跡	平安	77	P1内の土	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	

●：栽培植物 ○：可食種実

・第55号住居跡

落葉広葉樹のオニグルミ 2個, イヌザンショウ属 1個, サンショウ属 1個, ブドウ属 18個, ブドウ科 7個, 草本のオナモミ属 157個, 栽培植物のイネ 24個, オオムギ 5個, ムギ類 1個が検出された。

〈古墳時代後期〉

・第51号住居跡

栽培植物のマメ類 1個が検出された。

〈平安時代〉

・第67号住居跡

栽培植物のイネ 1個が検出された。

以下に, 本分析にて同定された種実の形態的特徴等を, 木本, 草本の順に記す。

〈木本〉

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。完形ならば径2.5-3.5cm程度の広卵形で頂部尖る。破片の大きさは8mm以下。1本の明瞭な縦の縫合線が一周する。核は硬く緻密で, 表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り, ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。核は木質, 硬く緻密で, 表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り, ごつごつしている。内面は平滑で, 縫合線に沿って半分に割れた面の正中線両側には子葉が入る2つの大きな窪みがある。

・イヌザンショウ属 (*Fagara*) ミカン科

核(内果皮)が検出された。非対称広倒卵形でやや扁平。長さ3mm, 幅2.5mm, 厚さ1.5mm程度。腹面正中線上に広

第14表 第55号住居跡の炭化種実同定結果

住居跡番号	時代	No.	分類群	木本													不明種実	その他				備考										
				部位	状態	破片	核	サキシヨウ属			ブドウ属	ブドウ科		●イネ	●オオムギ	●ムギ類		●コムギ	●マメ類	オナモミ属	炭化材		不明炭化物	昆虫	土の塊・礫など							
								核	破片	完形		種子	破片													完形	胚乳	破片	完形	種子	総苞	破片
								破片	破片	完形		破片	完形													破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片
第55号住居跡	弥生後期 (東中根式)	1	1c (ベルト)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	12										
		2	1d	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-									
		3	1e	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-									
		4	2c (ベルト)	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1	3	-	-	-									
		5	2c	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	ブドウ属3個合着								
		6	2d	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	12	-	-	-	-	-	-									
		7	2e	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	4	1	3	-	-	-									
		8	3b (ベルト)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	5	-	-	-									
		9	3b	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-									
		10	3c (ベルト)	-	-	-	-	-	1	-	4	-	-	-	-	-	10	8	1	14	-	-	-									
		11	3d	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	2	-	-	-	ブドウ属3個合着								
		12	3e	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	-	2	-	-	-									
		13	4a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-									
		14	4b	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-									
		15	4c (ベルト)	-	1	-	-	-	2	2	1	2	-	-	-	-	10	7	-	6	-	-	-									
		17	4d (ベルト)	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	1	-	-	8	6	-	11	-	-	-									
		18	4d	-	-	-	-	-	5	2	1	-	-	-	-	-	6	-	-	4	-	-	-									
		19	4e (ベルト)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20	-	-	10	-	-	7									
		20	4e	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-									
		21	4f (ベルト)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-									
		22	5b	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-									
		23	5c (ベルト)	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	12	6	-	5	-	-	-									
		24	5c	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	4	-	-	-									
		25	5d	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	9	-	-	3	-	-	-									
		26	5e	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	5	-	-	1	-	-	-									
		27	6a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-									
		28	6b	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-									
		29	6c (ベルト)	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-									
		32	6e	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-									
		33	7c (ベルト)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	5	-	-	-									
		34	7d	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-									
		36	ビット1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	11	5	-	1	-	-	6									
		37	ビット2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	7									
		38	ビット3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	1	1	5	-	-	1									
		39	ビット4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-									
		40	ビット5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-									
		41	ビット6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-									
		42	ビット7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-									
		43	ビット8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2									
		44	ビット11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1									
		45	ビット13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2									
		46	炉	-	-	-	-	-	-	3	4	-	-	-	-	-	4	3	6	4	-	-	2									
		47	I区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-									
		48	II区	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-									
		49	III区	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-									
		50	場所不明の土	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-									
		51	P1内の土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-									

●:栽培植物 ○:可食種実

線形の臍がある。内果皮は厚く硬く、表面にやや深く大きな網目模様がある。

・サンショウ属 (*Zanthoxylum*) ミカン科

核(内果皮)が検出された。倒卵体でやや偏平。長さ3.2 mm, 幅2.5 mm, 厚さ1.5 mm程度。腹面正中線上基部に斜切形の臍がある。内果皮は厚く硬く、表面には浅く細かな網目模様がみられる。

・ブドウ属 (*Vitis*) ブドウ科

種子が検出された。3個の腹面同士の合着が確認された。種子は広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。径3.5 mm程度。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は硬く表面は粗面、断面は柵状。なお、種の同定根拠となる背面が欠損した破片を、ブドウ科 (*Vitaceae*) としている。

〈草本〉

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳が検出された。長さ4 - 5 mm, 幅2.5 - 3 mm, 厚さ1.5 mm程度の長楕円形でやや偏平。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2 - 3本の隆条が縦列する。米を蒸したり炊いたりなどし過ぎて「おこげ」となった場合には、このように明瞭に胚乳の形をとどめることはないと考えられ、生米の状態では火熱を受けたことが推定される。

・オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属

胚乳が検出された。長さ5 - 6 mm, 径2.5 - 3 mm程度の紡錘状長楕円体で両端は尖る。腹面は正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で、表面に果皮(穎)が付着した個体もみられる。穎を含めた長さは8 mm程度。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳が検出された。長さ3 - 4.5 mm, 径2.5 - 3 mm程度の楕円体。腹面は正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面は

やや平滑。なお、頂部を欠損するなど遺存状態が悪く、オオムギとの判別が難しい個体をムギ類としている。

・マメ類 (*Leguminosae*) マメ科

種子が検出された。長さ5 mm, 径2 mm程度の長楕円体。子葉の合わせ目上に長さ2 mm程度の長楕円形で縁が隆起する細長い臍が確認される。種皮表面はやや平滑。

遺跡出土の炭化マメ類は、子葉内面の幼痕や初生葉の形態から、ササゲ、アズキ、リョクトウなどを判別する試みが行われている(吉崎, 1992)。一方、野生種との雑種も多いため、形態のみから現在の特定の種類に比定することは難しいとも考えられている(南木, 1991; 南木・中川, 2000など)。最近では、DNA分析による判別が開発されつつある(矢野, 2002)。今回検出されたマメ類は、子葉内面が確認されないため、現時点では形態のみによる種類の特定は控え、今後の資料の蓄積を待ち検討したいと考える。

・オナモミ属 (*Xanthium*) キク科

総苞が検出された。長さ9 mm, 径7 mm程度の楕円体。頂部はやや尖り、長さ1 mm程度の太い嘴2個がある。表面には長さ0.5 - 1 mm程度の刺が散在し、鉤状に曲がった刺先端部を欠損する。

(4) 考察

各住居跡の種実分類群からは、古くから栽培のために持ち込まれた渡来種とされるイネ、オオムギ、コムギなどのムギ類、マメ類が確認された。これらの栽培植物の胚乳や種子は、いずれも可食部で炭化していることから、居住域内における利用と火を受けた後に廃棄されたこと等が考えられる。

ひたちなか市内遺跡における栽培植物の種実検出例では、船窪遺跡群の住居跡の炬や竈等から、イネ、アワーヒエーキビ、オオムギ、コムギ、マメ類、シソ属が、ぼんぼり山遺跡の弥生時代の住居跡からイネが、半分山遺跡の弥生時代と6世紀の住居跡からイネ、アワーヒエ、オオムギ、コムギが、8・9世紀の住居跡からイネが、船窪遺跡の弥生時代と古墳時代前期の住居跡からイネが、古墳時代後期の住居跡からイネ、アワーヒエ、シソ属が、奈良時代から多量のイネ、アワーヒエー

キビ, コムギ, マメ類が, 平安時代の住居跡からイネ, アワ-ヒエ, オオムギ, マメ類が確認されている(バリノ・サーヴェイ株式会社, 2005)。また, 武田遺跡の古墳時代の土器内等からは, イネ, キビ, コムギ, ウリが, 平安時代の土器内からオオムギが確認されている(松谷, 1989:1991)。武田西塙遺跡の古墳時代の住居跡からイネ, キビ, コムギ, シソ, マメ類が(松谷, 1994:細谷, 1997), 平安時代の住居跡からイネの塊状炭化物, キビ, オオムギ, コムギ, ダイズ?, ヒョウタン?が確認されている(松谷, 1993)。武田石高遺跡の古墳時代からイネ, コムギ?が(松谷, 1992), 平安時代からアワ, オオムギが確認されている(松谷, 1992)。

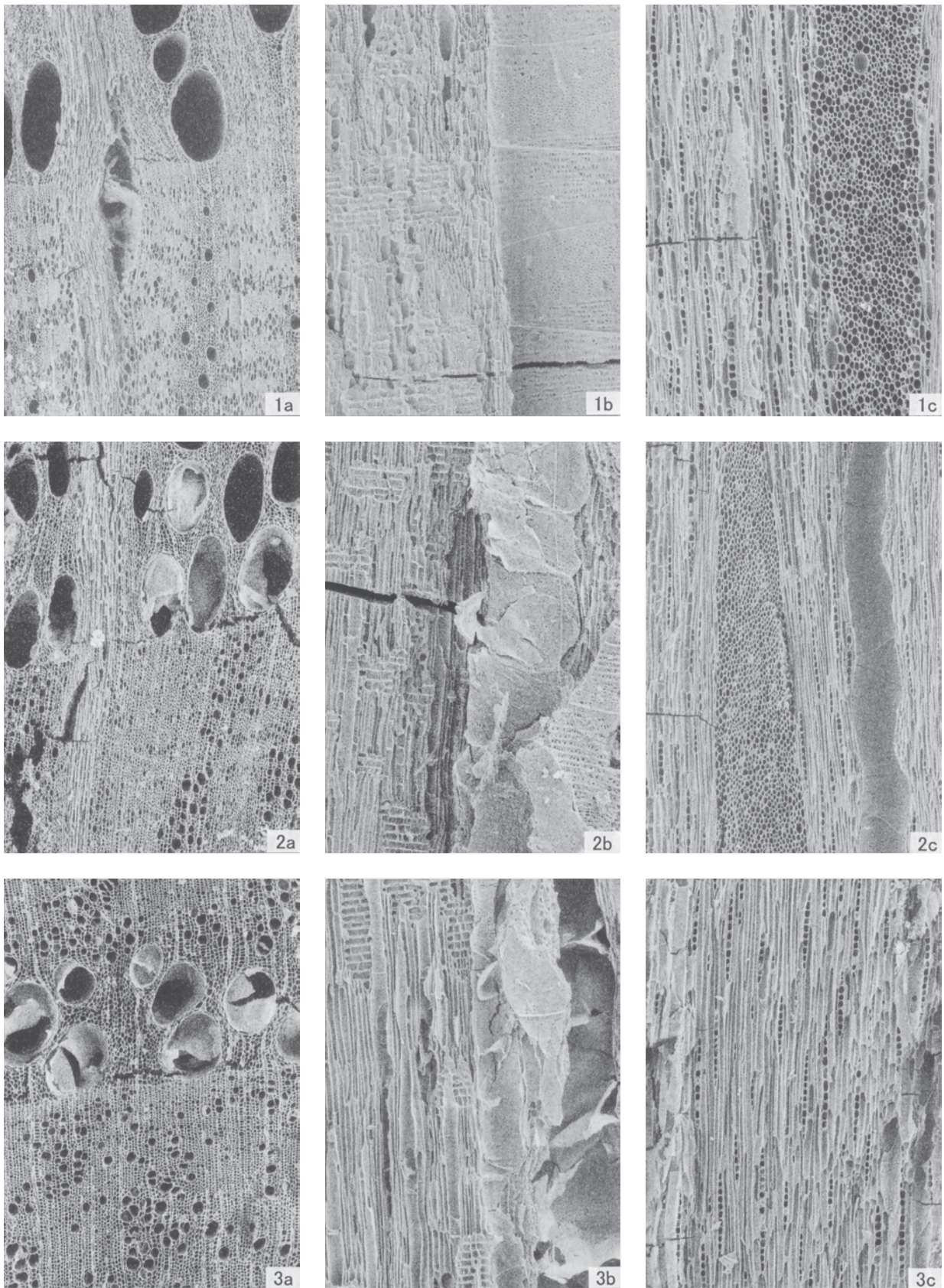
このように, 周辺遺跡の当該期に比定される遺構や遺物包含層からも多くの栽培植物の種実が検出されていることから, 本遺跡及び周辺域で普遍的に利用されていたことが推定される。

一方, 栽培植物と不明を除く種実分類群は, 落葉広葉樹5分類群(オニグルミ, イヌザンショウ属, サンショウ属, ブドウ属, ブドウ科), 草本のオナモミ属が確認された。オニグルミなどの河畔林要素や, イヌザンショウ属, サンショウ属, つる性木本のブドウ属, ブドウ科などの伐採地や崩壊地や林縁などの明るく開けた場所に先駆的に侵入する樹種が確認された。これらは, 本遺跡周辺域の河川沿いの低地や人里と林地の境界付近に生育していたものに由来すると考えられる。また, オナモミ属は, 明るく開けた場所に生育する人里植物に属する一年草であることから, 調査区周辺域の草地などに生育していたものに由来すると考えられる。

これらの自生していたと考えられる分類群のうち, 炭化核の破片が確認されたオニグルミは, 堅果内部の子葉が食用・長期保存可能な有用植物である。また, ブドウ属は果実が食用可能であるが, 第55号住居跡から炭化種子の合着が確認されたことから, 果実の状態ですべて火を受けたことが推定される。ブドウ属が液果で長期間の保存には不適であることを考慮すると, 結実する秋頃に火を受けている可能性がある。

引用文献

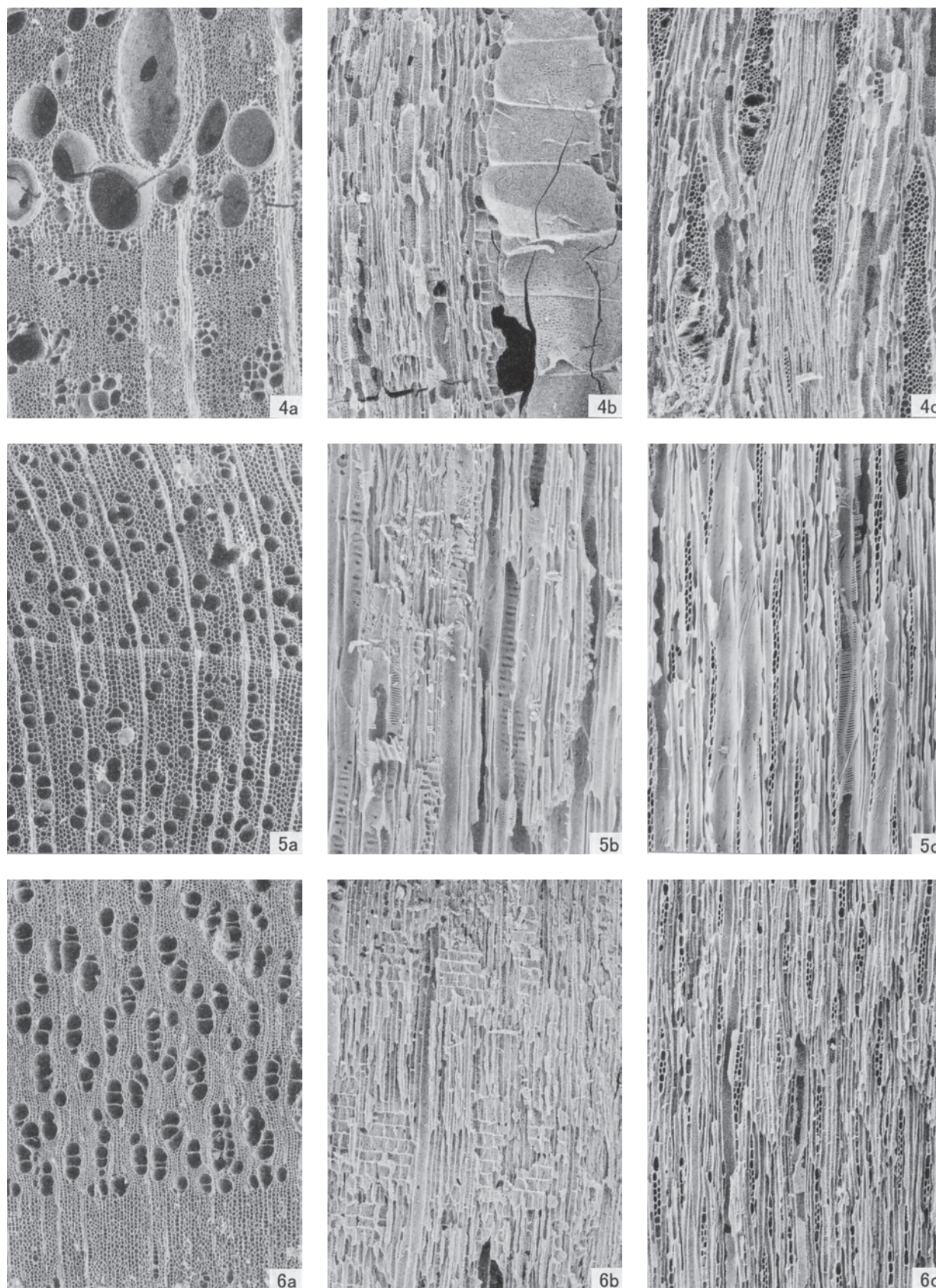
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
 細谷 葵, 1997, 欧米式archaeobotanyによる武田西塙遺跡植物遺体の分析. 武田X-1996年度武田遺跡群発掘調査の成果一, (財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社, 46-57.
 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
 松谷暁子, 1989, 武田遺跡群出土植物遺残. 武田Ⅱ-1988年度武田遺跡群発掘調査の成果一, (財)勝田市文化・スポーツ振興公社, 76-79.
 松谷暁子, 1991, 武田遺跡群出土の植物遺残の識別. 武田Ⅳ-1990年度武田遺跡群発掘調査の成果一, (財)勝田市文化・スポーツ振興公社, 109-113.
 松谷暁子, 1992, 武田遺跡群出土の植物遺残の識別. 武田Ⅴ-1991年度武田遺跡群発掘調査の成果一, (財)勝田市文化・スポーツ振興公社, 95-98.
 松谷暁子, 1993, 武田西塙遺跡(1992)出土植物遺残について. 武田Ⅵ-1992年度武田遺跡群発掘調査の成果一, (財)勝田市文化・スポーツ振興公社, 108-117.
 松谷暁子, 1994, 武田西塙遺跡(1993)出土植物遺残について. 武田Ⅶ-1993年度武田遺跡群発掘調査の成果一, (財)勝田市文化・スポーツ振興公社, 130-136.
 南木陸彦, 1991, 栽培植物, 古墳時代の研究 4 生産と流通Ⅰ, 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編, 雄山閣, 165-174.
 南木陸彦・中川治美, 2000, 大型植物遺体, 琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書3-2 粟津湖底遺跡 自然流路(粟津湖底遺跡Ⅲ), 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会, 49-112.
 中山至大・井之口希秀・南谷志志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
 バリノ・サーヴェイ株式会社, 2003, 猪谷津遺跡の埋没古墳環境変遷. 「(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第27集 ほんぼり山遺跡・猪谷津遺跡」, ひたちなか市船窪土地区画整理組合・財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社, 223-242.
 バリノ・サーヴェイ株式会社, 2005, 船窪遺跡群自然化学分析. 「(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第32集 船窪遺跡(第2分冊)」, ひたちなか市船窪土地区画整理組合・財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社, 337-377.
 鳥地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
 Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
 矢野 梓, 2002, 遺跡から出土した小型豆のDNA分析, DNA考古学 Newsletter3.
 吉崎昌一, 1992, 古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナル, No. 355, 2-14.



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (50号住居跡；C-69)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (45号住居跡；C-21)
 3. クリ (35号住居跡；C-39)
- a: 木口, b: 柱目, c: 板目

200 μm : a
 200 μm : b,c

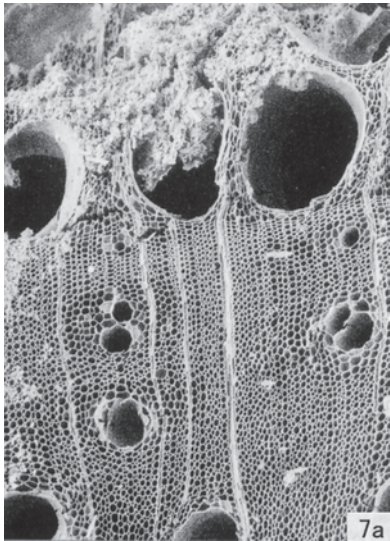
第99図 炭化材(1)



4. エノキ属 (35号住居跡；C-41)
 5. モクレン属 (45号住居跡；C-18)
 6. エゴノキ属 (35号住居跡；C-17)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μm : a
 200 μm : b,c

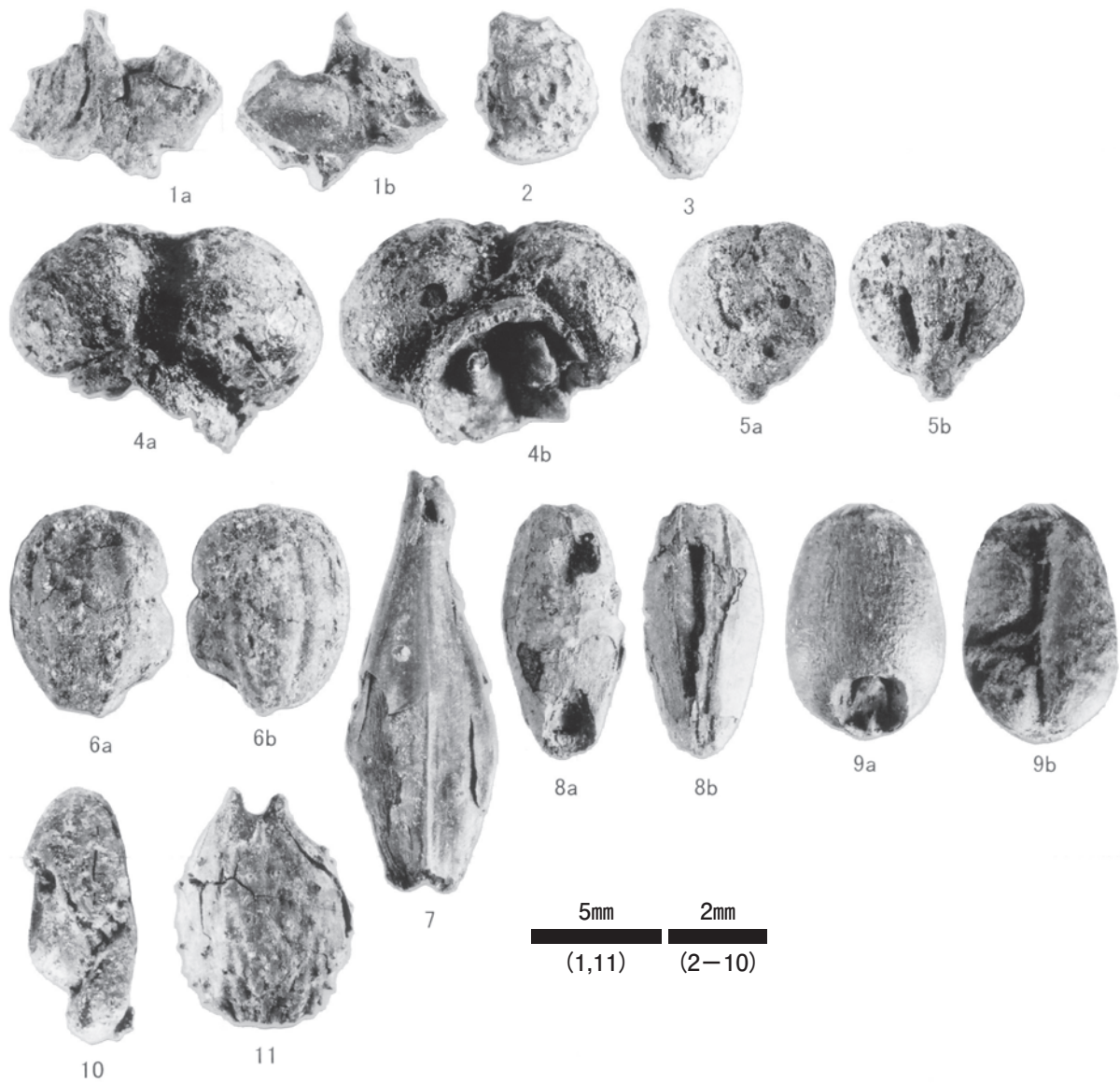
第100図 炭化材(2)



7. トネリコ属(35号住居跡；C-43)
a：木口，b：柁目，c：板目

200 μ m : a
200 μ m : b,c

第101図 炭化材(3)



- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. オニグルミ 核(47号住居跡；No.85) | 2. イヌザンショウ属 核(55号住居跡；No.15) |
| 3. サンショウ属 核(35号住居跡；No.14) | 4. ブドウ属 種子(55号住居跡；No.5) |
| 5. ブドウ属 種子(55号住居跡；No.18) | 6. イネ 胚乳(35号住居跡；No.11) |
| 7. オオムギ 胚乳・穎(47号住居跡；No.37) | 8. オオムギ 胚乳(47号住居跡；No.37) |
| 9. コムギ 胚乳(47号住居跡；No.17) | 10. マメ類 種子(51号住居跡；No.90) |
| 11. オナモミ属 総苞(55号住居跡；No.3) | |

第102図 炭化種実

2 鷹ノ巣遺跡出土顔料成分分析

はじめに

茨城県ひたちなか市に所在する鷹ノ巣遺跡および東海村に所在する下ノ諏訪南遺跡では、古墳時代住居跡から壺に赤色顔料が容れられた状態で出土している。今回の自然科学分析調査では、この赤色顔料の材質調査を目的として、X線回折分析を行う。

1 試料

(1)鷹ノ巣遺跡

試料は、古墳時代後期とされる第53号住居跡の覆土中層から出土した小型の壺内から検出された赤色顔料1点である。覆土に混在して塊状の赤色顔料が存在する状況にあり、調査にはこの塊状の赤色顔料を採取し、供試する。なお、実体鏡下での観察では、緻密な構造を成しており、基質はシルト質の酸化鉄であり、若干の鉱物粒が含まれる状況が見られる。また、発泡等の状態は確認されない。

(2)下ノ諏訪南遺跡

試料は、古墳時代中期とされる第23B号住居跡から出土した壺内から検出された赤色顔料1点である。覆土全体が赤味を帯び、極微粒の赤色粒が点在しているが、明瞭な赤色顔料が存在する状況にはないことから、調査には覆土中のやや赤味の強い土塊を採取し、供試する。実体鏡下での観察では、多くの鉱物粒が見られる。全体的にはシルト質の土粒子の集合体であり、発泡等の状態は確認されない。

2 分析方法

採取した赤色顔料を105℃で乾燥し、メノウ乳鉢で微粉砕した後、アセトンを用いて無反射試料板に塗布し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex Divergency Slit：1°
Target：Cu (K α) Scattering Slit：1°

Monochrometer：Graphite湾曲Receiving Slit：0.3mm
Voltage：40KV Scanning Speed：2°/min
Current：40Ma Scanning Mode：連続法
Detector：S C Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps Scanning Range：2～45°

3 結果

(1)鷹ノ巣遺跡

X線回折図を第103図に示す。検出された鉱物は、石英(quartz)、斜長石(albite)、カリ長石(microcline)、角閃石(hornblend)、赤鉄鉱(hematite)の5鉱物である。

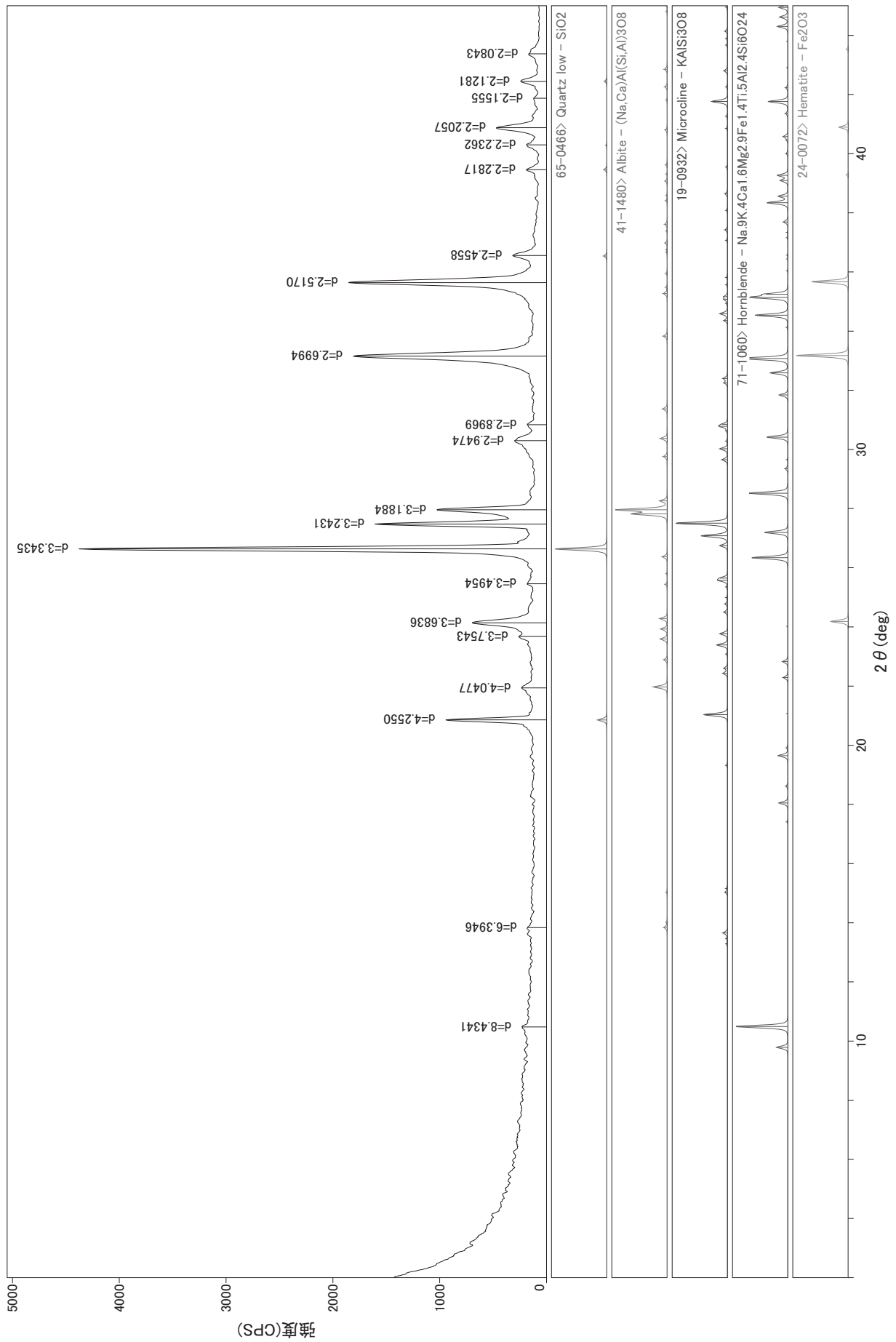
(2)下ノ諏訪南遺跡

X線回折図を第104図に示す。検出された鉱物は、石英(quartz)、斜長石(albite)、角閃石(hornblend)、赤鉄鉱(hematite)、雲母鉱物(muscovite)の5鉱物である。

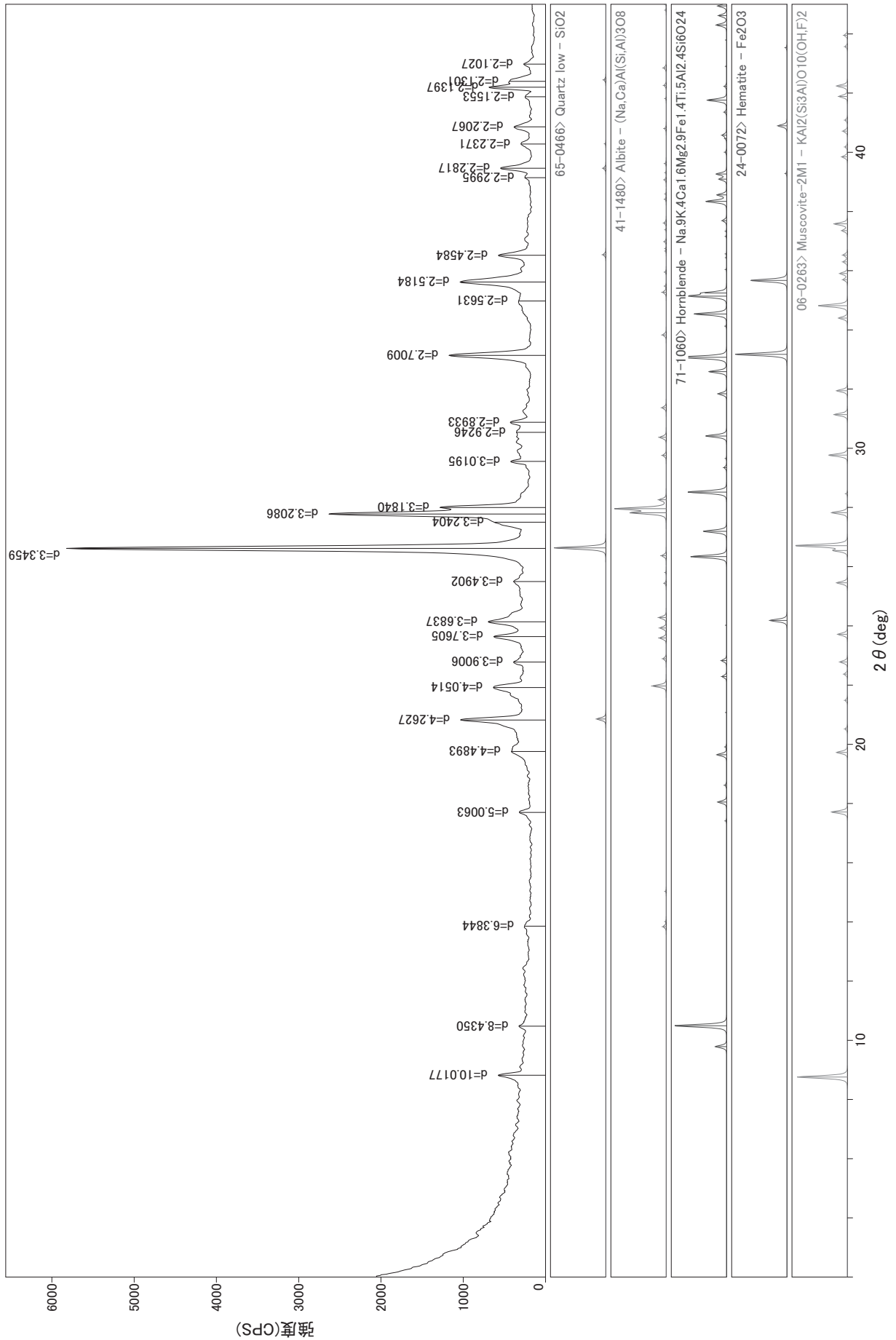
4 考察

赤色を呈する代表的な顔料鉱物にはベンガラ(赤鉄鉱；hematite [α -Fe $2O_3$])のほか、水銀朱(辰砂；cinnabar [HgS])、鉛丹(鉛丹；minium [Pb $3O_4$])などがある。今回、鷹ノ巣遺跡および下ノ諏訪南遺跡から検出された赤色顔料には赤鉄鉱(hematite)の存在が確認されていることから、これらがベンガラであることは明らかである。なお、同時に検出された石英や斜長石などの鉱物は、土壌や岩石中に見られる一般的な造岩鉱物であることから、覆土土壌に由来した鉱物と考えられる。

ベンガラには天然の赤鉄鉱を利用する場合のほか、含水水酸化鉄を焼成して得られる赤鉄鉱を利用する場合がある。また、赤鉄鉱にはパイプ状構造をなすものと、非パイプ状(塊状、球状、不定形など)構造のものがあり、前者については沼沢地などにおいて鉄バクテリアが生成する含水水酸化鉄(いわゆる高師小僧)が発物質であることが判明している(岡田, 1997;織幡・沢田, 1997)。このような背景から、ベンガラ材料の産出地は無数に存在することとなり、材料産出地に言及することは難しい。ただし、一遺跡において同一時期に使用されるベンガラはパイプ状もしくは非パイプ状のどちらかが支配的な傾



第103図 第53号住居跡出土土器内赤色顔料のX線解析図



第104図 東海村下ノ諏訪南遺跡第23B号住居跡出土土器内赤色顔料のX線解析図

Ⅷ 自然科学的分析

向にあることから(成瀬, 1998), 電子顕微鏡など利用してパイプ状構造の有無を観察することにより, その由来についての情報を得ることも可能である。

引用文献

- 岡田文男, 1997, パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38-39.
- 織幡順子・沢田正昭, 1997, 酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 76-77.
- 成瀬正和, 1998, 縄文時代の赤色顔料 I. 考古学ジャーナル, 438, 10-14.

写 真 图 版



1 第35号住居跡



2 第35号住居跡遺物出土状況



3 第47号住居跡



4 第47号住居跡遺物出土状況1



5 第47号住居跡遺物出土状況2



6 第47号住居跡遺物出土状況3



7 第55号住居跡



8 第55号住居跡遺物出土状況

図版2 住居跡 弥生時代～古墳時代前期



1 第43号住居跡



2 第59号住居跡



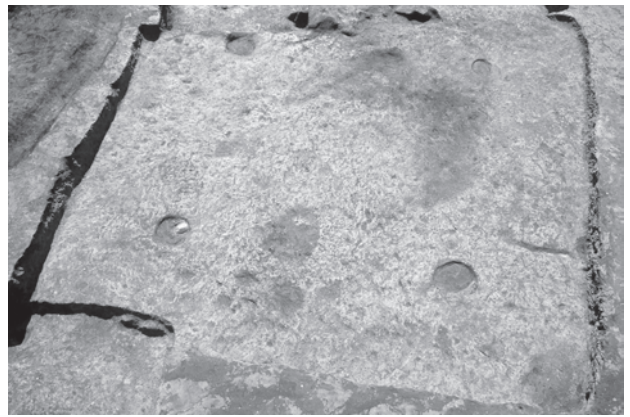
3 第59号住居跡遺物出土状況



4 第60号住居跡



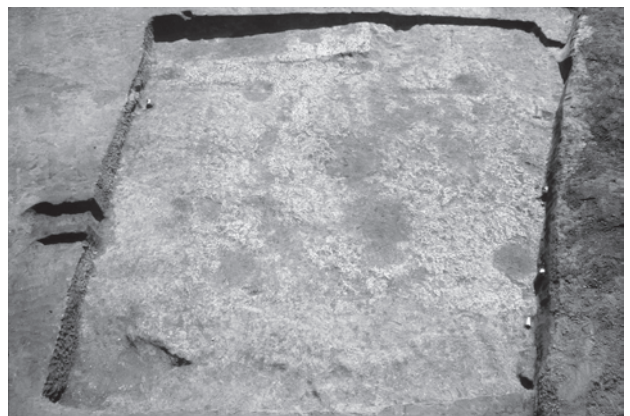
5 第60号住居跡遺物出土状況



6 第40B号住居跡



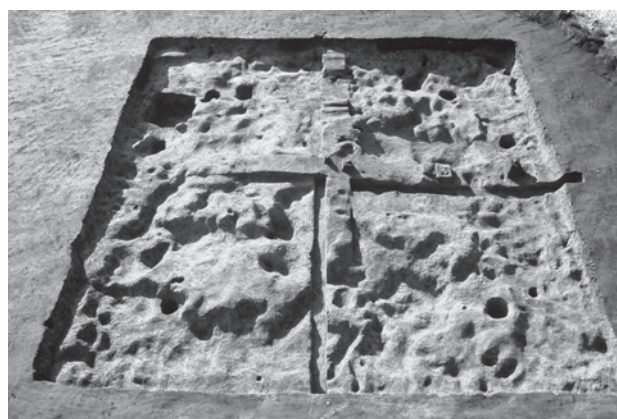
7 第40B号住居跡遺物出土状況



8 第41号住居跡



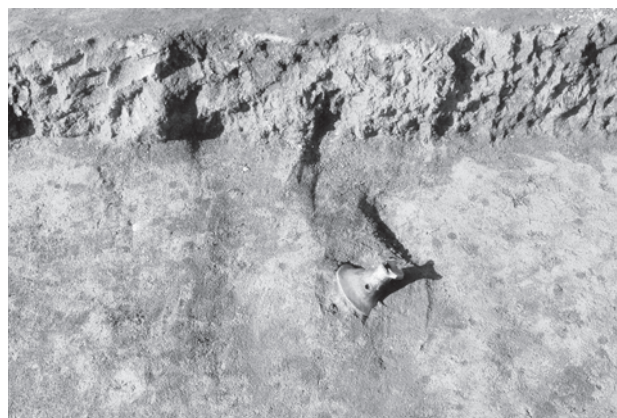
1 第41号住居跡遺物出土状況



2 第46号住居跡



3 第52号住居跡



4 第52号住居跡遺物出土状況



5 第62号住居跡

図版4 住居跡 古墳時代後期



1 第28号住居跡



2 第28号住居跡竈



3 第28号住居跡遺物出土状況



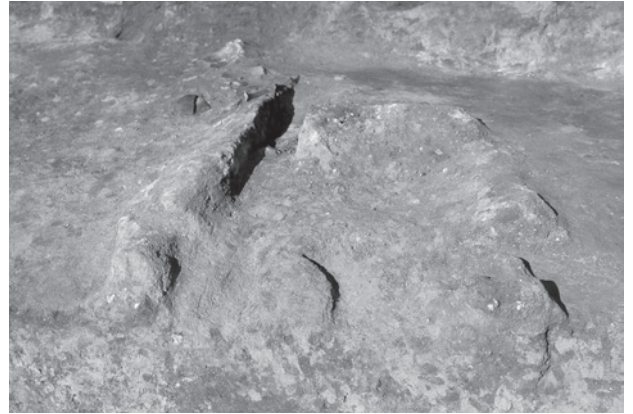
4 第30号住居跡



5 第30号住居跡竈



1 第31B号住居跡



2 第31B号住居跡竈



3 第31B号住居跡遺物出土狀況1



4 第31B号住居跡遺物出土狀況2



5 第34B号住居跡



6 第34B号住居跡竈



7 第36号住居跡



8 第36号住居跡竈



1 第37号住居跡



2 第37号住居跡竈



3 第39号住居跡



4 第40A号住居跡



5 第42号住居跡



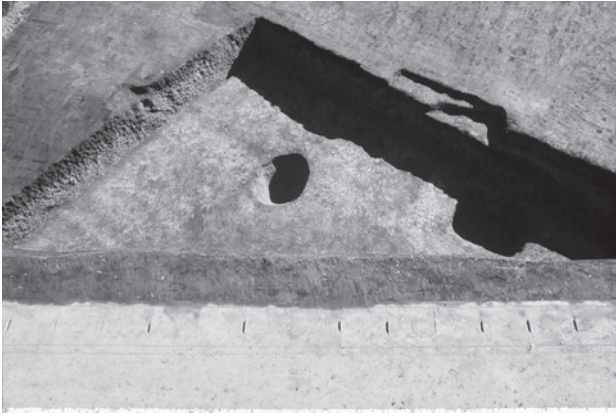
6 第42号住居跡竈



7 第45号住居跡



8 第45号住居跡竈



1 第48号住居跡



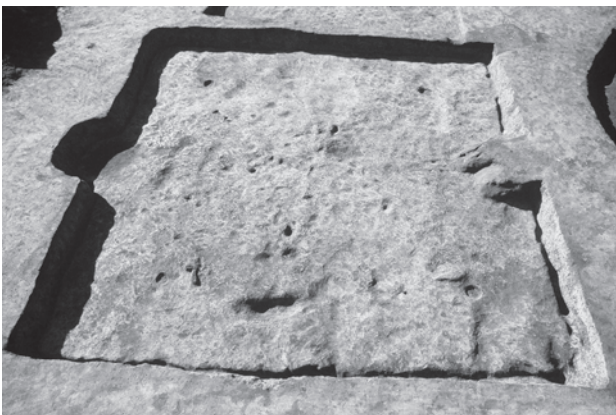
2 第48号住居跡ピット内遺物出土状況



3 第49号住居跡



4 第49号住居跡竈



5 第50号住居跡



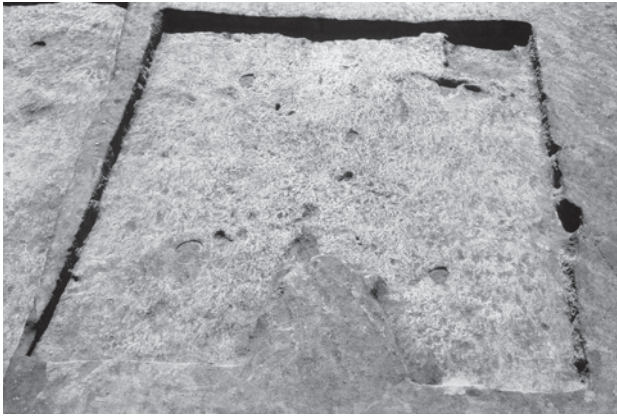
6 第50号住居跡竈



7 第50号住居跡炭化材・遺物出土状況1



8 第50号住居跡炭化材・遺物出土状況2



1 第51号住居跡



2 第51号住居跡炭化材出土状況



3 第51号住居跡竈



4 第51号住居跡竈内遺物出土状況



5 第53号住居跡



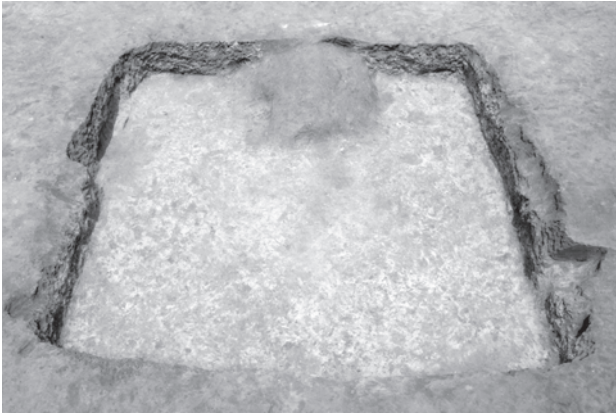
6 第53号住居跡竈



7 第64号住居跡



8 第64号住居跡炉址



1 第29号住居跡



2 第31A号住居跡



3 第32号住居跡



4 第32号住居跡竈



5 第33号住居跡



6 第33号住居跡竈



7 第33号住居跡遺物出土状況1



8 第33号住居跡遺物出土状況2



1 第 34B 号住居跡



2 第 38 号住居跡



3 第 44 号住居跡



4 第 44 号住居跡竈



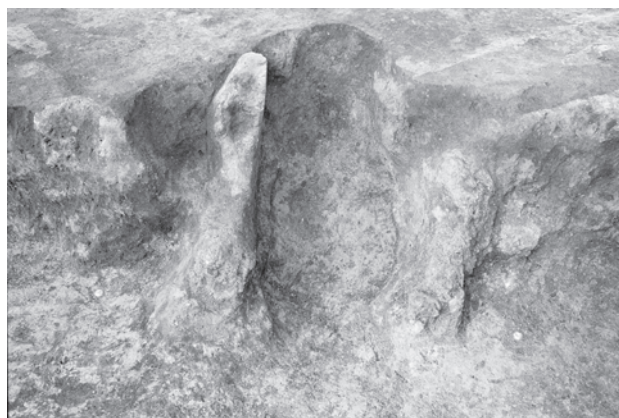
5 第 54 号住居跡



6 第 54 号住居跡竈



7 第 56 号住居跡



8 第 56 号住居跡竈



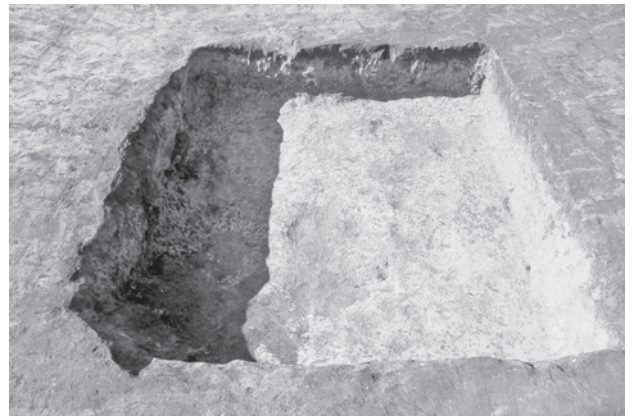
1 第57号住居跡



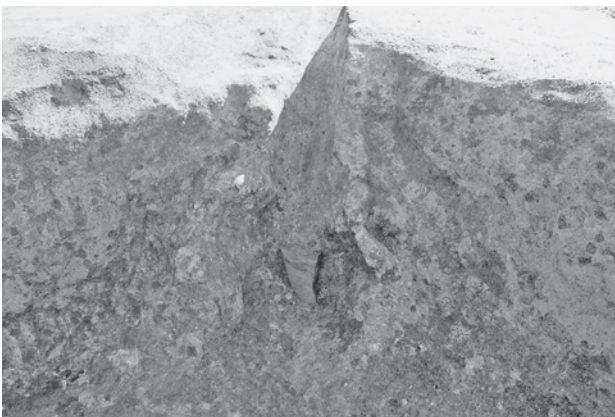
2 第57号住居跡竈



3 第58号住居跡



4 第63号住居跡



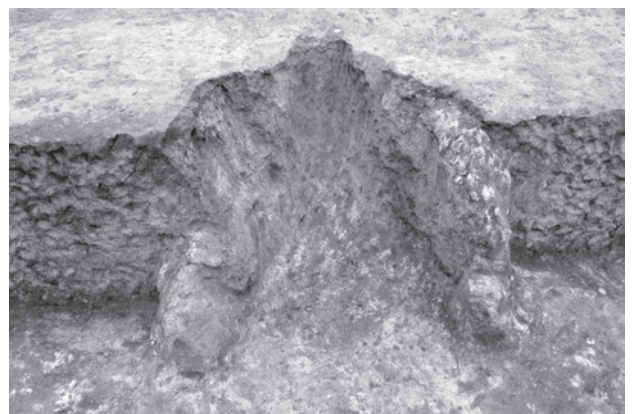
5 第63号住居跡竈



6 第63号住居跡竈



7 第65号住居跡



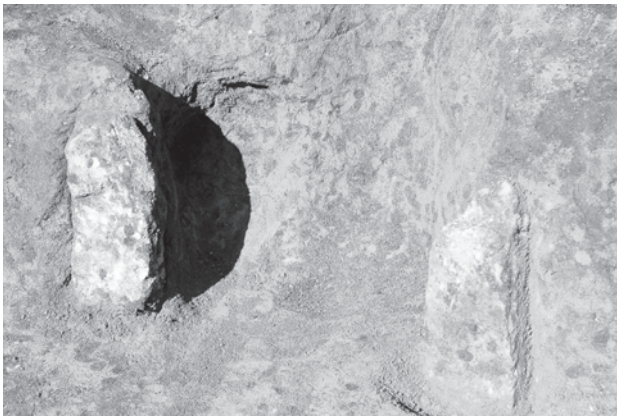
8 第65号住居跡竈



1 第65号住居跡遺物出土状況



2 第66号住居跡



3 第66号住居跡竈



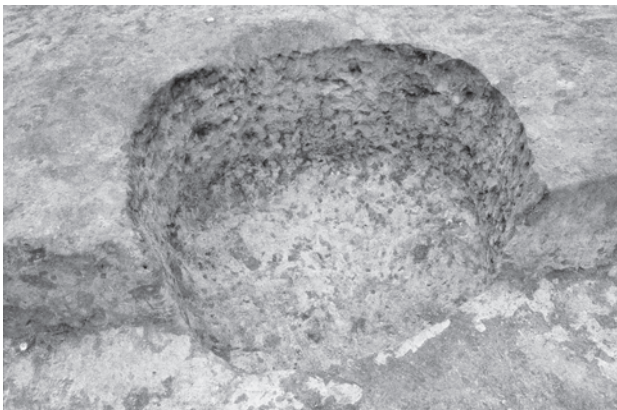
4 第67号住居跡



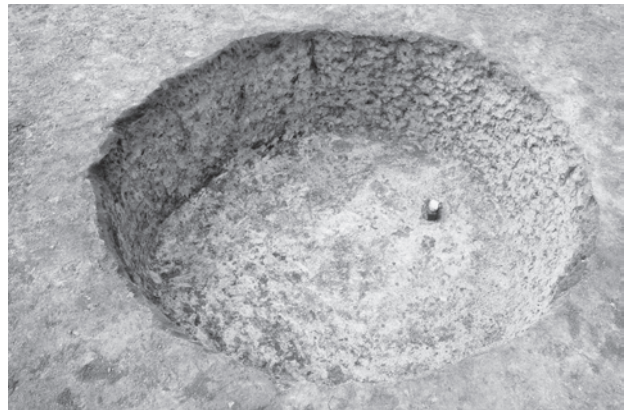
5 第1号溝状遺構



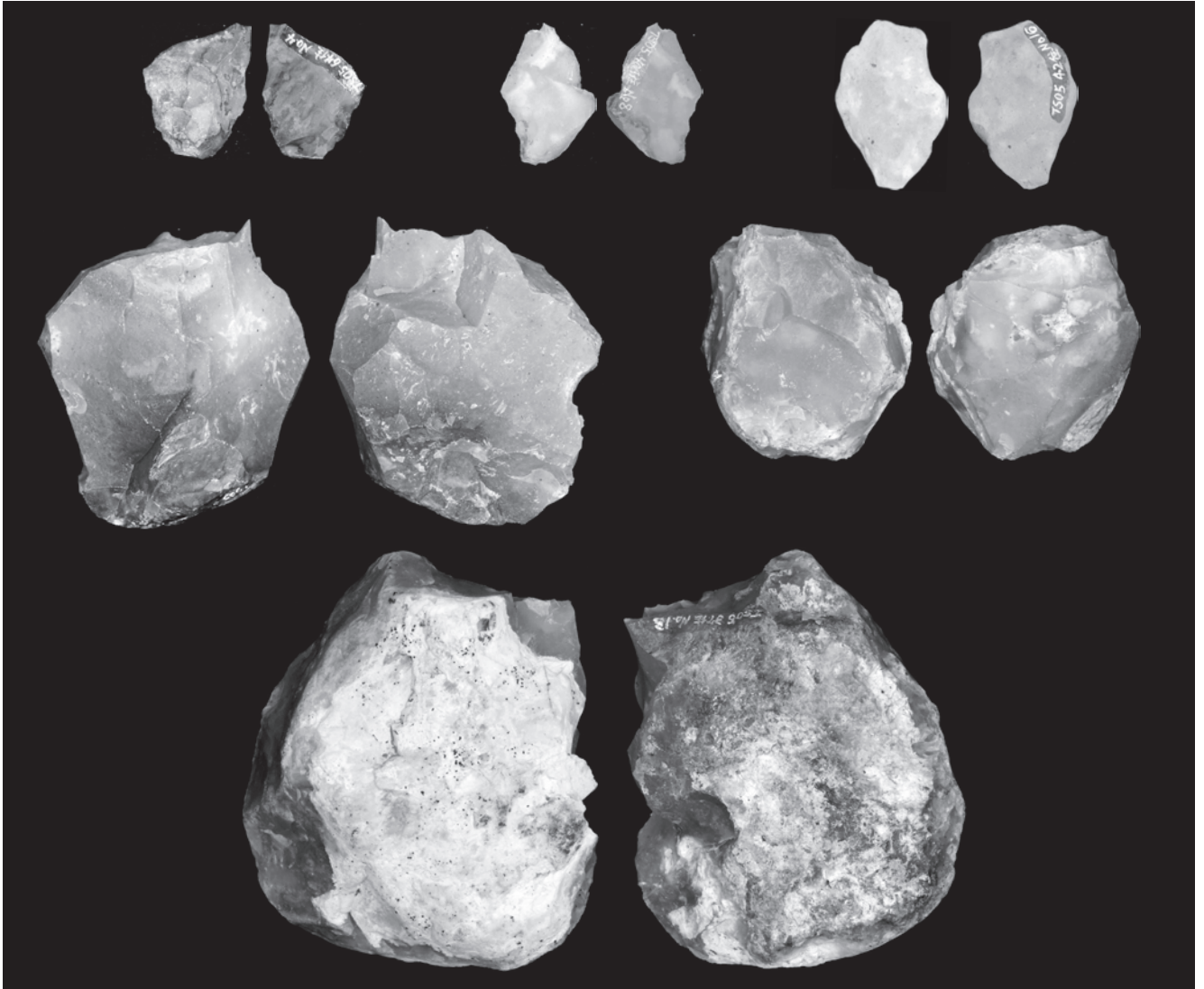
6 第8号土坑



7 第9号土坑



8 第10号土坑



1 旧石器時代 調査区出土石器



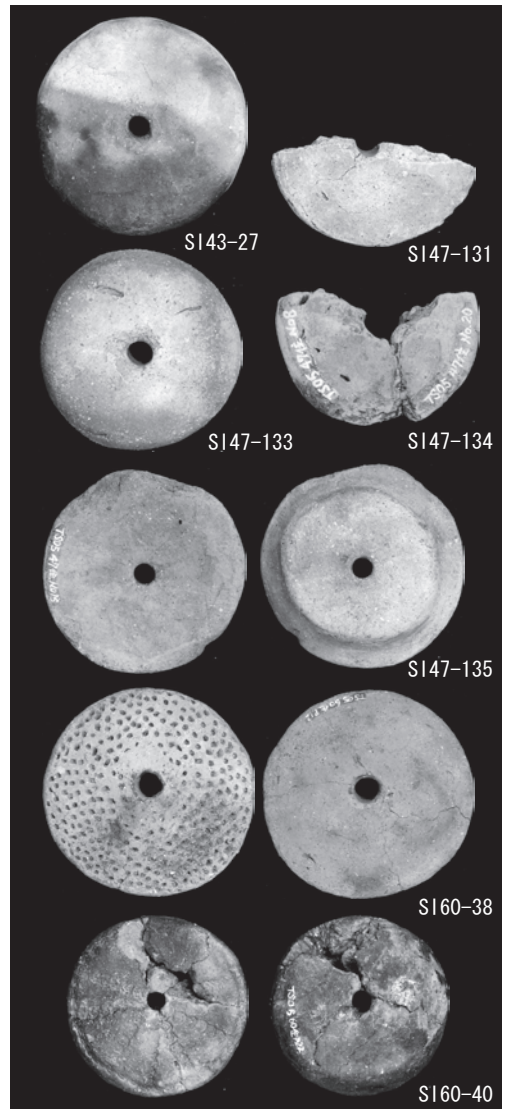
2 縄文時代 調査区出土石器



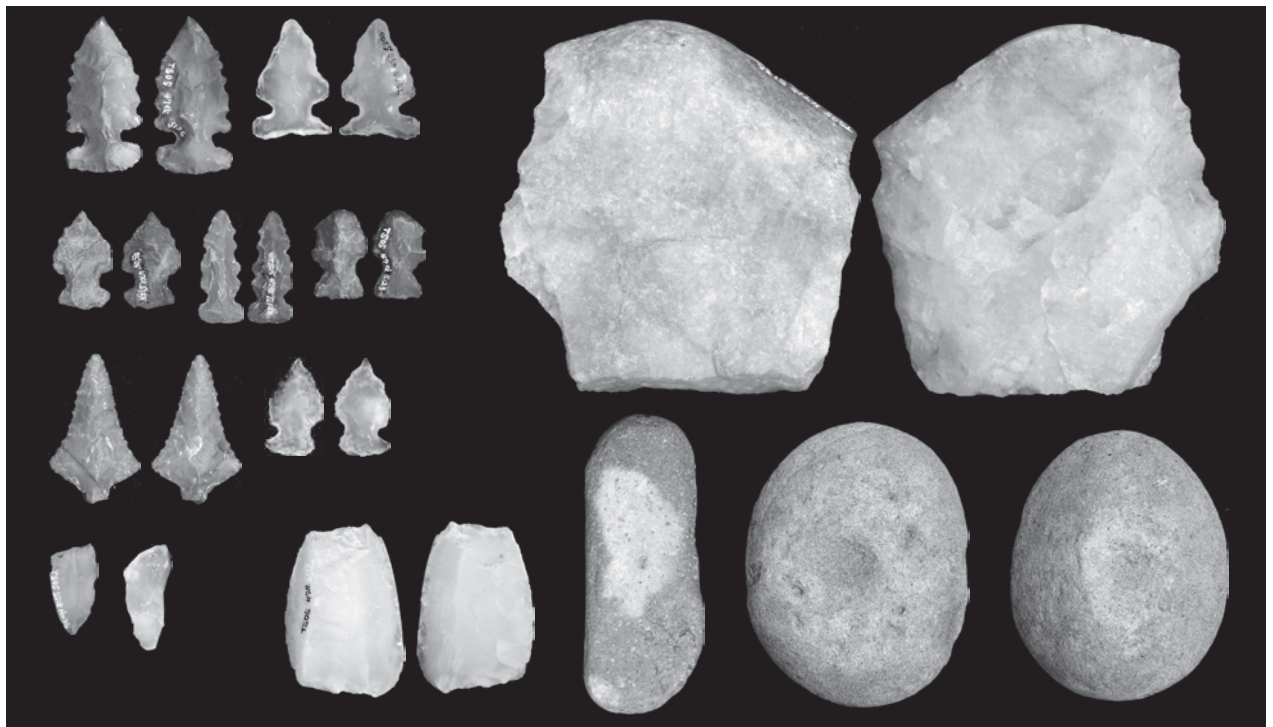


S159-1

1 弥生時代～古墳時代前期 住居跡出土遺物



2 弥生時代～古墳時代前期 住居跡出土紡錘車



3 弥生時代 住居跡出土石器



1 第 41 号住居跡出土遺物



2 第 31B 号住居跡出土遺物



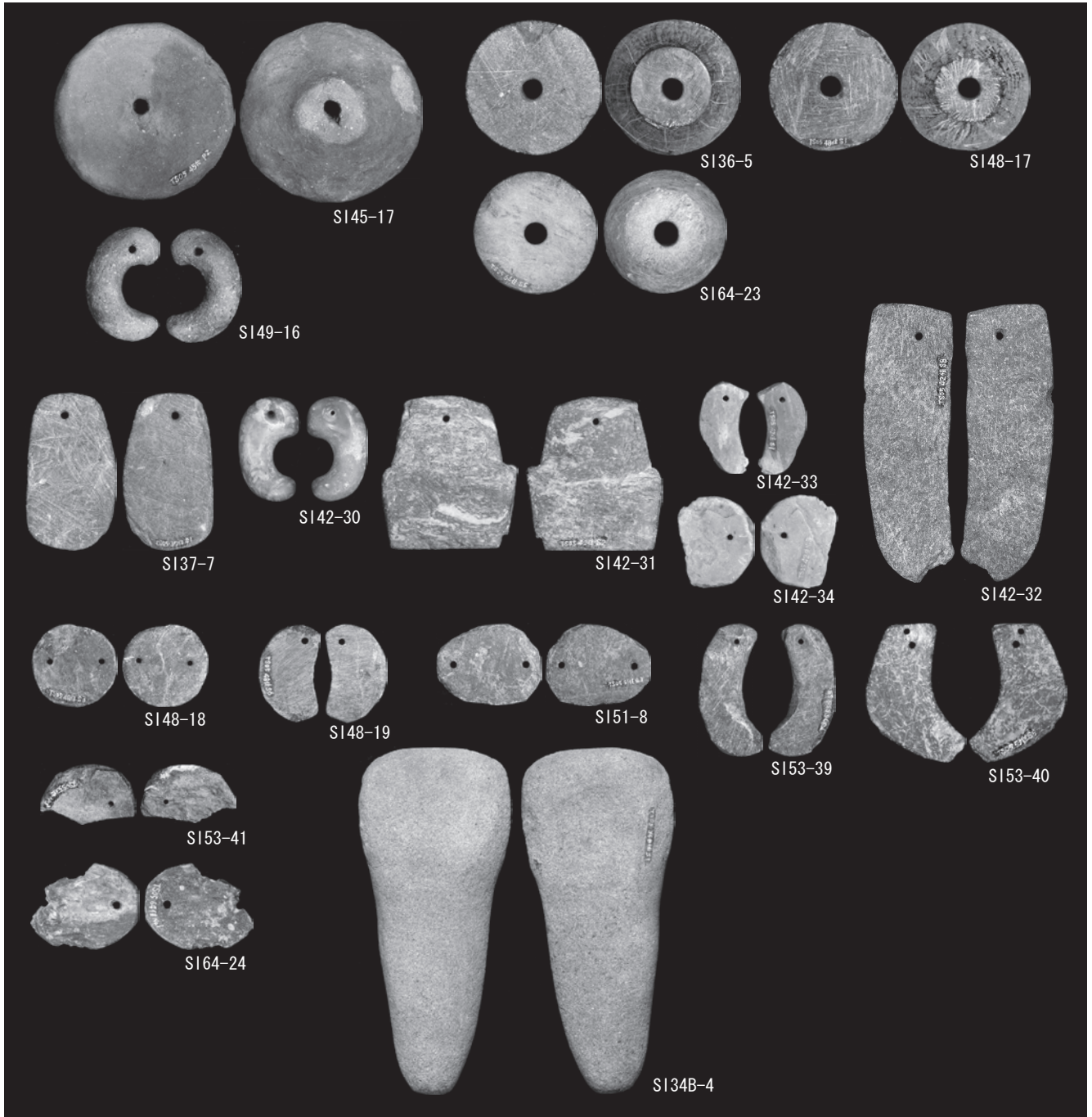
3 第 42 号住居跡出土遺物



1 第 48 号住居跡出土遺物



2 第 50 号住居跡出土遺物



1 古墳時代後期 住居跡出土土製品・石製品・石器



2 弥生時代の住居跡から出土した古墳時代石製品



3 第53号住居跡出土遺物



1 第 32 号住居跡出土遺物



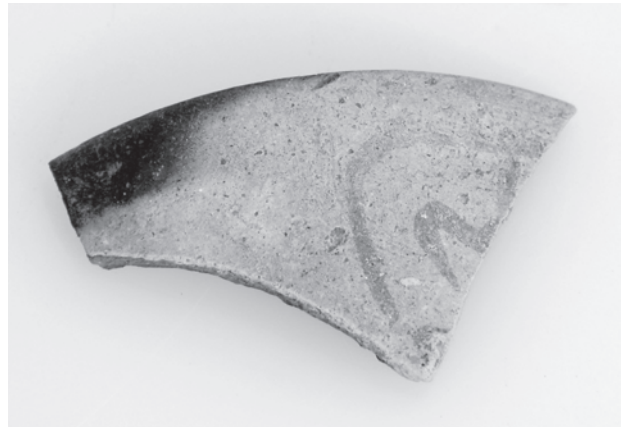
2 第 33 号住居跡出土文字瓦



1 第 65 号住居跡出土瓦



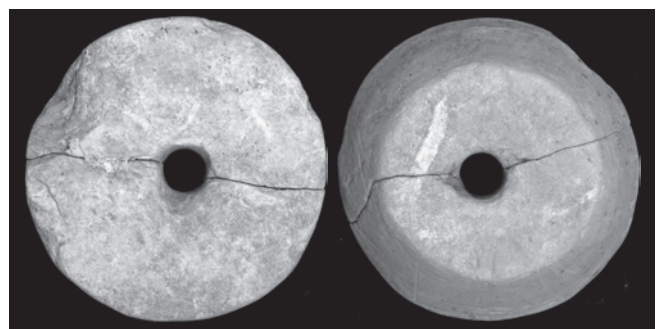
2 第 65 号住居跡出土瓦の刻書



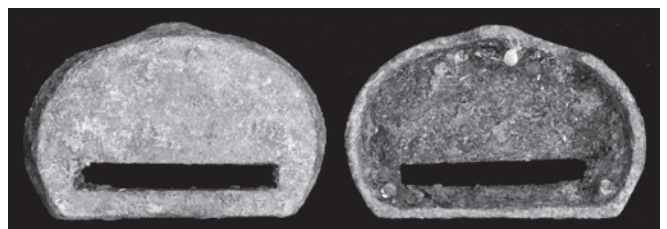
3 第 57 号住居跡出土墨書土器



4 第 67 号住居跡出土甕



5 第 32 号住居跡出土紡錘車



6 第 57 号住居跡出土丸柄

報告書抄録

フリガナ	タカノス
書名	鷹ノ巣Ⅱ
副書名	第2・3次調査の成果
巻名	
シリーズ名	(財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告
シリーズ番号	第41集
編集者名	稲田健一
著者名	鈴木素行・窪田恵一・色川順子・小松崎恵子・稲田健一
編集機関	財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
発行機関	財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
発行機関所在地	茨城県ひたちなか市大字中根3499 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内
発行年	西暦2013年3月15日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	標高	調査期間	面積	備考
		市町村	遺跡番号						
タカノス 鷹ノ巣	シニアザ ひたちなか市字 ヘタノミヤウシロ 部田野宮後・ ニシハラ 西原	08221	204	36° 22' 15"	140° 34' 32"	25.0～ 28.0	20050729～ 20060228 20120515～ 20120711	7,363㎡・ 600㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鷹ノ巣	集落 遺物包蔵地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安 時代 時期不明	住居跡 3基 住居跡 24基 住居跡 16基 溝状遺構 1条 溝状遺構 2条 土坑 8基	石器 縄文土器・石器 弥生土器(後期)・石器・ガラス玉 土師器・須恵器・石製模造品・ベンガラ 土師器・須恵器・文字瓦等	炭化材樹種・炭化種子の同定 ベンガラの同定

要約	<p>遺跡は、ひたちなか市のほぼ中央、本郷川左岸の標高約27mの台地上に位置する。</p> <p>2005年度の発掘調査では、弥生時代後期、古墳時代前期・後期、奈良時代、平安時代の住居跡43基が検出されたが、3基の住居跡は2012年度の調査となった。住居跡の規模は、弥生時代の第47号住居跡が長軸9.29mともっとも大きく、次いで奈良時代の第32号住居跡が長軸8.61mを測る。古墳時代前期や後期にも7mを超える住居跡が存在し、平安時代を除いて6m代のやや大型の住居跡が多く存在する傾向にある。</p> <p>注目される遺物としては、弥生時代の住居跡から、同時代としては市内で初となるガラス小玉58点が出土した。古墳時代後期の住居跡からは、ベンガラが詰まった小型の壺が出土した。また、石製模造品の斧や鎌等が出土し、斧は市内で初の出土である。奈良時代では、「山田文マ子夜児」と刻まれた文字瓦が出土した。</p>
----	--



2012年度調査員一同

(財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告 第41集

鷹ノ巣Ⅱ - 第2・3次調査の成果 -

2013年3月15日発行

編集 財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

発行 財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

(〒312-0011) 茨城県ひたちなか市中根3499

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内

TEL 029-276-8311

印刷 富士オフセット印刷株式会社 (〒310-0067) 水戸市根本3-1534-2
